のび太のBIO HAZARD『ENDLESS FEAR』

MONDOERA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
のび太のＢＩＯ　ＨＡＺＡＲＤ『ＥＮＤＬＥＳＳ　ＦＥＡＲ』

【Ｎコード】
Ｎ６８２１Ｎ

【作者名】
ＭＯＮＤＯＥＲＡ

【あらすじ】
２００４年７月２８日、東京都練馬区月見台ススキヶ原でバイオハザードが発生した。そのバイオハザードから生還したのは数人の少年少女だった。彼らはバイオハザードの元凶、ナムオアダフモ機関に決着を付ける為、ナムオアダフモ機関の本社に向かった。しかし、彼らはまたもや、悪夢を味わう事になる。
この小説は前作『のび太のＢＩＯ　ＨＡＺＡＲＤ『ＴＨＥ　ＮＩＧＨＴＭＡＲＥ』』の続編です。見ていない方はまずそちらをご覧ください。

所持銃火器（前書き）

今回は本編ではなく、各員の所持銃火器の紹介です。

気になるのが1箇所ありますが、突っ込まないでください。物語が進めば追々説明します。

所持銃火器

・のび太
ベレッタＭ９２ＦＳ
レミントンＭ８７０ＭＣＳ
コルトＭ７９
コルトＭ４カービン
ベレッタＭ１２
コルトパイソン
スタームルガーレッドホーク
炸裂手榴弾
焼夷手榴弾
閃光手榴弾
音響手榴弾
・スネ夫
スプリングフィールドＸＤ
ＵＺＩ
Ｈ＆amp;Ｋ　ＭＰ５
ステアーＴＭＰ
フランキ・スパス１２
モスバーグＭ５００
ＡＫ－４７
ＦＡ－ＭＡＳ
・ジャイアン
《ジャイアン流喧嘩殺法術》
デザートイーグル
・聖奈
グロック１７
Ｈ＆amp;Ｋ　ＭＰ５Ｋ

ベレッタ　Ｃｘ４
イジェマッシサイガ１２Ｋ
Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＵＭＰ
・真理奈
ベネリＭ３
Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＭＰ７
・燐
Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　Ｍｋ．２３　Ｍｏｄ．０
ベネリＭ４
ＵＳ　ＥＸ－４１
Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ５００
Ｍ２０２Ａ１
ＲＰＧ－７
炸裂手榴弾
焼夷手榴弾
閃光手榴弾
音響手榴弾（スタングレネード）
破片散弾榴弾（ボール爆弾）

疑惑のホテル

【僕たちは元々東京都練馬区月見台ススキヶ原に住んでいた。しかし、僕達の通う学校の地下にある研究所はナムオアダフモ機関の研究所で、ナムオアダフモ機関の陰謀でＴ－ウィルスが流出し、街中でバイオハザードが起きた。僕達は何とか生物兵器共を倒し、地下鉄での脱出に成功した。僕等はナムオアダフモ機関を潰す為に関東本社へ来ていた。しかし、ここでも異変は起きた。】

「皆、用意はいいか？」

ジャイアンが皆に向かって言った。

「ああ。」

「うんばっちりＯＫさ。」

のび太とスネ夫も返す。

「私も準備ＯＫです。」

真理奈も返す。

「聖奈さんも大丈夫か？」

とジャイアンが言うと、聖奈が応える。

「はい大丈夫です。」

と、聖奈が言うと、ジャイアンが喋る。

「よし、これから全員でナムオアダフモ機関本社に向かう。・・・それと、燐さんは内部事情は解らないのか？」

と、ジャイアンが燐に訊くと、燐は応える。

「・・・地下鉄でも話したと思うけど、あたしは入社したばかりの只の新入社員よ。本社の場所ぐらいなら解るけど、内部事情となるとぜんぜん解らないな。」

と、燐が言うと、のび太が言う。

「そうか、でも最低限場所さえ解れば行けるから大丈夫だろう。」

のび太がそう言うと、下の階から悲鳴が聞こえてきた。

「うわあああああああああああああああああああ」

その声に驚いた聖奈は慌てる。
「なに?何が起きたの?まさかまた・・・。」
聖奈が心配をすると、のび太がドアを開けて廊下へ出た。そして言った。
「どうやらドラえもんは僕等に休息を与える気はさらさらないようだね。」

「ああ～～～～～。」
「うお～～～～。」
「おおおお～～～～。」
ゾンビが呻き声をあげたころには、ジャイアンとスネ夫と聖奈も廊下に出ていた。ジャイアンが全員に向かって喋った。
「全員散開!今日の17時までにナムオアダフモ機関本社の前に集合する。皆、死ぬなよ!」
「解っている!」
とのび太が言うと、4人は下に向かっていった。ゾンビの量を分散させるためにばらばらのルートで下に行った。のび太もひたすら下に向かっていく。途中にはT－ウィルスに感染したと思われるゾンビがいたが、流石にあのバイオハザードを生き抜いただけあって無駄な弾薬を消費しないように気をつけながら、難なく下へ降りていった。
数分後。のび太はなんとかホテルのロビーまで来た。
「ふう、どうやら無事に出られそうだな。さて行くか。」
と言ってのび太はホテルから出ようとしたが、フロントの受付の方から轟音が聞こえてきた。
「何だ!!!」
受付の奥の扉をぶっ飛ばし、中から現れたのは、『B・C・W・』である、『フローズヴィニルト』だった。
「こいつは『フローズヴィニルト』!今は一体だけだけど、一先ず退いたほうがいいな。ここは一旦上へ上がろう!」

と言うとのび太は階段を駆け登り、一気に3階まで行った。そこまでは怪物も来なかった。しかしフロントのロビーに居るののでのび太はホテルから出られなくなってしまった。
「まずいな。ホテルから出るにはあの怪物を何とかしないといけないな。気づかれないように近づいて頭部に最大火力をぶっ放すか。」
そしてのび太は気づかれないようにゆっくり階段を下りて行った。

しかしそう上手くはいかないようで、のび太はうっかり長椅子にぶつかり、物音を出してしまったので、『フローズヴィニルト』に気付かれてしまった。
「ＧＯＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨ！！」
「しまった！こうなったら上の階に一時退こう！！」
と言うとのび太は、階段を駆け上がった。
「ＧＯＡＡＡＡＡＡ！！」
フローヴィニルトはのび太を追い掛けた。のび太は一気に5階まで駆け上がり、廊下を走り」、反対側まで走った。しかしフローズヴィニルトの方がのび太より速いので、フローズヴィニルトはのび太に追いついた。そして、フローズヴィニルトはのび太に殴り掛かってきた。
「うわっ！」
のび太はぎりぎりの所で何とか避けた。
「こうなったら応戦するしかないな。」
と言うとのび太は『ベレッタＭ９２』を取り出し、フローズヴィニルトに向かって5発程発砲した。
「ＧＯＡＡ！」
少し悲鳴を挙げたものの、フローズヴィニルトは依然として変わらずにのび太を追い掛けている。のび太は『ベレッタＭ９２』を懐にしまい、『レミントンＭ８７０』を構えた。

「ＧＯＯＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！」
のび太が『レミントンＭ８７０』を取り出している隙に、フローズヴィニルトはのび太の眼前まで迫っていた。普通の者なら慌てて何も出来ないところだが、のび太は慌てずにショットガンの引き金を引いた。
ダァン！
『レミントンＭ８７０』から『１２ゲージショットシェル』が発砲されたが、弾丸は目標を外れた。
フローズヴィニルトは弾丸を右に避けて、のび太の左側に潜り込み、そのままのび太を殴ろうとした。
「ＧＯＡＡ！」
フローズヴィニルトはのび太を殴ろうとしたものの、のび太はそれを避けたので当たらなかった。のび太はフローズヴィニルトの攻撃の瞬間を狙って、『ベレッタＭ９２』を構えて、頭部に５発程発砲した。

「ＧＯＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ

り幾らか大きく、かなり錆びた鍵があった。必然的にのび太はその鍵が、目の前にある扉の鍵だと思い、鍵穴に差し込んで、回してみた。

すると、鍵は見事に回った。そしてのび太は鋼鉄の扉を開けた。

ギィィィィ

と、重々しい音を立てて、鋼鉄の扉は開いた。開けた先は、すぐ下り階段になっており、暫く下った先は、右側に１つの扉があった。のび太は階段を下り、右側にある扉を開いた。扉を開いた先は、短い通路で、左側の壁には、男子トイレと女子トイレがあり、右側には２つの扉が並んでいた。そして、通路の奥には更に扉があった。のび太はまず、右側の手前にある扉から調べた。扉の中は、デスクや本棚等があるだけで只の事務室のようだった。のび太はその部屋を調べ始めた。

デスクの引き出しの中には、９ｍｍパラベラム弾のマガジンが２つ程と１２ゲージショットシェルの弾薬の箱が１つあっただけだった。次にのび太は本棚の辺りを調べた。

しかし、気になる物は特に何も無かった。のび太は諦めて事務室を出ようとしたが、デスクの上にある紙が目に入った。その紙にはこう書いてあった。

『［Ｐａｓｓｗｏｒｄ］

３４４６．４５６６９３ｉｎｃｈ

日本表記』

「何かのパスワードのようだな。何を意味しているのかは解らないけど。取り敢えずこれを取っておこう。」

と、呟くとのび太は事務室を後にした。

次にのび太は、事務室の隣にある部屋に入った。そこは何かの荷物が大量に置いてあり、倉庫のようだった。のび太はそこを暫く探索した。

暫くすると、壁のフックに鍵がかかっているのを発見した。その鍵はやや小さめの鍵だった。のび太はその鍵を取ると、倉庫を出た。次にのび太は、通路の奥の扉へ向かった。そして、扉を開いた。扉を開いた先は、下り階段しか無かった。のび太は慎重にその階段を下って行った。

暫く下ると、階段が切れて、すぐ奥に扉が見えた。のび太はその扉の奥へ進んで行った。その扉の奥には更に扉があったが、奥の扉はススキヶ原研究所にあったような観音開きの扉だった。そして、上にあるプレートには、

『『スティンガージーン』研究室』

と書かれてあった。のび太は徐にその扉を開けた。その扉の中は案の定、ゾンビやら、何かの細胞やらが入ってある、小さいカプセルが大量に置いてあり、辺りには資料が散乱していた。のび太は辺りに散乱している資料に目を通したが、どうやら、何かの研究過程の報告書のようだったが、専門用語や専門記号が並んでいて、素人が理解できるような代物じゃなかった。のび太はデスクには何かあるかと思い、デスクを調べ始めた。

暫くして、のび太は気になる資料を見つけた。それにはこう書いてあった。

『［特異細胞『スティンガージーン』について］

T－ウィルスによってゾンビとなった個体に、骨が異常に露出する現象が起きた。その現象が起きた個体を解剖し、分析した所、体内で特殊な遺伝子が生成されている事が発見された。その遺伝子は骨を異常に発達させ、重要器官（心臓や脳等）を護らせる働きをする

事が解った。しかし、この個体が発生する確率は、０．１％にも満たない為、現在保持しているサンプルで研究を進めるしか無い為、製造レベルには至っても、制御レベルには至らないと思われる。』
「また、新しい何かを研究していたのか・・・。このホテルはナムオアダフモ機関が経営していたって事か。」
と、のび太が呟くと、のび太は散乱している資料の下に、何かの扉がある事に気づいた。のび太はその扉を上に引き上げた。
すると、更に下り階段があった。のび太はその下に下りていった。

３０段程降りると、目の前に先程と同じような観音開きの扉があり、プレートには、
『『サンプル保管室』
入室の際はカプセルのロックがされているのを確認すること。』
と書かれてあった。
のび太は勿論カプセルのロックなど知らないので、そのまま部屋に入った。

部屋の中は、結構広く、のび太が入ってきた扉の反対側に、ゾンビの入ったカプセルと、その周りにある計器の様な物以外は何も無かった。のび太は計器の周辺を見たが、特に何も無かった。のび太が諦めてその部屋を出ようとすると、部屋の中のカプセルがいきなり割れた。中から現れたのは、肉体から骨が露出したゾンビだった。
「アアアアウゥゥゥゥゥ。」
ゾンビは唸り声を挙げながらのび太に接近してきた。のび太は咄嗟にハンドガンを発砲した。
しかし、頭を狙った5発の弾丸は全て弾かれた。
「！！弾丸が弾かれた!?・・・・・そうか、さっき見た資料に、『発達した骨が重要器官を守る働きをしている』とあったな。ハンドガンみたいな小口径の銃じゃ、倒すのは難しいか。」
と、のび太が呟いている隙にも、ゾンビは近づいて来る。

「ウアァァァァァァ。」
のび太のすぐ近くまで接近したゾンビはのび太に掴み掛かってきた。
のび太は素早く『レミントンＭ８７０』を取り出し、発砲した。
ダァン！
散弾がほぼ全弾当たったにも関わらず、ゾンビは少し後退しただけで、ダメージはあまり無い様だった。
「・・・・コイツはちょっと厄介だな。手榴弾を使えば何とか倒せそうだけれど、こんな部屋で使えば僕にも被害がでる。・・・・アサルトライフルで骨を削るしかないかな。」
と言うとのび太は、『コルトＭ４カービン』を構えて、ゾンビに向かって撃った。

『コルトＭ４カービン』から発射された弾丸は的確にゾンビの頭部に当たった。
「アアアアゥゥゥゥゥ。」
１５発程当たると、弾丸が頭脳まで到達し、ゾンビは倒れた。
「・・・・・・・・ナムオアダフモ機関はこんなものまで造っていたのか・・・。ジャイアン達は大丈夫かな？」
と、のび太は呟いた。そして、ふと、のび太の傍にある金庫の様なものが目に入った。のび太はそれに近づいて行った。その金庫は、扉の部分にシリンダー錠が掛けられていた。
「・・・・この錠は正しい４桁の数字と、更に特定の鍵を差し込まないと、解錠しないタイプだな。・・・・・・そういえば、さっき事務室にあった暗号がパスワードっぽかったから、あれを解けばこの錠を解錠する為の数字が導き出せるかもしれない。まずはさっきの事務室に戻ろう。何か見落としていた何かが見つかるかもしれないし。」
と言うと、のび太は階段を駆け上がり、事務室へ戻った。

暫くすると、のび太は事務室に着いた。そして、デスクにさっきの

暗号用紙を広げた。そして、のび太は考え始めた。
（・・・・・この暗号の注目すべき点は、この、『３４４６．４５６６９３ｉｎｃｈ』という所だろう。このｉｎｃｈは恐らく長さの単位のインチだろう。弾薬のサイズの表記にもインチが使われているから何とか知っている。で、下にある『日本表記』っていうのは、日本での一般的な長さの単位表記の事だろう。日本の長さの単位は勿論、メートルだ。つまり、３４４６．４５６６９３インチをセンチメートルに変換すればいいんだ。確か２．５４ｃｍで１インチだったから、

・・・・・・・・・・８７５４ｃｍになるな。という事は、８７５４がパスワードという事になるな。早速さっきの所に行こう。）
すると、のび太は事務室を出て、階段を下り、さっきの金庫の所まで来た。そして、シリンダー錠のダイヤルを８７５４に合わせた。そして、試しに倉庫で見つけた鍵を差し込んだ。鍵はうまく回り、シリンダー錠は解錠された。そしてのび太は金庫を開けた。

中に入っていたのは、銀色をした小さな鍵であり、表面に『ＡＬＰＨＡ』と印されてあった。
「・・・・・この鍵に書かれてある『ＡＬＰＨＡ』っていうのは何だろう？金庫に入っていたんだから何か大事な物だとは思うけど・・・。取り敢えずはこのホテルを出よう。」
と言うとのび太は階段を上がって行った。

のび太は更に階段を駆け上がり、巨大な観音開きの鋼鉄の扉まで来た。そのまま先へ進み、5階から1階まで下りた。ところが、のび太がフロントの方を見ると、驚くべき光景が広がっていた。

「あ、あれは・・・・・・・・・・・・!?」

ロビーは数え切れない程のゾンビで溢れ返っていた。玄関の自動扉が破壊されている所を見ると、この大量のゾンビ共に扉を破壊されたというのは想像に難くなかった。

（この数だと、手榴弾を投げ込まなければならないけど、・・・もし失敗したら、この数のゾンビがこっちへ向かって来る事になる。覚悟を決めるか、安全策で退路を予め確保するか、悩み所だな。・・・・・・・・・。）

のび太は、手榴弾を投げ込むかどうか悩んでいるようだった。

そして、のび太は意を決した様に炸裂手榴弾のピンを外し、炸裂手榴弾を投げ入れた。

数秒後、手榴弾が爆発し、大量のゾンビが吹き飛んだ。しかし、十数体のゾンビは生き残り、そして、のび太の存在に気づき、のび太に向かってきた。のび太はすぐに後ろの方に退いた。

やがてのび太は『大浴場』の方に向かった。

すると、のび太は男湯の脱衣所に向かった。脱衣所には数体のゾンビが居た。のび太はすぐさま、銃撃し、そのゾンビを倒した。しかし、すぐ後ろからさっきのゾンビが大挙して向かってきた。のび太は急いで、『大浴場』の浴室への扉を開き、浴室へ入った。浴室の中にも数体のゾンビが居たがのび太はそれらを無視し、露天風呂の方へ向かった。幸い、露天風呂の方にはゾンビは居なかった。のび太は露天風呂と外を仕切る壁を攀じ登った。そのおかげで、何とかのび太はゾンビから逃げ延びた。

のび太は壁を降りて、市街地の方へ向かった。

疑惑のホテル（後書き）

今回の『あとがきルーム』は『館長室』で開館します。
現在、ゲストが取れにくい状態である為、ゲストが取れるようになるまでこの『館長室』で開館するか、『あとがきルーム』自体を一時休止する事になりますので、ご了承ください。
それはそうと、いよいよ続編が始まりました。暫くはのび太視点で行きます。そして、早速なにやら新しいものが出てきてますが、まだまだオリジナル要素はあります。なので、楽しみにしていて下さい。
これくらいで、今回の『あとがきルーム』は終了したいと思います。
では次回の『あとがきルーム』までさようなら。

ＡＲＥＡ１『惨状』

のび太は市街地を見ると、愕然とした。市街地にはゾンビだけではなく、ケルベロスやハンター、キメラまで居た。

「・・・市街地でも惨状が起きているとは思ったけれど、まさか生物兵器まで居るとは・・・・・・・。」

と、のび太が呟くと、向こうから、車が蛇行走行しながらのび太に向かってきた。

やがて車は、のび太の目の前で壁に激突し、炎上した。

「・・・・・なんでまたこんな事が起きるんだ！早くドラえもんを止めないと！！」

と、のび太は叫ぶと、のび太はナムオアダフモ機関本社へ向けて走り出した。しかし、道中には多数のＢ．Ｃ．Ｗ．が居る為、中々進まなかった。

やがて、のび太は目の前に大量の『ケルベロス』がいるのを発見した。のび太はベレッタＭ９２を２挺構えた。

「ＧＲＵＲＵＲＵＲＵＲＵＲＵＲＵＲＵＲＵＲＵＲＵＲＵ！！！」

唸り声を挙げながら、１０体程のケルベロスはのび太に接近してきた。のび太はすぐさま、両手のハンドガンを連射した。

「ＫＡＩＮ！！」

銃弾が頭に直撃したケルベロスは声を挙げて、倒れた。１０体程居たケルベロスは、全員頭に銃弾を１発ずつ撃ち込まれていた。のび太は銃弾を１発も外さずにケルベロスの頭を撃ったのだ。

のび太はケルベロスが動かないことを確認すると、先に進んだ。怪物しかいない光景を見ていたのび太は呟く。

「進んでも進んでも怪物だらけだな。これは、あの時異常の規模かもしれないな。」
と、呟きながら、のび太は進んで行く。
しかしその時、隣の高層ビルから何かが落下して来た。
「ＫＳＨＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！」
落下して来たのは、両手に巨大な鈎爪があり、黒色の体躯をした『Ｂ．Ｃ．Ｗ．』、『キメラ』だった。
のび太は前に飛び込んで、キメラの攻撃を回避した。運よくキメラの攻撃は避けられたが、避けた方向がまずかった。
「ＫＩＳＨＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ

ＡＡＡ！！！」

のび太がハンドガンの引き金を引いてから０．３秒後、『９ｍｍパラベラム弾』が１０発程当たったキメラは悲鳴を挙げながら倒れた。

「ふぅ、危ない所だった。」

と、のび太は安堵の溜め息をつくと、『レミントンＭ８７０』をバッグにしまい、先へ進んだ。

のび太は暫く進んでいたが、所々に炎上した車や火事があり、中々進めなかった。しかも、進んでも進んでも怪物だらけなので、のび太は、ちゃんと進んでいるのか不安になった。しかし、勿論怪物達は、そんなのび太の不安など気にせずに、遠慮無くのび太に襲い掛かってくる。流石ののび太でも、およそ３０体を超える怪物を同時に相手するのはほぼ不可能に近いので、のび太は何処か避難出来る場所が無いかを探した。幸い、避難出来る場所はすぐに見つかった。それは、路地裏だった。のび太はすぐにその路地裏に入った。

「よし、来い！！」

のび太は、追ってきている生物兵器を野放しにしておくと後々面倒になると思ってか、路地裏に入ったすぐの所で、怪物共を迎え撃った。

「ＧＲＵＲＵＲＵ

数体のケルベロスはそのままぶっ倒れた。しかし、すぐに第2陣が来た。のび太の正面からは、12体のブレインディモス、上空からは12体のキメラが襲ってきた。のび太は『コルトM79』を構え、そしてブレインディモスに向けて撃った。『コルトM79』から放たれた焼夷弾はブレインディモスに直撃すると、炎上した。

「GISYAAAA!!」

炎が上がったので、それ以上はブレインディモスは近づいて来なかった。しかし、上からキメラがのび太に近づいて来ている。

「KSHAAAAAA!!」

唸り声を挙げながらキメラはのび太に襲い掛かってきた。しかし、上空から落下するだけの単調な動きなので、のび太はバックステップをして、簡単に回避した。のび太はすかさず『M4カービン』を連射した。

「「「「「「「「「「KSHAAAAA

ＡＲＥＡ２『再会』

のび太が入って行った路地裏には、怪物は１匹も居なかった。

やがて、のび太は路地裏の出口を出て、一際広い所へ出た。すると、右から声が聞こえてきた。

「のび太君！」

そう言ったのは真理奈だった。真理奈を見たのび太は言う。

「真理奈ちゃん！無事だったんだね！」

すると、真理奈が言う。

「それより、大変だよ！街の中が生物兵器だらけだよ！！」

その言葉を聴いたのび太は喋る。

「・・・うん、僕も驚いたよ。ゾンビだけだと思っていたのが、あらゆるＢ．Ｃ．Ｗ．が徘徊していたんだからな。取り敢えず一刻も早くナムオアダフモ機関の本社に行こう！」

と言うと、のび太と真理奈は、生物兵器を蹴散らしながら先へ進んで行った。

暫く進むと、あるＢ．Ｃ．Ｗ．に囲まれた。

「ＧＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！」

突如現れたのは、５体の『フローズヴィニルト』だった。

「！・・・コイツは『フローズヴィニルト』！！真理奈ちゃん！君は後方の２体を食い止めてくれ！僕は前方の３体を片付ける！！」

すると、真理奈が言う。

「解った。のび太君、気をつけて。」

と言うと、真理奈とのび太はそれぞれ武器を構え、戦闘に備えた。

真理奈は、ベネリＭ３を構えて、フローズヴィニルトを狙って射撃

した。
「ＧＫＡＡＯＯ！！」
散弾を喰らったフローズヴィニルトは悲鳴を挙げて後退した。真理奈はその隙に、『Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＭＰ７』を構えて、２体のフローズヴィニルトに向けて撃ちまくった。
一般的なサブマシンガンの音を立てて、その弾丸はフローズヴィニルトを貫いた。
「ＧＯＯＯ

よう。」
のび太がそう言うと、２人は先へ進んで行こうとした。しかし、あることに気がついた。
「・・・・・・・・・。あれは『ハンター』か・・・。」
のび太がそう呟いた。のび太の視線の先には、鋭利な爪があり、緑色をした怪物が立っていた。続いて真理奈も喋る。
「ち、ちょっと！こっちにも『ハンター』が居るけど！！」
と、真理奈が叫んだ。真理奈の視線の先にも３～４体の『ハンター』が居た。

やがて、次々とハンターが現れ、のび太と真理奈を囲んだ。
「・・・・・・・・くっ、囲まれたか。この数では凌ぎ切れないかもしれないな。・・・どうするか・・・・・・・。」
と、のび太は呟き、考えた。
すると、のび太はふと、右方向にある、とあるビルが目に付いた。
そして、のび太は真理奈に話し掛ける。
「真理奈ちゃん。こっちだ！」
と言うとのび太はビルの方へ向かって行く。真理奈ものび太に着いていく。

やがて、ビルの傍まで来ると、のび太が喋る。
「・・・このビルの非常階段を昇って、ビルの中に進入して、ビルの中の別の出入口から出て行こう。流石にこれだけの『ハンター』を片付ける事は至難の業だからな。まずは、真理奈ちゃんから昇ってくれ。僕はその間、『ハンター』共を食い止める。」
と、のび太はビルの非常階段を見ながら、自分の考えを真理奈に話した。
「解った。どうせ、駄目って言っても、聞かないでしょ。でものび太君もなるべく急いでね。」
真理奈のその言葉にのび太は応える。

「解ってるよ。」
そう言うと、真理奈は先に非常階段を昇って行った。
のび太は『Ｍ４カービン』と『レミントンＭ８７０』を構えて、迫り来る『ハンター』に備えた。
やがて、数体の『ハンター』がのび太に飛び掛かって来た。
「「「ＫＩＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！」」」
のび太は姿勢を低くして、ハンターの飛び掛かりを回避し、振り向き様に『レミントンＭ８７０』を発砲した。
ハンターは、ビルの壁に叩き付けられて、動きが止まった。のび太はそのまま、『Ｍ４カービン』を連射した。ハンターはそのまま動きを停止した。しかし、ハンターは次から次へと現れる。のび太は時折、手榴弾を使いながらハンターを殲滅していく。ハンターの数は減っていくが、まだまだ現れてくる。ハンターの数はざっと見積もっても３０～４０体は越していた。のび太を隙間無く囲っていて、更に、絶え間無くハンターが襲い掛かってくるので、のび太は非常階段を昇れずにいた。
「「「「ＫＩＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！」」」」
奇声を挙げながら、ハンターはのび太に次々と襲い掛かってくる。
のび太は、ショットガンで牽制しながら、壁を伝い、非常階段の方へ向かって行く。

やがて、非常階段が後３ｍの所まで差し掛かった辺りで、ハンターが５体程のび太に向かって来た。のび太はすかさず『レミントンＭ８７０』を撃った。
ハンター３体程に当たり、３体のハンターは少し吹っ飛んだ。
しかし、残りの２体のハンターがのび太に向かってくる。のび太は、その中の１体を、『コルトＭ４カービン』で撃ち抜き、無力化させた。フリーである１体のハンターは、のび太にその鋭利な爪を突き立てた。しかし、のび太は後ろ斜め方向に身を屈め、ハンターの攻

撃を避けた。そして、『レミントンＭ８７０』と『コルトＭ４カービン』をバッグにしまい、二挺の『ベレッタＭ９２』を両手に構え、一気に撃ち抜いた。

「ＫＩＹＡＡＡ

「今だ！」
と言いながら、手に持っていたスイッチを押した。
すると、大きな爆発音が鳴り響いて、非常階段は崩れ去った。すると、真理奈はのび太に訊く。
「！・・・今のは？」
のび太は真理奈の問いに応える。
「今のは『Ｃ４爆弾』さ。さっき取り付けたんだ。ススキヶ原研究所の武器倉庫に幾つかあったのを使ったんだよ。」
と、のび太が言った。
「でもよかった。うまく乗り切れて。」
と、真理奈が安堵しながら言った。
「取り敢えずはここから下に降りて、このビルの正面口から出よう。そうすれば別ルートから行ける筈だ。」
と、のび太が言うと、２人はビルの奥へ行った。

ＡＲＥＡ３『室内戦』

のび太と真理奈はビルの奥へ進んでいくと、異変を感じた。奥からは絶え間無い銃声と、たまに爆音が聞こえてきた。
のび太達が居る所は廊下であり、左右に２つずつ扉があって、銃声は左奥の扉の奥から聞こえた。
のび太達は慎重に廊下を進み、扉の前まで来た。
「じゃ、開けるから真理奈ちゃんは下がってて。」
と、のび太が言うと真理奈は頷き、のび太は徐に扉を開けた。
「・・・・・・・・・。」
扉の中を見たのび太は沈黙した。そこには、物言わぬ屍と化したゾンビと、『ハンター』や『ケルベロス』、『ブレインディモス』のＢ．Ｃ．Ｗ．が倒れていた。のび太は、ふと、部屋の隅に目を遣った。すると、そこには、のび太の見知った人物が居た。
「燐さん！！」
のび太は思わずその人物の名を叫んでいた。のび太の言葉に気づいた燐は振り向いた。
「ん、お前か。見当たらなかったから、どっかで野垂れ死んだかと思った。」
と、燐は言った。すると、真理奈も部屋の中に入ってきた。
「あ、燐さん。無事だったんだね。」
と、真理奈は喋った。すると、燐が２人に尋ねた。
「・・・・お前等２人だけか？他のガキ共は？」
燐のその言葉を聴いたのび太は応える。
「今いるのは僕達だけです。ジャイアン達も何処かで生き延びている筈です。」
と、のび太が言った。すると、燐も喋る。
「まぁ、あのバイオハザードを殆ど何の準備も無く生き残った連中だから大丈夫だろう。」

その燐の言葉を聴いた真理奈は言う。
「ジャイアン君達の事はいいとして、これからどうするの？外はバケモノだらけだけど・・・。」
真理奈の問い掛けに燐は応える。
「ん～、問題はそこなんだよなぁ。初めは乗用車奪おうかと思ったけど、全部炎上してて使い物にならなかったしな、・・・・後１つ、ルートがあるんだけど、なるべくならあそこは通りたくないな。」
燐のその言葉を聴いたのび太は訊く。
「それってどんなルートなんですか？」
のび太のその言葉を聴いた燐は応える。
「動物園を突っ切るルートだよ。ここら辺一帯に『Ｔ－ウィルス』が蔓延しているから、動物園にいる動物も恐らく『Ｔ－ウィルス』に感染しているだろう。そうだとしたら、大規模な戦闘が予測される。なるべくなら、無駄な戦闘は避けたい。」
と、燐は自分が考察した結果を述べた。
「でも、それしか道が無いなら仕方ないですね。」
と、のび太が言う。
「よし、それじゃあいくよ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・と、言いたい所なんだけど・・・。」
と、燐は言葉を濁した。それを不思議に思ったのび太が訊く。
「・・・・・・・どうかしたんですか？」
のび太がそう言うと、燐は話した。
「はっきり言ってこの下の階は怪物共の巣だ。さっき見てきたけど、凄い量のＢ．Ｃ．Ｗ．が居た。」
「ええ！！！」
と、真理奈は驚いた。
「具体的にはどのくらい居たんですか！？」
と、真理奈が言うと、燐は言う。

「4階の一部しか確認してないけど、ざっと20体程は居たと思う。これは予想だが、下の階に行けば行くほど、生物兵器の数が増えると思う。」
燐のその言葉を聴いたのび太は呟く。
「・・・・前の事件と比べると生物兵器の数が遥かに増しているな。」
すると、燐が言う。
「ああ、なるべくならあれだけの数を相手にする事はしたくない。或いはロケット弾一発で一掃出来るような状態まで持っていきたい。」
と言うと、少しの沈黙の後、のび太が喋った。
「取り敢えず、下の階に行って、現状を見て行きましょう。もしかしたら、何か光明が見えるかもしれません。」
と、のび太が言うと、燐が喋る。
「ん、ああそうだな。だが慎重に行こう。あたし等の場所がばれたら後々きつくなる。」
と言うと、3人は階段の傍まで来た。そして、階段の下を見た。階段の下には案の定、大量の生物兵器が居た。そして、それを見た真理奈が口を開く。
「!・・・あんなに一杯怪物がいる!どうしようもないよ!!」
すると燐が喋る。
「だからどうしようか考えているんだが。」
と言うと、少ししてのび太がある提案をした。
「・・・・・あの、今思い付いたんですが。」
すると燐が、
「ん?何だ?」
と、喋る。そして、のび太は言う。
「エレベーターを使えばいいんじゃないでしょうか。」
と、のび太が言った。
「・・・・・・・・・・。」暫しの沈黙。すると、真理奈が燐に

向かって喋る。
「何でそんな事思い付かないのよ。」
すると燐は、少し声を荒げて言う。
「ええい、五月蝿い！そんな事解っていたさ。ちょっとあれだよ！・・・ほら、・・・エレベーターみたいな閉塞空間に居たら生物兵器に攻撃された時に不利だろ！」
と、燐が言うと、のび太が冷静に言う。
「それは、作業用の梯子を伝って行けば良いんじゃないですか？」
と、のび太が言った。すると、燐は、目を泳がせながら言った。
「いやぁ、実は解ってたんだよ。今言おうと思ってたんだ。」
燐のその言葉を聴いた真理奈は、
（絶対解ってなかった。）
と思った。
そして、3人はエレベーターの方へと向かった。すると、燐がロケットランチャーでエレベーターの扉を破壊した。中を見た燐が呟いた。
「・・・どうやらエレベーターはこの上の階で停止しているようだな。さっさと1階へ降りよう。」
と言うと、燐、真理奈、のび太の順で梯子を降り始めた。暫くは何も無かったが、3階と2階の間辺りまで来ると、異変が起きた。
「ＫＳＨＡＡＡＡＡＡ！！」
いきなり生物兵器の奇声が轟いた。燐が上を見ると、数体のキメラが居た。
「！・・・あいつ等は『キメラ』か！先刻（さっき）エレベーターの扉を破壊する時にロケットランチャーをぶっ放したから、場所が特定されたか。」
と、燐が言う。
ふと、真理奈が下を見ると、驚きの光景が広がっていた。
「！し、下にも怪物が一杯居る！！！」
真理奈がそう叫ぶと、のび太と燐も下を見た。そこには、数体のブ

レインディモスとハンターが居た。
「こりゃあ挟撃ってやつか。」
と、燐が呟く。すると、のび太が2人に喋る。
「・・・僕が先に下に降りて足場の確保をします。2人は上のキメラを片付けて下さい。」
のび太のその言葉を聴くと、燐は驚いて言った。
「おい、ちょっと待てよ！」
と、燐が叫んだが、のび太はお構いなしに、壁を蹴ってほぼ落下するように降りて行った。
「くそ、あたし等は上のキメラを片付けるぞ！」
と、燐が言うと、真理奈は『ベネリＭ３』を構え、キメラに向かって撃った。
「ＫＳＨＡＡＡ

「・・・こんなに生物兵器が居るとは思わなかったな。まずはあそこに居るゾンビ共を片付けなければならないな。」
と、のび太が言うと、のび太は『ベレッタＭ９２』にハンドガンの予備マガジンを再装填し、向こう側に居る数体のゾンビの頭部を狙い、撃った。ゾンビの数は１０体にも満たなかったので、割と容易にゾンビは片付いた。しかし、『ブレインディモス』をはじめ、『ハンター』や『キメラ』が大量にこちらへ向かって来るので、戦況はどちらかと言うと危うい状況だった。すると、後方から声が聞こえてきた。
「・・・・・生物兵器がこんなに・・・・・。」
と、呟いたのは真理奈だった。燐と真理奈が降りてきたのを確認すると、のび太は喋った。
「燐さん、真理奈ちゃん。３人でバラバラに散開して3方向から同時に撃ちましょう。その方が安全で効率的です。」
と、のび太が言うと、燐も喋る。
「確かにのび太の言う通りだな。散開すれば相手の戦力も分散できるからな。よし、もたもたしている暇は無い。すぐに行動に移るぞ！あたしは左へ周る。真理奈は右に周って射撃してくれ。のび太はその場で撃ってくれ。」
と、燐が言うと、燐は左の方へ周り、真理奈は右の方へ周った。そしてのび太は片っ端からＢ．Ｃ．Ｗ．を『ベレッタＭ９２』で撃っていった。燐は『ベネリＭ４』と呼ばれるセミオートショットガンを次々とＢ．Ｃ．Ｗ．に撃ち込んでいった。真理奈は『Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＭＰ７』という名のサブマシンガンのストックを延ばし、肩に抱えながらＢ．Ｃ．Ｗ．に連射していく。大量に居たかに見えたそのＢ．Ｃ．Ｗ．共は、確実に数を減らしていった。
のび太はふと、視界の端で何かが動いた気がして後ろを振り向いた。すると後ろには、上から落ちてきて息絶えたかに見えた2体の『キメラ』だった。
「「ＫＳＨＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！」」

キメラは唸り声を挙げながらのび太に接近してくる。のび太はキメラを横に跳んで避わし、ハンドガンを撃ち込んだ。

「「ＫＳＨＡＡＡ

ＡＲＥＡ４『静寂』（前書き）

更新がかなり遅くなりました・・・。１週間に１回のペースで更新したいのですが、思い通りにはいきませんね。
それと、『あとがきルーム』はあと少しすれば再開します。・・・
する筈です。

ＡＲＥＡ４『静寂』

真っ直ぐ道路を進んで行くと、燐の言葉通り、動物園が見えてきた。
「ここの動物園は南口、北口、東口、西口に分かれていて、これからあたし達は西口から進入し、東口に出る。」
と、燐が言うと、他の２人はそれに肯定した。
そして３人は、動物園の西口から、動物園の中へ入って行った。
動物園の中は物音一つせず、静寂に包まれていた。
「・・・・・何も居ない感じだね。」
と、真理奈が呟いた。
「でも、何かが潜んでいるかもしれない。油断は禁物だよ。」
と、のび太は言う。
そこからは３人とも何も言わず、東口へ向かって行った。丁度動物園の全体の３分の１程進んだ所で、異変が起きた。
「オオオオオオオオオ。」
「アアアアアアアアア。」
「ウアアアアアアアア。」
「ギャアギャアギャア！！」
正面から大量のゾンビがこちらへ向かって来た。そして、ゾンビの唸り声に混じってゾンビカラスの唸り声も響いた。
「ゾンビ共は中央辺りに集まっていたって事か。でも、動物園だからもっと居るかと思ったけど。」
と、のび太が呟くと、真理奈がのび太をどやした。
「ちょっとのび太君！暢気に喋ってる場合じゃないでしょ！」
真理奈がそう言うと、のび太は
「ああ、ごめん。」
と言うとのび太は『ベレッタＭ９２』を構え、ゾンビの大群に向けて撃ち放った。真理奈も『Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＭＰ７』をゾンビの大群に向かって連射する。そして燐は『ベネリＭ４』で散弾を発砲し、

ゾンビカラスを次々と撃ち落としていった。

やがて暫くすると、ゾンビもゾンビカラスも動かなくなっていた。

「なんだか、妙に呆気無いな。」

と、のび太が呟いた。すると、燐がのび太の言葉に応えるように言う。

「まぁ、楽な事に越したことは無いさ。さぁ、先を急ごうぜ。」

と、燐が言うと、3人は奥の方へと進んで行った。

半分以上東口に近づくと、何者かの咆哮が轟いた。

「ＧＹＡＯＯＯＯ！」

その声を聞いた燐は思わず言う。

「！・・・今の唸り声は！」

と、燐が言うと、唸り声の主が現れた。それを見たのび太が言う。

「ブラックタイガー！」

と、のび太が叫んだ。3人の視線の先には、黒い体躯をした、巨大な蜘蛛が居た。

「ＧＹＡＯＯＯＯ

榴弾が直撃したブラックタイガーは体制を崩していた。その隙に真理奈はそこから離れ、のび太がブラックタイガーと対峙した。

「ＧＹＡＯＯＯＯ！」

唸り声を挙げながら、ブラックタイガーはのび太に接近して来る。しかし、どれも直線的な動きなので、のび太はそれを避け続けていた。のび太はブラックタイガーの攻撃を一通り避けると、隙を見て、ブラックタイガーを蹴り飛ばした。

「ＧＹＡＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！」

ブラックタイガーは軽い奇声を挙げて倒れた。のび太はブラックタイガーを放っておき、動物園の東口へ向かった。しかし、少し進んだ所で燐と真理奈が上を見上げていたので、のび太も上を見た。

「！何だあれ・・・！！」

のび太が見上げた先は、巨大な蜘蛛の巣があり、それに大量の生物が搦め捕られていた。搦め捕られていた生物は、見慣れた生物兵器も、ごく普通の動物も居た。

そうこうしている内にブラックタイガーがのび太達に追い着いて来た。

「ＧＹＡＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！」

奇声を挙げてブラックタイガーはのび太達に襲い掛かってきた。３人は難なくそれを回避した。しかし、燐の回避した先は生き残っていたゾンビ共が大量に居た。のび太と真理奈は反対側に跳んだので、そのゾンビ共に囲まれることは無かった。

「燐さん！」

と、真理奈が叫んで、燐を助けに行こうとしたが、のび太がそれを止めた。

「真理奈ちゃん。今はこの『ブラックタイガー』を倒す事だけを考えるんだ！向こうは燐さん１人でも多分大丈夫だ。こっちのブラックタイガーを早く仕留めないと後々面倒になる！」

と、のび太が言った。のび太のその言葉を聴いた真理奈はそれに肯定し、ブラックタイガーに『Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＭＰ７』の銃口を向

けて、撃ち放った。
タタタタタタタタタタタタ
『H&K　MP7』から大量の弾丸が一斉に放たれた。その弾丸の殆どがブラックタイガーに当たるものの、ブラックタイガーは至って平気な様子だった。その時、のび太は思った。
（・・・この前戦った奴より耐久力が格段に上がっているな。やはり焼夷弾を使わなきゃならないな。）
すると、のび太はバッグから『コルトM７９』を取り出そうとした。しかし、ブラックタイガーはその隙を見逃さなかった。
「GYAOOOOOOOOOOOOOOOO!!」
ブラックタイガーは咆哮を挙げながら、のび太に突進して来た。のび太はそれを避け切れず、ブラックタイガーの攻撃を受け、バッグを吹っ飛ばされた。
「しまった!バッグが!!」
思わずそう叫ぶと、のび太はバッグを取りに行こうとするが、ブラックタイガーが邪魔をして、取りに行けなかった。
「・・・焼夷弾はバッグの中だ。・・・手持ちのハンドガンで何とかするしか無いな。」
と、のび太は呟くと、2挺の『ベレッタM９２』を構えてブラックタイガーに銃口を向けた。そして、弾倉に入ってある弾薬をありったけ撃ち込んだ。
しかし、少し怯んだものの、ブラックタイガーは倒れる気配は微塵も無かった。
「GYAOOOOOOOOOOOOOOOO!!!」
一際大きな咆哮を挙げ、ブラックタイガーはのび太に突進してきた。のび太は咄嗟に横に側転して回避した。しかし、ブラックタイガーはのび太を通り越して、真理奈を掴み、蜘蛛の巣の方へと跳び、蜘蛛の巣に真理奈を搦め捕った。
「!真理奈ちゃん!!」

と、のび太は叫ぶと、ブラックタイガーを追い掛けた。追い掛ける途中で、弾薬の切れた弾倉を取り出し、新しい弾倉を装填した。
やがて、のび太は蜘蛛の巣の下まで来た。すると、ブラックタイガーがのび太の所まで来た。
のび太は応戦すべく、『ベレッタＭ９２』をブラックタイガーに向けて数発撃った。ブラックタイガーは弾丸をものともせずに、口から酸を吐き出した。のび太は姿勢を低くしてそれを回避した。続いてブラックタイガーはのび太に突進してきた。のび太はそれを側転して回避しながら、弾丸をブラックタイガーに向けて撃った。弾丸は命中したものの、ブラックタイガーはすぐに反転し、のび太に突進していった。ブラックタイガーの反転速度が早く、のび太はそれに対応する事が出来なかった。ブラックタイガーの突進でのび太は上空に打ち上げられ、そしてその衝撃で2挺の『ベレッタＭ９２』を落としてしまった。
「！しまった、銃が！！」
と、叫んだのび太は咄嗟に、近くにあった蜘蛛の巣の糸を掴んだ。
近くを見渡すと、ブラックタイガーはのび太のすぐ傍まで来ていた。
「ＧＹＡＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！」
ブラックタイガーが唸り声を挙げながらのび太に接近してくる。のび太は懸垂の様に腕を動かし、掴んでいる糸の上に乗った。蜘蛛の巣の縦糸は粘着性が無い事を、テレビで知っていたのび太は、縦糸を足場にしながらブラックタイガーの攻撃を避け続けていた。
その頃燐は、『ベネリＭ３』を撃って、大量のゾンビを退けていた。
「・・・数が多過ぎて埒が明かないな。グレネードぶっ放すしかないな。」
と言うと燐は、『ＵＳ　ＥＸ－４１』に榴弾が装填してある事を確認すると、ゾンビ共から一旦距離を取った。
燐は、ある程度ゾンビとの距離が離れた事を確認すると、『ＵＳＥＸ－４１』を発砲した。

「オオオオオオオオ。」
「アアアアアアアア。」
「ウアアアアアアア。」
爆音と共に大量のゾンビは悲鳴を挙げながら吹っ飛んだ。
「これで大分片付いたな。」
と、燐は呟くと、ふとのび太達の方を見た。すると、のび太が蜘蛛の巣の上でブラックタイガーの攻撃を避け続けているのを発見した。
（のび太の方は苦戦しているみたいだな。どういう訳か知らないけど、銃を持ってないみたいだな。加勢してやるか。）
と思った燐は、『ＲＰＧ－７』を構えようとした。しかし、死角からゾンビが襲い掛かってきた。
「ウォォォォォォォ。」
１体のゾンビは唸り声を挙げながら燐に掴み掛かってきた。
「しまった！まだ居たのか！」
と言いながら燐はゾンビを引き剥がそうとするが、中々引き剥がす事が出来ない。燐はのび太の方を見ると、何を思ったのか、のび太に叫んだ。
「のび太～～～～！！」
と、燐が叫ぶと、のび太は燐の方を振り向いた。すると燐はのび太に叫んだ。
「受け取れ～～～～！！！」
と叫ぶと同時に燐は、腰の後ろの方に掛けてあった『Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　Ｍｋ．２３』をのび太の方へ向かって投げた。投げられた『Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　Ｍｋ．２３』は、一直線にのび太の方へ飛んでいった。
のび太は空中に居たが、のび太はそれを取るべく、キャッチの体制に入った。すると、それを邪魔するかの様にブラックタイガーが迫ってきた。
「ＧＹＡＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！」
ブラックタイガーが、『Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　Ｍｋ．２７』を叩き落と

そうと、迫ってきた。
するとのび太は、空中でハンドガンを蹴り上げ、ハンドガンの飛んで来る軌跡の軌道を大幅に変えた。いきなり軌道が変わった為、ブラックタイガーはハンドガンを叩き落とせなかった。
のび太は空中で孤を描いて飛ぶハンドガンを何とか掴もうとした。右手の小指付近を『スライド』の『フロントサイト』に当てて、銃を逆回転させ、次に『トリガーガード』と『トリガー』の間に中指を差し込み、そして、回転させながら『グリップ』をしっかりと握り締め、ブラックタイガーに向かって、全弾を叩き込んだ。
「ＧＹＡＯＯＯ

り、銃なりの装備を整えた後、動物園の東口から動物園を出た。
「ここからはどう行くんですか？」
と、のび太が燐に訊いた。すると、燐は応える。
「この道を直進していけば着く筈だ。」
と、燐が言うと、３人は大通りを進んで行った。道中には相変わらず大量のＢ．Ｃ．Ｗ．が居た。３人は、それ等を蹴散らしながら進んでいく。
「キリがないよ！！」
と、真理奈がごねる。すると、燐が言う。
「この先を抜ければもう少しだよ！」
その燐の言葉を頼りに、３人は道を進んでいく。暫く進んでいくと、驚くべき光景が見えた。
「あらら、道が塞がっちゃってるな。」
と燐が言った。眼前には炎上した車が大量に重なっており、とても通れる所ではなかった。
「ちょっと通れないじゃない！話と違うよ！！」
と、真理奈が燐に愚痴った。
「知るか！近道ってだけで絶対に通れるっていう保証は無いよ！」
と、燐が反論する。するとのび太が言う。
「２人共落ち着いて。ここは通れないようだから、取り敢えず横道へ行きましょう。」
そののび太の言葉を聴いた燐と真理奈は静かになり、近くの路地裏に入った。しかし、路地裏の先は行き止まりだった。
「そんな！行き止まり！？」
と、真理奈が驚く。後ろからはゾンビやＢ．Ｃ．Ｗ．が迫って来ている。
「どうするのび太！このゾンビ共を撃ち抜くしかないか？」
と、緊迫した表情で燐がのび太に話し掛ける。するとのび太は下を見て何かを気づいた様で、燐に応えた。
「いえ、閃光手榴弾を使って下さい。」

そののび太の言葉を聴くと燐がのび太に訊く。
「え、それでいいのか？」
と言いながら燐が迷っていると、のび太が、
「いいから早く！！」
と急かした。
すると燐は懐から閃光手榴弾を取り出し、ピンを抜いて放り込んだ。
数秒して、閃光手榴弾が光を放った。その強烈な光に耐えられなかったゾンビとB．C．W．は、暫く前が見えなかった。
やがて前が見えるようになると、のび太達はもうそこには居なかった。

「・・・こんな所来て大丈夫なの？」
と真理奈が言う。するとのび太が応える。
「仕方ないだろ。ここしか行ける所無いんだから。」
とのび太が言うと、真理奈が喋る。
「まぁさっきの誰かさんよりはいいけどね。」
と、真理奈が言う。
「しかしまぁ、よくあんな土壇場でこんな事思いついたな。」
と、燐がのび太に言った。するとのび太は応える。
「下を見たら偶然マンホールの蓋が見えたんで、もしかしたら下水道に続くかなって思ったんです。」
と、のび太は言った。
「だけど油断するなよ。ここにも何か居るかもしれない。」
と、燐は2人に忠告した。
「解ってますって。」

と、のび太が言い、
「解ってるよ。」
と、真理奈が言った。
一行は更に下水道の先へ進んで行った。

ＡＲＥＡ５『下水道』

のび太達は下水道の奥へ進んで行った。下水道はゾンビもＢ．Ｃ．Ｗ．も居ず、静かだった。
「下水道の中は静かですね。上の騒ぎが嘘みたいだ。」
と、のび太が呟いた。
「ああ、もしかしたら何事も無く下水道を抜けられるかもしれない。」
と、燐が言う。しかし、そう簡単に事は進まなかった。
「ＫＩＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！」
いきなり、下水道に奇声が鳴り響いた。
「！・・・今のは、・・・・・・ハンターか？どうやらこの下水道もそれなりに危ないようだな。」
と、燐が言うと、３人はすぐ銃を撃てるように準備した。
下水道の造りは、あまり入り組んでおらず、道幅も広いので、戦えない地形では無かった。現在のび太達は、入って来たマンホールから数百メートル進んだ所の曲がり角付近に居る。その曲がり角は右に曲がっていて、右に曲がった先はクランク型の通路になっており、奥の方に何かの存在を僅かに視認した。
「あそこに微かに見えるのがハンターでしょうか？」
と、のび太が言う。
「恐らくはな。だが、１体だけとは限らない。充分に警戒しながら行こう。」
と、燐が応えると、３人はゆっくりと進んで行った。
のび太達はクランク型の通路の曲がり角に身を潜めた。曲がり角のすぐ向こうににハンターが居た。
「・・・・近くにはこの１体しか居ない様ですね。」
と、のび太が呟いた。
「じゃあ、私がこのサブマシンガンで倒してくるよ。」

と、真理奈が喋ると、真理奈は『H&K　MP7』をハンターに向けて連射した。
「KIYAAAAAAAAA!!」
ハンターは悲鳴を挙げている。ハンターは耐久力が高い為、中々倒れなかった。ふと、のび太がある事に気がついた。
「!!あれは!!!」
すると、のび太は天井に向かってハンドガンを撃った。
「KSHAAAAAAAA

「駄目ですよ！ここは地下なんですから！焼夷弾と榴弾は止めておいたほうが良いですよ！」
と、のび太が言うと燐が反論した。
「じゃ、どうすんのさ！！」
と、燐が言うとのび太が応える。
「散弾銃を使って、後方から来るＢ．Ｃ．Ｗ．を全自動火器で制圧します。」
と、のび太が言うと、渋々納得したのか、『ＲＰＧ－７』をしまい、『ベネリＭ４』を取り出すと、真理奈に言った。
「・・・・・・・真理奈！Ｍ３を貸せ！！２挺の散弾銃で食い止める！！」
と、燐が叫ぶと、真理奈は『ベネリＭ３』を燐に渡した。すると燐は、『ベネリＭ３』『ベネリＭ４』を構えて、後ろに居る大量のＢ．Ｃ．Ｗ．に向かって撃った。
「ＫＩＳＨＡＡＡ

「真理奈ちゃん！燐さんの加勢をしてくれ！こっちは僕だけで大丈夫だ！！」
と、のび太が真理奈に言うと、真理奈が応える。
「解った！のび太君も気をつけて。」
と、真理奈が言うと、真理奈は後方のＢ．Ｃ．Ｗ．に向かってサブマシンガンを連射した。
前方では、のび太が２挺の全自動火器でＢ．Ｃ．Ｗ．を殲滅していった。

問題無く殲滅出来ている様だったが、弾丸をかい潜った数体のＢ．Ｃ．Ｗ．がのび太に向かってきた。
「ＫＩＹＡＡＡ

ＡＡＡ

向かって、銃を撃ち続けた。

暫くすると後ろから声が聞こえた。

「のび太君。もうこっちはもたないよ！」

と言ったのは真理奈だった。後方は前方より大量のB．C．W．が居た為、捌き切れなかったのだ。のび太は辺りを見渡すと、真理奈と燐に言った。

「・・・・もう少し行った先にマンホールがあります。そこで一旦地上へ出ましょう。」

そののび太の言葉を聴くと、3人で、前方に居るB．C．W．共を蹴散らし、マンホールの直下まで来た。後方からは、大量のB．C．W．がこちらへ向かっていた。

「さっきみたいに閃光手榴弾を使って逃げましょう。」

と、のび太が言うと、燐が言う。

「ああ、解っているさ！！」

すると燐は閃光手榴弾のピンを外し、B．C．W．共に向かって投げた。

数秒すると、閃光手榴弾は強烈な光を発した。B．C．W．共の視界を奪っている隙に3人は梯子を上り、下水道から出た。

ＡＲＥＡ１『軍人』

地上へ出ると、周囲はゾンビだらけで、瞬く間にゾンビに囲まれてしまった。
「！！しまった！！！地上にはゾンビがいたのか！！！」
と、のび太が叫んだ。
「もう駄目だよ～～～！！！」
と、真理奈が叫ぶ。
「ゾンビごときがどうした！ＲＰＧ－７で吹っ飛ばしてやるよ！！！」
と、燐は今にも『ＲＰＧ－７』をぶっ放しそうな勢いである。すると、のび太の足元に何かが転がってきた。
（・・・・ん？何だこれ？）
その転がってきた物体は、黒い円筒型の形状をしていた。そして、のび太は気づいた様に燐と真理奈に向かって言った。
「燐さん、真理奈ちゃん！今すぐ耳と目を塞いで！！」
と、のび太が叫ぶと、真理奈はのび太に尋ねた。
「何で？」
と、真理奈が言うと、のび太はすかさず言う。
「いいから、早くして！！」
そののび太の言葉を聴くと、燐と真理奈は目と耳を塞いだ。
すると、すぐに強烈な光と大きな爆音が響いた。そのおかげでゾンビ共は視覚と聴覚を一時的に失った。
光と音が収まると、のび太は目を開き、耳を塞いでいた手を耳から離した。すると、路地裏の奥から声が聞こえてきた。
「こっちだ！早く来い！！」
するとのび太は真理奈と燐に、
「あの路地裏に逃げ込みましょう。」
と、一声掛けると、声のした路地裏に向かって走った。真理奈と燐

ものび太の後を着いていく。
「ちょっと、一体何があったの？」
と、真理奈がのび太に訊く。するとのび太は応える。
「誰かが音響手榴弾（スタングレネード）を投げ入れたんだ。」
そののび太の言葉を聴いた燐は喋る。
「音響手榴弾（スタングレネード）って、閃光と爆音で視覚と聴覚を奪う手榴弾だっけか。」
と、燐が言うと、真理奈が喋る。
「でもその『投げ入れた人』って誰さ？」
と、真理奈がのび太に訊くと、のび太は応える。
「いや、解んない。多分この先に居ると思うんだけど。」
と、のび太が言うと、真理奈と燐は後は何も言わなかった。
暫く進むと、路地裏から大通りへと出た。そこには赤い乗用車と、戦闘服を着た1人の男性が居た。その男性は、バックパックを背負っており、髪はあまり整えられていない黒の短髪で、髭を生やしていた。ぱっと見た感じ、30代位に見えた。その男性が着用している戦闘服は、黒や紺色を基調とした物で、下は長ズボン形状になっていて、上半身は半袖状になっていた。肩や胸などの要所には服の内側にプロテクターが装着されているのが確認できた。更に、胸辺りに2つのポケットがあり、肩にはベルトが掛かっていた。肩のベルトにはホルスターと思われる物があり、そこにハンドガンが収納されていた。腰辺りを見ると、そこにもベルトがあり、右と左に銃が収納してあるホルスターが見えた。
「おっ、何とか無事みたいだな。」
と、軍人かと思われる男性は言った。すると、のび太が話す。
「危ない所を助けて頂き、ありがとうございます。僕は野比のび太といいます。あなたは？」
と、のび太が訊くと、その男性はのび太の言葉に応える。
「俺の名は、『玄洞（げんどう）　巌（いわお）』。仲間内からは巌（げん）って呼ばれてる。・・・こっちの嬢ちゃん達は？」

と、巌が訊いたので、のび太は2人の代わりに言った。
「え～と、こちらの人が『牧野燐』さんで、こっちの僕と同じ位の女の子は、『相葉真理奈』ちゃんです。
・・・・・・ところで、巌さんは、何でこんな所に居るんですか？」
と、のび太が巌に訊いたので、巌は応えようとしたが、
「ウァァァウゥゥ。」
という、唸り声がしたので、巌は、
「取り敢えず詳しい話は車に乗ってからにしようぜ。ここじゃ危険だからな。」
と言った。すると3人は車に乗り込んだ。勿論、巌が運転席に座り、のび太は助手席に座り、真理奈と燐は後部座席に座った。
やがて、車は大通りを走行し始めた。すると、巌が喋る。
「・・・・・さっきの質問の事だが、まぁこの服装で解ると思うが俺は軍人だ。政府直属の極秘軍事特務機関『F．I．A．S．S．U．F．E．（フィアスサフィー）』の隊員だ。」
と、巌が言うと、のび太は巌に尋ねた。
「『F．I．A．S．S．U．F．E．』とは？」
そののび太の言葉を聴いた巌は応える。
「『F．I．A．S．S．U．F．E．』つーのは、『緊急事態における現地調査及び鎮圧特殊部隊』の事で、
『Field Investigation And Supppress Special Unit For Emergency』
と言い、略して、
『F．I．A．S．S．U．F．E．（フィアスサフィー）』っていう機関だ。ここら一帯で暴動やら猛獣が暴れているっていう情報を掴んだんでな、俺達はそれを調べに来たって訳だ。」
巌のその言葉を聴いた燐が巌に訊く。
「俺達？あんた1人しか居ないじゃないか。」
と、燐が言うと、巌が応える。
「別行動をしているが、俺の他にも後2人、隊員が調査に来てるん

だ。」
と、巌は言った。巌は続いてのび太達に訊いた。
「・・・・・で、あんた等はどういう経緯でここに居るんだ？まっ、どうせ訳ありだと思うが。」
巌のその言葉を聴いたのび太は、ここまで来るまでの経緯を話した。

「・・・・・随分とまぁ凄い体験してんだなお前等。」
と、巌が感嘆の声を漏らした。巌は続いて喋る。
「んで、お前等はその『ナムオアダフモ機関』に行こうとしていると？」
と、巌がのび太に言うと、のび太は頷いた。
「とすると、その企業を調査すれば何か解りそうだな。」
と、巌が呟いた。すると、車のサイドミラーに何かが映ったので、巌はサイドミラーを覗いた。
「・・・・後ろから、・・・・・バギーか？」
と、巌が呟いた。そして、のび太達も後ろを振り向いた。
「・・・確かにバギーだな。それに、ぱっと見、３０台位居るな。」
と、のび太が呟いた。

すると、後方のバギーから声が聞こえてきた。
「え～、前の軍用車は止まりなさい！止まらない場合、武力制裁に

よる実力行使をさせてもらう。我等『ナムオアダフモ機関』の栄光を邪魔する者は何人(なんぴと)たりとも許さん。我々『第一特殊部隊』が成敗してくれるわ。」

との言葉が聞こえた巌(げん)は言う。

「へぇ、大仰なこった。話を聴く限り、その『ナムオアダフモ機関』っていう企業が、非正規の部隊を造ったってとこか。・・・・・・でもこの車、市販されてる一般車なんだよなぁ。なのに軍用車って言ってくるって事は、相手は俺達『F．I．A．S．S．U．F．E．』の事も知ってるって事か。」

と、巌(げん)が呟くと、暫くして後方から何かが飛んできた。

「わっ！何あれ！？」

と、真理奈が思わず叫んだ。後方から飛んできたのは８５ｍｍ榴弾だった。

「ちっ、あいつらマジでやる気かよ！！・・・・・・あれだけの数の榴弾を回避するとなると、難しいかもな。」

と、巌(げん)が呟くと、のび太が話し掛ける。

「巌(げん)さん。僕が上に出て榴弾を迎撃します。運転の方はお願いします。」

と言うと、のび太は車のドアを開けて、車の上に攀(よ)じ登った。

「おい！ちょっと待てよのび太！！」

と、巌(げん)はのび太を制止した。しかし、のび太は降りては来なかった。

のび太を止めるのは無理だと判断した巌(げん)は喋る。

「ち、仕方ねぇ。のび太！無理すんなよ！！」

と、のび太に忠告した。続いて巌(げん)が喋る。

「それと、運転は任せろ。俺のドライビングテクニックを嘗めるなよ。」

と、巌(げん)が言った。そして、車上での銃撃戦が始まった。

ＡＲＥＡ１『軍人』（後書き）

久しぶりの『あとがきルーム』開館といきたいと思います。
今回のゲストは真理奈と燐です。
「あたしはここに来るのは初めてだな。」
「・・・・・・・・。」
あれ、真理奈ちゃん何で黙ってんの？
「だって、私の出番が全然無いんだもん！」
「そりゃあれか、空気化ってやつか。でもそう考えるとあたしも出番が無かったような・・・。」
う・・・、まぁ何回かはそういうこともあるさ！出番なんて後半一杯出てくるから安心してよ。
「ん～～～。まぁいいか。」
「ついでに言うと、次回はのび太と巌が大活躍しそうな雰囲気が漂っているんだが。実際のとこどうなんだ？」
勿論のび太と巌は活躍します。まぁ主人公だしいいじゃないか。
「巌さんの方は？」
初登場だし、頼りがいのある軍人って事で活躍します。
「ん、そういえばジャイアン達は？」
現在別行動中です。もうすぐで出番が現れると思います。
「そう。じゃ、そろそろ終わる？」
そうだな。じゃ、次回の『あとがきルーム』までさようなら。

ＡＲＥＡ２『銃撃戦』

のび太が車上に到達し、『ベレッタＭ９２』を取り出そうとした時には、既に数発の榴弾がこちらへ飛翔して来ていた。
「・・・覚悟はしていたけれど、かなり大量の榴弾を捌かなきゃならないな。ちょっときつそうだけど、やるしかないからな。」
のび太はそう呟くと、榴弾一発一発をよく狙って、『ベレッタＭ９２』を撃った。『ベレッタＭ９２』から放たれた『９ｍｍパラベラム弾』は一発も外すことなく、榴弾に直撃した。しかし、『９ｍｍパラベラム弾』では威力が低いのか、４～５発程撃たないと、迎撃が出来なかった。
「やはり、『９ｍｍパラベラム弾』じゃ威力が低いか。」
と呟くと、のび太は『コルトパイソン』を取り出すと、飛翔して来る榴弾を狙い撃った。すると、一発で榴弾を迎撃する事が出来た。しかし、マグナムでは連射が出来ないので、結果的に迎撃スピードは落ちてしまった。それに気づいたのび太は再び『ベレッタＭ９２』に持ち替え、榴弾に向かって連射した。
しかし、やはり迎撃が間に合わず、数発の榴弾を撃ち漏らしてしまう。榴弾が車に直撃しようとした瞬間、車は急カーブした。
「わっ！」
急にカーブしたので、のび太は車上から振り落とされそうになった。
すると、車内から声が聴こえてきた。
「わりぃ、のび太振り落とされてないか？」
と、巌の声が聴こえると、のび太は応えた。
「・・・なんとか大丈夫です。」
と、のび太が言うと、巌が話し掛ける。
「榴弾は最低限２０％位迎撃してくれれば俺が避ける。後は、振り落とされないように気をつけろよ。」
と、巌が言うと、のび太は言う。

「ええ、解りました。」
と言うとのび太は再び榴弾を迎撃し始めた。

暫くすると、弾切れを起こしたのか、榴弾が止んだ。
「ん？弾切れか？」
と、巌が呟いたが、またすぐに榴弾が発射された。
「ちっ、まだ弾切れじゃ無かったか。しかし、さっきよりでかい榴弾に見えるな。」
と、巌が呟いた。すると、のび太が向こうのバギーを見て言う。
「・・・向こうが使ってる砲、もしかして『ＲＰＧ－２９』か？」
と、のび太が言うと、巌が言う。
「って事は８５ｍｍじゃなく、１０５ｍｍって事か。当たったら即破壊されるな。」
と、巌が言っている内にも榴弾はこちらに向かってくる。のび太は引き続き、榴弾を迎撃した。巌の方も、上手く運転し、榴弾を回避する。しかし、あまりにも榴弾の数が多いので、捌き切れなかった榴弾が一発、車に当たろうとしていた。
「しまった！間に合わない！」
と、のび太が叫んだ。
次の瞬間、車に向かっていた榴弾が着弾する前に爆発した。
ふと見てみると、燐が窓を開けて、『ＲＰＧ－７』を車外に出しているのが見えた。どうやら『８５ｍｍ榴弾』を発砲して、迎撃したようだ。すると燐は喋る。
「あたしも忘れるなよ。車内に居たって、迎撃出来ない事はないんだからな。」
と言うと、燐は８５ｍｍ榴弾を『ＲＰＧ－７』に再び装填し、発砲した。向かってくる榴弾に見事に命中し、榴弾を破壊した。

そして、のび太も２挺の『ベレッタＭ９２』を連射し、榴弾を破壊していく。

暫くすると、本当に弾切れになったのか、榴弾はもう撃ってこなくなった。
「ふ～、何とか凌ぎ切ったってとこか？」
と、巌は呟いた。しかし、何かに気づいた真理奈が言う。
「ねぇ、あのバギー、こっちに向かって来てない？」
その真理奈の言葉を聴いた全員は一斉にバギーの方を向いた。
「・・・確かに言われてみればそうかもね。」
と、燐が言う。すると、巌が呟く。
「あらかた、接近してこの車に乗り込んで来るつもりだろうな。」
と巌が言うと、間も無くして、バギーが接近してきた。するとのび太が呟く。
「くっ、乗り込んで肉弾戦で決めるって寸法か。」
続いてのび太は巌に訊く。
「・・・巌さん。どうすれば良いでしょうか？」
のび太のその言葉を聴いた巌は応える。
「奴等のタイヤを撃ち抜いて操縦不能にしてやれ。」
と巌が応えるとのび太が反論する。
「・・・でもそれって、乗っている人は死ぬんじゃないんですか？」
のび太のその言葉を聴いた巌は言う。
「だがやらなきゃこっちが殺られる。それに操縦不能になったからって、死ぬって決まった訳じゃない。」
と、巌が言った。すると、のび太は渋々納得した。
「・・・・・・・・解りました。」
と言うと、のび太は『ベレッタＭ９２』の銃口をバギーのタイヤに向けて、発砲した。１発の『９ｍｍパラベラム弾』がバギーの後輪に直撃し、タイヤは破裂した。そしてそのバギーは、操縦不能になり、スピンした。
「うわあああぁぁぁぁぁぁぁ！」

スピンしたバギーの運転席から悲鳴が聞こえた。恐らくは運転手が挙げた悲鳴であった。
のび太は気にしないようにし、ほかのバギーに対しても同様の対処を行った。銃弾は1発も漏らさずにバギーの後輪を的確に撃ち抜いた。しかしそれでも、接近してくるバギーは大量にいたので、車のすぐ側まで接近してきた。バギーには運転手を含む2人の人間が乗っており、後部に乗っている人は立ち上がって、トンファーの様な物を持っていた。そして、トンファーを持った腕を振り上げた。巌は、腰の左にあるホルスターから『S&W M945』を取り出し、
「やらせるか!!」
と叫ぶと、トンファーに向かって射撃した。トンファーに『.45ACP弾』が直撃し、トンファーは吹っ飛んだ。続いて巌は、バギーのタイヤに向かって射撃した。
放たれた『.45ACP弾』は見事に前輪のタイヤに直撃し、バギーはスピンして巌達から離れていった。

その後ものび太達は、バギーを退け続けていた。

暫くすると、のび太が喋る。
「向こうに新しいバギーが来ているな。・・・もしかして援軍か?」
と、のび太が言うと、巌が呆れたような口調で言った。
「はぁ~あ。よくもまぁ飽きずに来るもんだ。」
と、巌が言うと、後方でいきなり爆発が起きた。
「!・・・何だ!!」
と、巌が驚いた。その時、丁度後ろを見ていたのび太が呟く。
「・・・・あれは、虎か?」
と、のび太が呟くと、その虎は後方にいるバギーに次々と襲い掛かり、襲われたバギーは次々と爆発した。
「でも何で爆発するの?」

と、真理奈が巌に尋ねた。すると、巌が応える。
「恐らくエンジンタンクを破壊しているんだ。それで爆発しているんだろう。
・・・・・・・・・それより、あいつがあの『B．C．W．』って奴か？」
と、巌が言うと、のび太が応える。
「・・・そうと決まった訳ではありませんが、可能性は高いです。
「本社には、後3体のB．C．W．のデータがある」って言ってましたし。」
と、のび太が言っている内に、後方のバギーは全て爆発した。そして虎は、こちらへ向かってきた。
「・・・・・・よく見ると、肉体の所々が腐ってるな。あいつがB．C．W．っていう線は濃くなったな。」
と、のび太が呟くと、巌がのび太に忠告した。
「気をつけろのび太！あいつは只者じゃねぇ！油断するなよ！！」
と、巌がのび太に叫んだ。のび太は『ベレッタM９２』に弾丸を装填し、攻撃に備えた。

ＡＲＥＡ３『虎』

後方にいる虎は、のび太達の乗っている車とほぼ同じ速度でこっちへ向かって来ていた。因みに今の車の速度は約６０ｋｍ／ｈである。
「・・・・・巌さん、どうします？撃ってみますか？」
のび太が巌にそう訊くと、巌は応える。
「いや、もう少し様子を見よう。何か仕掛けてくるかもしれないからな。」
と、巌は言った。

しかし、向こうの虎は一向に仕掛けてくる気配がない。
「・・・・・・のび太、１発撃っとけ。こちらから仕掛ける。もしかしたら今の速度があの虎の最高速度かもしれないからな。」
と、巌がのび太に言うと、のび太は狙いを付けて、虎目掛けて『９ｍｍパラベラム弾』を１発撃った。弾丸が虎に直撃する瞬間、虎は瞬時にその場から消え去った。
「！消えた！？一体何処へ！？」
と、のび太が虎を探して居ると、車内から声が聴こえてきた。
「のび太！左だ！」
と、叫んだのは燐だった。のび太は進行方向とは逆方向を向いていたので、のび太は車からは左方向、のび太からは右方向になる方向を向いた。すると、そこにはさっきの虎がいた。
「さっきの一瞬でここまで接近して来ていたのか！」
と言うと、のび太は２挺の『ベレッタＭ９２』を連射した。しかし虎は、目にも止まらない速度で、その弾丸を避け続けた。
「嘘だろ！？６０キロ出てんのにあのスピードかよ！！」
と、巌が驚いた。しかし、そう言っている内に虎は車に急接近してきた。そして、車に襲い掛かってきた。

しかし、巌が機転を効かせてブレーキを踏んだので、何とか避ける事が出来た。巌は一気に左にカーブした。一方、虎の方も反転し、再度こちらへ向かってきた。

「あんなのにどうすればいいっていうのさ！？」

と、真理奈が弱音を吐く。すると、巌が言う。

「諦めるな！のび太！ヤツに撃ち続けろ！！」

と、巌が叫んだ。のび太は向かってくる虎に『ベレッタＭ９２』を撃ち続けた。しかし、弾丸は全て避けられた。
「ちっ！！」
と、叫ぶと、巌は『Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ９４５』を虎に向かって撃った。
しかし、全弾外れてしまった。
「ちっ、全然当たんねぇ！」
と、巌が叫ぶ。そうこうしている内に虎は更に接近してくる。
すると、のび太はケブラーバッグから『コルトＭ７９』を取り出し、虎に向かって撃った。
放たれた榴弾は虎に当たらず、道路に直撃した。
「そこだ！！」
すると、のび太は虎が避けた方向に『ベレッタＭ９２』を連射した。０．２秒撃ち続け、１６発撃った。全弾命中とまではいかないものの、殆どの弾丸が命中した。
「ＧＢＯＡＡＡ

左方向に避けた。そして虎に向けて、『ベレッタＭ９２』を４発撃った。

「ＧＢＯＡＡＡ

咆哮を挙げた虎は、一直線にのび太に突進してきた。のび太は虎の動きを見て、左方向に避けた。虎の攻撃を避けたがに見えたが、虎が急に方向転換し、のび太は避け切れなかった。

「ＧＢＯＯＯ

と真理奈が言った。
「いやぁ、ただの偶然だよ。一歩間違えればこっちが殺されてた。」
と、のび太が喋る。
「まぁ、なんにせよ助かって良かったじゃねぇか。早く先急ごうぜ。」
と、巌が喋る。すると、のび太が車に乗り込もうとしたその時、
「GBOOO

「巌さん、彼は誰です？」
と、のび太が巌に尋ねると、巌は応える。
「ああ、あいつは俺のチームの仲間だよ。ほら、さっき言ったろ？『ここには俺の他に2人来てる』ってよ。あいつの名前は、『貴崎仁』。最近入隊してきたんだ。歳的には仁の方が上だが、隊の中では俺が先輩だから俺が上司って事になってる。でもま、年上の部下ってやり難いんだよな。」
と、巌が言うと、車上にいる仁が喋る。
「しかしそれは、当然の事です。私は隊に入ってまだ日が浅いんですから。」
と、仁は言った。
「まぁ、それはいいや。取り敢えずお前にこっちのガキ達の話を伝えるからよ。・・・・・・・・でもその前に車から降りてくんねぇか？これじゃあ首が痛くて敵わんからな。」
巌のその言葉を聴いた仁は車上から降りた。
そして、巌は今までの事を仁に話した。

「・・・・・見上げた根性ですね。その子供達は。・・・で、その中の『野比のび太』という少年がこちらの子供で、『相葉真理奈』と『牧野燐』という嬢さん方がこちらの方達というわけですね。」
と、のび太達の話を聴いた仁は言った。
「そうだ。他にも、『緑川聖奈』という少女や、のび太と同年代の『骨川スネ夫』と『剛田武』という少年もここに来ているらしい。」
と、巌が言うと、仁が喋る。
「・・・玲さんには連絡を？」
仁が巌にそう訊くと、巌は応えた。

「一応した。だけど、まだ誰にも会ってねえってよ。」
と、巌が言った。続いて巌が喋る。
「取り敢えず俺達はこのまま『ナムオアダフモ機関』へ向かおうぜ。直に玲のやつも来るだろ。のび太の仲間の方も『ナムオアダフモ機関』へ行くように伝わってるようだしな。そうとなったら早く行こうぜ。」
と、巌が言うと、全員は車に乗り込んだ。巌が運転席に座り、仁が助手席に座った。のび太と真理奈と燐は、後部座席に座り、左から、燐、のび太、真理奈の順で座った。
一行は『ナムオアダフモ機関』へ向かって行った。

ＡＲＥＡ１『探索開始』

のび太達が巌達と話し、『ナムオアダフモ機関』へ向かっている頃、ジャイアン達はとある病院に居た。
「・・・・これじゃとても出られないね。」
病院のロビーを見たスネ夫がそう言った。
「やっぱり病院に入らない方がよかったか・・・。」
と、ジャイアンが言った。
「・・・一度戻りましょう。別の脱出ルートがあるかもしれません。」
と、聖奈が言うと、ジャイアンとスネ夫と聖奈の３人は病院の奥へ進んだ。３人が覗いていたロビーは大量のゾンビで溢れていた。

数分前・・・・・、ホテルから抜け出したジャイアンは、聖奈とスネ夫と合流し、市街地を進んでいる最中だった。
【「数が多すぎるな。こりゃ前の時よりかなり多いぜ。」
と、ジャイアンが言う。
「僕達、ちゃんと『ナムオアダフモ機関』に行けるのかな?」
と、スネ夫が呟く。すると聖奈が喋る。
「でも、今はそこに行くしかないですからね。」
と、聖奈は言う。
ジャイアンは『デザートイーグル』を装備し、スネ夫は『ＦＡ－ＭＡＳ』を装備し、聖奈は『Ｈ＆ａｍｐ;Ｋ　ＭＰ５Ｋ』を構えて、迫り来るゾンビやＢ．Ｃ．Ｗ．共に、弾丸を撃ち続けた。
しかし、敵数が多すぎる為、敵を抑え切れないでいた。
「もう駄目だわ。後ろの病院に逃げ込みましょう。」
と、聖奈が言った。すると３人は銃を連射しながら後退していった。

「ちっ、逃げ回るなんて俺様の性に合わねぇや。」
と言うとジャイアンは、敵の真っ只中へと向かって行った。
「ジャイアン！？」
と、スネ夫が驚いた。するとジャイアンは聖奈とスネ夫に話し掛ける。
「俺様が時間を稼ぐ。その間に病院に行け！」
と、ジャイアンが叫ぶと、スネ夫が反論する。
「何言ってるんだよジャイアン！早く逃げないと！」
と、スネ夫が言うと、ジャイアンが叫ぶ。
「え～い、ごちゃごちゃ言ってないでさっさと行きやがれ！」
と、ジャイアンが一喝すると、２人は病院に急いだ。
ジャイアンは迫り来るゾンビ共を見て言った。
「俺様が独自に編み出した格闘術、『ジャイアン流喧嘩殺法術』を見せてやるぜ！」
と、叫んだジャイアンは、ゾンビ共に殴り掛かって行った。
「ウアアアアアアアアアア！」
ゾンビは唸り声を挙げてジャイアンに掴み掛かろうとするが、ジャイアンはすかさずゾンビの頭部をぶん殴った。
「ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」
ゾンビは唸り声を挙げた。ジャイアンは間髪入れずにゾンビのボディに鋭い蹴りを入れた。
「ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

「ウアアアアアアアアアアアアアア！！」
悲鳴を挙げながら、ゾンビは数メートル吹っ飛んでいった。
ジャイアンはその場を後にして、病院へと向かった。

やがてジャイアンは、病院のロビーに着いた。
「さて、じゃあ早速、この病院を探索するか？」
と、ジャイアンは言った。すると3人は、手前の部屋から簡易に探索した。
やがて、フロント付近で何かの呻き声が聞こえてきたので、3人はロビーへ戻った。すると、大量のゾンビがロビーを占領しているのが見えた。】
そして、現在へと至る。

ジャイアンとスネ夫と聖奈は廊下で会話をしていた。
「取り敢えず、これからどうする？」
と、ジャイアンが訊くと、スネ夫が応える。
「やっぱり探索しか無いんじゃないの？」
と、スネ夫が言うと、聖奈も喋る。
「そうですね。手分けして探索しましょうか？」
聖奈が提案すると、スネ夫が喋る。
「じゃあ、1人ずつ1階ごとに探索をしよう。探索を終えたら、ここに集合しよう。」
そのスネ夫の言葉を聴くと、他の2人も承諾した。
話し合いの結果、1階はスネ夫が担当し、2階は聖奈が担当し、3階をジャイアンが担当した。

そしてそれぞれは、それぞれの探索場所へ行った。

ＡＲＥＡ１『探索開始』（後書き）

こんにちは、『あとがきルーム』の開館です。今回のゲストはジャイアンとスネ夫です。
「やぁ、久しぶり。」
「やっと俺様の出番が回ってきたか。」
出番があって満足かね？
「そりゃあな。のび太ばっかりにかっこつけられてたまるか。」
「でもジャイアン、なんか新しい技が出てこなかった？」
「ああ。俺様が独自に編み出した格闘術、『ジャイアン流喧嘩殺法術』だろ。だてに俺様も脱出した後、暇持て余してなかったって訳だ。」
「じゃあつまり、脱出した後、技の研究をしていたって事？」
「その通りだな。まぁ勿論、他にも技があるからな、期待したまえ。」
「で、ところで筆者さん。病院ではこの後何が起こるんですか？」
それを教えられる訳がないだろう。まぁ次回予告ぐらいなら良いか。
次回は、１階の探索をしているスネ夫視点でいきます。
「最初は僕かグフフフ。１番目の出番は戴きだね。・・・でもそれって次回予告になってないね。」
うるさいっ。

・・・・・・・・という訳で、次回はスネ夫視点で進みます。お楽しみに。

小説の評価が低い。誰か評価してくれ・・・。

AREA2『1F　スネ夫』

他の2人と別れたスネ夫はすぐ傍にあった院内見取り図を見た。それを見ると、病室の一階は、通路がカタカナの『ロ』の様な形をしており、ロビーの両側に通路が延びていた。通路にあるのは、入院患者用の病室が殆どで、ロビーの右側の廊下には、『X線検査室』がある事が解った。スネ夫は早速探索を始めた。スネ夫は、『X線検査室』から反対側に通路を進んだ。『X線検査室』から反対側から周って探索する方法をとった。スネ夫は少し進んだ所で右へ曲がる曲がり角に突き当たったので、スネ夫は右へ曲がった。すると、『院内見取り図』の通り、左右の壁に病室の扉が並んでいた。スネ夫はまず、左の一番手前にある病室へ入った。中には、6つのベッドがある普通の病室だったが、ゾンビが5体程居た。

スネ夫は懐から『スプリングフィールドXD』を取り出し、ゾンビに向かって連射した。

「アウウゥゥゥ

「あの時に比べたら、僕も慣れたもんだな。」
と、スネ夫は呟くと、病室の探索を始めた。

しかし、その病室からは何も見つからなかった。スネ夫はその病室を出た。
そして、向かいの病室を同じ様に探索し始めた。そこにはゾンビは居なかった。スネ夫は一応周囲に気を付けながら探索した。

数分して、この病室の探索を終えたが、窓際にあったグリーンハーブ以外は何も見つからなかった。
そしてスネ夫は探索していた病室の筋向かいの病室を探索した。この要領でスネ夫は次々と病室を探索した。

幾つかの病室を探索した後、誰かの日記の様な物を見つけたので、スネ夫はそれを読んだ。
それにはこう書いてあった。
『７月２９日
明日は遂に僕の手術の日だ。怖いけど、僕の体の中のガンっていうのがとれるから、怖いけど、がんばろう。

７月３０日

お医者さんから手術は当分延期だと告げられた。何かあったのかなぁ？

８月１日
いつになく病院が騒がしい。何があったんだろう？

８月２日
何がどうなってるのか解らないけど、一杯のお医者さんと看護婦さんがここの病室に入って来た。扉の向こう側の変な唸り声と関係があるのかなぁ？

８月３日
昨日は一体何だったんだろう？いきなり変な人達が入って来たと思ったら、お医者さん達に襲い掛かった。僕は怖くてベッドで震えていた。そうだ、誰かを呼びに行こう。ロビーに公衆電話があった筈。もうこんな怖いのから抜け出したい。

月　日

』
スネ夫はそれを読み終えると、その日記を懐にしまった。そして、その病室を後にした。

スネ夫は引き続き、１階の探索を続行した。

残りの病室を全て探索すると、正面にロビーが見え、左方向の壁に扉が見え、その扉には『X線検査室』と書かれていた。スネ夫はその扉を開けた。鍵は掛かっていなかったが、扉が少々重かったので、両手でその扉を開けた。

『X線検査室』の中はゾンビは全く居なかった。周囲を多少警戒しながらスネ夫は、X線検査室の探索を始めた。

X線検査室には何も無かった。

「・・・無駄足だったか。」

と、呟いたスネ夫は、X線検査室を出ようとした。しかし、何かがスネ夫に向かってきた。

「オオオオォォォォォォォォォォォ！！」

いきなり唸り声が聞こえたので、スネ夫は振り返り、突進して来る何かを咄嗟に回避した。

「何だ！」

と言ってスネ夫は、改めて向かって来た何かを見た。”それ”は、只のゾンビの様に見えるが、体内から骨の様な突起物が出ていた。

「何だあれ！？」

と、スネ夫は叫んだ。するとスネ夫は『H&

「オオオオオオォォォォォォ！！」
ゾンビは反転し、唸り声を挙げながら再びスネ夫に向かって行った。
「来るな来るな！！」
と言いながらスネ夫は、更に『ＡＫ－４７』を連射した。
今度はゾンビを仰け反らせた。
「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオォォォォォォ

ＡＲＥＡ３『２Ｆ　聖奈』

病院内の２階では、聖奈が探索を行おうとしていた。
「まずは『院内見取り図』でフロアの構成を確認しましょう。」
と呟くと、聖奈は掲示されている『院内見取り図』を見た。それを見ると、２階は、１階と同じ病室が２０室程あり、１階のロビーの真上に位置する所には『ナースステーション』があるのが確認できた。聖奈はまず、病室の方から調べていった。聖奈は一つずつ確実に探索していった。途中の病室にゾンビが何体か居たが、『ベレッタＣｘ４』でゾンビの数を減らし、『グロック１７』で確実に倒す戦法を取っていたので、ゾンビを倒すのに苦労はしなかった。

暫くすると聖奈は、２０室程の病室の探索を終えた。病室の中にはグリーンハーブやレッドハーブ、ブルーハーブが幾つかあった他、救急スプレーや９ｍｍパラベラム弾の予備マガジンや『１２ゲージショットシェル』も幾つかあった。

「・・・・ハーブだけじゃなくて、弾薬もあるって事は、ここで警察の人達がゾンビと戦ったって事かしら？」
と、聖奈は呟いた。
しかし、今は探索を進める事が大事だと考えると、『ナースステーション』の探索をするべく、『ナースステーション』へ向かった。

聖奈はナースステーションの扉を開けると、中へ入っていった。ナースステーションの中は割と普通な感じだった。奥の方を見ると、更に扉があった。聖奈はその扉の前まで進んで行った。

その扉には、プレートが掛かっており、『資料室』と書かれてあった。聖奈はその扉を開けようとしたが、鍵が掛かっているらしく、扉は開かなかった。聖奈は諦めて振り返った。すると、
「アアアアアウウウウウウウウウウウウウ！」
という唸り声が響いた。見ると、ナースステーションの至る所にゾンビがいた。
聖奈は、『ベレッタＣｘ４』を構えて『９ｍｍパラベラム弾』を散蒔いた。
「オオォォォォォォォォォォォォォ！」
ゾンビは唸り声を挙げて、次々と倒れていく。しかし、ゾンビの数が多すぎる為、聖奈は移動しながら撃っていった。

撃っている途中で聖奈は、『ベレッタＣｘ４』をしまい、『Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＭＰ５Ｋ』と『Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＵＭＰ』を片手ずつに構えて、両手で撃った。２つのサブマシンガンから放たれる大量の『９ｍｍパラベラム弾』により、ゾンビは１体残らず倒れて動かなくなった。

ゾンビが動かなくなったのを確認した聖奈は、『ナースステーショ

ン』の探索を始めた。
聖奈は、並べてあるデスクを調べたが、何も見つからなかった。
聖奈は次に、デスクの引き出しを調べた。中には殆ど、関係なさそうな資料ばっかりだった。幾つかの引き出しには、『ＦＩＲＳＴＡＩＤ』と書かれていたスプレーがあり、そして、ある引き出しからは、鍵が見つかった。
「何かしらこの鍵？」
と、呟いた聖奈はその鍵をよく見た。その鍵の表面には、『γ』と記されており、裏側には『ＧＡＭＭＡ』と記されていた。
「これはどこの鍵かしら？向こうの資料室ではないと思うけれど・・・。
・・・そろそろ探索を終了しようかしら。集合場所へ戻りましょう。」
と、呟いた聖奈はナースステーションから出ようとしたが、床に伏せているゾンビに足を掴まれた。
「きゃあああぁぁぁぁ！！」
思わず叫んだ聖奈は、『グロック１７』を連射した。
「アアァァァァァァァァァァァァァァァ！！」
ゾンビは断末魔の悲鳴を挙げて、今度こそ倒れた。
「はぁ、はぁ、助かった・・・？」
聖奈は、暫く動悸が止まらなかった。
そして、何分か経って落ち着くと、床に光る物が見えたのでそれを拾った。それは鍵であり、タグには『資料室』と書かれていた。
「どうやらこれが、資料室の鍵みたいね。」
と、呟いた聖奈は資料室の扉へと向かった。
そして鍵を使い、資料室の扉を開けた。資料室の中は、大量のカルテ等があった。
「・・・これは、探索するのに時間が掛かりそうね。」
と、呟くと、聖奈は資料室の探索を始めた。

暫くして聖奈は探索を終えたが、大した収穫は無かった。
「それじゃあ、集合場所に集まりましょう。」
と、呟いた聖奈は、１階へと向かった。

ＡＲＥＡ４『３Ｆ　ジャイアン』

スネ夫と聖奈が病院を探索していた頃、ジャイアンも３階を探索していた。
「よ～し、片っ端から調べていくか。」
と呟くと、ジャイアンは３階を探索しようとしたが、上へ向かう階段がふと目に入り、呟いた。
「何だこりゃ！？階段が無くなってるじゃねぇか！」
３階から４階へ向かう階段は見事に粉砕されていた。
「この分じゃ探索は３階までで終わりそうだな。さっさと探索を済ませるか。」
と、呟いたジャイアンは３階の探索を開始した。３階も１階や２階と同じく、病室がメインのフロアだった。ジャイアンは病室を片っ端から探索していった。

８０％程の病室を探索し終えた頃、ジャイアンは呟いた。
「・・・・・簡単に何か見つかるとは思わなかったが、こうも何も見つからないとはな。・・・・・・・しかし、病室の壁の至る所が破壊されていたのが気になるな。・・・でも今は、探索が優先事項だから、さっさと探索を終わらせるか。」
するとジャイアンは次の病室の探索に移った。
扉を開けて病室内を見たジャイアンは、ある違和感に気が付いた。
「・・・この病室に倒れているゾンビ、おかしな殺られ方してるな。腕や頭の一部が潰されてる。」

と、ジャイアンは呟いた。ジャイアンが言った通り、病室内に倒れていたゾンビは全員、腕や頭部の一部が何か強力な力で潰されていた。

ジャイアンは、少々違和感を感じながらもその病室の探索を始めようとした。

「ＧＵＯＯＯ

「GOAAA

ＡＲＥＡ５『フィアスサフィー隊員』

最初に１階の集合場所に到着したのはジャイアンだった。
「なんだ、まだ誰も来てねえか。」
と、ジャイアンが呟いた。すると、スネ夫も来た。
「ジャイアン早いね。先越されちゃったな～。」
と、スネ夫がジャイアンに話し掛けるとジャイアンが喋る。
「おうよ、只の探索に無駄な時間を掛ける気はねえからな。」
と、ジャイアンは言った。そして２人は聖奈が到着するのを待った。
暫くすると、聖奈が集合場所へ来た。
「すみません、遅れました。」
と、聖奈が言うと、スネ夫が言う。
「別に良いよ、みんな無事だしね。
・・・・・・じゃ、探索の結果を報告しよう。」
と、スネ夫が言うと、聖奈が喋る。
「じゃ私から言いますね。収穫は、『ＧＡＭＭＡ』と書かれた鍵と、各種ハーブ類や救急スプレー、後は『９ｍｍパラベラム弾』や『１２ゲージショットシェル』が幾つか見つかりました。」
と、聖奈が言うと、すかさずジャイアンが喋る。
「それなら俺様の方でも見つかったぜ。『９ｍｍパラベラム弾』や『１２ゲージショットシェル』、『．５０ＡＥ弾』を見つけた。」
と、ジャイアンが言った。
「でも、この鍵は何でしょうか？」

表面に『γ』と書かれた鍵を見せながら聖奈は言った。
「・・・『γ』か。何だろう?数学記号では、『α』や『β』に次ぐ第3の定数となっているけど。」
と、スネ夫が喋った。
「わからねぇもんをいくら考えても仕方ないだろ。情報も少ないしな。それよりスネ夫、お前の方は何か見つけたのか?」
と、ジャイアンがスネ夫に訊いた。すると、スネ夫が応えた。
「・・・・・・収穫はこの日記かな。」
スネ夫はそう言いながら日記を見せた。ジャイアン達はそれを見た。

「これってもしかして、ここにいた生存者が・・・・・。」
と、聖奈が呟いた。
「まぁこんな状況だしな。だが今はこの病院を一刻も早く脱出して、ナムオアダフモ機関に到着する事が先決だ。」
と、ジャイアンが言った。
「でも、1階の窓は全部崩れてて無理そうだったよ。」
と、スネ夫が言う。すると、ジャイアンが呟く。
「3階の窓は大丈夫そうだったが3階から飛び降りるわけにも行かないしな。・・・・・・やっぱりロビーにいるゾンビ共をぶっ飛ばすしかねぇか。」

と、ジャイアンが言うと、聖奈が提案する。
「もう少し探索してみましょう。何か見落としてる所があるかもしれませんし。強行突破はそれからでも遅くない筈です。」
と、聖奈が言うと、スネ夫とジャイアンも承諾した。
「それじゃあ1階を3人で手分けして調べよう。」
と、スネ夫が言うと、3人はそれぞれ分かれて探索を始めた。

その頃、3階の窓から誰かが病院内へ侵入してきていた。

数分後、ジャイアン達3人はそれぞれの探索を終えて集合場所へ集まっていた。
「俺様の方は何も収穫は無かったぜ。聖奈さんやスネ夫の方は?」
と、ジャイアンはスネ夫と聖奈に訊いた。するとスネ夫は応える。
「僕の方も何も収穫は無かった。」
と、スネ夫が言うと、聖奈も応える。
「私の方も何も・・・・・・。」
3人とも収穫が無いのを確認したジャイアンは叫んだ。
「なら仕方ねぇ!ロビーを突っ切るしかねぇ!!」
そのジャイアンの言葉にスネ夫は愚痴を言う。
「ええ!そんなぁ!!」
スネ夫の弱気な言葉を聴いたジャイアンはスネ夫の胸倉を掴み、声を荒げて言う。
「うるせぇ!ぐだぐだ言ってんじゃねぇ!!」

そのジャイアンの言葉を聴いたスネ夫は渋々承認した。
そして3人はロビーの方を向いてロビーに走って行こうとした。
「待ちなさい！」
すると、いきなり後ろから声が聞こえてきた。声の主は続けて喋る。
「その先はゾンビの大群よ。数の制圧力を嘗めない方がいいわ。」
その言葉を聴いたジャイアンとスネ夫と聖奈は振り向いた。そして3人はその人物を見た。その人物は茶髪のショートヘアをしていて、青色の戦闘服と青色のベレー帽の様な物を被っていた女性だった。歳は２０代後半位で、青色の戦闘服は半袖と長ズボンの形状をしており、背中にはバックパックを背負っていた。左手首には、何かよく解らない小型の器械があり、右手首には、開閉可能なプラスチック製の箱の様な物が掛けられていた。腰辺りを見ると、そこにベルトがあり、そのベルトには、銃が収納されているホルスターが左右一つずつあり、右の部分には、ホルスターとは別に、ナイフが掛けられていた。そして、そのベルトの左右に一つずつ、尻の部分の左右に一つずつ、合計４つのポケットがあった。その女性が被っている青色のベレー帽の様な物の前には、ワッペンが貼られており、そのワッペンは２つの剣が交差していて、その下には、『Ｆ．Ｉ．Ａ．Ｓ．Ｓ．Ｕ．Ｆ．Ｅ』のロゴが描かれていた。
「あなたは？」
と、聖奈がその女性に訊いた。すると、その女性は言った。
「詳しい話はそこら辺の病室に入ってからしましょう。此処じゃ目立ちすぎるわ。」
と、その女性が言うと、その女性はすぐ傍にある病室に入って行った。ジャイアン達3人もそれに続いて病室に入って行った。
全員が入ると、１番扉に近い聖奈が病室の扉を閉めた。するとその女性が喋る。
「・・・・まずは自己紹介をしましょう。私はフィアスサフィー隊員の『齋藤　玲』よ。宜しく。貴方達は？」
と、その女性が言うと、ジャイアン達も自己紹介をした。

「俺様は『剛田　武』。皆からはジャイアンって呼ばれてる。特技は格闘技。趣味は歌の作詞作曲と歌を歌う事と、料理を作ることだぜ。」
と、ジャイアンが言った。すると、スネ夫が喋る。
「し、趣味も言う必要があるの？」
すると、スネ夫のその言葉に玲が応える。
「趣味までは言わなくても特技位は言って欲しいわね。後で必要になって来るかもしれないしね。」
と、玲が言った。するとスネ夫が喋る。
「え～と、僕は、『骨川　スネ夫』。特技は、ハッキングを少々。」
と、スネ夫が言うと、玲が言う。
「へぇ～、ハッキング出来るの？凄いわね。それで、そっちの娘は？」
と、玲が言うと、聖奈が自己紹介をする。
「私は『緑川聖奈』。薬品やハーブの調合が少し出来るくらいです。」
と、聖奈が言うと、玲が話す。
「取り敢えず、これで自己紹介は終わったわね。それでこれからどうするかだけど・・・・・・。」
と、玲が話すと、スネ夫が玲に訊く。
「ねぇ、玲さんちょっといい？」
と、スネ夫が言うと、玲が喋る。
「どうかした？」
するとスネ夫が話す。
「玲さんの帽子にあるワッペンが気になるんだけど。」
玲の青い帽子にあるワッペンを見ながらスネ夫は言った。すると、玲は説明した。
「この帽子のワッペンの事ね。ここに、２つの剣が交差したマークがあって、その下に『Ｆ．Ｉ．Ａ．Ｓ．Ｓ．Ｕ．Ｆ．Ｅ』ってロゴがあるでしょ。これはフィアスサフィーの隊員が付けるワッペンよ。

」
と、玲が言うと、聖奈が玲に訊いた。
「そのマークには何か意味があるんですか？」
すると玲は応える。
「剣は古来より、邪を断ち切るものとして伝わってきたわ。それがフィアスサフィーの生業なの。」
玲が説明した直後、スネ夫が玲に、
「・・・つまり？」
と、訊いた。すると玲は話す。
「テロリストの鎮圧や違法企業の活動の阻止、後はその疑いのあるものの調査ね。」
と、玲が言った。
「それじゃあ今は、この惨劇の調査に来たってところか。」
ジャイアンがそう言う。
「まぁそんなところね。ところで貴方達は何故こんな所にいるの？」
と、玲が3人に訊いた。すると3人は今まであった事を玲に説明した。

数分後、3人が話し終わると、玲が言う。
「そのナムオアダフモ機関って、相当の権力と権限を持っているみたいね。でなきゃ政府と話を付ける事なんて出来ない筈だもの。」
と、玲が言うと、ジャイアンが喋る。
「その権力やら権限やらはいいとして、取り敢えずここから出た方が良いんじゃないのか？」
そのジャイアンの言葉を聴いた玲が言う。
「・・・・一通り探してみたけど、安全に脱出出来そうな場所は無かったわ。他に道もなさそうだし、やっぱりあのロビーを突っ切るしか方法が無いわね。」
と、玲が言うと、スネ夫が驚いたように言う。
「え～あそこに突っ込んで行くの！？」
すると、ジャイアンが叫ぶ。
「当たり前だろ！俺様が全部ぶっ飛ばしてやるぜ！！」
そのジャイアンの言葉を聴いた玲がすかさず喋る。
「ちょっと待ちなさい！いくらなんでも考えなしに突っ込んで行くのはまずいわ！何か対策を立てないと！」
その玲の言葉を聴いたスネ夫は喋る。
「対策って言ったってどうすれば良いのさ！？」
と、スネ夫が言う。すると、玲が応える。
「・・・何処か別の所におびき寄せられれば良いんだけれど・・・。」
と、玲が言った。すると、聖奈が何かに気づいたように言った。
「あら、何か聞こえない？」
と、聖奈が言うと、全員は耳を澄ませた。
「オオオオオオオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ

ォ。」

扉の外からゾンビの唸り声のような声が聞こえてきた。不審に思ったスネ夫は病室の扉を開けて廊下を見た。すると、大量のゾンビが大挙して此方(こちら)へ向かって来ているのが確認できた。

「大変だぁ！！ゾンビがこっちに向かって来てるよぉ！！！」

と、スネ夫が全員に言った。

「ふん、上等じゃねぇか。こっちから行く手間が省けたってもんだぜ！！」

と、ジャイアンが戦意を剥き出しにして言った。

「落ち着きなさいジャイアン君！ここは取り敢えずバリケードを造るのよ！！」

と、玲が言った。すると４人は周りにあるベッド等を用い、バリケードを築いた。

ＡＲＥＡ６『攻防戦』

４人はバリケードを築くと、病室の奥に移動した。
「作戦内容だけど、作戦は至って簡単、ゾンビが入ってきたら、一斉に射撃する。何か質問は？」
玲が作戦内容を説明し、他の３人に尋ねた。
「おい、俺はどうすればいいんだ？銃の類は『デザートイーグル』しか持ってねぇんだが。」
と、ジャイアンが玲に言った。すると、玲が応える。
「ひとまずは待機よ。銃に慣れない者が銃を乱射しても全く当たらないから無理して銃を持つ必要は無いわ。いざという時の為に力を温存しておいて。」
玲のその言葉を聴いたジャイアンは諒解した。
「解ったぜ。」
そして、玲はスネ夫と聖奈の２人に呼び掛ける。
「全自動式の銃火器を中心に使いなさい！銃火器と予備弾倉の準備を急いで！」
と、玲がスネ夫と聖奈に言った。すると、スネ夫は、『ＡＫ－４７』と『ＦＡ－ＭＡＳ』を用意し、聖奈は『ベレッタＣｘ４』と『Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＵＭＰ』を用意した。
「ウァァァァァァァァァァァァァァァァ！」
すると、扉の向こうからゾンビの唸り声が聞こえてきた。そしてゾンビ共は扉を破壊しようとして、扉を叩き始めた。

暫くすると、扉が破壊され、ゾンビがなだれ込んできた。
「今よ！」
玲の掛け声とともに、スネ夫と聖奈と玲は一斉に銃を連射した。スネ夫は『ＦＡ－ＭＡＳ』を撃ち、聖奈は『ベレッタＣｘ４』を連射し、玲は2挺の『Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＭＰ５Ｋ』を撃った。
「ウァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！」
大量の銃弾をその身に喰らったゾンビの大群は、悲鳴を挙げながら次々と倒れていく。
「やった。これなら何とかなりそうだよ。」
と、スネ夫が言った。スネ夫が言った通り、ゾンビが押し寄せるスピードより、銃弾を撃つ速度の方が速かった。

しかし、暫くすると、何かの奇声が聞こえてきた。
「ＫＩＳＨＡＡＡ

「ＫＳＨＡＡＡ

ゾンビは次々と倒れていった。

しかし、ハンドガンの制圧力では大量のゾンビを抑え切れず、大量のゾンビに囲まれた。すると玲は何を思ったのか、『ベレッタＰｘ４』と『ステアーＧＢ』を腰のホルスターにしまった。そして、右手首に掛けてあるプラスチック製の箱の様な物を開けた。

中から出てきたのは極細のワイヤーであり、そのワイヤーの両端には取っ手が付いていた。玲は２つの取っ手を掴むと、ワイヤーを繰った。ワイヤーは閃光となり、次々とゾンビの首を狩った。

暫くすると、玲の傍のゾンビは１体も居なくなった。

その少し前、ジャイアンの方でも激闘が繰り広げられていた。

「掌底拳！！」
と、叫びながらジャイアンは、ブレインディモスに掌底拳を放った。
「ＫＩＳＨＡＡＡ

「スネ夫、聖奈さん！今の内に集中砲火だ！！」
そのジャイアンの言葉を聴いたスネ夫と聖奈は、それぞれ、『ＡＫ－４７』と『Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＵＭＰ』で、Ｂ．Ｃ．Ｗ．を撃ちまくった。
「「「「「「「「「「ＫＳＨＡＡＡ

やがて暫くすると、ゾンビやB．C．W．共は1体残らず動かなくなった。
「終わったか？」
と、ジャイアンは言った。
「恐らく大丈夫な筈よ。」
と、玲がジャイアンの言葉に応えた。
「じゃあロビーに居たゾンビは居なくなったんだね。」
と、スネ夫が言うと、玲が言う。
「外に私の車が停めてあるから、それでナムオアダフモ機関へ急ぎましょう！」
と、玲が言うと、全員は病院から出るべく、ロビーへと向かって行った。

AREA7『新型B．C．W．』

ジャイアン達４人は急いでロビーへ向かった。ロビーには大量の人の死体があった。
「・・・・こんなに一杯の人が犠牲に・・・・・。」
と、スネ夫が呟いた。
「さっさとナムオアダフモ機関へ行こうぜ。犠牲者をこれ以上増やす訳には行かないからな。」
と、ジャイアンが言う。しかし、聖奈はこの状況を不審に思っていた。
（・・・・でも、私達が病院に来た時はロビーには誰も居なかった筈。なら、この死体はゾンビになった人って事になるけど、ゾンビがこんな短時間で死ぬ事ってあるのかしら。）
と、聖奈が考えていると、ジャイアンが聖奈に話し掛けた。
「おい、聖奈さん！何やってんの。早く行こうぜ！」
そのジャイアンの言葉を聴いた聖奈は、慌ててジャイアン達に着いて行った。
そして、扉のすぐ傍に着くと、玲は扉を開けた。
しかし、扉は全く開かなかった。

「・・・・・・おかしいわね。扉が開かないわ。」
と、玲が言うと、ジャイアンが喋る。
「ちょっと俺に貸してみな。」
ジャイアンのその言葉を聴いた玲は、ジャイアンに扉を開けさせた。
しかし、ジャイアンが扉を開こうとしても、扉は開かなかった。
不審に思った聖奈は後ろを振り返った。すると、後方には驚愕の光景が広がっていた。
「あ、あれは何!!」
と、聖奈が思わず叫んだ。すると全員は後ろを振り返った。
なんと、後方の死体から植物が生えていたのだった。
「な、なにあれ!!」
と、スネ夫が叫んだ。
「また、新しいバケモンか!?」
と、ジャイアンが叫ぶ。
すると、死体に生えていた小さな植物が一気に成長した。そして、植物同士が結合し、巨大な樹木に成長した。
「も、もしかして木のB．C．W．？」
と、聖奈が驚いていると、突然向こうの樹木から蔦が伸びてきた。
そして、その蔦はスネ夫達に正確に向かってきた。
「うわ、わ!!」
スネ夫は驚き、慌てて銃を構えようとするが、それより前にジャイアンがスネ夫の前に出た。そして、蔦を両手で掴み、引き千切った。
「来るなら来やがれ!全て叩き潰してやるぜ!!!」
と、ジャイアンが叫んだ。そうこうしている間にも何本もの蔦が伸びてくる。ジャイアンは次々とそれを掴み、引き千切っていく。一

方、ジャイアンが掴み損ねた蔦は玲がナイフで捌いていく。ジャイアンと玲はその調子で蔦を迎撃していく。

最初は順調に蔦を処理出来ていたかの様に見えたが、何時まで経っても蔦の勢いが衰えないので、次第に疑問を感じていた。

「ちっ、キリがねぇ！」

と、ジャイアンが言う。すると、聖奈が呟く。

「もしかして、損傷している所をすぐに再生しているんじゃないかしら。」

と、聖奈が言った。聖奈が言った通り、蔦は恐るべきスピードで、損傷した部位を瞬時に再生していた。

「あの再生力をどうにかしないと何時までも堂々巡りだわ！！」

と、玲が叫んだ。すると、スネ夫が何かを思い出したように叫ぶ。

「そうだ！確か植物は炎に弱い筈！ススキヶ原の地下坑道で聖奈さんにもらった火炎瓶が使えるかも！！！」

と、スネ夫が言うと、その事を思い出したジャイアンと聖奈は、ケブラーバッグから火炎瓶をそれぞれ２つずつ取り出した。

そして、樹木に向かって、一斉に火炎瓶を投げ付けた。６つの火炎瓶が直撃した樹木は一気に炎上した。

そのまま消し炭になるかと思われたが、予想に反して炎はすぐに消

え去り、樹木は何事も無かったかのようにしていた。
「ほ、炎が効かない!?」
と、スネ夫が驚くと、玲が言う。
「・・・・信じられないけれど、炎を揉み消した様に見えたわ。」
と、玲が言うと、聖奈が呟く。
「T－ウィルスのB．C．W．ならこんな芸当が出来てもおかしくない・・・のかな?」
と、呟いている隙にも蔦は伸びてくる。そして、伸びてきた蔦が聖奈を掴み、引き寄せてきた。
「聖奈さん!!」
と、スネ夫が叫ぶ。すると、玲が左腕を前に突き出した。すると、右手首にある器械から、何かのワイヤーが射出された。そしてそのワイヤーが聖奈に巻き付いた。すると、蔦の聖奈を引く勢いが止まった。
「取り敢えずはいいけど、ここままじゃ危険だわ!」
と、玲が言う。そう言っている内にも、樹木から伸びてくる蔦は次々と聖奈を掴んでいく。すると、ジャイアンが玲の近くまで来て、ワイヤーを掴んだ。そして、
「俺様に貸せ!!」
と、叫ぶと、ワイヤーを思いっ切り引っ張った。すると蔦はジャイアンの力に耐え切れず、千切れた。そして、無事聖奈を引っ張り出す事に成功した。
「やったぜ!!」
と、ジャイアンは得意気に言う。
「でも、事態は一向に良くなっていないわ。あの植物の蔦の攻撃と、異常に高い再生能力をどうにかしないと!」
と、玲は言った。
「でももうどうしようもないじゃんか～!!」
と、スネ夫が喚く。すると、玲がある提案をする。
「1つだけ手があるわ。さっき火炎瓶を投げた時、蔦の動きは止ま

ったわ。となれば、焼夷手榴弾を投げて蔦の動きを止めた後、一斉に射撃して粉砕するしかないわ！」
と、玲が言うと、聖奈が言う。
「それしかないなら、やるしかないわね。」
と、聖奈が言うと、玲が言う。
「すぐに射撃の用意をして！今すぐにも手榴弾を投げるわ！！」
と言うと玲は、焼夷手榴弾を取り出し、ピンを抜き、向こうの樹木に向かって投げた。
数秒すると、焼夷手榴弾は炎上し、蔦の動きは止まった。すると、聖奈とスネ夫は一斉に銃を連射した。玲の方はというと、バックパックから何かの部品を取り出し、それを組み立てていった。
数秒すると組み立てが終了し、巨大な設置型のガトリングランチャーになった。そして玲はそれを一気に撃ち放った。
シリンダー状に連なった6つの銃身が回転しながら、大口径の弾丸を次々と連射していく。次第に、向こうの樹木は欠けていき、やがて、バラバラになった。樹木が動かなくなったのを確認すると、玲はガトリングランチャーを分解して、バックパックにしまった。
「やったあ！！」
と、スネ夫が嬉しそうにする。しかし、玲は呟いた。
「今回はたまたま運が良かっただけね。」
と、玲が言うと、聖奈は、
「え？」
と、疑問の声を漏らした。すると、玲が応える。
「・・・・・あの樹木の大きさに比べて、養分となる死体の数が圧倒的に少なかった。だから、充分に再生能力が発揮されず、あの程度の攻撃でも粉砕できた。」
と、玲が言うと、スネ夫が言う。
「じゃあその事を知ってて、あの作戦を考えたんだ。」
すると玲が応える。
「・・・・結構危ない賭けだったけれどね。まぁ、結果オーライっ

てやつね。」
と、玲が言うと、玲は後ろを振り返って言った。
「・・・あとは、このドアをどうするかね。」
と、玲が言うと、ジャイアンが喋る。
「俺様に任されよ！こんなドア如き抉じ開けてやるぜ！！」
と言うとジャイアンは、腕捲りをしてドアに手を掛けた。そして、思いっ切り横方向に引くと、ドアは割と簡単に開いた。
そして、４人は徐(おもむろ)に病院から出た。全員出ると、玲が３人に話し掛けた。
「まずは、この近くに停めてある私の車まで行こう。」
と、玲が言うと、スネ夫が陽気に言う。
「やっと光明が見えてきたんじゃない？」
と、スネ夫が言うと、ジャイアンも言う。
「そうだな！だけどナムオアダフモ機関に潜入して、決着を付けるまで油断はできねぇぞ。」
と、ジャイアンは言う。すると、聖奈が控えめに言う。
「・・・でも、のび太さん達は無事かしら？」
その聖奈の言葉を聴いたジャイアントスネ夫は少し黙ってしまった。
しかし、
「まぁ、のび太なら大丈夫だろ！」
とジャイアンが言ったおかげで、少し暗い雰囲気は晴れた。そしてその時、玲はある事を考えていた。
（・・・・・そういえばあの病院に着く前に巌が、「小学生位の子供達を見てないか？」って訊いてきたけれど、この子達の事かしら。一応連絡は取っておこうかしら。）
と思った玲は、懐から通信機を取り出し、巌に連絡をしようとした。

ＡＲＥＡ１『襲撃』

玲が懐から通信機を取り出し、厳に掛けようとした。しかし、いきなり近くに銃声が響いた。
「わっ！何！！」
と、スネ夫は驚いたが、銃声は更に続いた。
「これはまずいわ！何処かへ隠れないと！！」
玲がそう叫ぶと、聖奈が車道の向こう側を見て言った。
「向こうの森なら隠れられそうだわ！！」
聖奈のその言葉を聴いた他の３人と聖奈は、車道を横切り、森の中へと入って行った。そして４人は、森の奥へと進んで行った。暫く奥へ進むと、銃声が止んだ。
「一体何なんだよ、あの銃声は・・・。」
と、スネ夫が呟く。すると玲が全員に話し掛ける。
「銃声がしたって事は恐らく、特殊部隊のような団体が私達を襲ってきたと考えてまず間違いないわね。解っていると思うけれど、ここからは命の危険も常に付き纏うわ。」
玲のその言葉を聴いた３人は、特に驚く事もなかった。そして、ジャイアンが言う。
「今更そんな脅しが効くかよ。向かって来る奴なんざ、片っ端から蹴散らしてやるぜ！なぁスネ夫。」
ジャイアンは、スネ夫の肩を叩きながらそう言った。スネ夫の方も、乗り気ではないものの、ジャイアンと同じ気持ちであるようだった。
「でも、事態はそう簡単にならなそうよ。」
と、玲が言うと、ジャイアンが喋る。
「そりゃ、どういうことだ？」
と、ジャイアンが言うと、玲が説明する。
「さっき、あんなに銃声がしたのに、今は何の物音もしない。おかしいとは思わない？」

玲のその言葉を聴いた3人は少し考えていたが、聖奈が喋った。
「・・・確かにそうですね。」
と、聖奈が玲に肯定した。
「私の推測では、恐らく私達を襲ってきたのは、訓練を受けた特殊部隊だわ。となると、私達が森の中へ隠れたからといって、闇雲に進んで来る訳がないわ。完全に森を包囲し、そしてその包囲網を徐々に狭めていく筈よ。」
と、玲が自分の推測を話した。すると、ジャイアンが反論する。
「でも、片っ端から蹴散らすのは変わらないだろ?」
そのジャイアンの言葉を聴いた玲は言う。
「包囲されている場合、その方法はかえって危ないわ。」
と、玲が言うと、聖奈が玲に訊く。
「じゃあ、どうすれば・・・・・?」
と、聖奈が訊くと、玲は喋る。
「・・・・そうね。まぁ、方法は無いわけじゃないわね。」
玲は、森の奥を見ながらそう言った。そして、玲は更に森の奥へと進んで行った。

その頃、森の外では特殊部隊による包囲網が展開されていた。
「隊長!森の包囲完了しました!作戦を開始しますか?」
そう言ったのは、隊員と思わしき人物で、その隊員は隊長と思われる人物に話していた。その隊員の言葉を聴いた隊長は応える。
「まぁそう逸(はや)るな。ターゲットの中にはこの道のプロもいる。もう少し様子見でもよかろう。」
と、隊長は冷静に落ち着きのある口調で言った。すると、隊員は敬礼をしながら言う。

「では私は、合図があるまで再び待機行動を続行します。」
と言った隊員は、その場を去った。
そして、隊長はある事を考えていた。
（・・・・・先程の通信によると、１番隊は見事に失敗したようだな。ふん、ガキ共にやられるとは、１番隊も堕ちたものだな。だが我々は違う。この絶対なる包囲網が素人ごときに破られる訳がない。）

その頃、ジャイアン達の方は、どんどん森の奥へ進んでいった。
「玲さん、この先に何かあるの？」
と、スネ夫が玲に訊いた。玲は振り向くと、それに応える。
「さっきちらっと見えたのよ。」
と、玲が言うと、スネ夫が、
「何を？」
と訊いたので、玲が言う。
「粗大ごみ。」
玲のその言葉を聴いたジャイアンは思わず言葉を漏らした。
「はぁ？」
すると、玲が応える。
「何か使えそうな物があるかもしれないじゃない。」
と、玲が言う。そう話をしている内に粗大ごみ置き場へと着いた。
玲は早速、そこで物色を始めた。

暫くすると、玲が戻ってきた。
「何か役に立ちそうな物はあったのか？」
と、ジャイアンが玲に訊いた。すると、玲はジャイアンの問いに応える。
「ええ、これならなんとかなるかもしれないわ。」
と、玲が言った。玲は続いて言う。
「でも、その為には準備が必要ね。ジャイアン君、協力してくれるかしら？」
と、玲がジャイアンに言うと、ジャイアンは肯定した。
「勿論だぜ、任せな！で、俺は具体的には何をすればいいんだ？」
ジャイアンが玲にそう訊くと、玲は粗大ごみを引っ張り出しながら言う。
「荷物運びをお願いするわ。やっぱりこれはちょっと運び難いからね。」
と、玲は言うと、玲は奥の方から『電子レンジ』や『何かの網』、『長いロープ』等を取り出した。そして、玲は近くにあった冷蔵庫を指し示すと、ジャイアンに、
「じゃあ、ジャイアン君はこれを運んで。」
と、言った。
「ああ、いいけどさ、一体何をするつもりなんだ？」
と、ジャイアンは玲に尋ねた。すると、玲は応えた。
「トラップを仕掛けようと思うわ。古風に見えるけど、これが意外に効くのよね。」
と、玲は言った。すると、ジャイアンが喋る。
「そうか。ならさっさと準備に取り掛かろうぜ！」
と、ジャイアンが言うと、玲とジャイアンは罠を仕掛ける為に適当な位置に移動した。

「・・・・ところで、罠ってのは具体的にはどんな感じに仕掛けるんだ？」
ジャイアンが玲にそう訊くと、玲はその問いに応える。
「非常に簡単な仕掛けよ。ロープを使って、網や冷蔵庫等を動かす程度のもので充分よ。」
玲は、そう言いながら、木を利用して罠を仕掛けていた。

暫くすると、罠を仕掛け終わった2人はスネ夫と聖奈の所に戻った。
「やぁ、おかえり。」
戻ってきたジャイアンと玲を見たスネ夫はそう言った。
「罠はこの周囲に仕掛けたわ。後は、戦闘準備ね。」
と、玲は言いながら、バックパックから何かを取り出した。玲がバックパックから取り出した物は、玲が腰に掛けてある物と同じ物だった。
「これは、『ミドルパック』という物で、2つのホルスターと、4つの弾薬ポケットがある代物(しろもの)よ。装備しておきなさい。」
と言いながら、玲はジャイアンとスネ夫と聖奈に3つの『ミドルパック』を差し出した。
そして、3人はそれぞれ『ミドルパック』を腰に着けた。ミドルパックの装着が終わると、持っている銃火器と弾薬を整理した。
スネ夫は、『スプリングフィールドXD』と『UZI』をホルスターに入れ、『9mmパラベラム弾』と『12ゲージショットシェル』と『7.62mmx39弾』や『5.56mmx45弾』を弾薬ポケットに入れた。
聖奈は、『グロック17』を右のホルスターに入れ、『H&K UMP』を左のホルスターに入れた。そして、『9mmパラベラム弾』と『12ゲージショットシェル』を弾薬ポケットに入れた。
ジャイアンは、右のホルスターに『デザートイーグル』を入れ、弾薬ポケットに『.50AE弾』を入れた。
「整理は終わった?」
頃合いを見て、玲が3人にそう尋ねた。すると3人は、全員頷いた。
「そろそろ向こうが突入してくる頃だと思うわ。今回はゾンビじゃなく、特殊部隊が相手だから、そこの所をしっかり意識して戦いな

さい。でも、戦うのは最終手段。作戦はあくまで、あいつらから逃げる事。向こうが罠に掛かり始めて、部隊が混乱してからがチャンス。その隙に、包囲網の穴から逃げるわ。」
と、玲が作戦を他の３人に説明した。そして、４人は特殊部隊の突入に備えた。

その頃、森の外では、・・・・・・・・・・・・・・・

「こちら、晴瀬隊員。指定の兵器の調達に来ました。」
と、隊員は第２特殊部隊の隊長に向かって言った。
「ご苦労。それで、そのトラックの中にあるコンテナーには例のあの兵器があるという訳だな。」
と、隊長が晴瀬隊員に向かって言った。
「ええ、勿論。」
隊長の言葉を聴いた隊員はそう応えた。すると、隊長はトラックの荷台に近づき、緑のシートを外した。すると、中には２つの巨大なコンテナーがあり、荷台の前方に置いてあるコンテナーには、
『ＬＶ．１モデュレイテッドＢ．Ｃ．Ｗ．ＴＹＰＥ－Ｋｅ』
と書かれており、荷台の後方に置かれてあるコンテナーには、

『ＬＶ．２モデュレイテッドＢ．Ｃ．Ｗ．ＴＹＰＥ－Ｈｕ』
と、書かれていた。
「これが完成された生物兵器か。」
と、隊長は呟いた。続いて隊長は喋る。
「まあ、これを使う機会は無さそうだがな。我が隊員だけで充分だ。」
と、隊長は言うと、全隊員に指示を出した。
「総員突入せよ！！」
と、指示を出すと、隊員達は一斉に森に突入した。

AREA2『ブービートラップ』

森を包囲していた第2特殊部隊の隊員は、隊長の指示で一斉に突入して行った。
先発として、最初に突入した2人組の隊員は会話をしていた。
「ガキ共を捕らえるなんて随分楽な仕事だな。」
と、隊員の1人が喋った。すると、それを聴いていたもう1人の隊員が言う。
「だけど、噂じゃあ1人の小学生に第1特殊部隊が全滅させられたって話だぜ。」
その言葉を聴いたもう1人の隊員が喋る。
「そりゃあお前、そのガキが只者じゃなかったって事だろ。ドラ様が一目置いている奴だからな。」
と、隊員が言うと、もう1人の隊員が言う。
「そうは言っても第1特殊部隊を全滅させるって言ったら相当の実力だぜ。俺は相手にしたくないな。」
と言うと、もう1人の隊員が喋る。
「そこの所は大丈夫だろ。俺達が捕らえようとしてるのは、そいつじゃなく、只の小学生なんだからよ。」
と言うと、2人の会話は終わり、後は無言で作戦を行った。
2人の隊員は、こういった任務に慣れているのか、無駄の無い動きで、森の奥へと進んでいった。

暫くは順調に進んでいたが、とある所で異変が起きた。
「・・・なんだ!」
足元で何かが引っ掛かった感触を覚えた1人の隊員はそう声を漏らした。
すると、次の瞬間、頭上から何かが落下してきた。
「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

頭上から落ちてきた物が頭に直撃した隊員は、悲鳴を挙げて倒れた。
もう1人の隊員が落ちてきた物を見ると、落下してきた物体は、丸太の束だった。
「な、何でこんな物が落ちてくるんだ？」
と、隊員は呟いた。しかし隊員は、すぐさま任務に戻り、奥へ進んだ。

暫く進んだ所で、何かが動く気配を感じ取ったその隊員は、一拍置いてから踏み込んだ。
しかしそこには誰も居なかった。
「気のせいか。」
と、その隊員は呟いた。するといきなり後ろから誰かが出て来て、腕をその隊員の首に回し、首を絞めた。
「ぐっ。」
小さく唸り声を挙げたその隊員は、気を失った。すると、茂みからジャイアンが出て来て、隊員の首を絞めた者に話し掛けた。
「玲さん凄げぇな。あんなに早く『スリーパーホールド』を決めるなんてよ。」
と、ジャイアンは玲に言った。すると玲がジャイアンに言う。
「まぁね。『フィアスサフィー』に入ってると、こんな仕事も珍しくないからね。」
と、玲が言った。続いて玲が喋る。
「さて、こいつの装備を確認しましょう。」
と、玲が言うと、2人はその隊員の装備を確認した。
その隊員から見つかったのは、『H&K　USP』、『ヴァルトロ　PM5』、『FN　P90』、『S&W　M686』の4つの銃火器だった。
「ハンドガンにショットガン、サブマシンガンにマグナムか・・・。中々揃ってるね。」
と、玲が言うと、ジャイアンが言う。

「じゃあ使えそうな弾薬を奪ってそこら辺に縛り付けておこうぜ。」
そのジャイアンの言葉に肯定した玲は、その隊員が持っていた全ての銃火器を取り上げ、そして、そこら辺の木に縛り付けておいた。
「じゃあ使えそうな弾薬を奪ってそこら辺に縛り付けておこうぜ。」
そのジャイアンの言葉に肯定した玲は、その隊員が持っていた全ての銃火器を取り上げ、そして、その隊員をそこら辺の木に縛り付けておいた。
少しすると、ジャイアンと玲はスネ夫と聖奈が居る所に辿り着いた。
「作戦はうまくいきましたか？」
と、聖奈がジャイアンと玲に訊いたので、ジャイアンはすかさず応える。
「おう、全然問題なかったぜ。ああいうトラップっていうのも、意外と役に立つんだな。」
と、ジャイアンが言うと、玲が言う。
「向こうの特殊部隊の兵装を奪ってきたわ。適当に持っていって。」
と言いながら、玲は、先程の特殊部隊員から奪取した銃火器を出した。
スネ夫は『１２ゲージショットシェル』を取り、聖奈は『９ｍｍパラベラム弾』と、『ＦＮ　Ｐ９０』を取った。
「後は、期が熟すまで待つだけね。」
スネ夫と聖奈の銃火器の整理が終わったのを確認した玲がそう言った。

その数分後、森の外では・・・・・・・・・・・・・・・

「隊員の約半数が突入して十数分。しかし、誰からも報告の通信が来ないのはどういう事だ!!」

隊長がそう叫んだ。それを聴いていた1人の隊員が、突入して行った隊員に通信を掛けた。しかし聞こえてきたのは、

「ワー!キャー!ヒー!!」

等の悲鳴だけだった。

「ど、どうやら大分混乱しているようですが・・・。」

通信を掛けた隊員が隊長にそう言った。すると、隊長は言う。

「ぬぅ、役に立たない者共め。こうなれば、例の兵器を投入する!」

と言うと、隊長はトラックの中の2つのコンテナーを隊員に出させた。そして、隊員に指示を出す。

「『ＴＹＰＥ－Ｈｕ』はこの場所から投入せよ!そして、『ＴＹＰＥ－Ｋｅ』は、此処から反対の場所に投入するのだ!!」

その隊長の指示を聴いた隊員の1人はそれに反論した。

「し、しかし隊長。本部の作戦要項では、『ターゲットは生きた儘(まま)捕獲せよ』との指示ですが。」

隊員のその言葉を聴いた隊長はそれに応える。

「ああ、その事だがな。どうしても生きた儘(まま)の捕獲が困難な場合、生死は問わないとの指示が新たに出た。我が部隊の半数が何の連絡も無い事から推測すると、奴等にやられたと考えるのが妥当だろう。だとすれば、この儘(まま)作戦を続行しても、作戦を遂行出来る可能性は低い。だから、本部から送られてきたこの生物兵器を使うと言っているのだ。」

隊長のその言葉を聴いた隊員は、納得したようで、

「はっ。」

と、短く返事をすると、生物兵器の投入準備に入った。

数分後、隊長に一本の通信が入った。
「・・・私だが、どうかしたか？」
と、隊長が訊くと、通信機の向こうの隊員は言った。
「『ＴＹＰＥ－Ｋｅ』と『ＴＹＰＥ－Ｈｕ』、双方とも、投入準備を完了致しました。いつでも投入可能です。」
その隊員の言葉を聴いた隊長は指示を出す。
「よし、ならば今すぐに投入するのだ！！」
と、隊長は指示を出すと、隊員は、２種類の生物兵器を投入した。

その数分後、森のほぼ中央部にジャイアン達４人は居た。
「・・・・・最初の罠に奴等が引っ掛かって約十数分。だけど、一体向こうでは何が起きてるか解らない。本当にずっとここに居るつもりなのかよ、玲さん。」
と、ジャイアンは玲に尋ねた。すると、玲が応える。
「何の情報も無いのに動いた方がかえって危険だわ。それとも、私の言う事に何か不満でもあるの？」
と、玲が言うと、ジャイアンが応える。
「別に不満じゃないさ。玲さんは俺達と違ってベテランだもんな。でもやっぱりなんも動かないっていうのは不安が残るっていうか・・・・・・・。」
そのジャイアンの言葉を聴いた玲は言う。
「大丈夫よ。この方法で何度も危機を乗り越えてるからね。」
と、玲は言った。

暫くすると、森の中の別の場所から何かの唸り声が聞こえてきた。
「ＫＩＹＡＡＡ

と、聖奈が言うと、すかさず玲が言う。
「と、思うでしょ。でもね、B．C．W．には決定的に欠けている”もの”があるの。そしてそれは、自然界にとっても、戦士や軍人にとっても必要不可欠な”もの”なのよ。それが欠けている限り、B．C．W．は私達に勝つ事は絶対に無いわ。」
と、玲が言うと、スネ夫が呟く。
「B．C．W．に無い”もの”？それって一体・・・・・？」
と言うと、玲が、
「まぁ、見てれば解るわ。」
と言った。

ＡＲＥＡ３『脱出』

「Ｂ．Ｃ．Ｗ．に無い”もの”？それって一体・・ジャイアン達は玲の言う通りに、森の中央部でじっと待っていた。

その頃、森の中に放たれた生物兵器は森の中央部に向かって進行していた。

「ＫＩＹＡＡＡ

「玲さん、一体何を仕掛けたんだよ。」
ジャイアンの言葉を聴いた玲はその言葉に応える。
「冷蔵庫等に、衝撃が加わると炸裂するように細工した手榴弾を仕掛けて置いたの。そうすれば、罠に引っ掛かったハンターが冷蔵庫等に衝突した瞬間に、冷蔵庫等に仕掛けておいた手榴弾が炸裂して、さっきのような爆発が起きるって事よ。」
と、玲が仕掛けた罠について説明した。そう言っている内にも、至る所で爆発が起きていた。
「じゃあ、あの爆発は玲さんが仕掛けた罠って事ですね。」
と聖奈が言うと、玲が言う。
「その通りよ。ほら、私の言った通り、生物兵器は、私の仕掛けた罠を潜り抜けられなかったでしょ。」
玲がそう言うと、スネ夫が玲に訊く。
「何で生物兵器が罠に引っ掛かるって解ったの？」
スネ夫がそう言うと、玲が応える。
「確か先刻（さっき）、私は、『『B・C・W・』には、決定的な〝もの〟が欠けている』って言ったわよね。」
と、玲が3人に訊き直した。
「ええ、確かにそう言いましたけど。」
と、聖奈が言う。
「じゃあ、貴方達に訊くけれど、いきなり貴方達の目の前にあのハンターが出て来たらどうする？」
と、玲がジャイアンとスネ夫と聖奈に尋ねた。すると、ジャイアンが応える。
「速攻ぶん殴るぜ。」
と、ジャイアンが言うと、玲が言う。
「それはそれで凄いけれど、その前の段階の事を言っているの。」
と、玲が言うと、スネ夫が玲に尋ねる。
「前の段階って？」
スネ夫のその言葉を聴いた玲は言う。

「そうね、・・・例えば、スネ夫君が何も武器を持ってない状況で、突然目の前にハンターが現れたら、まず何を思う？」
と、玲がスネ夫に訊いた。すると、スネ夫は応える。
「そりゃあ、いきなりハンターが現れたら怖くて逃げ出すよ。」
と、スネ夫が言うと、玲が言う。
「そう！その感情が生物兵器には無い。つまり、恐怖が生物兵器には無いのよ。
恐怖、つまり、”警戒心”が生物兵器には存在しない！警戒心が無いという事は、危険を察知出来ないという事。
自然界の動物であっても、警戒心は存在する。だから、身の危険を感じて、それから逃げる事が出来る。人間にも勿論警戒心はある。だから、人間も危険を感じて、その危険が降り懸からないよう回避する事が出来る。しかし、生物兵器はその”警戒心”が無い為、危険を察知し、回避する事が出来ない。そんな兵器は、幾ら破壊力や性能を挙げても、限界は知れているわ。」
玲のその言葉を聴いた3人は驚いていた。そして、聖奈が口を開く。
「じゃあつまり、自然界の動物や人間は、危険や罠を察知して、それを回避する事が出来るけれど、生物兵器はどんなに強くても、罠を回避する事が出来ないって事？」
聖奈がそう尋ねると、玲が言う。
「その通りね。
さて、そろそろ脱出するわよ。」
と、玲が言うと、４人は動き出した。

その頃、森の外では・・・・・・。

「全ての生物兵器を投入したが、状況はどうだ?」
と、隊長が、近くに居る隊員に尋ねた。隊長のその言葉を聴いた隊員が恐る恐る言う。
「そ、それが、・・・先程、全てのB.C.W.のL.S.（Location Signal）が沈黙しました。」
隊員のその言葉を聴いた隊長は声を荒げる。
「何ィ!!それはどういう事だ!!」
隊長のその言葉を聴いた隊員は応える。
「恐らく、全て迎撃されたものだと・・・・・・。」
隊員がそう言うと、隊長が喋る。
「ぬぅ、やはり小学生だからと言って嘗めすぎていたか。幾ら子供といえども、ススキヶ原のバイオハザードを生き抜いた子供だものな。」
隊長がそう言うと、森の中から息を切らした隊員が出て来た。
「どうした!」
と、隊長が言うと、息を切らした隊員は応える。
「た、隊長。・・・森の・中は・・大・規模な・・ブービートラップの巣で・・す。我・々も、生物兵器も・・・し・て・・・やられまし・・た。」
と、言い残した隊員は力尽き、その場に倒れた。
「・・・ブービートラップだと?」
と、隊長が呟いた。すると、すぐさま隊員が言う。
「隊長、先程の爆発や今の話、そして、奴等の中にフィアスサフィー隊員がいる事から推測するに、奴等の中にいるフィアスサフィー隊員は恐らく、『ゴッドトラッパー』と恐れられる『齊藤　玲』と思われます。」
と、隊員が言うと、隊長が腕組みをしながら言う。
「むぅ。確かに、今の状況ではそうなるな。しかし、そうなると、第1特殊部隊が追っていたガキ共の方には、『玄洞　巌』か『貴崎

迅』がいた事になるな。」
隊長のその言葉を聴いた隊員は喋る。
「・・・・フィアスサフィーでは1番の功績を収めているあのチームですか。しかし、あのチームが相手となると、こちらに勝ち目はないのでは?」
隊員のその問い掛けを聴いた隊長は応える。
「まぁそう悲観したものでも無い。例え相手が、凄腕の傭兵であっても、戦闘ヘリの大群には敵(かな)うまい。」
と、隊長がそう言った。すると、隊員が隊長に尋ねる。
「と、言うと?」
隊員がそう言うと、隊長はそれに応える。
「実はさっきな、第1特殊部隊の生き残りがこちらに来て、戦闘ヘリを至急、調達してくるらしい。」
隊長のその言葉を聴いた隊員は言う。
「成る程。戦闘ヘリが相手じゃ、流石の奴等でも敵いませんね。・・・・しかし、奴等の所在は解るんですか?」
隊員がそう隊長に訊くと、隊長は応える。
「先程話した、第1特殊部隊の生き残りが奴等の居場所を知っているらしい。「正確な場所は解らないが、大体の見当は付いている。」と言っていた。」
隊長のその言葉を聴いた隊員は言う。
「なら、問題はありませんが、一つ、気掛かりな事が。」
と、隊員が言うと、隊長が、
「何だ?」
と訊いた。すると、隊員が話す。
「我が『ナムオアダフモ機関』の長、ドラ様が一目置いている者、『野比　のび太』の事なのですが。第1特殊部隊を1人で壊滅させた、というのは誠(まこと)なのですか?」
隊員のその言葉を聴いた隊長は話す。
「うむ、それは私も気になった。特殊部隊を1人で壊滅させるとな

ると、相当の腕が必要だからな。だから私は先程、第１特殊部隊の生き残りと話した時にその事を訊いた。すると、実際は『野比　のび太』によって壊滅させられたのではなく、パーフェクションＢ．Ｃ．Ｗ．である、『デストロイヤー』の暴走により、壊滅させられたのだと解った。そして、かの『野比　のび太』がその『デストロイヤー』を討ち倒したのだと解った。」

隊長のその言葉を聴いた隊員か言う。

「・・・・・・・・そうだったのですか。しかし、『デストロイヤー』を１人で討ち倒したという事だけでも凄い事ですよ。」

隊員がそう言うと、隊長が言う。

「ああそうだ。流石はドラ様が一目置く者といった所か。」

と、隊長が言うと、間も無く、ヘリコプターの音がした。

「戦闘ヘリが到着したか、早いな。」

と、隊長が呟いた。すると、隊員の方も喋る。

「・・・全機『ＡＨ－１コブラ』ですか。」

と、隊員が言うと、隊長の通信機に通信が掛かってきた。

「こちら、第１特殊部隊隊員の晴瀬です。１５機の『ＡＨ－１コブラ』の調達に向かい、只今到着致しました。」

その言葉を聴いた隊長は言う。

「ご苦労だったな。では、直ちに現場に急行し、作戦を遂行せよ。我々は一時、ナムオアダフモ機関本部に帰還し、対策を練り直す。」

と、隊長が命令をした。すると、晴瀬隊員は、

「了解。」

と、返答すると、のび太達の居る場所へと向かった。

その頃、ナムオアダフモ機関の本社では、今までの挙動を全て把握していた2人が居た。

「なぁ、ドラえもん。君はどう思う？」
と、言ったのは、スネ吉だった。その部屋には、スネ吉の他にもう一人居て、そのもう一人は、ドラえもんだった。スネ吉のその言葉を聴いたドラえもんは応える。
「どう思うも何も、あのような低脳ごときでは、のび太は止められまい。まぁ、のび太が『デストロイヤー』を無傷で仕留めたのは少し想定外だったが。」
ドラえもんがそう言うと、スネ吉が言う。
「ははは、きついなぁ。まぁ、実際本当の事だけれど。」
と、スネ吉が言った。すると、ドラえもんが、何か気づいた様に言う。
「・・・・そういえば、第2特殊部隊の兵が此処に帰還してくるらしいな。」
と、ドラえもんが言うと、スネ吉が言う。
「そうらしいね。作戦を練り直すとかなんとか。」
スネ吉がそう言うと、ドラえもんは応える。
「だが、所詮は猿芝居に過ぎんな。凡夫が何をやろうとあいつ等には敵わん。」
ドラえもんはそう言うと、続けて喋る。
「・・・・そういえば、例の新型兵器の設計は済んだのか？」
ドラえもんのその言葉を聴いたスネ吉は応える。
「大体はもう完成した。あと数時間で完全に完成すると思うよ。」
スネ吉がそう応えると、ドラえもんが言う。
「そうか。ならばのび太達が来る前に配備出来るな。」
ドラえもんがそう言うと、スネ吉は言う。

「そうだね。『アフィマーサー』の修復、というか再設計も完了したし。」
スネ吉のその言葉を聴いたドラえもんは呟く。
「『アフィマーサー』の再設計、『ｖｅｒ２．０』か。」
と、ドラえもんが呟いた。
「・・・・そういえば、生物兵器開発部のあいつは何処に行ったっけ？」
スネ吉は、思い出した様にドラえもんにそう尋ねた。すると、ドラえもんは応える。
「確か、「鳥類を生物兵器化する。」とか言ってどっかに行った筈だ。」
と、ドラえもんが言うと、スネ吉は、
「ああそう。」
と、軽く相槌を打った。
「じゃあ僕は持ち場へ戻るぞ。」
と、ドラえもんが言った。すると、スネ吉が喋る。
「ああ、じゃ気をつけて。」
と、スネ吉が言うと、ドラえもんは部屋から出た。

ＡＲＥＡ３『脱出』（後書き）

どうも、久しぶりに『あとがきルーム』の開館です。ゲストは、ジャイアンと齋藤玲です。
「なんか呼ばれたんだけど、これは何なの？」
「ああ、これは、本編の事について色々駄弁る場所さ。」
まぁそういう事だ。
「駄弁ったっても、話題がなあわよ。」
「じゃあさ、玲さんはどうやって病院に入って来たかを話してよ。」
「病院？・・・・・ああ、あれね。あの時は、『アンカーワイヤー』を使って、３階の窓から侵入したのよ。」
「て事は、俺が探索を終了した直後に来たって事か。」
もう少し探索が遅く終わってれば、３階で鉢合わせしたかもしれなかったんだな。
「それって、凄い偶然だよな。
・・・そうだ、玲さんっていつもあんなトラップ張ってるのか？」
「まぁ、それなりにね。こちらは基本、個人で動くけれど、向こうは部隊で動く事も少なくないから、その状況で生き延びるには、やっぱり罠が最適なのよ。」
「へぇ～、そうなんだ。やっぱり慣れてるんだなこういうの。」
「まぁね。」
・・・・うまい具合に話が続いているけど、もうそろそろ閉館時間です。
「もうそんな時間か。じゃあ、今回はここら辺で終了か。」
そうだね。じゃ、次回の『あとがきルーム』も宜しくお願いします。
ではさようなら。

ＡＲＥＡ４『合流』

森を脱出したジャイアンとスネ夫と聖奈と玲の４人は、玲の車に向かっていた。
「玲さん、今何処に向かってるの？」
スネ夫が玲にそう尋ねた。すると玲は応える。
「今、私の乗ってきた車に向かってるわ。それで、『ナムオアダフモ機関』に向かうわよ。」
と、玲が言った。
数秒走っていると、玲の車が見えてきた。そして、玲は運転席に乗り込んだ。他の３人も、後部座席に乗り込む。左から、スネ夫、聖奈、ジャイアンの順に乗り込んだ。
やがて、車は発進した。発進して少しすると、玲はある事を思い出した。
（そういえば巌が、「３人の子供達を見なかったか？名は、『緑川聖奈』に『骨川スネ夫』に『剛田武』っていうんだが。」って言っていたけど、その後、何の連絡もしてなかったわね。この子達がその子供だと思うし、電話して見ようかしら。）
と、思った玲は、懐から通信機を取り出し、巌に連絡した。
「・・・・・・・・・・・・もしもし。俺だが、どうした？」
と、通信機の向こうの巌が言ったので、玲が言う。
「さっきあんたが言っていた子供達見つかったわよ。」
玲のその言葉を聴いた巌は、
「本当か！」
と、驚きの声を漏らした。すると、玲が巌に尋ねる。
「今は車で『ナムオアダフモ機関』方面に向かっているけど、あんた達は何処に居るの？」
玲がそう訊くと、巌が応える。
「俺達も『ナムオアダフモ機関』に向かってる。だけど、後数十分

は掛かるぜ。玲は今どこら辺に居るんだ?」
巌のその言葉を聴いた玲は応える。
「今は水戸市民病院を出た辺りだわ。」
玲がそう言うと、巌は、一拍置いて喋る。
「・・・て事は、俺達の居る場所と大して変わらないな。此処に居るのび太達も安心するだろうし、この先のコンビニで落ち合わないか?」
巌が玲にそう訊くと、玲は応える。
「解ったわ。この先のコンビニと言うと、『ＳＡＶＥ　ＳＴＥＰ』ね。」
玲がそう言うと、巌が言う。
「ああそうだ。此処から見た感じ、危険は特に無さそうだ。そこで駐車して待ってる。」
と、巌が言うと、玲も言う。
「なるべく急いで行くわ。それじゃ。」
ピッ
と言うと、玲は通信を切った。
「何を話していたんですか?」
と、聖奈が玲に訊いた。すると、玲が応える。
「ちょっと、仕事の上司とね。それより、もうすぐお友達に会えるわよ。」
玲のその言葉を聴いた3人は驚いた。
「え!?それってどういう!!?」
と、スネ夫が玲に訊いた。すると、玲は応える。
「どうやら、さっき話していた上司が、貴方達の友達に出会ったみたいなの。そして今、この先にある『ＳＡＶＥ　ＳＴＥＰ』っていうコンビニで待っているらしいわ。」
玲のその言葉を聴いた3人は一斉に喜んだ。
「よかった。皆無事だったんだ。」
と、聖奈。

「やっと、皆に会えるよ。」
と、スネ夫。
「へっ、どうせそんな事だろうと思ったぜ。のび太が死ぬなんて考えられねえからな。」
と、ジャイアンが言った。それから暫く、車内は歓喜の渦に巻き込まれた。

数分後、玲達４人の乗った青い車は、無事『ＳＡＶＥ　ＳＴＥＰ』へ着いた。そこには、巌達が乗っている赤い車があった。玲は、その赤い車の隣に駐車した。そして、玲達４人は車から降りた。向こうも、４人が車から降りていた。
巌の車に乗っていたのび太はジャイアンを見ると、喜びの声を挙げた。
「ジャイアン！！」
と、のび太が言うと、ジャイアンも言う。
「この俺様がくたばる訳ねぇだろ。大体、のび太が大丈夫なら皆大丈夫だろ。」
と、ジャイアンが嫌味も混ぜながら言った。するとのび太は、
「ははは・・・。」
と、小さく笑った。
「でも、皆無事で良かったよ。」

と、スネ夫が言う。暫く、のび太とスネ夫とジャイアンと聖奈と燐と真理奈の６人は喜び合っていた。

巌は、軽く咳ばらいをすると、喜び合っている６人に向かって言った。

「・・・再会を喜びの所悪いが、あまり此処も長居していられない。早々に『ナムオアダフモ機関』に急行するぞ。・・・・・・・・しかし、慌てても失敗するだけだからな。ここは一旦、武器の整理をしないか？」

と、言いながら巌は、赤い車のトランクに近づき、トランクを開けた。そこには、大量の銃火器とその弾薬があった。巌が赤い車のトランクを開けると、玲も青い車のトランクを開けた。そのトランクの中にも、大量の銃火器と弾薬があった。

「へぇ～、トランクにこんなに沢山の銃が入ってたんだ。」

と、真理奈が呟く。

「取り敢えず、今後使えそうな武器は取っておきましょう。」

と、のび太が言うと、のび太は、トランクの中の銃を物色し、良さそうな銃火器を探した。それに続いて、他の５人も適当な銃を手に取った。

暫くすると、５人全員が幾つかの銃火器を取った。
のび太は『ジャイロジェット』を取り、スネ夫は、『グリースガン』の愛称で呼ばれる『ＧＭ　Ｍ３』を取り、聖奈は、『ＭＰＳ　ＡＡ－１２』という箱型弾倉のショットガンと、Ｈ＆amp;Ｋ　Ｇ３６というアサルトライフルの短機関銃モデルである『Ｈ＆amp;Ｋ　Ｇ３６Ｃ』を取り、真理奈は、『ＴＡＰ　ＴＯＺ－１９４－０１Ｍ』というショットガンを取り、燐は、『ＰＧＭ　ヘカート?』というボルトアクション対戦車ライフルを取った。そしてそれぞれ、使用する弾薬をミドルパックに入れた。のび太と燐と真理奈は、巌から『ミドルパック』を貰ったらしく、ジャイアン達と同じ様に装着していた。ふと、のび太が巌に訊いた。
「巌さん。この『ジャイロジェット』、少し改造してありますね。」
のび太のその言葉を聴いた巌は応える。
「解るか?流石だな。本来の『ジャイロジェット』は、装填する際に手作業で装填しなきゃならなかったからな。後、口径も小さかったしな。だからそこを改良して、ついでに銃身長を短くして、銃重量を軽くしたのがそれだ。」
巌のその言葉を聴いたのび太は言う。
「へぇ～、じゃ大分使いやすいですね。」
と、のび太が言うと、巌はのび太の他の４人を見ると言う。
「準備が終わったら、さっさと行くぞ。」
銃火器と弾薬の準備が終わったと見た巌はそう言った。すると、全員は車に乗り込んだ。巌の乗ってきた赤い車には、巌と迅とのび太とジャイアンとスネ夫が乗り込み、玲が乗ってきた青い車には、玲と燐と真理奈と聖奈が乗り込んだ。全員が乗り込むと、２台の車は『ナムオアダフモ機関』へと発進した。

その頃、上空からその車を見ていた部隊が居た。
「こちら2番隊。肉眼により、ターゲットの確認を完了しました。」
と、隊員の一人が言った。すると、通信機の向こうの隊員が言った。
「解った。では直ちに作戦を決行するぞ。現場の指揮は第一特殊部隊隊員であるこの晴瀬浩司が執る。」
と、通信機の向こうの晴瀬隊員が言うと、通信をしていた二番隊の隊員は、
「了解。」
と言うと、のび太達の乗った乗用車を追跡した。そして、全機の戦闘ヘリがそれに続いて行った。

その頃、車内では、戦闘ヘリが来る事を微塵も知らないのび太達が喋っていた。
「でも、良かったよ。ジャイアン達が無事で。ススキヶ原のバイオハザードの時は、スネ夫はゾンビに襲われそうになってたし、ジャイアンは捕まってたから、今回も同じ様な事になってないかと心配で。」
と、のび太が言うと、ジャイアンが言う。
「前回は、ちょいとヘマしたからな。でも、もうヘマなんかしないぜ。」
ジャイアンのその言葉に続いてスネ夫も喋る。
「僕だって、あの時は慣れて無かっただけで、もう大丈夫だよ。」
スネ夫がそう言うと、ジャイアンが言う。
「とか言っといて、病院に駆け込むときは結構ビビってたじゃんか。」
と、ジャイアンが言うと、スネ夫は喋る。

「ま、まぁそれはそれって事で・・・・。」

と、スネ夫は言った。そして、暫く3人で話し、3人は笑い出した。

バイオハザードが発生してから初めて会話らしい会話をしたので、気が緩んで、楽しくなってきたんだろう。それを聞いていた巌と迅も、心なしか楽しそうだった。

暫く楽しく会話をしていたが、のび太が異変に気がついた。
「・・・・・・・・・・・・？」
すると、のび太の様子がおかしいのに気づいたジャイアンは言う。
「どうしたのび太？」
と、ジャイアンがのび太に訊くと、のび太は応える。
「いや、何かヘリコプターの音が聞こえるような・・・。」
と、のび太が言うと、車内に居る全員が耳を澄ました。すると、確かにプロペラの音が聞こえてきた。不審に思った巌は車のサイドミラーを覗いた。すると、そこには、数機の戦闘ヘリが見えた。
「おい、後ろに大層なお出迎えが見えてるぜ。」
と、巌が全員に向かって冗談をかまして言った。すると、後部座席に座っているのび太達も後ろを振り向いた。すると、１０機程の戦闘ヘリが見えた。
「あれは・・・・・？」
と、のび太が呟くと、巌が言う。
「『ＡＨ－１コブラ』だな。バギーの次は戦闘ヘリと来たか。出し物が沢山あるな。」
巌がそう言うと、ジャイアンが喋る。
「冗談言ってる場合かよ・・。」
と、ジャイアンが言った。
すると、後方の戦闘ヘリがガトリングランチャーを放った。
「わぁ、撃ってきたよお！！」
と、スネ夫が叫ぶ。
巌は、弾丸に当たらないように車体を揺らして弾丸を回避していた。

そして、狭い路地裏へと、車を進めた。すると、のび太が言う。
「・・・・・じゃあ、僕が行って、相手を引き付けます。」
と言うと、のび太は、さっさと車から出た。
「おい、のび太！待てよ！！」
車から出て行ったのび太を見たジャイアンがそう叫んで、のび太を追い掛けて行った。
「・・・・・行っちまったな。迅、これからどうする？のび太追うか？」
と、巌は助手席にいる迅に訊いた。すると、迅は応える。
「まぁ、向こうは彼等だけで充分でしょう。それよりも、玲さん達の方と合流しましょう。スネ夫君もそれでいいですか？」
と、迅は巌の言葉に応えた後に、スネ夫にそう尋ねた。
「うん、それでいいと思うよ。」
と、スネ夫は応えた。すると、巌は玲に通信した。
何回かコールした後、玲が出た。
「こちら巌。玲、何処にいる？」
と、巌が玲に尋ねると、玲は応える。
「・・・何処かは解らないけど、何処かのビルの中に居るわ。屋上に燐が上がって行ったから、屋上を見れば解ると思う。」
と、玲は応えた。すると、巌が返事をする。
「じゃ俺達は、周囲のビルの屋上を確認して、燐の姿が見えたらそっちに合流する。・・・・ああそれと、のび太とジャイアンは相手を引き付ける為に向こうへ行っちまったぞ。」
巌が玲の言葉に返したついでに、のび太とジャイアンの事も話した。
すると、玲が言う。
「・・・まぁ、私達が近くに居ても足手まといになるだけだし、いいんじゃない？それより、早く合流した方がいいと思うけど。」
玲がそう言うと、巌は言う。
「そうだな。じゃ、切るぜ。」
と言うと巌は、通信を切った。そして、他の2人に言った。

「どうやら玲達は、どっかのビル内に居るらしい。んで、燐がそのビルの屋上に上がっているらしい。屋上に居る燐を見つけたら、玲達と合流するぞ。」

と、巌が言うと、巌と迅とスネ夫の3人は車から出た。そして、すぐ近くのビルの中に入り、窓から、周囲のビルの屋上を見た。時間が掛かると思われたが、意外とあっさり見つかった。

「居たぞ！あのビルだ！」

屋上に居る燐を見た巌は、そう叫ぶと、燐が居るビルに向かって走って行った。

ＡＲＥＡ５『戦闘準備』

巌が、屋上に居る燐を見つける数分前、車から勢いよく出て行ったのび太を追い掛けていたジャイアンはのび太に追い付いた。そして、のび太の腕を掴んで言った。

「おい、のび太。一人で突っ走るんじゃねぇよ！」

と、ジャイアンが声をやや大きくして言ったが、のび太は冷静に言う。

「何で来たのさジャイアン。こっちに来たら危ないよ。」

のび太のその言葉を聴いたジャイアンは言う。

「のび太の方が危ねえだろ！まったく、お前は何時からそんなに無茶するようになったんだよ。」

と、ジャイアンが言うと、のび太が言う。

「・・・別に無茶しているつもりじゃないよ。只、僕にやれる事をやってるだけだよ。もう後悔したくないし、それに、僕が動く事で皆が助かるならそれでいいさ。多少無理をしてもね。」

と、のび太が言った。『後悔したくない』と言ったのは恐らく、ススキヶ原の『翁蛾健治』の事を言っているのだろう。のび太のその言葉を聴いたジャイアンは少し微笑むと、言う。

「じゃあ俺様も同じだな。何時までもグダグダしてられねえよ。一緒に行こうぜ！」

ジャイアンがそう言うとのび太は笑顔を見せて、

「うん！じゃあ行こう！！」

と言うと、のび太は、ジャイアンと共に、戦闘ヘリへと向かって行った。

すると、すぐに戦闘ヘリが見えてきた。戦闘ヘリは、のび太の姿を確認すると、『ＴＯＷ』を撃ってきた。のび太はそれを横に走って避けた。次々と、『ＴＯＷ』が炸裂する中、のび太はそれをなんとか避けていた。そして、最後の『ＴＯＷ』を滑り込みで見事に回避

した。しかし、回避した次の瞬間に次の『ＴＯＷ』がのび太に迫っていた。のび太に向かっている『ＴＯＷ』を見たのび太は、

「しまった！」

と、声を漏らした。のび太は、滑り込みで体勢を崩していた為、その『ＴＯＷ』を回避出来なかった。のび太が半ば諦めたその瞬間、のび太の目の前で『ＴＯＷ』が空中で停止した。そして、すぐ近くで声が聴こえてきた。

「へっ、危なっかしいなのび太。」

そう言ったのは、ジャイアンだった。ジャイアンの左手を見てみると、しっかりと『ＴＯＷ』が掴まれていた。そして、ジャイアンはその『ＴＯＷ』を戦闘ヘリに向かって投げつけた。

「投擲拳！！」

そう叫びながらジャイアンは『ＴＯＷ』を投げ、見事に戦闘ヘリの一機に命中した。

「へっ、やったぜ！」

ジャイアンは自慢げにそう言った。

「ありがとうジャイアン、助かったよ。」

と、のび太はジャイアンに礼を言った。すると、ジャイアンが言う。

「いいって事よ。それより、一先ず物陰に隠れながら戦おうぜ。」

と、ジャイアンが提案すると、のび太はそれに肯定し、手近な建物の陰に隠れた。それから程なくして、戦闘ヘリがガトリングガンを撃ってきた。

のび太とジャイアンは崩れた建物の陰に隠れて、それを避けた。そして、のび太は『ジャイロジェット』の装弾数を確かめ、ガトリングランチャーの隙を見て、戦闘ヘリを撃った。

のび太の撃った弾丸は、弾丸に搭載された推進剤で弾速を速くしながら飛翔し、戦闘ヘリの後部回転翼のローターに直撃した。すると、後部回転翼は破壊され、その動きを止めた。後部回転翼の回転の止まったヘリコプターは、操縦不能になり、空中で回転しながら、降下し、やがて墜落した。墜落したヘリコプターは、強烈な爆発音の

後、炎上した。
「やった！」
と、のび太が言った。
「よっしゃ、この調子でいこうぜ！」
と、ジャイアンが言う。すると、のび太は次々と、ジャイロジェットの弾丸を戦闘ヘリの後部回転翼に当てていった。のび太の命中精度は凄まじく、次々と戦闘ヘリが落とされていった。しかし、相手の方も黙ってなく、のび太達の隠れている瓦礫に向かって、『ＴＯＷ』を撃ち込んできた。
「やべぇ、ミサイルが飛んでくるぞ！」
と、ジャイアンが言うと、のび太がジャイアンの腕を引っ張りながら言う。
「此処は危険だ、走ろうジャイアン！」
と、のび太が言うと、ジャイアンとのび太は、走って、『ＴＯＷ』を回避した。そして、戦闘ヘリは続けてガトリングランチャーを連射してきた。すると、のび太達は手近な建物の中に隠れた。のび太達が隠れようとした瞬間に戦闘ヘリの一機の主翼（プロペラ）のローターが破壊された。何事かと思ったのび太は様子を見に行った。すると、のび太達を挟んで、戦闘ヘリの大群の反対側の位置にあるビルの屋上に、『ＰＧＭ　ヘカート?』を構えた燐が居た。そして、燐は再び、ライフルを撃ち、『．５０ＢＭＧ弾』を放った。放たれた弾丸は、またもや、主翼のローターに直撃した。
「燐さんだ。ジャイアン、ここは燐さんに任せて僕達は一旦隠れよう。」
と、のび太が言うと、のび太とジャイアンの二人は近くのビルに入って行った。
その頃、巌達は玲達と合流していた。

「どうやら全員無事なようだな。」
と、巌が言うと、聖奈が喋る。
「でも、のび太さんとジャイアン君が・・・・・・・・。」
と、聖奈が口ごもると、玲が言う。
「仕方ないわ。私達が今しゃしゃり出ても、助けになるどころか、足手まといになるだけだわ。」
玲のその言葉を聴いた聖奈は呟く。
「そんな・・・・・・。」
と、聖奈が呟いた。すると、スネ夫は何かを考え込んでいた。そして、少しすると、全員に言う。
「あの、皆?僕ちょっと外出掛けてくるよ。戦闘ヘリとか、のび太達の様子も見たいし、・・・・じゃ、またあとで。」
と、言ったスネ夫は、のび太達の向かった所に駆け出して行った。
すると、聖奈が叫ぶ。
「スネ夫君!!」
聖奈はそう叫んだが、スネ夫は止まらず、そのまま見えなくなるまで行ってしまった。
「巌さん!早くスネ夫君を追い掛けないと!!」
と、聖奈は巌に言ったが、巌は黙ってばかりだった。
「巌さん?」
聖奈がそう言うと、巌は諭す様に言う。
「あのな聖奈、俺達は軍人だ。よって、感情に任せた勝手な行動は避けなければならない。ここは、待機するべきだ。」
と、巌が言った。すると、聖奈が反論する。
「だけど、スネ夫君が行ったじゃないの!」
聖奈がそう言うと巌は応える。
「誰かが行ったからって安易に行動する事は出来ない。そんなんじゃ統率なんか執れない。まぁ俺達は少数精鋭の部隊だから、統率を執る必要は無いが。だがそれでも、慎重に行動しなければならない

んだ。」
巌がそう応えると、聖奈が声を荒げて叫ぶ。
「慎重とかそういう問題じゃ無いでしょう！人の命が掛かってるんですよ！！」
聖奈がそう叫んだが、巌は淡々と喋る。
「・・・・・大きな目的の為には、小さな犠牲は仕方がない。それに、のび太が居れば大丈夫だろう。」
巌がそう言うと、聖奈は更に大きな声で叫ぶ。
「大丈夫って、・・・・・何か動かなきゃ駄目でしょ！！そんなの慎重とは言わない！それは臆病って言うのよ！！・・・・・・・・・・・・・私も、・・・・・私も行きます。」
聖奈がそう言うと、聖奈はのび太達の居る所に走って行った。
「あ、・・・・・私も！」
真理奈はそう言うと、聖奈と共にのび太達の所に向かって行った。
辺りには、巌と玲と迅が居るだけだった。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・巌・・・・・・。」
玲はそう巌に言った。巌の心の内を知っている為、話し掛けにくい様子だった。すると、迅が巌に言った。
「巌さん。やはり、あの事が響いているんですね。」
迅がそう言うと、巌は応える。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

巌は決心を固めると、今にも行こうとした。しかし、迅がそれを制止した。そして巌と玲に向かって喋る。
「ちょっと待って下さい。役割を分けましょう。私は燐さんの所に当たります。また何かの怪物が来るかもしれませんからね。玲さんは、『ＡＨ－１コブラ』の方に行き、巌さんは、子供達の護衛を頼みます。」
と、迅が言うと、二人は納得したようだった。すると、三人はすぐに行動に移った。
迅はビルの屋上に上がって行き、巌と玲は、のび太達のいる建物に向かって行った。

その頃、のび太達は建物の中から出られずにいた。
「・・・・・・あいつらが待ち伏せしてて此処から出れないな。」
と、ジャイアンが呟いた。すると、のび太が言う。
「取り敢えず、何か使えそうな物を捜そうよ。」
のび太がそう言うと、ジャイアンは肯定し、二人で何か使えそうな物を捜し始めた。

しかし、建物内の殆どが崩れており、瓦礫ぐらいしか見つからなかった。
「無いな・・・。」
のび太はそう呟きながらも黙々と捜していた。

暫くすると、ジャイアンがのび太に向かって話す。
「のび太、これは使えそうだぜ！」
ジャイアンのその言葉を聴いたのび太はジャイアンの方を振り向いた。ジャイアンが持っていたのは、１２０ｃｍ程の鉄筋だった。それを見たのび太はジャイアンに尋ねる。
「それをどう使うのさ？」

のび太のその言葉を聴いたジャイアンは応える。
「ほら、何時だかやっただろ。バッティングで戦闘機を撃ち落とした事。」
ジャイアンがそう言うと、のび太は言う。
「あの時のあれね。確かに出来なくもなさそうだけど、何を打つのさ?」
のび太がそう言うと、ジャイアンは応える。
「そこら辺にある瓦礫で充分だろ。」
と、ジャイアンが言うと、のび太が反論する。
「誰が投げるのさ?僕は射撃で忙しいし、ジャイアン一人で投げて打つのは命中精度が下がるんじゃないの?」
のび太がそう言うと、ジャイアンは応える。
「う、・・・まぁ確かにそうだが、他に手も思いつかないしな・・・。それに、あん時だって、自分で投げて自分で打った時に当たったし、大丈夫じゃないか?」
と、ジャイアンが言った。
「あの~僕も居るんだけど。」
すると、突然後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。のび太とジャイアンは振り向くと、そこには、スネ夫が居た。
「スネ夫!!来てくれたんだね!!!」
と、のび太は喜びの声を挙げた。すると、スネ夫はやや嬉しそうな顔をして言う。
「ははは・・・まぁね。僕も逃げてばかりいられないし。」
スネ夫がそう言うと、ジャイアンが言う。
「スネ夫も言うようになったじゃねえか。」
と、ジャイアンが言った。すると、向こうからまたもや、聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「のび太さん!!」
そう言ったのは、聖奈だった。
「聖奈さん!」

のび太もそう叫んだ。そして、聖奈の後ろには、真理奈と巌と玲も居た。
「皆来てくれたんだね。」
と、のび太は喜びの声を挙げた。
「・・・・・本来、俺と玲は来る筈じゃ無かったんだがな。俺に啖呵切ったそっちのカチューシャ付けた女の子に感謝しろよ。」
巌がそう言うと、スネ夫が呟く。
「え、聖奈さんが？」
と、スネ夫が言うと、聖奈が応える。
「ええ、只黙ってるのは嫌ですから。」
聖奈がそう言うと、真理奈が言う。
「随分しれっと言ったね。」
真理奈がそう言うと、ジャイアンが呟く様に言う。
「聖奈さんって、のび太と同じ様な事言うんだな。」
ジャイアンのその言葉を聴いた聖奈はジャイアンに訊く。
「え？のび太さんと同じ？」
聖奈がそう言うと、ジャイアンは応える。
「いや、独り言さ。あまり気にしないでくれよ。」
聖奈は、ジャイアンのその言葉を聴くと、
「はあ。」
と、小さく返事をした。そして、玲が全員に話し掛ける。
「さて、もたもたしてられないわ。早速行動に移りましょう。のび太君と、スネ夫君と、ジャイアン君と私で、向こうの戦闘ヘリと戦うわ。真理奈ちゃんと聖奈ちゃんと巌は、このビルの中で戦闘の準備を済ませて、待機する事。何か質問は？」
玲がそう言うと、真理奈が尋ねる。
「私達が待機する必要はあるんですか？」
真理奈のその言葉を聴いた玲は応える。
「ええ、勿論あるわ。向こうが用意してきた兵器が戦闘ヘリだけとは限らない。あの戦闘ヘリに生物兵器が積んであるかもしれないし、

まだ、後ろに控えている兵器もあるかもしれない。あなた達には、周囲の警戒をお願いしたいの。」

玲がそう言うと、真理奈達も納得したようだった。すると玲が言う。

「他に無いならもう行くわ。巌、そこの娘達のお守りは任せたわよ。いざという時はお願いね。」

玲のその言葉を聴いた巌は返事をする。

「ああ解ってるぜ。任せとけって。」

と、巌は玲に言った。

「それじゃあ行くわよ！！」

と、玲が言うと、玲は戦闘ヘリに向かって行った。のび太とジャイアンとスネ夫も玲に続いて飛び出した。

その頃、燐の所には、迅が居た。

「よお、何しに来たんだ？」

燐は迅にそう言った。すると、迅が言う。

「心配して来たのにそれは無いでしょう。燐さん一人では何かあった時に対処仕切れないでしょうから、加勢に来ました。他の皆さんは、のび太君達の方に向かいましたよ。」

迅がそう言うと、燐が言う。

「そうか。まぁ妥当だな。・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

燐がそう言うと、迅は燐に尋ねる。

「何かあったんですか？様子が変ですが。」

迅がそう言うと、燐は徐に応える。

「・・・・・・・・前にも言ったと思うけど、あたしは元ナムオアダフモ機関の社員でさ。そのナムオアダフモ機関がこんな兵器を所有していた事に驚いてるだけさ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・只な、スネ吉は機械兵器を開発するだけで、生物兵器の類は制作していなかった気がする。これは言い過ぎかもしれないが、裏に何かもっと大きな”何か”が控えているような気がするんだ。」

燐がそう言うと、迅は、一呼吸置いて言う。

「・・・・もしかしたら一理あるかもしれませんね。事実、この機関の行動には、少し疑問を感じますし。」

迅のその言葉を聴いた燐は迅に尋ねる。

「疑問って？」

燐は迅にそう尋ねると、迅は応える。

「ええ、それはですね、一介の企業にしては行動があまりにも大きすぎる事と、行動が無謀すぎる事ですね。」

迅がそう応えると、燐は、

「どういう事だ？」

と、尋ねた。すると、迅は応える。

「つまりですね、『ナムオアダフモ機関』は、ススキヶ原でも、此処でも、生物兵器と『Ｔ－ウィルス』を散蒔(ばらま)いたでしょう？しかも、ススキヶ原に散蒔いた翌日には、此処で散蒔いています。例え、生物兵器の戦闘データを録る為とはいえ、些か事を大きくしすぎです。これじゃあ、国家権力から、営業停止命令が下るのもおかしくありません。」

迅がそう言うと、燐は納得して言う。

「成る程、そう言われればそうだな。・・・・・でも直接あいつ等に訊けば早いんじゃないか？」

燐がそう言うと、迅は応える。

「まあ、最終的にはそうしますけれどね。警戒はしておいて、損ではないかもしれません。」

迅がそう言うと、燐はそれに肯定し、再び、戦闘ヘリの狙撃を再開した。燐が狙撃をしている間、迅は、遥か遠くの上空から来る援軍を確認した。

ＡＲＥＡ６『分断戦』

戦闘ヘリの大群に向かって行ったのび太とジャイアンとスネ夫と玲は、現在は物陰に隠れていた。
「なあ、玲さん。何か策はあるのか？」
ジャイアンが玲にそう尋ねると、玲は応える。
「勿論あるわ。私が『アンカーワイヤー』を戦闘ヘリの着陸脚に引っ掛けて、私が戦闘ヘリに張り付く。そうすれば、相手の注意が私に向くから、その間にのび太君達が戦闘ヘリを撃墜してくれればいい。」
玲がそう言うと、スネ夫が言う。
「でも、そうなると玲さんが危なくなるんじゃないの？」
スネ夫のその言葉を聴いた玲は応える。
「大丈夫よ。攻撃されたら、なんとか避けるわ。それにこういった事態は珍しくないし、経験もあるしね。」
玲がそう言うと、のび太が言う。
「やっぱり傭兵は頼もしいですね。・・・でもあんまり無茶しないでくださいよ。危ない時は援護しますけれど・・・。」
のび太のその言葉を聴いた玲は言う。
「御忠告どうもね。のび太君。貴方の事は、巌から大体聴いているわ。なんでも、車より速く走る虎を討ち負かしたらしいじゃない。頼りにしてるわよ。」
玲がそう言うと、玲は戦闘ヘリに向かって『アンカーワイヤー』を打ち込んだ。すると、『アンカーワイヤー』は戦闘ヘリの着陸脚に見事に引っ掛かった。
「・・・よし、じゃあ僕達も動こう！」
とのび太が言うと、のび太は『ジャイロジェット』を構えた。同時に、ジャイアンも鉄筋を構え、スネ夫は野球ボール程度の大きさの瓦礫を大量に抱えた。

すると、ジャイアンは鉄筋を野球のバットの様に持つと、スネ夫に呼び掛けた。

「よっしゃ！スネ夫投げろ！！」

ジャイアンのその言葉を聴いたスネ夫は瓦礫をジャイアンに投げた。そして、ジャイアンは、自分に投げられた瓦礫を鉄筋を使い、バッティングの要領で打った。打たれた瓦礫は、真っ直ぐ戦闘ヘリに向かい、後部回転翼のローターに直撃し、ローターは破壊された。

「よっしゃあ！スネ夫、どんどん投げろ！！」

ジャイアンがスネ夫にそう言うと、スネ夫は、

「オーケー。」

と、返事をし、ジャイアンのバッティングに合わせて瓦礫を投げた。ジャイアンの打った瓦礫は、一つも外す事なく、戦闘ヘリに直撃した。のび太もそれに合わせて、『ジャイロジェット』を撃つ。

一方、戦闘ヘリに張り付いている玲の方も、『ＵＳ　ＥＸ－４１』を射撃し、戦闘ヘリを迎撃していった。

やがて、無数にいるかと思われた『ＡＨ－１コブラ』も、段々と、数を減らしていった。最早残りは、凡(おお)そ3機程しか残っていなかっ

た。

その頃、巌達の方では、・・・・・・

「巌さん、待機って暇だね。」

暇を持て余した真理奈が巌にそう言った。すると、巌は言う。

「無駄話しないで周りを警戒しろ。何時(いつ)何が来るか解らないからな。」

巌は、『ブローニングＨＰ』の確認と整備を行いながらそう言った。

「それは、そうですけど・・・。やはり何も動かないって言うのは・・・。」

聖奈がそう言うと、巌が言う。

「待機も立派な任務の内だぞ。作戦を無事成功させる為には、こういった役割も必要だ。」

と、巌が言った。

やがて、巌は銃火器の整備が終わり、ホルスターに銃を収納した。

右の腿のホルスターには、『Ｓ＆ａｍｐ;Ｗ　Ｍ９４５』を収納し、左腿のホルスターには、『ハードボーラー』を収納し、左肩のホルスターには、『ＦＮファイブセブン』を収納した。そして、右手に『ブローニングＨＰ』を装備して、戦闘に備えた。

そうして暫くすると、何かの声が響いた。
「GOAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！」
響いてきた声は、何かのB．C．W．の奇声の様だった。
「何、今の声！？」
と、聖奈が、先程の奇声に驚いた。すると、巌は冷静な口調で言う。
「どうやらそろそろお出ましの様だな。取り敢えずお前等は下がってろ。俺が確認してくる。」
巌はそう言いながら、声がした方向に向かって行こうとした、しかし、声がした方向から何かが、巌に向かってきた。
「ちっ！」
巌は小さくそう言うと、左方向に回転して避けた。そして巌は、素早く体勢を立て直し、向かってきた何かを確認した。”向かってきた何か”は、全身が全体的に黒色をしており、皮を引ん剥いた様なゴリラの容姿をしていた。その情報から、そのB．C．W．は、『フローズヴィニルト』だと解るのに時間は掛からなかった。
「どういう訳か知らないが、此処に潜伏していたB．C．W．か！」
と、言いながら巌は、手に持っていた『ブローニングHP』をフローズヴィニルト目掛けて撃った。

「ＧＯＡＡＡ

しかし、フローズヴィニルトは跳び上がり、弾丸を回避した。そして、フローズヴィニルトは、巌の後ろに回り込み、すかさず、巌を殴り付けた。すると、巌は、伸ばされたフローズヴィニルトの腕を掴み、掴んだ儘、フローズヴィニルトの後ろに回り込んだ。そして、フローズヴィニルトの背中を蹴り飛ばした。

「ＧＯＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！」

思わぬ不意打ちを喰らったフローズヴィニルトは、叫び声を挙げて床に叩き付けられた。そして、巌はバックパックから、『ダネルＭＧＬ』を取り出すと、倒れているフローズヴィニルト目掛けて撃った。『ダネルＭＧＬ』から放たれた榴弾はフローズヴィニルトの上体に着弾し、炸裂した。それと共に、フローズヴィニルトの上体から上は消し飛んだ。

「ＧＯＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ

「AAAA

しかしそれは、一発の銃声で止められた。
「ＧＯＡＡＡ

えていたが、やがて大人しくなって、その場に倒れた。
すると、聖奈と真理奈が巌に駆け寄ってきた。
「大丈夫ですか！？」
聖奈が巌にそう訊くと、巌は応える。
「ああ、なんとか大丈夫だ。だが借りができたな。お前が助けてくれなかったら死んでた所だった。」
巌がそう言うと、聖奈は言う。
「いや、少しでも役に立ちたいので。」
と、聖奈が言った。すると、巌が言う。
「じゃあ待機を続行するぞ。周りの警戒も怠らずにな。」
巌がそう言うと、三人は、楽な姿勢をして、待機した。

その頃、燐と迅の所では・・・・・
「・・・・・そろそろ相手方も減ってきたな。」
残り3機になった『ＡＨ－１コブラ』を見た燐はそう言った。すると、迅が後ろを見て言う。
「・・・しかし、どうやら新手が来たようですよ。」
迅のその言葉を聴いた燐は、『ＰＤＭ　ヘカート?』をバックパックに装着し、振り向いた。すると、向こう側から、輸送ヘリがこちらへと向かって来ていた。
そして、何かのコンテナーを落とし、また何処かへと飛んで行った。
「・・・・・・・・何だこのコンテナーは?」
と、燐が言った。

「さっき少しだけですが、企業名みたいなものが輸送ヘリに印字されているのが見えました。」
迅のその言葉を聴いた燐は言う。
「企業？『ナムオアダフモ機関』か？」
燐がそう言うと、迅は応える。
「それはどうか解りませんが、今はあのコンテナーをどうにかするべきだと思うんですが。」
迅は、輸送ヘリから落とされたコンテナーを見てそう言った。そのコンテナーには、
『『ＴＩＮＤＥＲ』試作型』
と、書かれていた。やがて、やがて、気圧が抜ける音がして、コンテナーの戸が開いた。
「ＧＹＩＯＯＯ

大口径のマグナム弾が直撃した巨大な芋虫は、巨大な奇声を挙げ、弾丸が直撃した瞬間に何故か炎上した。

暫くすると、巨大な芋虫は、ぐったりと倒れた。

「何だったんだこいつは？」

と、燐が呟く。すると、迅はその言葉に応える様に言う。

「・・・やはり、相手が寄越（よこ）してきたＢ．Ｃ．Ｗ．でしょうか？」

迅がそう言うと、燐は言う。

「いや、おかしい。それにしては呆気なさすぎる。例え試作型だとしても、こんなに虫の息な訳は無い筈だ。」

と、呟きながら燐は、動かなくなった巨大な芋虫に近づいて行った。

燐と、巨大な芋虫との距離が、５ｍ程になった辺りで、巨大な芋虫に変化が起きた。

「ＧＹＩＯＯＯ

中辺りを突き破って出て来た。そして、上空へと舞い上がった。燐は、『S&W M500』を構えながら、上空に舞い上がった”何か”を見た。

巨大な芋虫の背中を突き破って出て来た”何か”は、巨大な蝶の様な外見をしていた。

「こいつが本体か！」

と言うと、燐は、巨大な蝶に向かって、『S&W M500』を発砲した。

すると、強烈な爆音が響き、燐は吹っ飛ばされた。燐が居た所は、炎上していた。

「燐さん！」

吹っ飛ばされた燐を見た迅はそう叫ぶと、ビルの屋上から落ちそうになっている燐の手を掴んだ。

そして、徐(おもむろ)に引き上げた。屋上に戻れた燐は上空にいる巨大な蝶を見ながら言う。

「ちっ、どうなってんだ？」

燐がそう言うと、迅が自分の考えを話す。

「恐らく、鱗粉のせいでしょう。可燃性の鱗粉を空気中に散布し、少しの火花や摩擦熱が生じるだけで、高熱を発し、そして、無数に存在する鱗粉が連鎖的に燃え上がり、先程の様に炎上したんでしょう。

細かい可燃性の粒子が少しの火花で、連鎖的に爆発する粉塵爆発と同じ原理です。」

迅がそう言うと、燐は言う。

「そういう事か。しかしそうなったら、銃火器の類は一切使えないぞ。」

燐がそう言うと、迅が自分の考えを話す。

「銃火器が無理だとすれば、私の持つ『堅裂』でなんとかするしかないでしょうね。」

迅のその言葉を聴いた燐は迅に尋ねる。

「『堅裂』？何だそれは？」

燐が迅にそう訊くと、迅は応える。

「それは、腰に掛けてあるこの刀の事ですよ。」
迅は、自分の左の腰に掛けてある刀を掴んでそう言った。
「確かに、刀なら、火花を発しないからなんとかなるかもしれないな。でも、あの高度まで上がれるのか？」
迅の刀を見た燐はそう言った。燐が言った通り、巨大な蝶は、かなりの高度にいた。
「・・・確かにあの高度にいては、簡単には届きませんね。」
迅は、落ち着いてそう言った。そして、少し考えた後、燐に言う。
「燐さんが、両手で私を打ち上げてくれれば、届くと思うんですが。」
迅のその言葉を聴いた燐は言う。
「・・・・・・巧く上げれば一回で成功するか？」
燐のその言葉を聴いた迅は応える。
「向こうに相当のスピードが無い限り、失敗はしないですが、１００％とは言えないですね。」
と、迅が言うと、燐が言う。
「でも、それしか方法が無いならそれに賭けるしかないな。
そうと決まったら、早速動くか。」
すると、燐は、両手をバレーボールのアンダーハンドパスの様に構え、腰を落とした。すると、迅は、燐の両手に乗った。そして、燐は、一気に迅を打ち上げた。
打ち上げられた迅は一気に、巨大な蝶の高度まで上がった。そして、鞘から刀を抜き、翅（はね）を斬り裂いた。
「ＧＹＩＥＥＥ

燐のその言葉を聴いた迅は素早く身を引いた。燐は、『ＲＰＧ－７』を構えていた。そして、こちらに突進してくる巨大な蝶に向かって、『８５ｍｍ榴弾』を放った。燐達の立っている場所の３０Ｍから、４０Ｍ程の位置で、『８５ｍｍ榴弾』は巨大な蝶に命中し、爆裂した。巨大な蝶は跡形も無く消え去った。

「なんとか凌ぎ切ったようですね。」

迅が燐に近づきながらそう言った。それを聴いた燐は、構えていた『ＲＰＧ－７』の構えを解いた。そして、迅の方を振り向き、言う。

「ああ。あいつが自暴自棄になって上空に舞い上がったお陰で、その時に生じた風で鱗粉が飛ばされたから、こいつをぶっ放す事が出来た。あいつが冷静な奴だったら、どうなっていたか解らなかったな。」

燐は、右手に持っている『ＲＰＧ－７』を少し下げながらそう言った。

「そうですね。早い内に的確な対処方法を講じなければいけませんね。・・・・・・・・・・・・それはそうとして、そろそろ、巌さん達の所に戻りませんか？」

迅がそう言うと、迅のその言葉を聴いた燐が応える。

「ああ、そうだな。見た所、『ＡＨ－１コブラ』も全機墜としてるようだし、合流するか。」

と言うと、燐と迅は、のび太達の所へと向かって行った。

燐と迅が巨大な蝶を倒した数分前、のび太達の方では、残り３機となった、『ＡＨ－１コブラ』を相手にしていた。残りの戦闘ヘリが少なくなったので、玲は戦闘ヘリから離れて、のび太達に合流した。

のび太とジャイアンとスネ夫と玲は物陰に隠れていた。

「・・・・・残りのヘリコプターが減ったから、慎重になってきてるわね。これからは、あまり、安易に攻撃は出来ないわ。」

と、玲が言った。
「だけど、１０機以上もいた戦闘ヘリが今は3機まで減っただろ。すぐに終わりそうな気がするんだが。」
玲の言葉に応える様にジャイアンがそう言った。
「でも、慎重になるに越したことはない。相手も何か奥の手を隠し持っているかもしれないし。」
と、のび太が言った。すると、3機の戦闘ヘリは再び銃撃を再開した。
「で、こっからどうするの？」
玲が3人にそう訊いた。すると、のび太が玲の言葉に応える。
「なんとか隙を見て、後部回転翼を撃ち抜きます。」
と、のび太が言った。のび太を信用しているのか、玲達は、それ以上は何も言わなかった。
　のび太は、先程までの様に、銃撃の合間を縫って、『ジャイロジェット』を撃った。のび太の射撃の命中精度は、衰える事を知らなかった。のび太の放った弾丸は、戦闘ヘリの後部回転翼を見事に撃ち抜いた。
「よっしゃあ！また1機撃ち落としたぜ。」
と、ジャイアンが歓喜の声を挙げた。すると、スネ夫が叫ぶ。
「ミサイルが来るよ！！」
と、スネ夫がのび太に呼び掛けた。すると、スネ夫が言った通り、『ＡＨ－１コブラ』の1機から『ＴＯＷ』が、のび太目掛けて飛んできた。のび太と、他の3人は、『ＴＯＷ』の爆風から避ける為に、その場を急いで離れた。のび太は右側に走り、スネ夫とジャイアンと玲は、左側に走った。
『ＴＯＷ』は、着弾した瞬間に爆発したが、のび太達には当たらなかった。のび太は、再び物陰に隠れると、先程、『ＴＯＷ』を撃ってきた戦闘ヘリの後部回転翼に、ジャイロジェットで弾丸を撃ち込んだ。のび太の放った弾丸は、一直線に後部回転翼のローターに向かい、直撃した。後部回転翼のローターは見事に破壊され、後部回

転翼を破壊された戦闘ヘリは、回転しながら墜落した。
「よし、残り1機！」
と、のび太が呟くと、戦闘ヘリを挟んだのび太の反対側から何かが飛んできた。飛んできた物体は、握り拳（こぶし）サイズの石の様な物だった。飛来してくる石は、真っ直ぐ、戦闘ヘリの後部回転翼のローターに飛び、直撃した。後部回転翼が動かなくなった戦闘ヘリは、操縦不能になり、墜落した。
全ての戦闘ヘリを無力化した事を確認したのび太は隠れていた物陰から出て来た。そして、向こう側に居るジャイアン達と合流した。
「なんとか無事に終わったね。」
と、スネ夫が言った。すると、のび太はジャイアン達に訊いた。
「最後の戦闘ヘリが墜ちた時に、戦闘ヘリの後部回転翼に石が飛んできたけど、もしかして、ジャイアンが打ったの？」
のび太のその言葉を聴いたジャイアンは応える。
「ああそうだぜ。上手（うま）かっただろ？」
ジャイアンがそう言うと、のび太がその言葉に応える。
「うん、助かったよ。」
のび太がそう言うと、玲が喋る。
「戦闘ヘリも無力化した事だし、巌達の所に戻りましょう。」
玲がそう言うと、スネ夫が言う。
「うん、そうだね。早いとこ『ナムオアダフモ機関』に行って、事を終わらせなきゃ。」
スネ夫がそう言うと、のび太とスネ夫とジャイアンと玲の４人は、巌達の居る建物に向かった。しかし、のび太が、炎上している戦闘ヘリの１機に『ベレッタＭ９２ＦＳ』を向けた。それを不審に思った玲がのび太に話し掛ける。
「どうしたののび太君？」
玲のその言葉を聴いたのび太は応える。
「・・・あの炎上している戦闘ヘリの中で何かが動いたので、まだ何かあるかと思いまして。」

のび太がそう言うと、ジャイアンが、
「何だって！」
と、叫んだ。すると、全員は振り向き、玲はのび太と共に、炎上している戦闘ヘリの1機に、『ベレッタＰｘ４』を向け、のび太は、先程と引き続き、『ベレッタＭ９２ＦＳ』を構え、スネ夫とジャイアンは、すぐに動けるように臨戦体勢をとった。
「何か動いてる”もの”って何だろ？」
少しビビりながらスネ夫がそう呟いた。すると玲がそれに応える様に言う。
「搭乗していた隊員、という線が高いけれど、高熱に耐性のある、生物兵器という事も有り得るわ。」
玲はそう言った。のび太と玲は、ハンドガンを構えながら少しずつ戦闘ヘリに近づいて行った。炎上した戦闘ヘリと、のび太達の距離が、５Ｍから６Ｍまでの距離になるまで近づいた頃、炎上した戦闘ヘリから一人の隊員が歩いて出て来た。その隊員は、全身が燃え上がっていた。そして、のび太達に向かって言う。
「・・・どう・や・ら、貴様・等を、甘・く見て・いた・ようだ・・な。だが、こ・の・・隊の・指揮を・執っ・ていた私が・・この・ま・ま本・・部に帰投して・も、責任を取ら・・され、殺されるだけ。ならば、いけ・好か・・ない・彼奴・の作っ・た”あれ”を・使う・のみ。」
隊員はそう言うと、懐から”何か”が入った注射器を取り出した。それを見たのび太が呟く。
「あれは？」
のび太がそう言うか言わない内にその隊員は、首の動脈に注射器を突き刺し、中に入っている薬品の様な”もの”を注入した。
「もしかして、何かのウィルス！？」
と、玲が言う。すると、ジャイアンも言う。
「Ｔ－ウィルスか！？」
と、ジャイアンが言うと、隊員が叫び出す。

「ウオオオ

「のび太君!!」
と言った玲は、ナイフを取り出し、のび太に絡まった毛髪を切断していった。が、中々解(ほど)けずにいた。
すると、隊員が毛髪を動かし、向こうの建物にのび太を投げ飛ばした。
「のび太!!」
ジャイアンがそう叫び、のび太を投げ飛ばした隊員の方を向いた。
「てめぇ・・・!!」
ジャイアンが隊員を睨みつけ、そう言ったが、隊員は少しも慌てずに言った。
「この肉体に傷でも付けられるものなら付けてみるがいい。『T一(タイラント)ウィルス』に替わる新たなウィルス、『S一(スティンガー)ウィルス』には敵わん。『T一ウィルス』は倒せても、『S一ウィルス』は倒す事は出来ん!!」
と、隊員が言うと、ジャイアンが言い返す。
「ふん、よく言うぜ。そんなもんに頼らなきゃ戦う事も出来ねえ癖に。」
ジャイアンのその言葉を聴いた隊員は声を荒げて言う。
「喧(やかま)しい!!貴様等ではこの肉体に敵う筈は無し!どんな手を使っても最終的に勝利すればいいのだ!!」
すると、隊員は、ジャイアン達に攻撃を始めた。

AREA7『スティンガーウィルス』

のび太が異形の生物と成り果てた隊員に投げ飛ばされた先は、巌達が待機している建物だった。のび太は、壁に叩き付けられ、その際、壁が脆かった為、壁を破壊しながら建物の中に転がり込んだ。

「のび太君!!?」

建物の中に転がり込んできたのび太を見た聖奈は、そう言いながらのび太に駆け寄ってきた。傍にいた巌と真理奈も駆け寄ってくる。

「おいのび太!何があった!?」

と、巌が言う。すると、真理奈が異変に気が付いた。

「何これ?・・・・・・・髪の毛?」

のび太の服に付着した、隊員の毛髪を見た真理奈がそう言った。のび太は少しふらついていたが、巌と聖奈と真理奈の3人を見ると、言う。

「詳しい話は後で!早くこっちへ来て!新手の敵が来ました!!」

と、のび太が叫ぶと、のび太はさっきまでいた所まで走った。巌達3人ものび太に続いて走った。少し走ると、隊員の姿と、隊員と対峙しているジャイアンとスネ夫と玲の姿が見えた。

「よかった!まだ皆無事だ!!」

のび太がそう叫んだ。すると、異形の生物となった隊員を見た巌が言う。

「おい、それはいいけどよ、のび太。あの怪物は何だ?」

巌のその言葉を聴いたのび太は応える。

「戦闘ヘリに搭乗していた隊員が、『スティンガーウィルス』とかいうウィルスを投与したら、こうなったんです。」

のび太はそう言った。

「『スティンガーウィルス』?何なのそれ?」

と、真理奈が疑問を顕わにした。すると、のび太がそれに自信無さ気に応える。

「僕にもよく解らないんだけど、Ｔ－ウィルス感染者のごく一部に現れた、特異遺伝子をウィルス化したものらしい。」
のび太がそう言うと、隊員が話す。
「よく解らんか？傑作だな。お前達が潜伏していたホテルの地下で秘密裏にこの研究をしていたというのに。」
隊員がそう言うと、ジャイアンが言う。
「俺達の泊まったホテルの地下で研究だと？」
と、ジャイアンが呟く。すると、のび太は思い出した様に言う。
「地下で研究ってあれか！！」
のび太がそう言うと、聖奈がのび太に尋ねる。
「のび太君知ってるの！？」
聖奈の言葉を聴いたのび太は応える。
「ああ、言うのを忘れていたけれど、僕は皆と散開した後、『フローズヴィニルト』と戦闘して、その直後に、錆びた扉を発見したんだ。そして、その奥に入ると、地下に続く階段があって、その奥に『スティンガージーン』研究室を発見したんだ。」
のび太がそう言うと、スネ夫が呟く。
「僕達が居たホテルにそんな所があったのか・・・。」
スネ夫がそう呟くと、巌が言う。
「民間のホテルの地下でウィルスの研究をしてたかなんてこの際どうでもいい。どちらにしろお前等のやっている事は違法行為だ。」
巌はそう言いながら、『Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ９４５』を隊員に向けた。すると、隊員は言う。
「だったらどうした？貴様等ごときに『スティンガー』が殺られるとでも？」

「どうやら、嘗めきってるようだな。」
と言うと、巌は、隊員に向かって、『Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ９４５』を発砲した。しかし、又もや、銃弾はスティンガーの毛髪に止められた。

「！これは！？」
巌が止められた銃弾を見て驚いた。すると、のび太が言う。
「あいつは銃弾を止める事が出来るんです。」
のび太のその言葉を聴いた巌は言う。
「銃弾を止めるか・・・。こいつは厄介だな。」
巌がそう言うと、真理奈が言う。
「銃弾を止める？じゃあどうやって倒すのよ？」
真理奈がそう言うと、巌が言う。
「とにかく攻撃あるのみだ！全員分かれろ！固まればあいつのいい的だぞ！！」
巌がそう言うと、のび太とスネ夫とジャイアンと玲と巌と聖奈と真理奈の７人全員は、隊員を囲むように陣形をとった。
「何をしても無駄だと言うのに。凡夫とは悲しいな。」
隊員がそう言うと、ジャイアンは叫ぶ。
「うるせえ！さっさとぶっ飛ばして終わらせるぜ！！」
ジャイアンはそう言うと、隊員に対し、『粉砕連撃拳』を試みた。しかし、ジャイアンの拳は悉く、隊員の毛髪に止められた。すると、ジャイアンは、隊員の毛髪を鷲掴みし、ぶん投げた。異形の隊員は、投げ飛ばされ、空中を舞った。するとジャイアンは、太腿のホルスターに掛けてある、『デザートイーグル』を取り出し、３発連続して撃った。一発目は、左足の踵付近に当たり、二発目は外れ、三発目は右足の脛辺りに当たった。そして、異形の隊員は、地面に激突した。しかし、すぐに起き上がってきた。
　すると、徐にこちらに歩いて来ながら言う。
「やはり、その程度か。まったく効かんな。」
隊員がそう言うと、のび太が言う。
「やっぱりあいつもウィルス兵器。頭を撃ち抜かないと、駄目みたいだ。」
のび太がそう言うと、聖奈が言う。
「でも一体どうすればいいの？普通に発砲してもあの髪の毛に止め

られるのに・・・・・。」
と、聖奈が言った。すると、巌も言う。
「あの毛髪をなんとか抑えられればいいんだが・・・・・。」
巌がそう言うと、思い付いた様にスネ夫が言う。
「そうだ！音響手榴弾（スタングレネード）！あれでなんとかならないかな！？」
スネ夫のその言葉を聴いた巌は、その言葉に応える。
「音響手榴弾（スタングレネード）か・・・・。試してみる価値はありそうだな。」
巌はそう言うと、バックパックから音響手榴弾（スタングレネード）を取り出し、隊員に悟られないように音響手榴弾（スタングレネード）を投げた。
　すると、音響手榴弾（スタングレネード）が強烈な音響と、強力な閃光を発すると、隊員の動きが泊まったかの様に見えた。すると、巌は『ＦＮファイブセブン』を連射し、玲は『ベレッタＰｘ４』を連射した。

しかし、隊員の動きは止まったものの、まるで生物の様に動く隊員の毛髪に弾丸が止められた。
「ちっ、音響手榴弾を使っても動きを止められないのか！！」
と、巌が言うと、隊員が喋る。
「・・・・・何を遣ったかと思ったら、スタングレネードか。他愛ないな。」
隊員はそう喋ると、巌達に向かって爪を伸ばし、攻撃してきた。巌達は側方に飛び込み前転を行い、それを回避した。すると、のび太が後方を振り向き、全員に呼び掛けた。
「皆、取り敢えず、向こうの建物の陰に隠れましょう。」
のび太のその言葉を聴いたジャイアンとスネ夫と聖奈と真理奈と巌と玲は一旦その場を離れ、そして、のび太を含む全員は、建物の陰に隠れた。すると、のび太が巌に喋る。
「今ので解った事があります。」
のび太がそう言うと、巌が尋ねる。
「解った事？それは何だ？」
巌はのび太にそう訊いた。

「恐らく、スタングレネードはあの隊員に効かなかった訳では無いと思います。」
のび太がそう言うと、真理奈が口を挟む。
「え？でも、髪の毛が動いていたけど？」
真理奈のその言葉を聴いたのび太は、その言葉に応える。
「だけど、接近していたのに、爪による攻撃は行わなかった。・・・奴の目と耳は働いていなくて、毛髪だけが動いていたと思うんだ。」
のび太がそう言うと玲が言う。
「つまり、奴の毛髪は、奴自身の意志で動かす事も出来るけれど、毛髪自体でも、何らかの方法で、周囲の物体を感知し、動くって事ね。」
玲がそう言うと、のび太は頷き、言う。
「だから、何とかして毛髪の動きを止めてスタングレネードを仕掛ければなんとかなると思うんですが・・・。」
のび太はそう言ったが、語尾が自信なさ気だった。
「でも、あの毛髪をどうやって止めるの？」
聖奈が唐突にそう言った。すると、のび太が応える。
「どうもねぇ、それが解らないんだよね。」
のび太が申し訳なさそうに言った。すると、巌が言う。
「だが、音響手榴弾（スタングレネード）が奴に効かない訳じゃないと解っただけでかなりの進展だ。後はあの毛髪を封じればいいだけだからな。」
巌が腰に『ＦＮファイブセブン』を落としながらそう言った。すると、数秒経って、スネ夫が思い出した様に言う。
「あっ！！もしかしてあれがいいかな？」
スネ夫が唐突にそう言うと、巌がスネ夫に尋ねる。
「どうした？何かいい案でも浮かんだのか！」
巌がスネ夫にそう訊くと、スネ夫は応える。
「うん。さっき、あの隊員がのび太を投げ飛ばした時、あいつは全ての髪の毛でのび太を掴んでいた。だったらもしかすると、何かを掴んでいる最中は髪の毛を操作出来ないんじゃないかと思って・・・

。」

スネ夫がそう言うと、巌は言う。

「じゃあ、誰かが奴に掴まれれば奴は毛髪を動かせない訳だな。・・・・・・・・問題は、それが誰かって事だな。」

巌がそう言った。しかし、全員は黙った。暫くすると、巌が口を開いた。

「・・・・・・・まあ、いざという時は、俺が囮になる。まずは、銃弾による攻撃を仕掛け、その後に、作戦を行う。」

巌がそう言うと、巌は異形の隊員に向かって行った。そして、他の全員も巌に続いて行った。異形の隊員は、のび太達の隠れていたすぐ傍まで来ていた。

「どうした?隠れん坊は終わったのか?」

隊員がそう言うと、ジャイアンが言い返す。

「てめぇごときに隠れる訳ねぇだろ!」

ジャイアンがそう叫ぶと、ジャイアンは太腿のホルスターから『デザートイーグル』を取り出し、発砲した。

しかし、毛髪により、銃弾は止められた。その直後、のび太が『レミントンＭ８７０』を発砲した。銃口から１２ゲージショットシェルが射出され、ショットシェルの内部に装填されている球体状の弾丸が多数発射され、拡散した。弾丸は全て命中したが、又もや全弾止められた。

「休まずに撃ち続けろ!弾数で制圧しろ!!」

と、巌が叫ぶと、聖奈は、『Ｈ＆amp;Ｋ　ＭＰ７』を構え、スネ夫は『ＦＡ－ＭＡＳ』を構え、巌は『ベレッタＭ７０』を構え、玲は、二挺の『Ｈ＆amp;Ｋ　ＭＰ５Ｋ』を構えて撃ち続けた。

無数の弾丸が異形の隊員に撃ち込まれたが、殆どの弾丸が、隊員の毛髪に止められた。数発の弾丸が隊員に届いたものの、発達した骨格により、弾丸は止められた。

「ちっ、駄目か!」

巌がそう呟くと、巌はすぐに動けるように準備した。すると、真理奈が巌に近づいて巌に話し掛けた。
「巌さん。スタングレネードを投げて！」
真理奈のその言葉を聴いた巌は真理奈に尋ねる。
「何でだ？何か策でもあるのか？」
巌が真理奈にそう訊くと、真理奈は応える。
「いいから！早くしないと！！」
真理奈がそう言うと、巌は腑に落ちない様子で、音響手榴弾（スタングレネード）を異形の隊員の眼前向けて投げた。すると、音響手榴弾（スタングレネード）が、強力な閃光と強烈な爆音を放った。巌はその際に目を瞑り、耳を塞いだ。
音響手榴弾（スタングレネード）の音響と閃光が止んだ頃、巌は目を開け、塞いでいた耳に当てていた手を放した。すると、目前には意外な光景があった。
「真理奈！」
巌はそう叫んだ。真理奈は隊員の毛髪に捕縛されながらも、隊員に掴み掛かっていた。
「今の内に撃って！早く！！」
真理奈はそう叫んだ。しかし、巌は、真理奈へ流れ弾が当たる事を危惧しているのか、発砲するのを躊躇（ためら）っていた。すると、巌のすぐ

傍から何かの音が幾つか聞こえてきた。そして、そのすぐ後に、『９ｍｍパラベラム弾』が8発程、隊員の頭部に、寸分狂わず当たった。巌は、先程聞こえた音が銃声だと理解すると、先程、銃声が聞こえてきた方向を向いた。

すると、そこには、『ベレッタＭ９２ＦＳ』を構え、その銃口を真っ直ぐ、隊員の頭部に向けているのび太がいた。のび太の構えている『ベレッタＭ９２ＦＳ』の銃口からは、硝煙が立ち上っていた。すると、玲とジャイアンが隊員に向かって行った。そして、玲が隊

員の毛髪をナイフで切り裂き、ジャイアンは力ずくで、真理奈を隊員から引き離した。そして、玲と真理奈とジャイアンの3人が隊員から離れると、巌は弾倉内に装填されている全ての弾薬を撃ち放った。

多少、対象から逸れた弾丸が数発あったものの、殆どの弾丸は隊員の頭部や胸部、腹部に命中した。弾倉内に装填されていた12発全ての弾薬を撃ち切った為、巌は、構えていた『FNファイブセブン』を左手に持ち、まだ熱くなっている銃口を隊員の方に向け、右手を、右腿のホルスターに収納している、『S&W M945』に向かわせ、『S&W M945』のグリップを掴み、いつでも射撃出来るようにした。

「ウォォォ

『スタームルガーレッドホーク』に装填されている、５発の『．４４マグナム弾』を全て撃ち込んだものの、隊員の動きは止まらなかった。

遂にのび太の目の前まで、異形の隊員が迫ってきた。そして、異形の隊員がのび太に爪を伸ばしてきた時の事だった。

のび太のすぐ後ろで、強烈な銃声が聞こえたかと思うと、異形の隊

員の上半身が消し飛んでいた。のび太に伸ばしていた、隊員の爪は、のび太に届く事なく、地面に落ちた。のび太が後ろを振り向くと、『S&ｗ　Ｍ５００』を構えている巌がいた。巌は暫く、倒れた異形の隊員に銃口を向けて、警戒していたが、数秒すると、銃をしまい、

「どうやら終わったようだな。」

と、言った。すると、巌は、真理奈の方を向き、真理奈に駆け寄って、尋ねた。

「・・・・何であんな無茶したんだ！？」

巌は少し、強い口調でそう言った。しかし、真理奈は徐に喋る。

「スタングレネードで、視覚と聴覚を奪えば、毛髪が自動で動くでしょ？だとすれば、接近してきた物体を所構わずに掴む筈。だから、私が接近すれば、あの毛髪は私を掴むと思ったの。」

真理奈がそう言うと、巌が喋る。

「・・・・・成功したからよかったが、失敗してたら死んでたかもしれねぇんだぞ。今度からは、んな危ねえ真似すんなよ。」

巌が真理奈にそう忠告すると、巌は全員に言う。

「よし、じゃあ迅達と合流して、『ナムオアダフモ機関』に急ぐぞ。」

巌がそう言うと、全員は巌達の車の方に向かった。その道中、ビルの屋上から戻って来る燐と迅と合流した。

「どうやらそちらも終わった様ですね。」

迅が巌達にそう言った。すると、巌が言う。

「ああ、少し予想外の事態も起きたが、何とか無事に終わった。」

巌がそう言うと、玲が言う。

「全員が集まった事だし、早いとこ『ナムオアダフモ機関』へ急ぎましょう。」

玲がそう言うと、巌が言う。

「ちょっと待て。一旦全員の装備を確認、調整した方がいい。」

巌のその言葉に全員は納得した様で、全員は、各自の装備の点検を

した。そして、各自で、持っていく銃火器の追加、仲間内での銃火器の譲渡や交換を行った。

暫くすると、全員、装備の確認と整備を済ませた。そして、全員はさっきと同じ様に、車に乗り込んだ。巌達が乗っている車では、巌達が会話をしていた。

「なぁ迅。お前の所では予想外の事態か何か起きたか？」

巌がそう言うと、迅は応える。

「ええ、恐らく、『ナムオアダフモ機関』の生物兵器と思われるものが送られてきました。そちらは何があったのですか？」

迅のその言葉を聴いた巌は応える。

「ああ、こっちは、『スティンガーウィルス』を投与して、怪物化した隊員に急襲された。今までの生物兵器とは一線を脱した強さだったな。弾丸は止められるわ、仮に命中したとしても、発達した骨に当たって、致命傷にならないわで大変だったんだぜ。まあそれでも、何とかマグナムをぶち当てて、何とかなったがな。」

巌のその言葉を聴いていた迅は巌の言葉に応える。

「しかし、その様なウィルスが『ナムオアダフモ機関』で実用化されてるとなると、少々厄介ですね。生物兵器として、軍事用に実用化されたら、世界のバランスが崩れる事も心配されます。」

迅がそう言うと、巌が言う。

「そうだな。早いとこ『ナムオアダフモ機関』の調査を進めて、対

処方法を考えなければならないだろうな。」
巌がそう言うと、車の後部座席に座っているのび太とスネ夫とジャイアンも会話をしていた。
「しかし、とんでもない奴だったな。」
と、ジャイアンが言うと、のび太が喋る。
「・・・・『スティンガーウィルス』か。『T－ウィルス』は人間をゾンビ化させるだけだったけれど、『スティンガーウィルス』は人間を怪物化させる。とんでもないウィルスだな。」
のび太がそう言うと、スネ夫が言う。
「でもさ、『ナムオアダフモ機関』の中で、『スティンガーウィルス』を使われたらどう対処しよう?」
スネ夫のその言葉を聴いたのび太は応える。
「・・・・・・そうなったら多分さっきみたいに、スタングレネードを使って毛髪の気を引いてから射撃する事になるだろうね。」
のび太がそう言うと、ジャイアンが言う。
「そんな面倒な事しなくても、俺様が一発ぶん殴ってぶっ倒してやるよ。」
ジャイアンがそう言うと、スネ夫が言う。
「流石ジャイアン!頼もしいなぁ!」
スネ夫がジャイアンをそう称賛した。
その後も、一行は、賑やかに会話していった。

登場人物紹介

〔味方勢力〕

・野比のび太

本作の主人公の１０歳の少年で、卓越した射撃能力を持っており、今まで撃った弾丸は一度も外したことが無い。持っている銃火器は自動拳銃（ハンドガン）、散弾銃（ショットガン）、擲弾発射器（グレネードランチャー）、短機関銃（サブマシンガン）、突撃銃（アサルトライフル）、回転式大型拳銃（マグナムリボルバー）、と、あらゆる銃火器を使い、状況によって使い分けている。本人曰く、どんな銃でも使えるが、拳銃タイプの銃が一番使いやすいらしく、自動拳銃を基本の装備として使い、大体は、『ベレッタＭ９２ＦＳ』の二挺拳銃で戦闘する。今まで、あらゆるＢ．Ｃ．Ｗ．やアフィマーサーを１人で倒してきており、その戦闘能力は計り知れない。ナムオアダフモ機関の内部からは、『精密連射狙撃ののび太』と呼ばれ、恐れられている。

・骨川スネ夫

のび太と同い年の少年であり、のび太の友人。有名な大手企業、『骨川グループ』の社長の一人息子で、その事を自慢する事もしばしばある。従兄（いとこ）のスネ吉からプログラミングやハッキングの仕方を教わっており、その事に対する知識は、大学生並みで、仲間の大きな力になる事も多々ある。

使用銃火器は、ＵＺＩやＨ&ａｍｐ;Ｋ　ＭＰ５、ＡＫ－４７やＦＡ－ＭＡＳ等、全自動（フルオートマチック）の銃をよく使い、フランキ・スパス１２やモスバーグＭ５００の散弾銃も使う。戦闘面では、少々引け腰だが、それ程戦闘力が低い訳でもない。

・ジャイアン

のび太の親友でススキヶ原のガキ大将。歌が趣味で、作詞作曲も自分で全て行う本格的なものだったが、歌声が音響兵器並に凄まじいので皆からは忌み嫌われている。（歌声が。）料理も趣味の一つだが、こっちはこっちで凄まじく、とても食えた物ではない。しかし、

いざという時には頼りになる存在で、『フローズヴィニルト』級の生物兵器を一人で倒す程の戦闘能力を持つ。
独自で編み出した格闘術、『ジャイアン流喧嘩殺法術』を持っており、それ等を使い、迫り来る生物兵器を次々と始末していく。現在確認されている技は、『掌底拳』、『粉砕連撃拳』、『爆撃突』、『投擲拳』の四つである。
本人は、あまり使用しないが、『デザートイーグル』を持っており、少し距離が離れた敵に対しても攻撃が加えられる。

・緑川聖奈

のび太の通っている学校の6年生で生徒会長。テニス部の部長もやっており、試合を控えている状態で、ススキヶ原の事件に遭遇した。それなりに頭も良く、そのお陰で、学校の保健室で皆と合流することが出来た。
銃火器は『グロック17』や『H&K　G36C』等、コンパクトな銃火器を使う。射撃能力は高くないが、その代わり、薬剤や薬品関係に詳しく、ハーブの調合や、化学薬品の調合等を行うことが出来る。

・相葉真理奈

のび太と同じクラスで、のび太の前の席に座っている女子。ススキヶ原のバイオハザード発生時には、運良く、学校の近くにいた為、学校に逃げ込んで、生き延びることが出来た。体育館の体育倉庫に隠れていた所を、のび太に発見されて、仲間と合流した。それからは、のび太と共に行動し、のび太に助けられながらも、戦闘技術をのび太に教わっていった。
ショットガンを基本装備にしているが、戦闘能力はいまいちで、一人では戦えない。しかし、特に自棄（やけ）になる事も、諦める事も無いので、メンバーとして、悪い訳ではない。

・牧野燐

元ナムオアダフモ機関の社員だったが、入社して3ヶ月程で、ナムオアダフモ機関の実態に気づく。それから数ヵ月後、ススキヶ原研

究所に異動になり、その際に、ナムオアダフモ機関の武器庫から、幾つかの銃火器を無断拝借した。ススキヶ原での、Ｂ．Ｃ．Ｗ．の動作実験が始まってからは、ある程度、自室に隠れていて、頃合いを見て、研究所のゾンビやＢ．Ｃ．Ｗ．を排除していった。そして、その途中で、のび太達と遭遇し、行動を共にした。
常に『ＲＰＧ－７』を携行しており、隙あらば、『ＲＰＧ－７』をぶっ放し、Ｂ．Ｃ．Ｗ．を一掃する。それが出来ない状況下では、『Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　Ｍｋ．２３』や『ベネリＭ４』を使用する。

・玄洞巌

日本政府直属の極秘軍事機関、『Ｆ．Ｉ．Ａ．Ｓ．Ｓ．Ｕ．Ｆ．Ｅ．』に所属しており、今回の任務遂行中にのび太達と遭遇した。４０代のベテランの傭兵であり、２０年以上も軍人をやっている。頼り甲斐のある傭兵で、戦闘能力が高いのは勿論の事、人付き合いもいいので、人望もある。射撃能力はあまり高くないが、それを補う程の体術を持っている。巌の体術は、空手と柔道を合わせた様なもので、あらゆる局面に対応できる。ドライビングテクニックが非常に高く、高速で動く虎の生物兵器の攻撃を避けた事がある。

・齋藤玲

巌のチームメイトで、巌の部下に当たる。初任務の時から、『超硬質ワイヤーカッター』や『アンカーワイヤー』を用いて、任務を遂行していた。その段階で、敵に囲まれる事も少なく無く、その際は、多数のブービートラップを仕掛け、窮地を脱している。
病院内を探索している途中に、ジャイアン達と出会い、行動を共にした。
基本戦術は、ナイフや超硬質ワイヤーカッターを用いた白兵戦であり、それだけでも、かなりの戦闘力を持っている他、銃の扱いも巧（うま）く、ナイフや超硬質ワイヤーカッターの動作に織り交ぜて射撃する為、結果的にかなりの戦闘能力を有している。

・貴崎迅

最近、『Ｆ．Ｉ．Ａ．Ｓ．Ｓ．Ｕ．Ｆ．Ｅ．』に入隊してきた隊員。

銃火器の類は全く使わず、腰に掛けている日本刀、『堅裂』を用いて戦う。今回の任務では、あまり戦闘はしていないが、虎の生物兵器を一刀両断した事から、かなりの戦闘能力を持っていると推測できる。

〔敵勢力〕

・ドラえもん

ナムオアダフモ機関の司令官クラスに位置する人物。前回のススキヶ原研究所では、現場の監督官になった。のび太、ジャイアン、スネ夫の友人である。何故ナムオアダフモ機関にの所属しているかはまだ明かされていない。

・スネ吉

ナムオアダフモ機関の総長クラスに位置する人物。ドラえもんとどちらがナムオアダフモ機関の一番の権力者であるかは解らない。電子工学（エレクトロニクス：E）と生体工学（バイオニクス：B）の第一人者で、数々の兵器を生み出した。本人が一番得意とするものは、情報技術（インフォメーションテクノロジー：IT）であり、かなりのプログラミング知識を持っている。そのプログラミング知識やハッキングの知識を従兄弟のスネ夫に教授している。ウィルスを使用した生物兵器の開発は、他の誰かが行っている様だ。E．O．（Ｅｌｅｃｔｒｏｎ　Ｏｐｔｉｃｓ）を用いた兵器の開発も得意であり、今回製作している新型兵器にその機構を搭載する予定。

・春瀬浩司隊員

第一特殊部隊の隊員で、第一特殊部隊の中で、唯一、虎の生物兵器に殺されなかった隊員。本部から第二特殊部隊に支援された『モデュレイテッドB．C．W．』の輸送を行った。その後は第二特殊部隊の隊員と合わせて、緊急の部隊を形成し、その部隊の指揮を執ったものの、全ての戦闘ヘリコプターがのび太達に撃墜された事で決心して、自らに『Ｓ（スティンガー）ウィルス』を投与し、のび太達を殺害しよう

と試みた。しかし、一瞬の隙を突かれて、のび太達に倒された。

使用銃火器（前書き）

各員が使う銃火器等のリストです。

使用銃火器

・のび太

ベレッタＭ９２ＦＳ
レミントンＭ８７０
コルトＭ７９
コルトＭ４カービン
ベレッタＭ１２
コルトパイソン
スタームルガーレッドホーク
ジャイロジェット
破片手榴弾（フラグメンテーショングレネード）
焼夷手榴弾（ファイヤーグレネード）
音響手榴弾（スタングレネード）

・スネ夫

スプリングフィールドＸＤ
ＵＺＩ
Ｈ＆amp;Ｋ　ＭＰ５
ＧＭ　Ｍ３”グリースガン”
ＦＮ　Ｐ９０
フランキ・スパス１２
モスバーグＭ５００
ＡＫ－４７
ＦＡ－ＭＡＳ

・ジャイアン

《ジャイアン流喧嘩殺法術》
〔掌底拳〕

〔粉砕連撃拳〕
〔爆撃突〕
〔投擲拳〕
デザートイーグル

・聖奈
グロック17
H&K　MP5K
ベレッタ　Cx4
イジェマッシサイガ12K
MPS　AA－12
H&K　UMP
H&K　G36C
ステアーTMP

・真理奈
ベネリM3
トルベロ　ネオステッド2000
H&K　MP7

・燐
H&K　Mk.23”ソーコムピストル”
ベネリM4
US　EX－41
S&W　M500
PGM　ヘカート?
RPG－7
音響手榴弾（スタングレネード）
破片散弾榴弾（ボール爆弾）

・玄洞　巌
ブローニングＨＰ
ＦＮファイブセブン
ハードボーラー
Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ９４５
フランキ・スパス１５
ベレッタＭ７０
アームスコーＭＧＬ
Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ５００
ＲＰＧ－２９”ヴァンピール”
破片手榴弾（フラグメンテーショングレネード）
焼夷手榴弾（ファイヤーグレネード）
音響手榴弾（スタングレネード）

・齋藤　玲
超硬質ワイヤーカッター
アンカーワイヤー
コンバットナイフ
ベレッタＰｘ４
ベレッタ９０－ＴＷＯ
ステアーＧＢ
Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ＆ａｍｐ；Ｐ
ベネリＭ３
Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＭＰ５Ｋ
コルトＭ７９
Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ２９
破片手榴弾（フラグメンテーショングレネード）
焼夷手榴弾（ファイヤーグレネード）
音響手榴弾（スタングレネード）

・貴崎　迅
『堅裂』（日本刀）
《虚影二刀流》
※詳細不明

ＡＲＥＡ１『潜入』

巌達を乗せた車は、ナムオアダフモ機関の門の前で停車した。すると、９人全員は車から降車した。そして、巌が全員に話す。

「・・・・・いよいよこっからは敵の本拠地だ。何があるか解らないから、常に警戒は怠るなよ。基本的に３人ずつの３チームに分かれて行動する。１チーム目は、俺とのび太と真理奈のチーム、２チーム目は、スネ夫とジャイアンと迅のチーム、３チーム目は、聖奈と燐と玲のチームで編成する。まずは、全員で潜入し、その後、状況に応じて、３チームに分かれる。」

と、巌が言うと、全員はそれに肯定した。すると、巌は一拍置いて、迅や玲を除く、のび太達全員に喋った。

「なあお前等、軍人に最低限必要なものって解るか？」

巌がそう言うと、のび太は言う。

「軍人に必要不可欠なもの？それって一体・・・・・？」

のび太がそう言うと、巌は言う。

「それは、戦いに臨む理由と少しの自信さ。例えどんな下っ端の傭兵でも、何かしら戦う理由を持っている。家族の為だとか、国の為だとか、信念の為だとか、皆何かを守る為に戦うんだ。お前等も、何かを守る為に、『ナムオアダフモ機関』と戦おうとしてるんだろ？それさえ忘れなければ、負ける事はそうそう無いさ。後は自信があれば大丈夫だ。」

巌がそう励ますと、巌は続いて言う。

「・・・・じゃあ早速、『ナムオアダフモ機関』に潜入するぞ。」

巌がそう言うと、全員はナムオアダフモ機関の門まで走って行った。そして、全員は『ナムオアダフモ機関』の門の前まで来ると、門の陰に身を隠し、『ナムオアダフモ機関』の正面玄関の辺りを窺った。門と正面玄関の間には駐車場があり、数台の乗用車が停車していたが、その全ての乗用車は、炎上していた。その乗用車のすぐ傍には、

横たわっている死体があり、その周囲には、『キメラ』や『ブレインディモス』がいた。
「あれは、Ｂ．Ｃ．Ｗ．？何でナムオアダフモ機関の前に居るんだ？」
スネ夫がそう呟くと、巌が言う。
「門に生物兵器を投入して、侵入者を防ごうとしているのかもしれないな。」
巌はそう言った。そして、巌は続けて言う。
「見た感じだと、奴等に気づかれないで侵入するのは無理そうだ。銃撃の用意をしろ。一気に突入するぞ。」
巌のその言葉を聴いた全員はそれぞれ、戦闘の用意をした。
そして、一拍置いて、突入した。突入直後、巌は、生物兵器が固まっている所へ、『ＭＫ３Ａ２手榴弾』を投げた。数秒して、手榴弾が炸裂し、その付近にいた生物兵器は消し飛んだ。
その他の生物兵器は手榴弾の爆音に気づき、巌達に向かってきた。
「ＫＩＳＨＡＡＡ

「ああ、間違い無い。全て絶命した。」
巌がそう言うと、巌は続けて喋る。
「早速だが、突入するぞ。準備はいいな?」
巌が全員にそう尋ねると、全員は首を縦に振った。

そして、全員はナムオアダフモ機関に突入した。ナムオアダフモ機関の内部の天井の電灯は煌々と付いていていたが、閑散としており、人影は全く見えなかった。
「・・・・・人が全く居ないですね。電灯が付いているところを見ると、ついさっきまで誰かが居たような雰囲気ですけど。」
のび太がそう呟くと、巌が言う。
「確かにな。敵さんは、俺達がこっちへ向かって来る事を知っているから、何か策を講じてるかもしれん。慎重に行こうぜ。くれぐれも油断するなよ。」
巌がそう言うと、全員は上階に上がる為にエレベーターを探した。すると、巌が、エレベーターが、奥の方にあるのを発見し、全員を呼んで、エレベーターの前まで進み、エレベーターの呼び出しボタンを押した。しかし、呼び出しボタンを押しても反応が無かった。
「・・・全く反応が無いな。恐らく、此処のエレベーターの電圧が落ちてるんだろう。」
巌がそう言うと、ジャイアンが言う。
「ナムオアダフモ機関の奴等がやったのか?」
ジャイアンがそう尋ねると、巌は応える。
「多分な。だが、恐らく何処かにエレベーターの電圧を復旧する為の装置、或いは、上の階に上がる方法がある筈だ。手分けして、この1階を調べるぞ。」
巌がそう言うと、全員はさっき分けたメンバーで、3ルートに分かれ、探索を始めた。のび太、巌、真理奈のチームは、手前の右方向

を探索し、聖奈、燐、玲のチームは、手前の左方向を探索し、スネ夫、ジャイアン、迅のチームは奥の方を探索した。
玄関から見て、手前の右方向を探索しているのび太達は、受付を探索していた。
「・・・どうやらここは受付の様ですね。」
のび太がそう言うと、巌が言う。
「そうだな。さっさとやって探索を終わらせようぜ。」
巌がそう言うと、のび太達は早速、探索を始めた。

スネ夫、ジャイアン、迅のチームは奥の方を探索した。
玄関から見て、手前の右方向を探索しているのび太達は、受付を探索していた。
「・・・どうやらここは受付の様ですね。」
のび太がそう言うと、巌が言う。
「そうだな。さっさとやって探索を終わらせようぜ。」
巌がそう言うと、のび太達は早速、探索を始めた。

その頃、玲達のチームも、並行して、探索を進めていた。
「さあ、早く探索を始めるわよ。」
玲がそう言うと、燐は呟く。
「・・・・・此処は社員食堂だな。1階にB．C．W．が投入されてるとすると、此処に潜伏している可能性が高いな。」
燐がそう言うと、聖奈が言う。
「じゃあ、慎重に探索を進めましょう。」
聖奈がそう言うと、3人は、社員食堂の中に入り、周囲を警戒した。
しかし、B．C．W．は見当たらなかった。すると、玲は構えてい

た銃を仕舞い、他の2人に話し掛けた。
「それじゃあ、探索を始めるわよ。それぞれ3方向に分かれて食堂内を探索。何か変わったことがあったら、他の2人に知らせる事。」
玲がそう言うと、聖奈と燐の二人は肯定した。そして、三人は三方向に分かれて探索した。

その頃、奥の方に分担されている迅のチームも、同様に探索を始めていた。3人が探索しようとしている場所は、電圧が落ちているエレベーターの右にある、奥へ続く通路だった。
「あんまりもたもたしてる暇は無いからな。さっさと済ませてさっさと終わろうぜ。」
ジャイアンがそう言うと、迅が言う。
「しかし、くれぐれも慎重に。焦ってしまっては、相手に足元を掬われるかもしれません。」
迅がそう言いながら、慎重に通路の奥に進む。通路は丁度、コの字の形をしており、外周に沿って、6つの扉が等間隔に並んでいた。
「ドアが6つあるな。手分けして探索するか？」
ジャイアンがそう言うと、迅が言う。
「いえ、少々時間はかかりますが、此処は3人で探索しましょう。此処は敵の本拠地なのですから、何処で何が起こるか解らないですからね。」
迅がそう言うと、3人は手前の扉に近づき、注意深く扉を開けた。扉の中は、かなり広い部屋であり、隣の扉もこの部屋に繋がっていた。部屋の中は、大量のパソコンがあった。
「・・・ここは、何かの仕事場かな？」
と、スネ夫が呟いた。すると、迅がその言葉に応える様に言う。
「・・・・恐らく、一般の社員の仕事場になっていたのでしょう。しかし、調べてみる価値はありそうですよ。」
迅がそう言うと、ジャイアンが言う。

「じゃあ、3方向に分かれて探索しようぜ。」
ジャイアンがそう言うと、3人は分かれて探索を始めた。ジャイアンとスネ夫は前方と後方に分かれ、迅は中央を調べた。

数十分後、3人は、それぞれの探索を終えたが、特に発見は無かった。
「・・・此処には、何もありませんでしたが、他の部屋には何かあるかもしれません。次の部屋を探索に行きましょう。」
迅がそう言うと、迅は次の部屋の扉に向かって行った。ジャイアンとスネ夫は迅に着いて行った。

その頃、のび太達の所では、引き続き、受付を探索していた。
「おい、のび太。そっちは何か進展あったか？」
退屈になってきた巌がのび太にそう言った。すると、のび太は巌の言葉に応える。
「いや、こっちは何もありません。」
のび太がそう言うと、巌が言う。
「そっちも進展なしか。楽に進められるとは思ってはいなかったが、初っ端からこう躓くとはな。」
巌がそう言うと、のび太が言う。
「しかし、此処の何処かに上階に行く為のルートがある筈です。・・・僕がいるなら尚更ね。」
のび太がそう言うと、巌が尋ねる。
「それ・・・どういう意味だ？」
巌がそう言うと、のび太は応える。
「このナムオアダフモ機関の中には、きっと、ドラえもんがいるから・・・。ドラえもんは、僕が来たと知ったら多分会いたがるだろうしね。」
のび太がそう言うと、真理奈がのび太に尋ねる。
「ねぇ、のび太君と、そのドラえもんってのは、過去に何かあったの？」
真理奈がそう言うと、巌も言う。
「そいつは俺も聴きたいな。何か深い訳があるんだろ？詳しく聞かせろよ。」
巌がそう言うと、のび太はドラえもんに出逢ってから今までの出来事を偽りなく話した。宇宙一のガンマンとの一対一の決闘で勝利したことや、雲の上の世界に言った事、ゲーム会社を隠れ蓑にして、

生物兵器の開発を行っていた売人との戦闘、大量の寄生生物との戦闘。真理奈は暇そうに聞いていたが、巌は、信じ難い内容であるにも係わらず、最後まで聴いていた。そして、のび太の語りが終わると、巌は言う。

「・・・・・成る程な。だから、お前はナムオアダフモ機関にそこまで固執しているんだな。」

巌がそう言うと、のび太は相槌を打った。

その後は、3人共引き続き探索を行った。

数分後、玲達のチームでは、とある進展があった。

「玲さん!ちょっと来て下さい!!」

聖奈が玲にそう言うと、玲は聖奈の下(もと)に向かって行った。燐もそれに続いて行く。玲と燐の2人が聖奈の下(もと)に到着すると、玲は聖奈に尋ねる。

「一体何があったの?」

玲のその言葉を聴いた聖奈は、すぐ傍の床を指差して言う。

「・・・・この床の扉が怪しいんです。」

聖奈はそう言いながら、床の扉を開けた。すると、そこには、地下へと続く梯子があった。

「・・・・・確かに、この深さだと、何かありそうね。下に降りて調べてみましょう。」

地下へと続く穴を見た玲はそう言うと、梯子を降りはじめた。燐と聖奈の二人も、玲に続いて降りて行った。

ＡＲＥＡ２『地下水路』

梯子は３０ｍ程あり、地下の床から８０ｃｍ程上の部分で切れていた。地下の床には、３０ｃｍ程の高さまで水が浸っており、その水の水面に付くか付かないかの位置に、網状の足場が敷かれていた。玲と燐と聖奈は無事に地下に降りると、周りの様子を確認した。この地下はどうやら、地下水路の様な所だった。梯子から真っ直ぐ行くと、約２５ｍ向こうに、丁字路があり、左右に道が分かれていた。その他には、行けるような通路は無かった。

「・・・ナムオアダフモ機関の食堂の地下にこんな水路があったとはな。全然気づかなかったな。」

と、燐は呟く。すると、玲が二人に話し掛ける。

「二人共気をつけて。此処から先は何が居るか解らない。慎重に行きましょう。」

玲はそう言いながら、『ベレッタＰｘ４』の弾数を確認し、前方にハンドガンを構えた。

すると燐は、『Ｈ＆ａｍｐ;Ｋ　Ｍｋ．２３』を構え、聖奈は『Ｈ＆ａｍｐ;Ｋ　Ｇ３６Ｃ』を構えた。そして三人は銃を構えながら前方に進んで行った。２５ｍ程進むと、丁字路の曲がり角に差し掛かった。玲は左側を警戒し、聖奈と燐は右側を警戒した。

三人は同時に曲がり角の向こうに素早く銃を向けたが、何もいなかった。すると、玲が燐と聖奈に話し掛ける。

「それじゃあ、私はこれから左側の通路を探索するわ。貴方達は右側の通路を探索して。暫くしたら、梯子の所に集合するわ。」

玲がそう言うと、聖奈と燐の二人は肯定のサインを出した。すると、玲は左側の通路の奥へと行った。同様に、聖奈と燐の二人も、右側の通路を探索し始めた。

その数分前、一階の受付では、のび太達が探索を終えた所だった。
「・・・・・・・・・結局何も見つかりませんでしたね。」
のび太がそう言うと、巌が応える。
「まぁ、そう簡単に進展はしないだろうな。
集合場所に行こうぜ。」
と、巌が言うと、3人は、集合場所に向かっていった。

その頃、迅達の方では、・・・・・一つ目の部屋を探索し終え、次の部屋の探索を始める所だった。最初に扉に手を掛けたのは、ジャイアンで、ジャイアンは扉を開けようとした。しかし、扉は開かず、ジャイアンは呟いた。
「このドア開かないな。鍵が掛かってるみたいだな。」
ジャイアンがそう言うと、三人は、反対側にある扉に向かって、開けようとした。しかし、その扉にも、鍵が掛かっていた。
すると、三人は曲がり角を曲がり、次の扉を開けた。その扉は無事に開いた。内部には大量の資料があり、奥の方には、一つのパソコンがあった。
「此処はどうやら資料室の様だね。」
スネ夫がそう呟くと、迅が言う。
「恐らく、此処には、表向きの資料が収められているんでしょう。

扉のプレートにも、『資料室』と書かれていましたし。」
迅がそう言うと、ジャイアンも言う。
「よし！じゃあ早速調べてみようぜ！！」
と、ジャイアンが言うと、迅がそれを止めた。
「少し待って下さい。此処の資料の量は多そうなので、時間が掛かりそうです。当面の目的は、エレベーターの電圧を復旧させる事ですので、次の部屋を調べてから、此処の資料を調べましょう。」
迅がそう言うと、ジャイアンとスネ夫の二人も了承した。
そして、三人は、最後に残った扉を開けた。扉を開けた先は、３坪にも満たない狭い部屋で、扉と反対側の壁際に、何かの端末らしき物があった。三人はその端末機に近づいた。その端末機は、約１６インチの画面（ディスプレイ）と、簡単なキーボードがあり、すぐ横には、カードリーダーがあった。
そして、スネ夫がそれを操作し始めた。
数秒後、スネ夫が迅とジャイアンの二人に話し掛ける。
「・・・・・どうやらこれは、一階のエレベーターの電圧を制御する端末みたいだね。・・・・・・・・・・他のエレベーターの制御も出来るみたいだけど、特殊なライセンスが必要みたいだ。」
スネ夫がそう言うと、ジャイアンは言う。
「じゃあ、あのエレベーターは動きそうだな。スネ夫、さっさとエレベーターを動くようにしてくれよ。」
ジャイアンのその言葉を聴いたスネ夫は頷き、一階のエレベーターに電圧を供給する為の操作を行った。

数秒後、スネ夫は操作を終え、ディスプレイには、
『第一エレベーターへの電圧供給を終了しました。』
の文字が出た。すると、迅が言う。
「エレベーターの問題も解決したことですし、一旦他のメンバーと合流しましょう。」
迅がそう言うと、迅とジャイアンとスネ夫の三人は、『第一制御室』を後にした。そして、三人は、集合場所へと向かった。

集合場所には、既に、のび太と真理奈と巌が居た。迅が集合場所に到着すると、巌は迅に話し掛ける。
「こっちは何も進展なしだ。そっちは何かあったか？」
巌のその言葉を聴いた迅は応える。
「ええ、エレベーターの制御装置はこちらにありました。スネ夫君の御蔭で、電圧の供給に成功しました。何時でも行けそうですよ。」
迅がそう言うと、巌が言う。
「なら、後は、玲達を待つだけだな。」
巌がそう言うと、その場に居る六人は玲達を待った。

しかし、十数分が経っても、玲達は戻って来なかった。
「・・・・・・・・・・・遅いな。」
ジャイアンがそう呟くと、巌は、『ブローニングＨＰ』の残弾確認をしながら言う。
「もしかしたら、あいつ等に何か異常自体が起きたかもしれない。これから、俺とのび太が様子を見に行く。」
巌がそう言うと、巌は、玲達の担当の場所である、社員食堂に向かった。のび太も巌について行く。すると、真理奈がのび太に言う。
「のび太君気をつけてね。」
真理奈のその言葉を聴いたのび太は、
「解ってるよ。」
と、応えた。
そして、巌とのび太の二人は、社員食堂に入って行った。入ってすぐ、巌はのび太に言う。
「あいつ等が探索していたのは、此処の筈だ。二手に分かれて、手懸かりを見つけるぞ。」
巌はそう言うと、のび太は頷き、早速、社員食堂を調べ始めた。巌は入って左側の場所を、のび太は、入って右側の場所を調べた。

一方、その数分前、聖奈と燐は、地下水路を探索していた。
「聖奈、油断するなよ。此処は、一般社員には、全く知られて無かった場所だから、何があるか判らん。」
燐がそう言うと、聖奈は頷き、周囲の警戒をした。
地下水路は、気味が悪い程静かで、先程の燐の声や、二人の足音以外の音は全く聞こえなかった。
燐達が行った、右側の通路は、１０m程進んだ所で左に折れ曲がっていた。一階の食堂からの梯子から見て、丁度、クランク型の通路になっていた。燐は曲がり角の先を警戒し、聖奈は後方を警戒した。
燐は、慎重に曲がり角の先を確認した。曲がり角の先は、一直線になっていたが、等間隔に配置されている電灯の明かりを頼りにしても、向こう側が見えなく、闇の中に消えていた。
二人は引き続き、周囲を警戒しながら、通路を進んで行った。

約４０m程進んだ所で、左側に扉が見えたが、その扉には取っ手が見当たらず、代わりに、六角形の穴があり、扉のすぐ左側には、掌（てのひら）サイズの押しボタンの様な物があった。燐がその押しボタンの様な物を押したが、何も反応しなかった。
「此処は、電子ロック式の鍵が掛かっているみたいだな。」
燐はそう呟くと、その扉は諦めて、通路の先に進んだ。

凡そ１２０m程進んだ所で通路は突き当たり、正面と右側には、先

程と同じ様な扉が見え、更に左側に通路が延びていた。二人はまず、正面に見えている扉をよく見た。扉のデザインは先程の扉と同じだったが、六角形の穴は無く、扉のすぐ左側に、先程と同じ様なボタンがあった。燐は、さっきと同じ様に、ボタンを押した。すると、今度は難無く扉が開いた。扉の向こうは、何かの部屋の様だった。燐は、暫く、部屋の中を警戒していたが、何も潜んでいない事を確認すると、聖奈を部屋に呼び入れた。

部屋の中は、手前の左側に、一つのベッドがあり、燐達の正面には、デスクがあった。その左側には、本棚と、小型の冷蔵庫の様な物があった。特に目立つ物はそれ等だけで、無駄な物は何一つ無く、部屋が綺麗に片付いていた。

「此処は、どんな部屋なんだ？」

燐がそう呟くと、聖奈はその言葉に応える様に言う。

「さっき、この部屋の扉の上の方に、『管理人仮眠室』と書かれていたので、此処の研究員か、管理人の仮眠室だと思います。それに、この部屋をよく見てみると、ススキヶ原研究所の、『南原晃』さんの部屋によく似ていますし。」

聖奈がそう言うと、燐が言う。

「確かに言われてみれば似てるかもしれないな。・・・・・・・・・・・取り敢えず、この部屋を一通り調べてみるか。」

燐がそう言うと、聖奈はデスクの辺りを、燐は本棚と小型の冷蔵庫の様な物の辺りを調べた。

その数分前、玲は左側の通路を進んでいる最中だった。

数十メートル進んだ所で、右側と正面に扉が見え、左側には、更に通路が続いていた。
玲はまず、右側の扉が開くかどうかを確認した。その扉は、その扉の右側にあるボタンを押す事で開くタイプの電子タイプの扉だった。
玲は、壁に身を付け、扉の向こうからの奇襲を受けないようにした。
そして、ボタンを押した。すると、扉はいとも簡単に開いた。
数秒間、玲は様子を見た。そして、何も来ない事を確認すると、銃を構えながら、部屋の中へと入った。部屋の中には、特に誰も居なかった。部屋の中に、危険が無い事を確認した玲は、もう一度、部屋の中を見渡した。その部屋の中は、電動ドリルや、半田ゴテ、基板、導線等があった。そして、部屋の右側の奥に更に、扉が見えた。
「どうやら此処は電子工作室のようね。」
玲はそう呟くと、その部屋に、使えそうな工具が無いかを調べ始めた。

数分間部屋の中を調べていたが、電源が必要な工具ばかりで、使えそうな工具は無かった。玲は次に、奥の扉を調べた。すると、その扉は、施錠されていた。すると、玲は、懐から『ピッキングツール』を取り出し、取っ手の所にあるピンタンブラー錠の解除を試みた。

数分後、錠が解除されるのを確認した玲は、扉を開けて中へと入って行った。銃を構えながら警戒して入ったが、中には、工具があるばかりで、特に動くものは無かった。
すると玲は、部屋の中にある工具を確認した。
その部屋にある工具は、『モンキーレンチ』や『ドライバー』、『L型六角レンチ』、『ナット回し』等だった。その部屋の奥にも、更に扉があった。その扉にも施錠がしてあり、右側にカードリーダーがある事から、カードキーで開けるタイプの扉だと解った。
「カードキーの電子ロックじゃどうしようもないわね。」
玲はそう呟くと、工具室と、電子工作室を後にした。
玲は電子工作室を出ると、すぐ傍にある扉を確認した。扉の上部のプレートには、『武器弾薬庫』と書かれていた。その扉も、扉のすぐ左側にあるボタンで開くタイプの扉だった。玲は、慎重に扉を開けた。扉には、電子ロックは掛かっていなかった。玲は、銃を構えながら、部屋の中を警戒した。
しかし、そこにも危険が潜んでいない事を確認すると、玲はその部屋の中を調べ始めた。その部屋の中は、扉の上部のプレートに書かれてあった通り、『武器庫』の様で、幾つものロッカーの中には、大量の銃火器と弾薬があった。玲は、その部屋を隈なく調べた。
しかし、その部屋には、銃火器と弾薬が納められているロッカーしかなく、他には何も無かった。
「この部屋にはこの企業に関する資料は無さそうね。・・・・・・・・でも、此処の銃と弾薬は、後々使う事になりそうだわ。」
玲はそう呟くと、その部屋を後にした。
玲は、奥の通路に進む事にした。先程通ってきた通路から見て、左側に通路が折れ曲がっていたので、その方向に向かって行った。

玲が『武器弾薬庫』の扉を開けた頃、聖奈と燐は仮眠室の探索を終えようとしている所だった。

「燐さん、何か見つかりましたか?私は、何処かの鍵を見つけましたけれど。」

聖奈は、タグの付いた鍵を右手に持ちながらそう言った。すると、燐が言う。

「聖奈、ちょっとこっち来てみろ。」

燐のその言葉を聴いた聖奈は燐のところへ向かった。燐は、小型の冷蔵庫の様な物の前で屈んで、何かを調べていた。聖奈も同じ様に、燐の隣で屈むと、燐が手に持った試験管を聖奈に渡した。

「・・・・・・・・・・そのラベルを読んでみろ。」

燐がそう言うと、聖奈はラベルを読んだ。すると聖奈は、驚いた顔をして言う。

「これ、・・Ｔ－ウィルス!!」

試験管のラベルを見た聖奈は思わずそう叫んだ。その試験管には、緑色の液体のような物が入っており、ラベルには、『Ｔ－Ｖｉｒｕｓ　Ｓａｍｐｌｅ　２０ｍｇ』と書かれていた。

聖奈のその反応を見た燐は言う。

「どうやら此処は当たりのようだな。奴等のウィルスがこんな所に保管されてるって事は、研究資料もここら辺にありそうだ。他には何も無さそうだから、他を当たってみようぜ。」

燐がそう言うと、聖奈は、『ｔ－ウィルスサンプル』の試験管を二本程、バッグに入れた。

すると二人は、『管理人仮眠室』から出て、すぐ傍の扉を調べた。その扉の上部には、『地下実験区画』と書かれているプレートが掛かっていた。その扉は、先程と同じく、扉の横のボタンで開くタイプの扉だった。燐は、徐にそのボタンを押した。

しかし、その扉は開かなかった。

「此処も電子ロックが掛かっているようですね。」

と、聖奈が言った。

「仕方ない。先に進むか。」

燐がそう言うと、聖奈と燐の二人は、まだ行っていない通路の奥へと向かって行った。１０ｍ程進んだ所で、左側に、同じ様な扉が見えた。すると、燐は、今までと同じ様に、横のボタンを押した。しかし、その部屋は、電子ロックが掛かっているようだった。

「ここも電子ロックか。」

と、燐が呟いた。扉の上部には、『地下水路制御室』と書かれていた。ここに入る事を諦めた二人は、通路の先へと進んで行った。８０ｍ程進むと、通路は右に折れていた。二人はその通路を右に曲がった。二人はそのまま、その通路を直進した。１５ｍ程進むと、厳かな扉があった。

「・・・・・・これは、大型エレベーターのようだな。」

と、燐が呟いた。燐が言った通り、その扉は大型エレベーターの扉だった。燐はエレベーターの呼び出しボタンを押した。すると、エラー音が出た。燐はそのエラー音が出た方向を向いた。その大型エレベーターの扉のすぐ横には、よく見ると、ディスプレイ付きのカードリーダーがあり、ディスプレイには、『作動のための権限がありません。Ｌｖ．２以上のライセンスが必要です。』と、表示されていた。この扉が開かない事を確認した二人は、元来た道を引き返す事にした。

その数分前、地上の社員食堂では、のび太と巌が何かを発見したところだった。
「巌さん！ちょっと来て下さい！！」
のび太がそう言うと、巌はのび太の下に向かった。そして、のび太に尋ねる。
「何かあったか！？」
巌がそう言うと、のび太は、足元を指差して言う。
「此処に、地下に続く梯子があります。多分此処を降りて行ったんだと思います。」
のび太がそう言うと、巌は言う。
「よし、俺が先に行く。のび太は、後から付いて来い。」
巌のその言葉を聴いたのび太は、
「ええ、解りました。」
と応えた。
そして、二人は、ゆっくりと地下に降りて行った。

やがて３０ｍ程降りた所で、網状の足場に辿り着いた。すると、のび太が呟く。
「此処は・・・・・・・地下水路か？」
のび太がそう言うと、巌も言う。
「ああ、そうだな。しかし、数々の生物兵器を製造している『ナム

オアダフモ機関』の地下水路だ。何かしらの脅威が潜んでいる可能性がある。充分に気を付けて進もうぜ。」
巌がそう言うと、のび太と巌の二人は銃を構えながら、慎重且つ迅速に先に進んだ。２５m程進んだ所で、道が左右に分かれていた。
「道が分かれているな。どうする?二手に分かれるか、それともどちらか一方を二人で探索するか?」
巌がのび太にそう訊いた。すると、のび太は間髪入れずに応える。
「ここは、二手に分かれて行きましょう。何が潜んでいるか判らない状況ですが、現在は、他のメンバーとの合流が最優先に思えます。」
のび太がそう応えると、巌ものび太の言葉に応える。
「ああ、その通りだな。確かに不安が無い訳じゃないが、まぁお前なら大丈夫だろ。お互いに気を付けて行こうぜ。」
巌がそう言うと、のび太は右の通路に、巌は左の通路に行こうとした。しかし、巌がのび太を呼び止めた。
「そうだのび太。通信機を使うのは控えろよ。」
巌がそう言うと、のび太は巌に言う。
「?・・・何でですか?」
すると、巌は言う。
「こんな、敵の本拠地の真っ只中で通信機なんか使ったら、すぐに傍受される。聴かれてもいい内容だといいが、重要な話をする場合は、通信機じゃなく、直接話をした方がいいな。更に、通信機を使うだけで、自分の場所が特定される恐れがある。通信機は極力使わないようにするのが好ましいな。」
巌がそう言うと、のび太は、
「解りました。」
と、言った。そして二人は、それぞれの通路の先へと進んで行った。
のび太は右側に進んだ後、すぐに左側に通路が折れていた。のび太は警戒しながら、左に曲がった。しかし、特に何も無く、延々と通路が続いているだけだった。のび太は、構えていた一挺の『ベレッ

タＭ９２ＦＳ』を右のホルスターに仕舞い込み、通路の先に進んだ。約４０ｍ程進んだ所で、左側にドアがあり、のび太は、そのドアをよく見た。そのドアは、電子式のドアで、すぐ横のボタンを押すと開く仕組みの扉だった。のび太は、壁に背を付け、慎重に扉を開こうとした。しかし、ボタンを押しても、扉は開かなかった。

「・・・・・・電子ロックが掛かっているのか。なら、通路の先に進もう。此処には聖奈さん達はいなさそうだ。」

のび太はそう呟くと、その扉から離れ、通路の先へと進んだ。約１２０ｍ程進んだ所で、のび太は突き当たりにぶつかった。そこには、正面と右側に、先程と同じ様な電子式の扉があり、左側には、更に通路が延びていた。正面の扉の上部には、『管理人仮眠室』と書かれており、右側の扉の上部には、『地下実験区画』と書かれていた。のび太はまず、正面の扉が開くかどうかを試した。扉の向こうからの奇襲を防ぐ為に、壁に身を付けて、慎重に扉を開くボタンを押した。すると、扉は難なく開いた。のび太は一拍置いた後、銃を構えて、部屋の中へと入った。部屋の中は、ベッドとデスクと本棚、そして、小型の冷蔵庫の様な物がある小部屋だった。しかし、部屋の中には誰もいなかった。

「此処には誰も居ないか。」

のび太はそう呟くと、その部屋から出て、『地下実験区画』と書かれている扉を開こうとした。しかし、扉はまたもや開かなかった。のび太は踵を返すと、まだ行っていない通路へと進んで行った。

その頃、巌の方でも、探索は進められていた。

「・・・・・・・・此処もいないか。」

巌はそう呟くと、電子工作室を出た。巌は、電子工作室と工具室を調べていたが、誰もいなかった。すると、巌は、すぐ傍にある扉に入った。扉の中は大量のロッカーだらけであり、ロッカーの中には大量の銃火器と弾薬があった。部屋の中は、ロッカーだけしかなく、人の気配は無かった。巌はその部屋を出ると、まだ行っていない通路へと進んで行った。

その数分前、玲は引き続き地下水路を探索していた。『武器弾薬庫』を出た玲は、まだ探索していない通路へと進んで行った。地下水路には、ほぼ等間隔で、ランプ型の電灯が付いているが、それでも、地下水路は充分に暗く、１０m先は見えない程暗かった。玲は、慎重に前後を警戒しながら進んで行った。

やがて、２００m程進んだ所で、通路は左に折れていた。玲は、一度、壁に身を付け、一拍置いてから銃を構えながら曲がり角の先を確認した。曲がり角の先は、何も居ず、等間隔に並んでいる電灯があるだけだった。玲は、『ベレッタＰｘ４』を腰に落とすと、警戒しつつ、その儘（ママ）、通路を進んで行った。４３０m程進むと、網状の足場が途切れ、コンクリートの床になった。其処（そこ）から１０m程進むと、下へ降りる梯子が現れた。玲は、警戒しつつ、梯子を降りて行った。梯子は１０m程の長さであり、先程の梯子よりは短かった。

玲は、梯子を降りきると、周囲の様子を確認した。足元は、先程と違い、コンクリートであり、正面に延びる一本道しかなく、８m程先には、バルブハンドルの付いた正円状の気密ハッチがあった。玲は、その気密ハッチに近づくと、バルブハンドルを回した。幾らか回すと、気密ハッチが開いた。玲は、銃を構えて、一拍置いた後、一気に突入した。周囲を見た感じは、特に何もいない様だった。しかし、周囲には、壁から天井まで、あらゆるサイズのパイプが並んでおり、幾つかのパイプからは、蒸気が噴出していた。玲は、周囲を警戒しながら、先へと進んで行った。

ＡＲＥＡ３『地下動力炉』

その頃、のび太は、慎重に地下水路を進んでいる所だった。
「・・・・・此処も電子ロックが掛かっているか。」
そう呟いたのび太は、更に、通路の先に進んだ。
８０ｍ程進んだ所で、通路は、右に折れていた。のび太は、一度壁に身を付け、一拍置いて、銃を構えながら、一気に通路の先を見た。
通路の先には、すぐ傍に聖奈と燐がいた。
「の、のび太さん！？」
いきなり現れたのび太に驚いた聖奈は思わずそう叫んだ。のび太も、慌てて、銃を右腿のホルスターに仕舞った。のび太が『ベレッタＭ９２ＦＳ』を仕舞いきる前に燐がのび太に尋ねる。
「何でのび太が此処にいるんだ？のび太は、別の場所の担当だっただろ？」
燐がそうのび太に訊いた。すると、右腿のホルスターに銃を仕舞い終えたのび太がその言葉に応える。
「いや、あまりにも遅いから、捜しに来たんだよ。」
のび太がそう応えると、聖奈が言う。
「え、じゃあ、捜しに来てくれたんですか？」
聖奈がそう言うと、のび太は言う。
「まぁ、そりゃあね。」
と、のび太が言うと、燐が言う。
「そりゃあご苦労なこったな。・・・・・

「そうです。その場所で分かれて、探索したんです。」
聖奈がそう言うと、のび太が言う。
「じゃあ、玲さんが行った通路の先に向かおう。その方向は、巌さんが向かったけれど、どんな事態が起きるか判らないからな。念の為、行ってみよう。」
のび太がそう言うと、聖奈と燐の二人はのび太の言葉に了承した。
そして、三人は、元来た通路を引き返していった。

その頃、巌は、通路を警戒しつつ、迅速に進んでいる所だった。やがて、網状の足場が途切れ、コンクリートの床を踏みしめた瞬間、巌は呟いた。
「・・・・・・・・こっからは、コンクリートの床か。」
巌はそう呟くと、引き続き、通路を進んだ。１０m程進んだ所で、更に下へと続く梯子があった。
「玲はこの先に進んだのか。」
巌はそう呟くと、慎重に梯子を降りて行った。

その数分前、玲は奇妙な気配を感じつつも、何の姿も確認できないので、先程より、一層周囲を警戒して探索をしていた。玲が進んでいる通路は、基本的に一本道であり、探索する通路が分かれている訳ではなかったが、かなり入り組んでいて、曲がり角が多かった。
玲は、曲がり角からの奇襲に充分に警戒し、探索を進めた。右寄りのクランク型の通路の先には、すぐ左に曲がる通路があり、その通路は、７０m程続いていた。玲は、後方にも注意しながら、進んで

行った。

やがて、７０ｍ程進むと、通路が右に折れていた。
玲は、銃を構えながら、慎重に右に曲がった。しかし、その先にも何もいなかった。玲は、警戒体制を解かずに、『ベレッタＰｘ４』を構えながら、先へと進んで行った。
少し進んだ所で通路は右に曲がっており、更に、少し行った先には、通路が左に折れていて、丁度、先程と同じ様なクランク型の通路だった。クランク状に曲がった通路の先は、１０ｍ程直進する通路があり、その先には、厳かな観音開きの鋼鉄の扉があった。
玲は、素早く扉に近づき、後方を警戒した。
玲は、何も居ない事を確認すると、その扉を調べた。その扉は、遠隔制御電子ロック式の扉であったが、電子ロックは掛かっていなかった。その扉の上部のプレートには、『有機生物性動力炉』と、書かれていた。玲は、観音開きの扉を一気に開き、銃を構えながら、突入した。
その扉の向こう側には、驚くべき光景が広がっていた。
その扉の向こう側は、一つの部屋があり、その部屋の広さは、１３ｍ×１６ｍ程あるが、高さがとてつもなく高く、１０ｍ程の高さがあった。更に、玲の正面には、５ｍ×１０ｍの大穴が開いており、その大穴に、巨大な物体があった。その巨大な物体は、大穴に入り込んでいる為、全て見える訳じゃないが、見えるだけでも、１０ｍ程の高さがあった。その巨大な物体は、どうやら、巨大な肉塊の様だった。そして、その巨大な物体には、パソコンの様な端末機があり、その巨大な物体と同化していた。玲は、慎重に、その端末機に近づいた。端末機のキーボードを打てる位置まで近づくと、先程の巨大な物体が一層、威圧感を増していた。玲は、端末機のディスプレイを見た。端末機のディスプレイには、こう書かれていた。
『有機生物性動力炉動作状況

エネルギー生成状況
問題なし
変換モジュール
問題なし
パイプライン
問題なし』
それを確認した玲は、再び巨大な物体を見上げた。その巨大な物体をよく見てみると、細かく脈動しており、その内部からは、動力炉特有の音が聞こえた。
玲はふと、見上げると、上空に、何かが飛行しているのが見えた。玲は、『ベレッタＰｘ４』を構えながら、相手の出方を窺った。上空を飛行していたのは、翅の生えた昆虫型の生物の様だった。やがて、その昆虫型の生物は、玲の近くに着地した。その昆虫型の生物をよく見ると、体長が人間と同じ位あった。その昆虫型の生物は、全てで５体程いた。そして、昆虫型の生物の内の一体が玲に向かって、酸を吐き出した。玲は、素早く横に飛び退き、『ベレッタＰｘ４』を５発程発砲した。
「ＫＩＳＨＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！」
５発の『９ｍｍパラベラム弾』は、昆虫型の生物に見事に命中し、その昆虫型の生物は、六足歩行から、二足歩行に変わり、玲に掴み掛かろうとした。玲は素早くショットガンに切り替え、『ベネリＭ３』を開いた腹部に発砲した。多数のペレット弾が殆ど全て、昆虫型の生物に命中した。
「ＧＩＳＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ

バックパックから『コルトＭ７９』を取り出し、『コルトＭ７９』を構えた。そして、昆虫型の生物が固まっている所に『４０ｍｍ榴弾』を撃ち込んだ。

「「「「ＧＩＳＹＡＡＡ

だろ。」
巌がそう言うと、玲は言う。
「そう、なら早く集合場所に戻りましょう。」
玲がそう言うと、巌と玲の二人は来た道を戻っていった。

ＡＲＥＡ４『戦闘』

その頃、のび太と聖奈と燐は、元来た道を戻っていた。今は丁度、『管理人仮眠室』の曲がり角を右に曲がった所だった。
「・・・・・で、何か進展はあったの？」
のび太が不意に聖奈にそう訊いた。すると、聖奈は応える。
「見つかったのは、この鍵と、ｔ－ウィルスサンプルですね。」
聖奈はそう言いながら、先程見つけた鍵と『ｔ－ウィルスサンプル』を懐から取り出した。
「これは、一体何処で？」
のび太がそう尋ねると、聖奈は応える。
「そこの、『管理人仮眠室』を探索中に見つけました。」
聖奈は、すぐ傍にある、『管理人仮眠室』を指差しながらそう言った。のび太は、聖奈が持っていた鍵を借り、暫くその鍵を眺めていた。その鍵は、何の変哲もない金属製の鍵であり、その鍵には何も書かれていなかった。のび太はその鍵を聖奈に返すと、再び『ベレッタＭ９２ＦＳ』を構えた。三人は、周囲を警戒しながら、前に進んで行った。１００ｍ以上もある長い廊下を半分ぐらい進んだ所で、のび太が異常に気づいた。
「聖奈さん、燐さん。気をつけて下さい。向こうから何かが来ます。」
のび太がそう言うと、燐がのび太に言う。
「生物兵器か！？」
燐がそう言うと、のび太が応える。
「生物兵器かどうかの確信はありませんが、微かに聞こえる足音は人間のものではない気がします。スピードは小走り位だと思います。」
のび太がそう言うと、燐と聖奈の二人もそれぞれ、銃を構えた。燐は『Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　Ｍｋ．２３』を構え、聖奈は『グロック１７』

を構えた。

やがて、闇の中から”そいつ”は姿を現した。

「ＫＳＨＡＡＡ

のび太は、その生物兵器が動かなくなったのを確認すると、一息を付こうとしたが、それもつかの間、

「「「ＫＳＨＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！」」」

いきなり、闇の向こうから、三体分の奇声が聞こえた。そして、それからすぐに、先程の様な生物兵器が三体向かって来るのが見えた。すると、燐が叫んだ。

「一旦退くぞ！『管理人仮眠室』に入るぞ！」

燐がそう言うと、三人は、『管理人仮眠室』に向かった。聖奈と燐は、急いで『管理人仮眠室』に向かい、のび太は、三体の生物兵器に銃撃して、牽制しながら、『管理人仮眠室』に向かって後退していった。

やがて、のび太は『管理人仮眠室』の扉の前まで来ていた。のび太は隙を見計らって、扉の中に入った。そして、のび太が入ってすぐに、扉が閉まった。部屋の中にはすでに燐と聖奈がいた。のび太はすかさず、部屋の中にあったデスクを持ち上げ、扉の所に置いて、バリケードにした。そして、のび太は燐と聖奈に言う。

「奴らが入って来たら、一斉射撃だ。そうすれば、あの生物兵器もひとたまりもないだろう。」

のび太がそう言うと、聖奈は『ステアーＴＭＰ』を構え、燐は、聖奈から、『Ｈ＆amp;Ｋ　ＵＭＰ』を借りて、扉の方に銃口を向けた。のび太は、二挺の『ベレッタＭ９２ＦＳ』の弾倉に弾薬を装填し、扉の方に構えた。すると、あの生物兵器が扉を破壊しようとする音が聞こえてきた。

やがて、扉が大きな音を立てて、崩れた。すると、聖奈と燐とのび太は一斉射撃を行った。

「「「「ＫＳＨＡＡＡ

「・・・この黒い体躯に、鋭い鎌状の両手、この生物兵器は、ススキヶ原研究所の動力室にいた『キメラ』に似てるけど、ちょっと違う感じがするな。動力室にいた奴はこんなに迅くはなかった。」
のび太はそう呟くと、燐は言う。
「・・・もしかしたら、『ナムオアダフモ機関』が改良したモデルかもしれないな。」
燐がそう言うと、聖奈が言う。
「・・・そろそろこの部屋から出ませんか?」
聖奈がそう言うと、燐は
「そうだな。」
と言った。そして燐は、バリケード代わりにしていたデスクを退かした。そのデスクは、多数の弾丸が命中しており、ボロボロだった。
燐がバリケードを退かしている間、のび太は本棚の方を調べていた。
「のび太さん?何やってるんですか?」
聖奈がそう尋ねると、のび太は応える。
「本棚の奥が怪しいから、ちょっと調べてるんだ。」
のび太はそう応えながら、本棚の奥を調べていった。
やがて、黒い”何か”を発見したのび太は、本棚の欠片を退かした。
すると、壁に埋め込まれた黒い金庫が姿を現した。
「よ、よく気づきましたね。」
聖奈が驚いてそう言うと、のび太が言う。
「僕等の学校の図書室の書庫にもこれと同じ様な物があったからね。まぁ、書庫の方は、本棚がレールで横に動く物だったけれどね。」
のび太はそう言うと、その金庫が開くかどうかを確認した。その金庫は、勿論、錠が掛かっていて、開かなかった。その金庫は、ダイヤル式の錠ではなく、ピンタンブラー錠を開錠する為の鍵と同じ様な形状の鍵を差し込んで回す事で開錠するものだった。すると、のび太は聖奈に話し掛ける。

「聖奈さん。さっきの鍵を貸してください。あの鍵で、この金庫が開くかもしれません。」

のび太のその言葉を聴いた聖奈は、懐からさっきの鍵を取り出し、のび太に渡した。のび太は、鍵穴に鍵を差し込み、回した。鍵はすんなりと回り、開錠された音がした。のび太は鍵を抜くと、金庫の扉を開けた。金庫の中には、一つのＣＤケースと何かの資料があった。のび太はまず、ＣＤケースの方を調べた。ＣＤケースは、何の変哲もないケースだった。のび太はＣＤケースを開いて中のＣＤを見た。中に入っていたＣＤはどうやら、記録された『ＣＤ－Ｒ』のようであり、表面には『Ｎ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．性能データ』と書かれていた。のび太は次に、資料の方も見た。その資料は、数枚のＡ４用紙をステープラーで留めた物だった。その資料には、こう書かれていた。

『《制式配属『Ｎ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．』総移行について》

この度、戦力コストの削減の為に、旧式の『Ｎ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．』を全て廃棄処分する事が、会議によって決まった。この事は、会長のスネ吉や、参謀総長のドラえもんにも伝わっており、双方の正式な署名と判もある。以下に、処分する対象の『Ｎ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．』のリストを挙げる。

・ケルベロス
・クロウ
・ブレインディモス
・キメラ
・ハンター
・バイオゲラス
・フローズヴィニルト
・ブラックタイガー
・タイラント
・ヴァイオレントプラント
・シェルプルーフ

これ等十一種の『N．A．C．B．C．W．』を焼却処理するが、『アドバンスドB．C．W．』開発の為、設計資料は残しておく事。

《制式配属『N．A．C．B．C．W．』について》

新たに制式採用された『N．A．C．B．C．W．』についてここに記す。以下のリストは制式配属された『N．A．C．B．C．W．』の名称である。

・ディソルブ
・スプリット
・ウェブフライヤー
・センシティブ
・ティンダー
・デストロイヤー
・ヴァイオレンス
・ヴィルレント
・グレートスパイダー
・クラーケン

これ等の『N．A．C．B．C．W．』の詳細な性能については、データディスクを参照する事。（但し、Ｌｖ２以上のライセンスを所持していない場合、全てを参照する事は出来ない。）

《被委託開発生物兵器について》

我々『ナムオアダフモ機関』は、同じく裏の世界で秘密裏に生物兵器を開発、販売している、『マイクロソフトシステムズ』と繋がりがあり、資金援助を受けている。今回、その『マイクロソフトシステムズ』から、『マイクロソフトシステムズ』が開発中の生物兵器のサンプルと設計資料が送られてきた。即ち、委託開発を任されたという事である。我々『ナムオアダフモ機関』は、『Ｖ（ヴァリアント）ーウィルス』

を投与し、あらゆる実験を繰り返した。そして、改良に改良を重ね、実用段階まで進化した。以下にその『N．A．C．B．C．W．』のリストを挙げる。

・ウェブフライヤー
・ティンダー
・ヴィルレント
・クラーケン

』

のび太は、その資料を読み終えると、呟いた。

「・・・・・ナムオアダフモ機関の他にもこんな企業があったのか。」

すると、横で資料を見ていた聖奈は喋る。

「『『N．A．C．B．C．W．』総移行』って事は、より強く実用性が高い生物兵器が生み出せたって事ね。でも、この、『Ｖ（ヴァリアント）ィルス』って何かしら？」

聖奈がそう言うと、のび太は、聖奈の言葉に応える様に言う。

「『ナムオアダフモ機関』が開発した、『Ｔ－ウィルス』に代わる新しいウィルスかもしれないな。」

のび太がそう言うと、扉の傍にいた燐がのび太達に近づいてきて言う。

「のび太、これを見てみろ。」

燐はそう言いながら、日記帳の様な物をのび太に差し出した。のび太はその日記帳の様な物をよく見た。その日記帳の様な物は、ハードカバーが付いたＢ５サイズのノートであり、表紙には、『地下研究施設管理人の手記』と書かれていた。のび太は徐にそのノートを開いた。そのノートの中にはこう書かれていた。

『２００３年４月３０日

今回、『マイクロソフトシステムズ』から『ナムオアダフモ機関』に、生物兵器が４体程送られてきた。どうやら委託開発用の生物兵器らしい。『マイクロソフトシステムズ』と『ナムオアダフモ機関』

は互いに資金援助や隠蔽工作、特殊部隊の派遣等を行ってきた。基本的には、『マイクロソフトシステムズ』が『ナムオアダフモ機関』に資金援助を行い、『ナムオアダフモ機関』は『マイクロソフトシステムズ』に対し、特殊部隊の派遣や、事故が起きた際の隠蔽工作等をやってきた。その『マイクロソフトシステムズ』が、４体の生物兵器を委託開発用生物兵器として、『ナムオアダフモ機関』に差し出してきた本意は今だ解らない。表向きは資金援助の増加という事だが、噂によると、『マイクロソフトシステムズ』は、恐るべき生物兵器を開発したらしい。それは、伝説上の怪物を真似た生物兵器であり、対戦車ミサイルである、『ＴＯＷ』が直撃しても、傷一つ付かなかったらしい。互いに深くは干渉しないのが契約である為、詳しくは解らないが、『マイクロソフトシステムズ』は、『ナムオアダフモ機関』の『Ｎ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．』を上回る生物兵器を開発している事は間違いないと言えるだろう。

－０３年６月８日

遂にこの『ナムオアダフモ機関』にも、光明が見えてきた。今まで、『アンブレラ』から『奪取』した『ｔ－ウィルス』や『Ｂ．Ｏ．Ｗ．』、『マイクロソフトシステムズ』からの『委託開発生物兵器』をその儘使っていたが、『ｔ－ウィルス』の欠点を解消し、改良した、新たなウィルスが完成した。このウィルスは、生物の能力を最大限に活かす性能を秘めており、『ｔ－ウィルス』よりも遥かに凌駕した性能を持っている。現在は試作段階で、実用化はまだ遠いが、実験を繰り返し、改良を行えば、画期的なウィルスと成り得るだろう。そして、このウィルスは、我が『ナムオアダフモ機関』の目玉商品になるだろう。

－０３年１０月２８日

前回の記述から数ヶ月が経った。実験に実験を重ね、遂に例のウィルスが実用化されることになった。例のウィルスの名は、『Ｖ－ウィルス』になった。此処のすぐ傍にある、『Ｌｖ１研究資料室』の、”Ｖ－ウィルス”関係の資料を読むと、『Ｖ－ウィルス』は『ｔ－ウィルス』とは全く違った物である事が再認識された。また『Ｖ－ウィルス』には、電気信号を受けて、その性能を若干変える特性も持っており、汎用性にも富んでいる。

'０３年１２月１８日

『Ｖ－ウィルス』が実用化され、数々の『Ｎ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．』も造られた事で、『ｔ－ウィルス』を使用して造られた、旧式の生物兵器が制式配属『Ｎ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．』から外された。それに伴って、旧式の生物兵器は廃棄処分扱いになった。しかし、参謀総長のドラ様によると、戦闘データを計測する為のものとすれば、まだまだ利用価値はあるとの事だった。

２００４年４月１０日

今年も、新入社員が入社してくる時期になった。自分には関係ないが、新入社員の相手をする人事部の連中はよくやってると思う。人道から外れた実験をしてる癖に他愛ない面接をやれる神経が俺には理解できない。しかし、此処に入社してきた新入社員も災難だな。特例を除けば、大体は被験体になるか、研究所の職員になるかのどちらかだからな。

'０４年７月１４日

新入社員が入社してから、大体３ヶ月が経っただろうか。いきなり緊急集会で、社員全員が集まった。すると、会長のスネ吉から恐る

べき事が告げられた。どうやら、新入社員の一人に、『ナムオアダフモ機関』の実態がばれた可能性があるとの事だった。その新入社員の処置は参謀総長のドラ様の担当となり、他の社員には、隠蔽工作を怠らないよう注意するように言われた。今まで一度も、研究員と特殊部隊以外の新入社員にはばれた事が無かっただけに、今回の事態はかなり驚いた。その社員の名は、『牧野　燐』というらしい。

'０４年７月１７日

前回の緊急集会から数日が経った。例の新入社員の処置が決まったらしい。上層部の話では、『ススキヶ原研究所』の研究員にするらしい。まぁ被験体にされないだけましだろう。本人には、研修として研究所に送り込むと言っていたらしい。『ナムオアダフモ機関』に入社した新入社員は、少なくとも一年は、表向きの道徳的な事務作業を出来るというのに、たった３ヶ月で人外の研究員にさせられるなんて、こちらも同情してしまうな。

'０４年７月２３日

例の新入社員の『牧野　燐』が『ススキヶ原研究所』に送られてから３～４日程経っただろうか。又もや、緊急集会で、新入社員を除く全社員が集められた。こんな短期間に連続して緊急集会を行うなんて事は初めてだ。一体今度は何事かと思ったら、例の新入社員の事だった。会長のスネ吉の話だと『牧野　燐』が『ナムオアダフモ機関』の武器庫から、重火器を主とした、銃火器を数挺くすねたらしい。『ナムオアダフモ機関』の実態に気づいただけでなく、『ススキヶ原研究所』に送られる直前に銃火器をくすねるなんて、『牧野　燐』は、かなりませた奴らしい。不本意ながら、少し会ってみたい気もしたが、『ススキヶ原研究所』に送られたなら、殆ど生きて帰れないだろうな。

'０４年7月２４日

どうやら、参謀総長のドラ様が『ススキヶ原研究所』で、旧式の生物兵器の戦闘データの算出実験をするらしい。戦闘データの算出実験なら他の所でも出来そうだが、どうやらススキヶ原は、ドラ様にとって、特別な思い入れがあるらしい。しかし、生物兵器を放つという事は、『牧野　燐』が生存出来る確率は絶望的だな。

'０４年7月２８日

『ススキヶ原研究所』からドラ様がこの『ナムオアダフモ機関本社』に戻ってきた。そして、１０分もしない内に、緊急集会で、社員全員が集められた。ドラ様の話だと、ススキヶ原で旧式の生物兵器を放ち、戦闘データの算出実験を行った所、数人の少年少女が生き残り、近々、『ナムオアダフモ機関本社』に向かってくるそうだ。社員全員にその生き残った者達の顔写真と簡易的に算出した戦闘能力を記載したプリントが渡された。もしやと思ったが、やはり、例の『牧野　燐』の顔写真もあった。しかし、もっと驚いたのは、『野比　のび太』という小学四年生の少年だった。その少年は、”戦闘能力算出不能”とあり、

『一人で、『バイオゲラス』や3体の『フローズヴィニルト』、『ブラックタイガー』を撃破している。』

と書かれていたが、俄（にわか）には信じられなかった。更に、自動拳銃（ハンドガン）、散弾銃（ショットガン）、擲弾発射器（グレネードランチャー）、突撃銃（アサルトライフル）、短機関銃（サブマシンガン）、回転式大型拳銃（マグナムリボルバー）等、あらゆる銃火器をプロ級の腕前で使いこなし、弾丸が対象を外れた事がないと書かれてあったのはもっと信じられなかった。熟練のスナイパーでも、対象を外す事はそれなりにあるし、第一、のび太は殆ど自動拳銃（ハンドガン）を使っていたとあり、スナイパーライフルよりも命中率が低い筈であるのに、一発も外した事がないというのは、どうにも、誇

張表現にしか見えない。しかし、他の少年少女も、卓越した能力を持っている事が明らかになった。
生物兵器を素手で始末する、『剛田　武』、会長のスネ吉の従兄弟であり、スネ吉のプログラミング技術を学び、ハッキングに長けた『骨川　スネ夫』、薬剤調合に長けあらゆる薬品を作り出す『緑川　聖奈』等、通常では考えられない能力を持った子供が4～5人もいたのには驚かされた。
気になっていた『牧野　燐』の項を見てみると、『ロケットランチャー等の重火器を駆使し、ススキヶ原研究所内の、『N．A．C．B．C．W．』を殲滅していっていた。』
と記述されており、かなり派手な奴だと思ったが、一般人にしては、かなり逸材な人材であるな。
そして、集会の最後にドラ様から、
「奴らがこの『ナムオアダフモ機関本社』に到着した際に、おめてなしが出来るよう、準備をしておけ。」
との言葉を賜った。まずは、事を全く知らぬ新入社員を戦闘員に改造し、更に、『特殊精鋭部隊』の全員に例のウィルスを投与。そして、『ナムオアダフモ機関本社』の至る所に各種の新型『N．A．C．B．C．W．』の配備。正直、ここまで徹底する必要があるのかと思ったが、取り敢えずは、ドラ様とスネ吉に従う事にした。

-０４年7月３０日
今日、『ナムオアダフモ機関』と裏で繋がり、ある契約を結んでいる、ホテル、病院、ビジネスビルに、『近々、生物兵器を放つ。』という旨を話した。当然何処も反発したが、『協力しなければ、契約を破棄する。』との事を伝えた結果、渋々了承した。どちらにせよ、この3つの施設はもう終わりだろう。

'０４年８月２日
遂に、市街地に、旧式の『Ｎ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．』が投入された。奴らを侵入させないようにする為とはいえ、少々やり過ぎなような気がする。その旨をドラ様に伝えた所、『他の奴らはともかく、のび太は、この程度の障害等、苦にもしない。』と言っていた。前々から思っていた事だが、どうやらドラ様は、ススキヶ原というより、『野比　のび太』という小僧に特別な思い入れがあるらしい。

'０４年８月４日
今日の１０時頃、参謀総長のドラ様に呼ばれた。何かと思ったら、例のウィルスを盗んだ事についてだった。隠蔽工作はそれなりにしたつもりだったが、どうやらばれてしまったらしい。しかし、ドラ様は何の罰則もしなかった。その代わりに、のび太達が侵入してきた際には、戦闘に参加するように言ってきた。勿論最初からそのつもりだったので、反対はしなかった。
まぁ出来れば、『牧野　燐』の奴を見てみたいが。

今日の１４時頃、遂に奴らが動き出したらしい。幸か不幸か奴らが宿泊したのは、『ナムオアダフモ機関』と契約しているホテルだった。奴らもまさか市街地に生物兵器を投入しているとは思わないから、驚いただろう。そして、市街地に第一特殊部隊と第二特殊部隊が投入された。どうやら、奴らを始末する任務を与えられたらしい。

これで奴らがこの『ナムオアダフモ機関本社』に到着する確率はほぼ不可能になったな。

驚くべき情報が入って来た。どうやら、のび太が一人で数々の生物兵器を討ち倒してきてるらしい。更に、他の奴らも互いに協力しながら此処に向かって来てるらしい。しかも、『Ｆ．Ｉ．Ａ．Ｓ．Ｓ．Ｕ．Ｆ．Ｅ．』の連中ものび太達に協力し、『ナムオアダフモ機関本社』に向かって来てるらしい。更に最も驚いたのは、のび太が一人で、あの『デストロイヤー』を撃破したという事だ。報告によれば、『デストロイヤー』は、何かしらの理由により、我々の管制化から断ち切られ、第一特殊部隊の隊員を鏖（みなごろし）にし、のび太達に襲い掛かって行ったらしい。我々ナムオアダフモ機関の精鋭達でも始末するのが困難な『デストロイヤー』を一人で撃破するとは、のび太という奴は相当戦闘能力が高いんだろう。この調子では、奴らが『ナムオアダフモ機関本社』に突入してくるのも、時間の問題だろう。早く対処法を立てなければ。』

その手記を読み終わったのび太は顔を挙げ、喋った。

「どうやら、僕達の事は『ナムオアダフモ機関』の社員達にばれてるみたいですね。」

のび太がそう言うと、燐が言う。

「ああ、そしてあたしは、此処の奴に相当好かれてるみたいだな。」

燐がそう言うと、のび太は、足元に置いていたＣＤケースを持ち上げた。

「恐らく、このデータディスクには、『Ｎ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．』のデータが入っているんだろう。」

のび太がそう呟くと、聖奈が喋る。

「じゃあ、上のパソコンで、内容を見ましょう。」

聖奈がそう言ったが、のび太は反論する。
「いや、多分特殊なＯＳが無いと再生出来ないだろうね。ススキヶ原の学校にあったＵＳＢメモリ内のデータを参照するのにも特殊なＯＳが必要だったから。」
のび太がそう言うと、燐が言う。
「この地下の何処かにパソコンがあれば、その特殊なＯＳが入ってそうだけどな。」
燐がそう言うと、のび太が言う。
「でも、今急いで見なきゃいけない訳じゃ無いし、今は他の皆と合流するのが先決だと思います。」
のび太がそう言うと、他の二人は頷いた。すると、のび太と燐と真理奈は、『管理人仮眠室』から出た。そして、通路を真っ直ぐ進んで行った。そして、地上の社員食堂に続く梯子の所まで来た。すると気のせいか、上の方から銃声の様な音が聞こえた気がした。
「・・・・・何か、上から銃声が聞こえるような気がするんですが。」
のび太がそう言うと、燐が言う。
「上でも何か起きてるかもしれないな。」
燐がそう言うと、上から何かが落下してきた。
落ちてきたのは、真理奈だった。真理奈は、顔を上げると、のび太達に向かって言う。
「大変、敵が来たよ!!」
真理奈がそう言うと、のび太は真理奈に尋ねる。
「敵って、一体上で何があったの!?」
のび太がそう言うと、真理奈は応える。
「私達は、一階のロビーで待機してたんだけど、何処かからいきなり、銃を持ったゾンビが現れて、銃撃してきたの。で、私はここまで逃げて来たの。」
真理奈がそう言うと、上から何かが降りてくる気配がした。のび太達４人は梯子から離れて様子を見た。すると数秒後、上から、ゾン

ビが落下し、着地した。そのゾンビは通常のゾンビに比べて腐敗の度合いが少ない感じがし、腹部には、ガトリングランチャーがあった。そのガトリングランチャーからは、何本ものコードが延びており、そのコードの全ては、ゾンビの肉体に繋がっていた。そのゾンビは、巨大な箱を背負っており、その巨大な箱から弾薬の束がガトリングランチャーに延びていた。そのゾンビはのび太達に銃口を向けると、ガトリングランチャーの銃身を回転させ、連射した。六連銃身が回転し、高速で２０ｍｍの弾丸が発射された。のび太達は急いで物陰に隠れた。

何とか間に合い、被弾する事は無かった。そのゾンビは暫く２０ｍｍ弾丸を撃ち続けていたが、対象に当たらない事を確認すると、射撃を止めた。そして、のび太達に向かって来た。そのスピードはゾンビとは思えない程、素早かった。ゾンビがのび太達に向かって来るのを確認したのび太は、逆にゾンビに向かって行った。

「のび太君！」

驚いた真理奈はそう叫んだ。のび太はそれには応えず、そのままゾンビに向かって行った。のび太がゾンビの目の前まで来ると、ゾンビはのび太に掴み掛かろうとした。するとのび太は、ゾンビの横を通るような形で飛び込み、床に手を付けた直後に脚を上げ、踵でゾンビの頭部を蹴った。その直後、足の甲を使い、そのゾンビの首の後ろに足の甲を引っ掛けた。そして、引っ掛けた脚を使って、跳ね上がった。ゾンビの頭部の真後ろに移動したのび太は、背中のホルスターから『レミントンＭ８７０』を取り出し、ゾンビの後頭部に銃口を向け、至近距離で発砲した。多数のペレット弾がゾンビの後頭部に命中し、ゾンビの首は消し飛んだ。のび太は、『レミントンＭ８７０』に１２ゲージショットシェルを装填した。すると、聖奈と燐と真理奈の３人はのび太の所へと来ていた。その三人を見たのび太は言う。

「なんとか無事に終わったよ。」

のび太がそう言うと、真理奈が言う。
「でも、なんでわざわざあのゾンビに接近して行ったの？」
真理奈がのび太にそう尋ねると、のび太は応える。
「ガトリングランチャーを装備していたから、接近戦には弱いと思って、接近戦を仕掛けたんだ。」
のび太はそう言った。すると、聖奈が呟く。
「でも、ゾンビまでも銃火器を使うとは思いませんでしたね。」
聖奈がそう言うと、燐が言う。
「ゾンビの弱点は遠距離攻撃が出来ない事だったが、こうなると、対処が難しいな。」
燐がそう言うと、のび太が全員に話す様に言う。
「先刻の資料の事もありますし、やはり、『ナムオアダフモ機関』が新型のウィルスで、新しいゾンビを造り出したと思われます。」
のび太がそう言うと、真理奈が訊く。
「先刻の資料って？」
真理奈がそう尋ねると、のび太は、バックパックから、『《制式配属『Ｎ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．』総移行について》』と書かれた資料と、『地下施設管理人の手記』を真理奈に渡した。

暫くすると、真理奈が顔を挙げ、言う。
「この手記に書いてある、『此処のすぐ傍にある、『Ｌｖ１研究資料室』』って所の『Ｌｖ１研究資料室』ってのは、あそこの扉の奥の事かな。」
真理奈が、数メートル離れた扉を指差してそう言った。すると、聖奈が真理奈に言う。

「でも、そこの扉、ロックしてありますよ。」
聖奈がそう言うと、真理奈が反論する。
「じゃあ、どんな錠が掛かってるの？」
真理奈がそう言うと、聖奈が言う。
「どんな錠かは、解らないんですけど・・・。」
聖奈がそう言うと、真理奈が言う。
「なら、もしかしたら、簡単な鍵で開くタイプの物かもしれないね。」
真理奈がそう言うと、燐が言う。
「確かにな、此処の地下自体、表向きは隠してるわけだし、そんなに複雑な錠を付ける必要は無いかもしれないな。」
燐がそう言うと、のび太も言う。
「ええ、それに、この地下の管理人の人も簡単に出入りできたくらいですし、やはり、そんなに複雑な錠が掛かっている訳じゃなさそうです。」
のび太がそう言うと、真理奈はすでに、『Ｌｖ１研究資料室』の扉を調べていた。のび太達は、真理奈の下へ行った。のび太達が近づいてきたのを確認した真理奈はのび太達に話し掛けた。
「この扉、六角形の窪みがあるね。もしかしたら、これが錠かも。」
真理奈がそう言うと、聖奈が言う。
「ええ、でも、そんな形の鍵は持ってないんですが。」
聖奈がそう言うと、真理奈が言う。
「もしかしたら、六角レンチで開くかも。」
真理奈がそう言うと、聖奈が言う。
「流石に、工具じゃ開かないんじゃ・・・・・。」
聖奈はそう言った。その時、燐はふとのび太を見た。するとのび太は、地上に繋がる梯子の方向にある、曲がり角を見ながら、ホルスターに装着してあるハンドガンに手を掛けていた。
「のび太、どうかしたのか？」
燐がのび太にそう尋ねた。すると、のび太は応える。

「向こうから、足音がします。もしかしたら巌さん達かもしれませんが、敵だという可能性もあります。」
のび太がそう言うと、聖奈と燐の二人も警戒態勢をとった。

すると、向こうから現れたのは、巌と玲だった。
「巌さん！」
のび太はそう叫んだ。すると、巌が言う。
「のび太、無事だったか。銃声が聞こえた後、急いで向かったんだが、思いの外、時間が掛かってな、まぁなんにせよ無事でよかった。」
巌がそう言うと、のび太が言う。
「巌さん達はここに来るまでに、ガトリングを持っていて、ガトリングから出ているコードがゾンビの肉体に繋がっているゾンビを見ませんでしたか？」
のび太がそう訊くと、巌は応える。
「ああ、俺達も見た。あれは多分、ゾンビの神経系にコードが繋がっているんだろう。どういう構造をしているか詳しくは解らないが、『ナムオアダフモ機関』が開発した新型の生物兵器だろうな。」
巌がそう言うと、聖奈が言う。
「じゃあ、やっぱり、『ナムオアダフモ機関』が新型のウィルスを開発したという事ですね。」
聖奈はそう言った。すると、真理奈が喋る。
「ねぇ、何処かに工具室みたいな所ないかな？」
真理奈がそう言うと、玲がその言葉に応える。
「ああ、それなら、向こうの方にあったわ。」
玲がそう言うと、真理奈は早速玲の指差した方向へと走って行った。
すると、巌がのび太に言う。
「真理奈が何の為に工具室に行くのか解らねぇが、のび太、お前も行ってやれ。あいつ一人じゃ心配だからな。」

巌がそう言うと、のび太は頷いて、真理奈の下へと急いだ。
数秒走ると、真理奈に追いついた。すると、真理奈がのび太に気づき言う。
「あれ、のび太君も来るの？」
真理奈がそう言うと、のび太は応える。
「真理奈ちゃん一人じゃ、心配だって事で、巌さんが僕を寄越したんだ。」
のび太がそう言うと、真理奈は、嬉しそうな表情をした。
そして、暫く歩くと、『電子工作室』と書かれた扉の傍まで来た。
そして、のび太と真理奈の二人はその扉を開けた。その中は、電動ドリルや半田ゴテ等があった。そして、部屋の奥には、『工具室』と書かれたプレートが付いている扉があった。二人は、その扉を開けた。
すると、床から壁から天井まで、あらゆる工具が並べられていた。
真理奈は、幾つかの工具をバックパックに入れた。
「そんなに持っていくの？」
のび太が真理奈にそう言うと、真理奈はのび太のその言葉に応える。
「まぁ、一応念のためね。ドライバーハンドル、各種ドライバービットとモンキーレンチ、鑿（のみ）、L型六角レンチ、後、ラジオペンチにスクレイパーとワイヤースクレイパー、クランクとか。」
真理奈がそう言ったが、のび太には、何が何だか解らなかった。
「・・・・・工具に随分詳しいんだね。」
のび太がそう言うと、真理奈が言う。
「まぁ、この扱いはお父さんから教わったから。自転車の組み立て方とか自動車のタイヤ交換の仕方とかね。」
真理奈が得意気にそう言った。
「じゃあ、早速さっきの扉に向かおう。」
のび太がそう言うと、のび太は、『工具室』から出て行った。真理奈ものび太に続いた。そして、『電子工作室』から出たのび太が目にしたのは、『電子工作室』のすぐ傍にある、『武器庫』と書かれ

た扉だった。のび太は、真理奈に、
「この武器庫の中も調べてみる？」
と訊いた。すると、真理奈は肯定した。そして、のび太と真理奈は武器庫に入っていった。武器庫の中は、銃火器の入っているロッカーだらけだった。のび太は、休憩がてら、ロッカーの中を漁っていった。一方、真理奈の方も、ロッカーを漁っていった。あまり時間は掛けられないと思ったのび太は、真理奈の下に向かった。すると、真理奈は、一挺のハンドガンと一挺のショットガンを持っていた。のび太の姿を見た真理奈はのび太に言う。
「これ、持って行こうと思うんだけど、いいかな？」
真理奈がそう言うと、のび太が言う。
「自動拳銃の『スタームルガーＰ８９』とブルパップ式ポンプアクションショットガンの『マーベリックＭ８８』か。使い易い銃だからいいと思うよ。」
のび太がそう言うと、真理奈は二つの銃をバックパックに仕舞った。そして、二人は、『武器庫』から出て、『Ｌｖ１研究資料室』に向かった。

ＡＲＥＡ５『資料』

暫くすると、のび太と真理奈の二人は、『Ｌｖ１研究資料室』の前に到着した。

「遅かったな。工具を取ってくるだけだろ。」

巌がのび太と真理奈にそう言った。すると、真理奈が応える。

「いろいろな工具を取ってきたからね。また後で使うかもしれないし。」

真理奈はそう言った。そして、『Ｌｖ１研究資料室』の扉の前まで行き、六角形の穴に『六角レンチ』を差し込み、回した。すると、開錠される音がした。真理奈は、横のボタンを押した。すると、簡単に扉が開いた。真理奈はすぐにその扉の中に入っていった。すると、巌は真理奈に忠告した。

「おい、もうちょっと警戒して入れ。」

巌がそう言うと、真理奈は、

「ゴメン。」

とだけ言った。

（……全然感情がこもってないな。）

巌はそう思ったが、口にはださなかった。

先に『Ｌｖ１研究資料室』に入った真理奈はまずは、辺りをよく見回した。中は余り広くなく、目の前には、高さが２ｍ程の本棚の様な物が５つ程並んでいた。その本棚には、紙媒体の資料が並んでいた。そして、その本棚の奥に、パソコンの様な物があった。真理奈は、まず、そのパソコンの様な物に近づいて行った。そのパソコンの様な物は、特殊な端末機等ではなく、通常のパソコンだった。そのパソコンは、電源が付いていなかった。真理奈は、電源ボタンを探した。そのパソコンは一般的に普及しているパソコンなので、電源ボタンは、すぐに見つかった。真理奈は、そのボタンを押した。すると、画面に『ＭｉｃｒｏＣｏｍｐｕｔｅｒ&ａｍｐ;Ｓｏｆｔ

ｗａｒｅＳｙｓｔｅｍｓ』と表示された。どこかのメーカーの様だが、それがどこのメーカーの物かは、誰にも解らなかった。そして、暫くすると、『Ｎｅｗ　Ｍａｋｅ　Ｏｆ　Ａｒｍｓ　Ｄｅｖｅｌｏｐｍｅｎｔ　Ｆｏｒ　Ｍｉｌｉｔａｒｙ　Ｏｂｊｅｃｔ　Ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎ』のロゴが表示され、パソコンが起動した。真理奈の周りには、既に５人全員が集まっていた。のび太は、バックパックからＣＤケースを取り出した。そして、真理奈に喋る。

「これをこのパソコンに読み込んでみましょう。」

のび太はそう言いながら、『Ｎ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．性能データ』と書かれたＣＤ－Ｒを真理奈に渡した。すると真理奈は、のび太に渡されたＣＤ－Ｒを『Ｅ：ドライブ』に挿入した。すると、パソコンの画面に、

『ドライブのデータを読み込んでいます・・・』

と、表示された。

数秒すると、フルスクリーン表示で、次の様に表示された。

『Ｎ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．性能規格書

下記のリストは、２００３年１２月１８日に決定した、制式配属生物兵器のリストです。詳細情報はＮ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．の名前の欄をクリックし、リンクを参照して下さい。但し、”ＣＯＤＥ：００３”～”ＣＯＤＥ：００６”までは、『Ｌｖ１ライセンスカードキー』の認証を必要とし、”ＣＯＤＥ：００７”～”ＣＯＤＥ：０１０”までは、『Ｌｖ２ライセンスカードキー』の認証を必要とします。また、詳細情報の見方については、マニュアルの欄を参照してください。

マニュアル

CODE：001『ディソルブ』

CODE：002『スプリット』

CODE：003『ウェブフライヤー』

CODE：004『センシティブ』

CODE：005『ティンダー』

CODE：006『デストロイヤー』

CODE：007『ヴァイオレンス』

CODE：008『ヴィルレント』

CODE：009『グレートスパイダー』

CODE：010『クラーケン』

』

「どうやら、プロテクトが掛かってて、閲覧制限が掛かってるみたいだな。」

パソコンの画面を見た巌がそう言った。すると、燐が言う。

「まずは、マニュアルの所を確認してみよう。何か解るかもしれない。」

燐がそう言うと、真理奈は、『マニュアル』の欄をクリックした。すると、画面が次のように切り替わった。

『《N．A．C．B．C．W．性能規格書》の見方を下に載せます。情報に誤りがある、又は、情報の更新が必要な場合は、Ｌｖ１以上の権限を持つ研究員に連絡して下さい。参謀長官と会長の承認が出れば、情報が更新されます。

全長（ＳＩＺＥ）

対象の生物兵器の体長。体長１０ｃｍ未満だと『超小型』、体長１０ｃｍ以上５０ｃｍ未満であれば『小型』、体長５０ｃｍ以上２００ｃｍ未満だと『中型』、体長２００ｃｍ以上５００ｃｍ未満だと『大型』、体長５００ｃｍ以上だと『超大型』の５種類に分けられる。一般に多いのが『中型』で、人間とほぼ同じ大きさである。

破壊力（ＰＯＷＥＲ）

対象の生物兵器の力。この値が大きければ大きいほど、敵に与える損傷が大きくなる。

装甲（ＡＲＭＯＲ）
対象の生物兵器の表面の皮膚の硬さの事。甲殻類ベースの生物兵器だと、この値が大きい。また、後述の『生命力（ＶＩＴＡＬＩＴＹ）』の値とこの値は反比例する傾向にある。
生命力（ＶＩＴＡＬＩＴＹ）
対象の生物兵器の生命力の事。この値が大きければ大きい程、肉体損傷を受けても絶命しにくくなる。
敏捷性（ＡＧＩＬＩＴＹ）
対象の生物兵器の単純な移動速度の事。この値が大きければ大きい程、通常時の移動速度が速い事を示す。
知能（ＩＮＴＥＬＬＩＧＥＮＣＥ）
対象の生物兵器の知能の高さの事。
機動力（ＭＯＢＩＬＩＴＹ）
対象の生物兵器の臨機応変能力の事。状況の変化に応じて、自分で判断し、行動を決める能力を言う。この値が大きい程、より早く、状況の変化に対応できる生物兵器となる。
量産性（ＣＯＳＴ　ＰＥＲＦＯＲＭＡＮＣＥ）
対象の生物兵器を生産するに当たっての生産コストの事。この値が大きければ大きい程、大量生産が可能な生物兵器となる。
弱点部位（ＷＥＡＫ　ＲＥＧＩＯＮ）
対象の生物兵器のもっとも弱い部分の事。基本的に頭部や腹部が多い。
弱点性質（ＷＥＡＫ　ＰＲＯＰＥＲＴＹ）
対象の生物兵器の弱点となる性質のものの事であり、『高熱』『低温』『焼却』『冷凍』『強酸』『閃光』『轟音』の七種類がある。但し、『高熱』と『低温』に至っては、運動機能の低下ぐらいしか効果が無い。
肉体損傷による戦闘力減衰値
対象の生物兵器が肉体損傷を受けた場合に減衰する運動機能の量。パーセンテージで表示し、数値が大きければ大きい程、減衰効率が

高くなる（より多く、戦闘能力が低下する）。また、－（マイナス）が付いている場合は、逆に運動機能が増加する事を示す。
総合評価（ＧＥＮＥＲＡＬ　ＰＥＲＦＯＲＭＡＮＣＥ）
上記の結果を総合的に判断し評価したもの。
備考
対象の生物兵器の詳しい性能等について表記する欄。』

上の画面を見た玲は言う。
「どうやらこれは、生物兵器の情報を示した物のようね。」
玲がそう言うと、聖奈が言う。
「じゃあ、早く、『ディソルブ』と『スプリット』のデータを見ましょう。」
聖奈はそう言った。すると、パソコンを操作していた真理奈は、『ＣＯＤＥ：００１『ディソルブ』』の欄をクリックした。すると、画面が次のように変わった。
『ＣＯＤＥ：００１『ディソルブ』
全長（ＳＩＺＥ）
中型
破壊力（ＰＯＷＥＲ）
Ｃ
装甲（ＡＲＭＯＲ）
Ｃ
生命力（ＶＩＴＡＬＩＴＹ）
Ｂ
敏捷性（ＡＧＩＬＩＴＹ）
Ｂ（空中では”Ｓ”）
知能（ＩＮＴＥＬＬＩＧＥＮＣＥ）
Ｄ
機動力（ＭＯＢＩＬＩＴＹ）
Ｄ

量産性（ＣＯＳＴ　ＰＥＲＦＯＲＭＡＮＣＥ）
Ａ
弱点部位（ＷＥＡＫ　ＲＥＧＩＯＮ）
腹部
弱点性質（ＷＥＡＫ　ＰＲＯＰＥＲＴＹ）
高熱、焼却、冷凍、強酸
肉体損傷による戦闘力減衰値
８０％
総合評価（ＧＥＮＥＲＡＬ　ＰＥＲＦＯＲＭＡＮＣＥ）
Ｃ
備考
一般的なモデュレイテッドＢ．Ｃ．Ｗ．の性能の生物兵器。個体の戦闘力は低いものの、高い量産性により、少ない費用で量産が可能なＢ．Ｃ．Ｗ．。『ブレイディモス』の改良型のＢ．Ｃ．Ｗ．である。空間に完全に固定されたかのようなホバリングや、高速での急激な方向転換など、複雑で敏捷な飛翔を熟す等の高い飛翔能力を持っており、更に、掴み掛かっての酸攻撃等、『ブレインディモス』よりも多彩な行動が可能となった。』

上の記述を見た玲は言う。

「この生物兵器、さっき動力室にいた奴だわ。」

玲のその言葉を聴いた巌は言う。

「さっきの場所に生物兵器がいたのか？・・・で、状況はどうだった？」

巌がそう言うと、玲は巌の言葉に応える。

「動力室の数メートル上空に5体程飛んでいたわ。戦闘能力はそれ程高くなかったわ。あの時は、『ベレッタＰｘ４』と『ベネリＭ３』、後は、４０ｍｍ榴弾一発で対処出来たわ。」

玲がそう言うと、巌が言う。

「じゃあ、これに書いてある通り、一体一体の戦闘能力は低いって事だな。」

巌がそう言うと、玲が真理奈に言う。
「次は、『ＣＯＤＥ：００２『スプリット』』を参照してみて。」
玲のその言葉を聴いた真理奈は、前のページに戻ってから、『ＣＯＤＥ：００２『スプリット』』の欄をクリックした。すると、次のページが出た。
『ＣＯＤＥ：００２『スプリット』
全長（ＳＩＺＥ）
中型
破壊力（ＰＯＷＥＲ）
Ｂ
装甲（ＡＲＭＯＲ）
Ｄ
生命力（ＶＩＴＡＬＩＴＹ）
Ｂ
敏捷性（ＡＧＩＬＩＴＹ）
Ａ
知能（ＩＮＴＥＬＬＩＧＥＮＣＥ）
Ｂ
機動力（ＭＯＢＩＬＩＴＹ）
Ｂ
量産性（ＣＯＳＴ　ＰＥＲＦＯＲＭＡＮＣＥ）
Ｂ
弱点部位（ＷＥＡＫ　ＲＥＧＩＯＮ）
頭部
弱点性質（ＷＥＡＫ　ＰＲＯＰＥＲＴＹ）
高熱、強酸
肉体損傷による戦闘力減衰値
５０％
総合評価（ＧＥＮＥＲＡＬ　ＰＥＲＦＯＲＭＡＮＣＥ）
Ｂ

備考
モデュレイテッドB．C．W．である生物兵器だが、敏捷性、機動力が高く、実用性は高い。更に、視覚による認識方法を使っておらず、空気や地面の振動で獲物のだいたいの位置を捕捉し、獲物の体臭で、獲物の正確な位置を割り出す。また、敵の体勢を崩し、喉元に鎌状の爪を突き刺して抉り、敵を即座に絶命させる特性を持っており、これからの活躍が期待出来るN．A．C．B．C．W．である。』
上の記述を見た聖奈は言う。
「この生物兵器！　さっき戦った生物兵器だわ！」
聖奈がそう言うと、燐が言う。
「確かに、この画像を見ると、さっき襲い掛かってきた生物兵器そっくりだな。」
燐がそう言うと、のび太が言う。
「ええ、それに、これに書いてある通り、奴の動きはかなり速い方でした。」
のび太がそう言うと、巌が言う。
「どうやら、『ナムオアダフモ機関』側は、俺達を楽に通してくれる気はなさそうだな。」
巌がそう言うと、のび太が言う。
「でも、此処まで来てしまったんですから、後は進むしかないと思います。」
のび太がそう言うと、巌が全員に言う。
「よし！　地下水路の探索も一通り終わった事だし、そろそろ上に戻るぞ。」
巌がそう言うと、その場に居る全員は一階に上がって行った。
無事に一階に上がり、ロビーに戻ると、スネ夫とジャイアンと迅がいた。
「おい！　遅えぞお前ら！」

一番最初に叫んだのはジャイアンだった。すると、のび太が言う。
「いや、向こうでも色々あってね。」
のび太はそう言うと、今まであった事をジャイアン達に話した。
数分後、のび太が地下であった事を話し終えた。
「成る程。だったら遅かったのも頷けるな。」
のび太の話を聴いたジャイアンはそう言った。すると、スネ夫も喋る。
「地下でそんな事が起きてたのか・・・。だったら、此処の探索を進めていくと、また、奴らの様な奴に会うかもしれないね・・・・・。」
スネ夫が尻込みした口調でそう言った。どうやら、不安を感じているようだった。しかし、スネ夫は続けて喋る。
「さっきも、いきなりゾンビが襲ってきたし、僕達、無事に生きて帰れるのかな・・・？」

スネ夫がそう泣き言を言うと、のび太がスネ夫を励ます。
「大丈夫さ！今までだって何とかしてきたんだ！今回だってどうにかなるさ！！」
のび太がそう言うと、ジャイアンも言う。
「のび太の言う通りだぜ！泣き言なんか言っても始まらないだろ？」
ジャイアンが大きな声でそう言った。そして、ジャイアンは続けて言う。
「それに、迅さんだってすげえじゃねえか！ゾンビがガトリング砲で撃ってきた弾丸を全て弾いたんだぜ！」
ジャイアンがそう言うと、聖奈が驚きながら喋る。
「え！？本当にそんな事ができるんですか？」
聖奈がそう言うと、迅は聖奈の言葉に応える。
「ええ、私の先代が編み出した剣術がありますからね。」
迅はそう応えた。すると、巌が言う。
「……前から思ってたんだけどよ。その、…剣術っていうのは、そんなに便利なものなのか？　実際飛んでくる弾丸を斬れるとは思えないんだが？」
巌が迅にそう訊くと迅は巌の言葉に応える。
「本当に弾丸を斬っている訳ではありません。弾頭の側面に掠らせるように刀の刀身を当て、弾道を逸らすことで弾丸を避けているのです。ちなみにこの技を『乱葉』といいます。」
迅がそう言うと、再び巌が言う。
「――――――――とても人間技とは思えないな。」
巌がそう言うと、迅が言う。
「確かに、普通の人間が使える様な技ではありません。この技を扱うには、空気の流れを肌で感じ取れるようにならなければなりませんからね。でも、のび太君なら出来そうですね。」
迅がそう言うと、のび太は驚いた。
「え？　何でそこで僕？」
のび太は驚いて迅にそう訊いた。すると、迅はのび太の言葉に応

える。
「いえ、実は、のび太君が虎の生物兵器と戦っていた時に、その様子を見ていたんですよ。それで、のび太君の戦いぶりを見て、『のび太君なら、『乱葉』等の難しい技も使える様になるな。』と思った訳です。」
迅がそう言うと、のび太は、
「――――――――――とてもそうは思えないけどなぁ～。」
と呟いた。
「前置きが長くなったな。此処で喋ってても始まらないから、早い所『ナムオアダフモ機関』の探索を再開するぞ。先刻と同じく、3つのチームに分かれて探索を行う。…と言っても、エレベーターを上がって、分かれ道があるまでは、固まって行動するけどな。取り敢えず、エレベーターに急ぐぞ。」
巌が全員にそう言うと、9人全員は、エレベーターに乗り込んだ。

ＡＲＥＡ６『一般階層』

９人はエレベーターに乗り込むと、エレベーターのボタンの所に注意書きがあるのが目に入った。その注意書きには、こう書かれていた。

『このエレベーターは、１階～１０階までにしか止まりません。それ以上の階に向かいたい場合は、上層階エレベーターをご利用下さい。』

その注意書きを見たのび太は喋る。

「……エレベーターが分かれてるんですね。」

のび太がそう喋ると、燐が言う。

「恐らく１階から１０階までは、一般階層で、ナムオアダフモ機関の実態を知らない一般社員の勤務エリアの筈だ。あたし達は１０階より上は入れないようになっていたからな。」

燐がそう言うと、燐が続いて喋る。

「……一旦５階に止まろうぜ。」

燐がそう言うと、巌がエレベーターの５階のボタンを押した。巌は敢えて理由は訊かなかった。

暫くすると、５階に到着し、エレベーターの扉が開いた。まず先に巌と玲が飛び出し、周囲の状況を確認した。周囲には、生物兵器はいなかったが、壁や天井に傷が多く見られ、生物兵器が此処に居た事を物語っていた。

巌と玲は、暫く周囲を確認していたが、何もいない事を確認すると、他のメンバーにエレベーターから出てくるように合図を出した。すると全員はエレベーターから出た。燐は少し周りを見回した後、右方向に向かって走り出した。それを見たのび太は燐を追い掛けた。

「！　おい待て！　単独行動は……。」

と、巌が燐とのび太に言ったが、二人には巌の言葉が聞こえていないようだった。すると、ジャイアンと真理奈と聖奈ものび太を追い掛けて行った。エレベーター付近に残ったのは、巌と玲と迅とスネ夫だった。

「仕方ねえ。俺達は此処であいつらが戻って来るのを待とう。暫くすれば戻って来るだろ。」

巌がそう言うと、４人はエレベーターの前に待機した。

その頃、燐はある部屋の前で立ち止まっていた。その燐にのび太が追いついた。

「いきなり走ったりして一体どうしたんですか燐さん。」

のび太がそう言ったが燐は何も言わなかった。のび太は燐が何を思っているか理解し、それ以上は何も言わなかった。

やがて燐は徐に扉を開けた。

扉の中は凄惨な様子で、周囲には血が飛び、床には元が生物とは思えない程、原型を留めていない肉が潰れていた。それが曾(かつ)て人間だったとは誰も思わないだろう。

燐は部屋の奥に向かって走った。しかし、のび太は燐を追わない方がいいと思い、依然その場にいた。いつの間にかジャイアンと聖奈と真理奈もこの部屋に入って来た。慣れてない人がこの部屋の惨状を見れば、一瞬で昏倒する事だろう。だが、ジャイアンと聖奈と真理奈は、少なからず経験しているので、昏倒する事はなかった。

「……こいつはひでえ。」

ジャイアンはそう言った。

「此処で一体何が起きたっていうの……。」

聖奈はそう呟いた。

「……。」

真理奈は眼前の光景に圧倒され、言葉が出なかった。

ジャイアンはふと、のび太の方を見た。ジャイアンや聖奈や真理奈は皆、驚愕の表情をしているのに対し、のび太は悲しい様な寂しい様な表情をしていた。

やがて真理奈も、のび太の方を向き、のび太の表情が何やら悲し気

である事に気づき、のび太に話し掛けようとしたが、それをジャイアンが制止した。
「放っておけよ。あいつは今、葛藤してるんだ。」
ジャイアンがそう言うと、真理奈はのび太に話し掛けるのを止めた。真理奈が話し掛けないのを見ると、ジャイアンは真理奈から目を離した。
それから少しすると、のび太が徐に、部屋の奥に向かって行った。のび太に続いて、ジャイアンと聖奈と真理奈も部屋の奥に向かった。部屋の奥へ行くと、そこも酷い惨状であり、見るに耐えなかった。暫く奥に進むと、燐が誰かと話しているのが見えた。
「燐さん？　その人は？」
のび太が燐にそう訊いた。すると、燐は応える。
「……あたしの同僚さ。話によると、仕事をしている最中にいきなり変な生物が襲い掛かってきたらしい。」
燐がそう言うと、のび太が言う。
「……そうですか。」
のび太は悲しげな表情をして、そう言った。燐はのび太のその表情を見ていたが、のび太の悲しげな表情の内側にある心情は、のび太自身とジャイアンしか解らないだろう。
暫くすると、今まで燐の陰で見えなかった燐の同僚がのび太達の前に姿を現した。その人物は、黒髪の長髪の女性で、スーツを着ていた。
「……私、渡井織恵（わたいおりえ）っていいます。」
その女性は、そう言って自己紹介をした。すると、のび太が言う。
「初めまして、僕は、野比のび太といいます。」

のび太がそう言うと、ジャイアンと聖奈と真理奈の3人も同じ様に自己紹介をする。自己紹介を終わると、のび太が織恵に訊く。
「それで、今までいた怪物は何処に？」
のび太がそう尋ねると、織恵は応える。
「いや、私は隠れてたから、解らないの。ただ、誰かの声はしたけれど。」
織恵がそう言うと、のび太は再び尋ねる。
「声？　って事は、複数人いたって事？」
のび太がそう言うと、織恵は応える。
「確信は無いけれど、声は一人分だけだった筈だわ。多分電話か何かだと思うけれど……。」
織恵がそう言うと、のび太は何かを考える様な姿勢をし、この状況について考え出した。
（此処に現れた怪物はほぼ１００％Ｂ．Ｃ．Ｗ．であると、考えられるけれど、話し声ってのが気になるな。地下水路管理人の手記にあった、『特殊精鋭部隊』の可能性が高いけれど――――。）
のび太がそう考えていると、織恵が申し訳無さそうに喋る。
「ごめんなさい、よく覚えていなくて。私も燐ちゃんみたいに強かったら……。」
と、弱気な事を言ったので、のび太が慌てて言う。
「いや、渡井さんが悪い訳じゃないですよ。いきなりこんな状況になったら、誰だって怖くなりますし。」
のび太がそう言うと、燐も言う。
「それに、あたしだって、怖くなかった訳じゃない。実態を知った時は、死ぬかと思ったさ。でもま、必死になれば、なんとかなるもんだな。」
燐がそう言った。織恵はまだ慣れてないようだったが、落ち着きは取り戻してきていた。するとジャイアンは言う。
「それじゃあよ、早く巌さん達と合流しようぜ。いつまでもこんな所に居たくないしな。」

ジャイアンがそう言うと、全員はそれに同意し、部屋から出た。
すると、ふと、のび太がある事に気がついた。
「そういえば、渡井さんに、銃を渡しておかないと。」
のび太がそう言うと、織恵は勿論驚く。
「え！　銃!?」
織恵は思わずそう叫んだ。すると、のび太が言う。
「ええ、こんな状況ですし、一応持っておかないと、いざという時に困ります。」
のび太が織恵にそう言うと、織恵は反論する。
「でも私、銃なんて扱った事ないし……。」
織恵がそう言うと、のび太は織恵に言う。
「大丈夫ですよ。その道のプロである軍人の人もいますし。」
のび太がそう言うと、織恵は言う。
「軍人？　もう軍が動いてるの？　てか、軍ってどこの?」
織恵がそう言うと、のび太が応える。
「『F．I．A．S．S．U．F．E．』っていう、日本政府直属の極秘軍事組織らしいけど。」
のび太がそう言うと、織恵は言う。
「どうも、ぴんとこないなぁ。」
織恵はそう言った。すると、のび太が言う。
「まぁ、極秘ですし、聞いた事はないでしょうね。」
のび太はそう言った。すると、織恵が言う。
「じゃあ、その道のプロフェッショナルがいるから、その人に、銃の扱い方を訊いて、銃を持ち歩けって事ね。」
織恵がそう言うと、のび太が応える。
「まあ、そんな所です。」
のび太がそう言った。

会話をしながら戻っている内に、巌達の所に着いた。すると、巌が呆れつつ微笑した様な顔をして言う。
「よぉ、用は済んだか？」
巌がそう言うと、のび太が巌に話し掛ける。
「ええ、向こうで生存者がいました。話によると、勤務中に生物兵器に襲われたようです。」
のび太がそう言うと、巌がのび太に言う。
「生存者は一人だけか？」
巌がのび太にそう尋ねると、のび太は応える。
「取り敢えずは、一人だけです。あ、後、渡井さんに銃を分けてあげないと。」
のび太はそう言うと、巌が言う。
「じゃあ、ハンドガンとサブマシンガンとショットガン辺りでいいか。ハンドガンでは、玲の『S&W M&P』がいいな。後、スネ夫と聖奈は確か、ショットガンとサブマシンガンを複数個持ってただろ？　すまないが貸してやってくれ。」
巌がそう言うと、玲は『ミドルパック』を取り出し、織恵に着用するように言った。織恵が『ミドルパック』を着用し終えると、玲は『S&W M&P』と９ｍｍパラベラム弾１００発を取り出し、織恵に渡した。スネ夫は、『モスバーグＭ５００』と３０発の１２ゲージショットシェルを織恵に渡し、聖奈は、『H&K UMP』と１５０発の９ｍｍパラベラム弾を織恵に渡した。すると織恵は、背中のホルスターに『モスバーグＭ５００』と『H&K UMP』を装着した。そして、ヒップ部分にある４つの弾薬ポケットの中の、２つの弾薬ポケットにそれぞれ『９ｍｍパラベラム弾』と『１２ゲージショットシェル』を入れた。
「……こんな感じかなぁ。」
一通り装備が済むと、織恵はそう呟いた。すると、のび太は言う。
「これで大丈夫だと思いますよ。」

のび太がそう言うと、織恵は言う。
「……さっきも言ったけど、私射撃なんてしたこと無いんだけど……。」
織恵が不安そうにそう言うと、巌が言う。
「ああ、射撃に関してはのび太が教えるから、そいつに訊いてくれ。」
巌がいきなりそう言ったので、のび太は驚いた。
「え、僕が教えるんですか！」
のび太がそう言うと、巌は応える。
「射撃に関しては俺よりのび太の方が上だからな。それに、真理奈にも戦闘技術を教えたんだろ？」
巌がそう言うと、のび太は言う。
「別に教えたって訳じゃないですけど……。」
のび太がそう言い訳したが、巌は初めからのび太に任せようとしていたらしく、結局、のび太が織恵に射撃技術の教授を行う事になった。そして必然的に、織恵は、のび太のチームに入る事になった。
「じゃあ、そろそろ、上の階に行くぞ。まずは１０階に向かう。」
巌がそう言うと、全員はエレベーターに乗り込んだ。

ＡＲＥＡ７『驚異』

エレベーターが１０階に向かっている間、織恵に、今まで起きた事を伝えた。

「――――――それ、ほんとに？」

織恵がそう言うと、のび太が応える。

「ええ、信じられないですけどね……。」

のび太がそう言うと、織恵が言う。

「じゃあ、数日前に、原発の事故があったってニュースがあったけど、その時にナムオアダフモ機関が生物兵器を投入したって事……？」

織恵がそう言うと、のび太は応える。

「はい、それで、僕達はそこから、此処まで来たんです。」

のび太はそう言った。そういう会話をしている内に、エレベーターは１０階に着いた。先程と同じ様に、巌と玲が周囲の確認を行った。しかし、見渡せる範囲内には何もおらず、更に、５階の時とは違い、壁や天井に傷一つなく、生物兵器が暴れた様な跡は全く無かった。何もいない事を確認し終えると、巌は、他の全員に、エレベーターから出るように指示した。

全員がエレベーターから出ると、全員は、エレベーターの前にある掲示板の様な物に気がついた。それには、こう書かれてあった。

『≪上層棟の進入権利について≫

ナムオアダフモ機関は１階から２０階までであり、１階から１０階までを『下層棟』、或いは『一般棟』と呼び、１１階から２０階までを『上層棟』或いは『機密棟』と呼ぶ。

１０階から上に上がる為には、最低、Ｌｖ１以上のライセンスが必要となる。ライセンスの所得方法については、入社時のミーティングでも言っているが、上司が課した特殊な課題で、一定数以上の功

績を修めた者に報酬として与えられる。ライセンスを所得した場合、社員には、その事実を会社側に報告する義務があり、所得日から９０日以上報告が無い場合、会社側にはその社員に対し、然るべき処置を行う権限が発生するとする。報告方法としては、１０階にある『ライセンス報告受付室』に入り、端末に社員コードを入力する事で、報告された事になる。その後は、１１階及び１２階への進入が可能となる。また、Ｌｖ１以上のライセンスを所得している者を上層社員といい、会社側から特殊な業務が与えられる事がある。その業務を完遂すれば、その功績に応じた報酬を与える。その際に、会社が求める人材との適合が認められた場合、Ｌｖ２、Ｌｖ３のライセンスを所得する権利が与えられる。Ｌｖ２、Ｌｖ３のライセンスを所得した場合には、会社側への報告は不要である。また、Ｌｖ２、Ｌｖ３のライセンスを所得すれば、進入出来る階層が増える。会社側は若い希望の星を求めている。是非とも頑張って欲しい。』

その文章を読み終えると、のび太が呟く。

「どうやら、ライセンスカードキーが無いと、此処から上の階には上がれないみたいですね。」

のび太のその言葉を聴いた巌は言う。

「ああ、現状だと、この階を探索する事になりそうだな。」

巌がそう言った。すると、玲が言う。

「さっきと同じ様に、３チームに分かれて探索をしましょう。手前の範囲を私達のチーム、奥の範囲を他の２チームが担当する事でいいかしら。」

玲がそう言うと、全員はその意見に賛成した。すると、全員は道なりに進み始めた。エレベーターを降りた位置から左に数歩進んだ所で、通路は右に折れていた。その通路を右に曲がると、数十メートル程、通路が真っ直ぐ延びていた。また、その通路の左側の壁には、ほぼ等間隔に扉が３つ並んでいた。そして、右側の壁には、扉が一つだけあった。また、それぞれの位置関係としては、左側の壁にある３つの扉の内、一番手前の扉とその扉の一つ奥の扉の丁度真

ん中の位置の向かい側の部分に右側の壁にある扉がある造りになっている。
今見える４つの扉を探索する担当は、玲と聖奈と燐のチームになり、残りの２チームは、奥の場所を探索する事になった。玲達のチームはまず、左側の手前の扉を確認した。扉の上部にはプレートがあり、そこには、『マルチメディアプレゼンテーション室』と書かれていた。玲は、右腿のホルスターから、『ベレッタＰｘ４』を抜き、銃口を扉に向けつつ、左手で勢いよく扉を開けた。周囲を見渡すと、ぱっと見た感じでは、生物兵器の類は見当たらなかったが、足元に、人間の死体があった。玲は『ベレッタＰｘ４』を床に起き、その死体を調べ始めた。その死体は、スーツを着ている様子から、ここの社員だという事は解ったが、頭部が無く、首の部分に、抉られた様な、噛み千切られた様な傷痕があった。その死体のすぐ傍の床には、何かのカードが落ちていた。玲は、そのカードをよく見た。すると、そのカードには、『Ｌｖ１ライセンスカードキー』と書かれていた。
「『Ｌｖ１ライセンスカードキー』があったわ。これで取り敢えずは、１１階と１２階には行けるわね。」
玲がそう言うと、そのカードを懐に仕舞った。そして、『ベレッタＰｘ４』を拾うと、この部屋の奥へと進んで行った。この部屋は多くの座席と、一番前に、パソコンとプロジェクターとスクリーンがあり、玲達は、慎重にパソコンの方へと向かった。
暫くして、パソコンのすぐ傍まで来た。玲は、パソコンに何かのデータが入っていないかと探したが、特に気になる物はなかった。諦めてこの部屋を出ようとすると、驚くべき光景が目に飛び込んできた。
「……あれは？」
玲がその光景を見てそう呟いた。玲の目の先には、先程の、頭部がない死体が立っていた。
「おい、さっき死んでた筈だろ？　何で立ってるんだよ？！」

燐が信じられない様子でそう言った。
「何か、……嫌な予感がするんですけど…。」
聖奈が不安がってそう言った。すると、頭部のない死体の首から、何かが突出してきた。その突出してきた物体は、絶えず前後左右に動き、その先端には、鋭い巨大な弧の字型の鋏(はさみ)の刃の様な物があった。
「何だ！　新手の奴か！？」
燐が驚いてそう言った。すると、そのゾンビは、燐達に向かって、小走りのスピードで向かって来た。玲は『ベレッタＰｘ４』、聖奈は『グロック１７』、燐は『Ｈ＆ａｍｐ;Ｋ　Ｍｋ．２３』で応戦した。３人はそのゾンビに向かって撃ち続けていたが、そのゾンビは全く止まらなかった。すると、玲は、燐と聖奈に言う。
「固まっていたらまずいわ、３方向に分かれて戦いましょう。」
玲がそう言うと、燐と聖奈は部屋の中央部の左右の端に移動し、聖奈は『Ｈ＆ａｍｐ;Ｋ　ＭＰ５』を装備し、燐は『Ｈ＆ａｍｐ;Ｋ　Ｍｋ．２３』のまま、再び射撃した。しかし、そのゾンビは止まらず、玲の目の前まできた。すると、そのゾンビの、絶え間無く動いていた突出してきた物体の動きが止まった。危機を予感した玲は、すかさず屈んだ。すると、そのゾンビの鋏の様な物体が玲の頭上を掠めた。玲がそのままの状態で屈んでいなかったら、玲の首は撥ね飛ばされていた。玲は体勢を整えようとしたが、そのゾンビは、玲の腕を掴んだ。
「くっ、しまった。」
玲は必死に脱出しようとしたが、ゾンビの力は思いの外強く、中々脱出出来なかった。その時、聖奈が呟いた。
「あのゾンビはいったい何？　いくら撃っても倒れないわ。早くしないと玲さんが危ないわ。」
聖奈はそう呟きながらも、ゾンビに向かって撃ち続けた。弾倉内の全ての弾薬を撃ち尽くしたがゾンビは倒れなかった。すると、ふと、聖奈は何かを思いつき、『グロック１７』で、ゾンビの膝辺り

に照準を合わせ、発砲した。２発程撃ち、ゾンビの膝の真後ろに見事に命中した。すると、ゾンビは膝を付いた。玲はその隙を逃さず、ゾンビを蹴り飛ばした。するとゾンビは仰向きに倒れた。玲はそのゾンビから距離をると、焼夷手榴弾をそのゾンビに投擲した。

「あああああああああああ～～～～～～～。」

そのゾンビは炎上しながら呻き声を挙げた。すると、玲が燐と聖奈に言う。

「急いでこの部屋から出るわよ！」

玲はそう言うと、プロジェクター側にある扉から廊下に出た。玲の言葉を聴いた聖奈と燐は、玲が出た扉の反対側の扉、つまり、この部屋に入って来た時に通ってきた扉から廊下に出た。そして、奥の扉にいる玲に向かって行った。玲の近くまで行くと、聖奈は喋る。

「何とか凌ぎましたね。」

聖奈がそう言うと、玲が言う。

「ええ、危ない所だったわ。あの時、聖奈ちゃんが銃撃して助けてくれなかったら、殺られてたかもしれないわ。ありがとうね。」

玲が聖奈にそう礼を言った。すると、燐が言う。

「しかし、ナムオアダフモ機関もとんでもないものを造りやがったな。あんなに強いゾンビは初めてだぜ。」

燐がそう言うと、玲が言う。

「まだ、あんな奴がいるかもしれないわ。今まで以上に気を引き締めて探索しましょう。」

玲はそう言うと、『ベレッタＰｘ４』の装弾を確認し、弾薬を装填し直した。そして、先程の部屋の向かい側にある扉に近づいた。その扉のプレートには、『ライセンス報告受付室』と書かれていた。一方、聖奈は『グロック１７』の予備マガジンを装填し、燐も『Ｈ＆amp;Ｋ　Ｍｋ．２３』に弾薬を再装填した。そして、聖奈は扉を挟んだ玲の反対側で突入の準備をし、燐は、廊下や別の扉から何かが来ないか警戒をした。

数秒すると、玲が聖奈にアイコンタクトした。すると、玲はドアノ

ブに手を延ばした。そして、一拍置き、銃口を部屋の中に向けながら、一気に扉を開けた。玲のすぐ後ろに聖奈も続いた。そして、燐は、廊下に銃口を向け、警戒しながら、部屋の中に入って行った。部屋の中は、今までとは造りが違い、壁や天井や床が鋼鉄で出来ていた。そして、部屋の奥行きは３ｍ程で、部屋の一番奥には、何かの端末機の様な物があった。玲はその端末機に近づいた。すると、その端末機にはこう書いてあった。

『ライセンス所得の報告にあたっての必要事項を入力してください。必要事項を入力後、『送信』をクリックすると、会社側への報告が完了します。

フリガナ

姓　　名

社員ＩＤ

所属課

送信

』

その表示を見た玲は喋る。

「どうやらこの端末機で、ライセンス所得者のリストを作っている

ようね。」
　玲がそう言った。すると、玲は続けて喋る。
「この端末には、特に重要な情報は無いみたいね。次の探索場所に移動しましょう。」
　玲がそう言うと、玲は、周囲の警戒をしながら、『ライセンス報告受付室』を出た。聖奈と燐の二人も玲に続いた。廊下に出ると、三人は周囲の警戒を再び行った。しかし、特に何もいなかった。三人がまだ探索していない所は、『ライセンス報告受付室』の扉から見て、右側の筋向いの扉だけだった。三人は、その扉の前まで来た。その扉の上部には、プレートがあり、『第二制御室』と書かれていた。三人は、先程と同じ様に、慎重に扉の中へと入って行った。
扉の中は、先程と同じ様な、全面鋼鉄張りで、入ってきた扉から約７ｍ奥の場所に、１６インチほどのディスプレイがある端末機があった。玲は、その端末機の前まで歩いていった、やがて玲は、端末機の前まで来て、ディスプレイを見た。すると、そのディスプレイには、こう表示されていた。
『第一エレベーターへの電力供給
　実行中
　第二エレベーターへの電力供給
　待機中
　第三エレベーターへの電力供給
　　上位プロテクトが掛けられている為操作不能』
ディスプレイの表示を見た玲は言う。
「どうやら、上層棟のエレベーターは第二と第三に分かれているようね。」
　玲がそう言うと、聖奈も言う。
「第三エレベーターは、此処では操作出来なさそうですけど、第二エレベーターの操作は出来そうですね。」
　聖奈がそう言うと、玲は早速端末機を操作し、第二エレベーターの電力供給を行った。暫く操作していると、以下のようなメッセー

ジが表示された。
『電力供給を行う為のライセンス認証を行います。付属のカードリーダーにＬｖ１以上のライセンスカードキーを認証させてください。』
そのメッセージを見た玲は、懐から、『Ｌｖ１ライセンスカードキー』を取り出しながら呟く。
「早速”これ”が使えそうね。」
玲はそう呟きながら、端末機の右側にあるカードリーダーに、『Ｌｖ１ライセンスカードキー』を読み込ませた。すると、端末機のディスプレイに、
『認証中……』
の表示が表れた。そして、数秒すると、ディスプレイの表示が次のように変わった。
『Ｌｖ１ライセンスカードキーを認証しました。第二エレベーターの電力供給を開始します。』
その表示を見た聖奈は言う。
「これで、取り敢えず第二エレベーターは使えそうですね。」
聖奈がそう言うと、燐が言う。
「だけど確か進入制限があるから、１１階と１２階しか入れない筈だぜ。」
燐がそう言うと、玲がその言葉に応える。
「ええ、だけど、１１階や１２階に行けば何かあるかもしれないわ。」
玲がそう言うと、聖奈が言う。
「でも、第二エレベーターって、何処にあるんでしょう?」
聖奈がそう言うと、玲は応える。
「恐らく、この階の何処かにあるんじゃないかしら。巌達が探索している所辺りにあると思うわ。」
玲がそう言うと、燐が言う。
「……この部屋であたし達が探索する場所は終わりか?」

燐がそう言うと、玲は、燐のその言葉に応える。
「ええ、ここで私達の分は終了ね。この階に来た時のエレベーターの前まで行きましょう。巌達の方も、探索が終わったらそこに集合する筈だわ。」
玲がそう言うと、三人は扉を開け、廊下に出た。そして、先程乗ってきたエレベーターがある場所まで移動した。

しかし、廊下を１０ｍ程進んだ所で、後ろで轟音がした。
「！　なんだ！」
そう叫びながら振り向いたのは燐だった。続いて、聖奈と玲の二人も振り向く。轟音がした場所は、『マルチメディアプレゼンテーション室』のプロジェクター側の扉であり、その扉が破壊されていた。そして、ゆっくりと、”何か”が三人の前に現れた。三人の前に現れたのは、先程、焼夷手榴弾で焼却した、ゾンビだった。そのゾンビは、全身が焼け爛れていたが、動きは先程と同じであり、首から突出している物体の動きも全く鈍くなっていなかった。
「こいつ、まだ生きてたのか！」
燐がそう言ったが、聖奈は冷静に言う。
「でも、あれだけの銃弾を浴びてたのに、ダメージを受けてる気配がないわ。」
聖奈が燐と玲の二人にそう言った。すると、目の前のゾンビに変化が表れた。
「ゾンビの様子が変だわ。気をつけて！」
玲はそう叫び、『ベレッタＰｘ４』を構えた。すると、いきなり、目の前のゾンビは、右腕と左腕が弾け飛んだ。そして、両足ももげ、その場に倒れた。かと思うと、両手両足がもげた場所から、手足の様なものが四本現れた。その手足の様なものは、五本指で、爪は鋭く、腕の長さは１ｍ程あり、色は、人間の肌色よりもやや黒みがかっていた。そして、四足歩行で走行し、小走り位のスピードで、玲

達に接近していった。すると、玲は、聖奈と燐の二人に叫んだ。
「狭い廊下ではこちらが不利だわ。取り敢えず、一旦、部屋に下がるわ！」
　玲はそう叫びながら、『マルチメディアプレゼンテーション室』の中に入った。玲のその言葉を聴いた聖奈と燐も、玲に続いて、『マルチメディアプレゼンテーション室』に入る。すると、変異したゾンビが扉を破壊して、部屋に入って来た。その変異したゾンビは、椅子と机を押し退け、玲達に接近していった。玲達三人は、アサルトライフルやサブマシンガンを連射していたが、一向に、変異したゾンビの動きは止まらなかった。燐は、『Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　Ｍｋ・２３』を仕舞い、『ベネリＭ４』を構えて発砲した。１２ゲージショットシェルから幾つものペレット弾が発射され、変異したゾンビに命中した。ボディや新しく生えてきた腕や鋏触手にも命中したが、一瞬怯んだだけで、変異したゾンビの動きは変わらなかった。すると、聖奈は、『ＭＰＳ　ＡＡ－１２』を装備し、撃ち続けた。フルオートでペレット弾が連射されるが、それでも、その変異したゾンビの動きは止まらない。すると、玲は、『ＭＰ５Ｋ』を二挺装備し、ゾンビの生えてきた脚の関節に向かって撃った。
１０発程の『９ｍｍパラベラム弾』が命中すると、ゾンビの脚の関節部分が破壊され、脚が動かなくなった。玲は、続いて、『Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ２９』を装備し、まだ動いている３本の脚の内の一本の脚の関節部分を狙い撃った。発射された『．４４マグナム弾』は、見事に、脚の関節に直撃し、１発で関節を破壊した。玲は同じ様に、後、２本の脚を、『Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ２９』で銃撃し、その変異したゾンビの脚は全て動かなくなった。そして、玲は、首から露出している鋏の触手の根元部分を銃撃した。３発の『．４４マグナム弾』は全弾命中し、触手の動きも停止した。
玲達は、暫くそのゾンビを見ていたが、全く動かない事を確認すると、銃を降ろした。
「なんとか凌いだわね。」

玲はそう言いながら、『S&W　M29』の弾倉（シリンダー）を開き、空薬莢を排出し、『.44マグナム弾』を再装填した。
「でも一体、あのゾンビは何だったんでしょうか？」
聖奈がそう言うと、燐が自分の意見を言う。
「多分、肉体が一定以上の損傷を受けると、進化するゾンビだろうな。玲が、首から出ている触手を撃って、あのゾンビが絶命したところを見ると、どうやら、首から出てきた、あの触手が弱点だったみたいだな。」
燐がそう言うと、玲は言う。
「でも、危ない所だったわ。もしやと思って、首の触手を撃ったから良かったけど、気づくのがもう少し遅かったら、殺られてたわ。」
玲がそう言うと、聖奈が言う。
「……もしかしたら、のび太君達の方でも何か特殊な生物兵器に襲撃されてるかも！」
聖奈がそう言うと、玲は言う。
「その可能性は大いにあるわね。様子を見に行きましょう。」
玲がそう言うと、3人は、のび太達の探索範囲の所へと急いだ。

ＡＲＥＡ８『ハーブ』（前書き）

今回はあまり進展ないです。

ＡＲＥＡ８『ハーブ』

玲達のチームと分かれて、巌と迅のチームは、通路を奥に進んで行った。暫く進むと、廊下は突き当たり、通路が右に折れていた。そして、左側には、『第二管制室』と書かれた扉があった。

「この通路の先が、俺達が調査するエリアだな。」

巌が、右に折れている通路を見るとそう言った。右に折れている通路は、１５ｍ程あり、右側には、２つの扉があった。すぐ左には階段があり、左側には、１つの扉があった。そして、通路の奥には、エレベーターがあった。巌達は、まず、扉のプレートを見た。すると、右側の手前の扉は、『薬剤資料室』と書かれており、右側の奥の扉には、『ハーブ類精製室』と書かれていた。そして、左側の扉には、『Ｂ棟』と書かれていた。すると巌は言う。

「俺達のチームは、Ｂ棟と書かれている扉の先を調べる。迅達は、ここ周辺を調べてくれ。」

巌がそう言うと、迅は了解した。そして、巌とのび太と真理奈と織恵は、『Ｂ棟』と書かれた扉へ行った。巌達が扉の奥に入ると、迅は、ジャイアンとスネ夫に言う。

「それでは、そろそろ探索を始めましょうか。」

迅がそう言うと、三人はまず、『薬剤資料室』に入った。『薬剤資料室』は、３坪程しかなく、両側の壁に本棚があり、正面にデスクがある他は特に何も無かった。３人はまず、デスクの方を調べ始めた。デスクの上をよく見ると、右半分の範囲に、『グリーンハーブ』、『レッドハーブ』、『ブルーハーブ』、の模型のような物があり、更に、黄色い色をしたハーブと、黒い色をしたハーブと、白い色をしたハーブも模型もあり、それら６つの模型は、直径１５ｃｍ、高さ３０ｃｍ程の円筒形のカプセルの様な容器に入っていた。そのデスクの左側には、数枚のプリントが、ステープラーで綴じられた資料があった。その資料の表紙には、『各種ハーブが人体に与

える影響について』と書かれていた。スネ夫は、その資料を手に取り、中を開いた。それにはこう書いてあった。

『ナムオアダフモ機関が、既存しているハーブの一つ、『グリーンハーブ』を精製し、あらゆる特性を持つハーブを開発した。そのハーブの色と特性を以下に示す。

・グリーンハーブ

自然界に存在したハーブの一種。新陳代謝を高めると共に、体力の回復も図る事が出来る。

・レッドハーブ

グリーンハーブを高速培養液の中に入れ、通常より早く成長させる事により、『グリーンハーブ』とは違った性能を持たせる事に成功した。まず、この『レッドハーブ』単体では、強い毒性を持ち、そのまま人間が摂取すると、傾眠や譫妄（せんもう）、場合によっては、昏睡などの意識障害を引き起こす性質を持つ。しかし、グリーンハーブと調合する事で、毒性が中和され、かつ、グリーンハーブの新陳代謝促進機能、体力回復機能を大幅に高める事が出来る。

・ブルーハーブ

『グリーンハーブ』の遺伝子組み換えを行い、あらゆる毒薬を中和する機能を持ったハーブ。解毒できる毒の種類はかなり多く、毒を持った生物に噛まれた時に、素早く対処できる。

・イエローハーブ

『グリーンハーブ』の体力回復効果を念頭において、遺伝子操作をし、その効能を高めた物。体力や持久力の増加を図る事が出来る。

・ブラックハーブ
『グリーンハーブ』、『レッドハーブ』、『ブルーハーブ』、『イエローハーブ』を一定の割合で調合した物。研究段階なので詳細不明。

・ホワイトハーブ
『グリーンハーブ』、『レッドハーブ』、『ブルーハーブ』、『イエローハーブ』の遺伝子を組み合わせた物。研究段階なので詳細不明。

』
それを見たスネ夫は喋る。
「これは、ススキヶ原の学校にもあった、ハーブの事だね。」
スネ夫がそう言うと、ジャイアンは言う。
「これを見た感じ、ナムオアダフモ機関がこのハーブを研究しているみたいだな。」
ジャイアンがそう言うと、迅が言う。
「しかし、ナムオアダフモ機関では、セキュリティシステムや生物兵器を研究し、開発していた筈です。なら、生物兵器とこのハーブが、何かしらの関係性を持っている可能性があります。」
迅がそう言うと、スネ夫とジャイアンも頷いた。
「それって、ハーブがウィルスに何か影響を与えるって事か？」
ジャイアンがそう言うと、迅が応える。
「ええ、その可能性が高いでしょうね。」
迅がそう言った。すると、三人は、『薬剤資料室』を出た。そして、『薬剤資料室』の右隣りにある部屋の扉を見た。その扉には『ハーブ類精製室』と書かれていた。スネ夫達は、その扉を開けた。

その扉の中の部屋は、今までの部屋と違い、壁や天井に、複数のパイプが張り巡らされており、部屋の中央部分の右側には、何かの端末があり、その端末の上には小型のカプセルが６つ程あった。その部屋の奥には、更に扉があり、その扉の横には、カードリーダーがあった。三人はまず、何かの端末の方に向かった。三人はその端末をよく見た。すると、その端末は、縦２８ｃｍ、横３０ｃｍの小さめのディスプレイがあり、その上には６つのカプセルがあった。ディスプレイのすぐ下には、キーボードがあり、その下には、カプセルを装着させる為の窪みがあった。そのすぐ上の部分には、カプセルポートと書かれていた。その端末のディスプレイをよく見てみると、ディスプレイの左側に、こう書かれていた。

『ＣＡＵＴＩＯＮ！

この端末の利用は、マスター権限を持つ者が発行する、許可証が必要となります。許可をとらずにこの端末を使用した場合、会社側から処罰を受ける可能性があります。場合によっては、解雇も有り得ますので、無断の利用は控えて下さい。また、利用の際に、衛生管理課の課長の同行を必須とします。』

更に、ディスプレイの右側にはこう書いてあった。

『ＷＡＲＮＩＮＧ！！

この端末による調合により、有害物質が発生する可能性があります。調合の前に必ず、机上での論理構築をして下さい。また、これは義務ではありませんが、衛生管理課の課長に、その論理構築した書類を見せると、なお良いです。調合した薬剤を抽出する場合、必ず気密カプセルを使用してください。最悪の場合、死亡する事も考えられます。また、調合が終了した後、報告書を作成し、衛生管理課の課長に提出する事が義務付けられています。提出期限は一週間です。遅れた場合、処罰がなされます。』

その注意書きを見たスネ夫は言う。

「此処で、ハーブの調合が出来るみたいだね。」

スネ夫がそう言うと、ジャイアンが言う。

「だけど、調合すると有害物質が発生するのもあるみたいだな。……そんなに危険なものだったのか。」
ジャイアンがそう言うと、迅が言う。
「やはり、ナムオアダフモ機関で研究していたハーブは、他とは逸脱した効能を持っていたようですね。」
迅がそう言うと、スネ夫が言う。
「じゃあ、ハーブはウィルスに何らかの影響を与えて、且つ劇薬になる可能性もあるって事か。」
スネ夫がそう言うと、ジャイアンが言う。
「もしかしたら、上の階には、ハーブの事について記した資料があるかもしれないな。」
ジャイアンがそう言うと、三人は、奥の扉に向かった。その奥の扉は、鋼鉄製であり、その扉のプレートには、
『有事の際以外は、会長と参謀長官及び、Ｌｖ３のライセンスを持つ者以外の入室を禁じる。』
と書かれていた。ジャイアン達はその扉を開けようと試みたが、電子ロックが掛かっており、全く開かなかった。すると、スネ夫が言う。
「どうやら、電子ロックが掛かっているみたいだね。Ｌｖ３のライセンスカードキーが無いと開かないみたいだね。」
スネ夫がそう言うと、ジャイアンが言う。
「ああ、此処はいったん諦めるか、俺様の怪力でも、流石にこの扉は破壊できねぇな。」
ジャイアンがそう言うと、三人は、『ハーブ類精製室』を出た。そして通路の奥にあるエレベーターに向かった。そのエレベーターは、昇降ボタンとエレベーターの扉の間に、カードリーダーがあり、その上には縦１０ｃｍ、横１５ｃｍの小型のディスプレイがあった。スネ夫は、上の階に上がる為のボタンを押した。すると、カードリーダーのすぐ上にあるディスプレイにこう表示された。
『Ｌｖ１以上のライセンスカードキーを読み込ませて下さい。』

「…電圧は供給されてるみたいだけれど、Ｌｖ１のライセンスカードキーが必要みたいだね。」
スネ夫がそう言うと、ジャイアンが言う。
「１１階から上は、ライセンスを持った社員しか入れないって事か。掲示板に書いてあった通りだな。」
ジャイアンがそう言うと、迅が言う。
「これ以上探索する場所もないようですし、一旦、この階まで来たエレベーターまで戻りましょう。探索が終われば、そこに全員集合する筈です。」
迅がそう言うと、三人は、元来た道を戻った。しかし、曲がり角から５ｍ程手前の位置に来た所で、玲達三人が現れた。
「！　どうやら、あなた達は無事みたいね。そっちは何かあった？」
玲が迅達にそう尋ねると、迅は応える。
「ハーブの事について記した資料と、ハーブの精製室以外は収穫は特にありませんでしたが。」
迅がそう言うと、玲が更に言う。
「新手の敵はいた？」
玲のその言葉を聴いたスネ夫は言う。
「こっちでは、特に出なかったけれど、もしかして、そっちでは何か生物兵器が出たの？」
スネ夫がそう言うと、玲は応える。
「ええ、ゾンビの頭部を突き破って、首から触手が生えている奇妙なゾンビだったわ。こっちでは何とか倒したけれど、他の所では、何か新手の奴が出ていないかと確かめに来たの。」
玲がそう言うと、ジャイアンは言う。
「そういや、のび太達がＢ棟の方に行ったままだぜ。」
ジャイアンがそう言うと、聖奈は言う。
「じゃあ、もしかしたら、のび太君達の方でも何かあったかも！」
聖奈がそう言うと、燐が言う。
「まだそう決まった訳じゃないが、可能性はあるな。早く行こうぜ。

」

燐がそう言うと、六人は、『B棟』と書かれた扉の奥に向かった。

ＡＲＥＡ９『新型生物兵器』

のび太達は、ジャイアン達のチームと分かれ、『Ｂ棟』と書かれた扉を開け、奥に入って行った。入ってすぐ突き当たりで、道は、左右に延びていた。すると、巌が他の三人に言う。

「此処から先は、二人一組になり、二手に分かれて探索するぞ。俺と真理奈が左のルートを、のび太と織恵は右のルートを頼む。」

巌がそう言うと、四人は肯定した。すると、巌はと真理奈は、のび太達と一旦分かれた。巌達が見えなくなると、織恵がのび太に話し掛ける。

「のび太君、じゃあそろそろ行く？」

織恵がそう言うと、のび太が応える。

「うん。じゃあ僕達も行こうか。」

すると、のび太は、『ベレッタＭ９２ＦＳ』を右手に構え、織恵は、『Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ＆ａｍｐ；Ｐ』を右手に構えた。すると、織恵が、のび太に訊く。

「ねぇ、のび太君、銃ってどう扱えばいいの？まだ聴かされてないんだけど。」

織恵がそう言うと、のび太は応える。

「基本的には、射撃対象に照準を合わせて引き金を引けばいいだけだけど、弾倉内の弾薬を撃ち尽くしたら、スライドストップといって、スライドと呼ばれる部分が後退したままその位置で止まる。そして、トリガーガードと呼ばれる部分とグリップの接点辺りに、ボタンがある。そのボタンは、マガジンリリースボタンといって、そのボタンを押すと、マガジンが排出される。その後、予備のマガジンを装填すればいい。」

のび太は、銃の各部分を指差ししながらそう言い、織恵に説明した。すると、織恵がのび太に訊く。

「……大体の使い方は解ったけれど、照準の合わせ方は具体的には

どうやればいいの？」
　織恵がそう訊くと、のび太は応える。
「銃の撃鉄の部分と、銃口の部分の上に出っ張りがある。それはそれぞれ、『リアサイト』、『フロントサイト』といって、その部品と、射撃対象が一直線になるようにすれば当たる筈だよ。」
　のび太がそう説明すると、織恵は「ありがとう」と言い、銃を暫く見た後、のび太に、
「じゃあ行きましょう。」
　と言った。すると二人は、右側の通路を進んで行った。十数メートル程進んだ所で、ドアノブの付いた扉が見えた。するとのび太は、ドアの陰に身を隠し、織恵に話し掛ける。
「渡井さん、ここは僕が様子を見ます。渡井さんはここで待っていてください。」
　のび太がそう言うと、織恵は、
「解ったわ。のび太君気をつけて。」
　と言った。そして、一拍置いて、のび太は、扉を勢いよく開け、部屋の中を見た。その部屋は、それなりに広く、１０ｍ×２０ｍ程の大きさがあった。すると、部屋の奥の方に、三人ほどの人影が見えた。その人影をよく見ると、ゾンビであり、その手には、『ＦＮ　ＭＩＮＩＭＩ』が握られていた。すると、そのゾンビ達は、のび太に、『ＦＮ　ＭＩＮＩＭＩ』の銃口を向け、連射してきた。のび太は、ゾンビ達と平行に走り、銃弾を回避した。そして、前転回避をし、前転中に、『ベレッタＭ９２ＦＳ』を９連射した。放たれた９発の『９ｍｍパラベラム弾』は、それぞれのゾンビの頭部に３発ずつ命中した。すると、３体のゾンビは絶命し、その場に倒れ込んだ。のび太は、暫く辺りを見回したが、特に動く物はなかったので、織恵を部屋に呼んだ。部屋に入ってきた織恵は、倒れているゾンビを見てこう言った。
「……これは？」
　織恵がそう言うと、のび太は応える。

「ゾンビって奴さ。元々は、知能が低い筈なんだけど、どういう訳か、ナムオアダフモ機関のゾンビは、銃火器も扱えるらしい。」
のび太がそう言うと、織恵が言う。
「じゃあこいつが、のび太君たちが言っていたゾンビって奴なのね。」
織恵がそう言うと、一泊置いて、織恵は続けて喋る。
「銃火器が扱えるって事は、ナムオアダフモ機関で脳改造をしたって事かしら?」
織恵がそう言うと、のび太は応える。
「どうだろう? 解らないけど、『Vウィルス(ヴァリアント)』が何か関係してくるのかもしれないな。」
のび太がそう言った。すると、二人は改めて辺りを見回した。その部屋は、折り畳まれた長テーブルやパイプ椅子が大量にあり、それ等は、部屋の隅に立て掛けられていた。すると、のび太が呟く。
「…此処は何ていう部屋なんだろう?」
のび太がそう呟くと、織恵は応える。
「さっき此処の扉のプレートを見たけれど、『大会議室』って書かれてたわ。」
織恵がそう言うと、のび太は言う。
「じゃあ此処は、今は使っていない会議室って事か。」
のび太がそう言うと二人は再び部屋を見回した。すると、扉が幾つかあるのが分かった。のび太達が入ってきた扉側の壁には、後二つの扉があり、一つは部屋の真ん中に、もう一つは、部屋の一番奥にあった。のび太達はまず、手前の方にある扉に向かった。その扉は、『大会議室』に入ってきた時に見た扉と同じ様に、ドアノブを回すタイプのアナログの扉だった。のび太はその扉を開けようとした。

しかし、鍵が掛かっているのか、扉は開かなかった。その扉のプレートには、『運搬用大型自動昇降機通路』と書かれていた。
「…この、『運搬用大型自動昇降機通路』って何だろ？」
のび太がそう言うと、織恵が言う。
「もしかしたら、大型エレベーターに続く通路の事じゃないかしら。自動昇降機ってエレベーターの事っぽいし。」
織恵がそう言うと、のび太は納得した。
「じゃあ、この先に行ければ、上の階に行けそうだな。」
のび太はそう言うと、この扉を開ける事は諦め、次の扉に向かった。

のび太達は、一番奥にある扉の前まで来た。すると、織恵が喋る。
「あれ、この扉、プレートがないよ。」
織恵がそう言うと、のび太も言う。
「…そういえばそうだな。今までの扉は全て、部屋の名前を示すプレートがあったのに此処だけ無いな。何か理由があるのかな？」
のび太がそう言うと、織恵が言う。
「でも、ここで考えていても何も変わらないと思うわ。取り敢えず、慎重に開けてみましょう。」
織恵がそう言うと、のび太は肯定し、扉を慎重に開けた。

すると、その先にあったのは、クランク型の廊下だった。
「ただ単に、廊下への扉だったから何も書いてなかったのか。確かに、『廊下』って書くのもなんかおかしい気がするしね。」
のび太がそう言うと、織恵が言う。
「どうやら、ただの杞憂だったみたいね。」
織恵はそう言った。すると、二人は、探索を再開し、クランク型の通路を進んで行った。

一方巌達のほうでは……

巌と真理奈は、のび太達と分かれた所の左の通路を進んでいた。

「ねぇ、巌さんって、今いくつなの？」
唐突に真理奈が巌にそう訊いた。すると、巌は言う。
「何だよ突然。」
巌は前方に『ブローニングＨＰ』を向け、警戒しながらそう言った。すると、真理奈が言う。
「いやぁ、ちょっと気になってね。」
真理奈がそう言うと、巌は応える。
「…４２、いや今年で４３か。」
巌がそう言うと、真理奈が言う。
「じゃあ、傭兵になって何年ぐらい？」
真理奈がそう訊くと、巌は応える。
「確か、神奈川の大学を卒業してから、自衛隊に入隊して、何年か後に、『Ｆ．Ｉ．Ａ．Ｓ．Ｓ．Ｕ．Ｆ．Ｅ．』に入隊したから、…大体２０年位か。」
巌がそう言うと、真理奈が言う。
「２０年か～～。やっぱりベテランの軍人なんだね。」
真理奈がそう言うと、巌が言う。
「まぁな。でも、今回の様な事は滅多に無いな。大体は、調査で終わる事が殆どだな。」
巌がそう言うと、真理奈が言う。
「滅多に無いって事は、前に１回はあったって事？　教えてよ。」
真理奈がそう言うと、巌は俯き加減に言う。
「ああ、この事件が片付いたらな。」
巌がそう言うと、真理奈は何も言わなかった。
二人が会話を終えると、丁度通路の突き当たりにぶつかり、その通路は右に折れていた。巌達はその通路を右に曲がった。すると、その通路は、数十メートルもあり、左側の壁には、全てで４つの扉がほぼ等間隔に並んでいた。巌達は、まず、手前の扉を開けようとした。

しかし、扉は動かなかった。
「鍵が掛かってるのかな？」
真理奈がそう言ったが巌が反論した。
「いや、違う。恐らく何か強い力で扉が曲げられたんだ。」
巌はそう言った。二人が見ている扉は、巌が言った通り、少し歪んでいた。ふと、真理奈は、扉の上にあるプレートを見た。すると、そのプレートには、『予備室』と書かれていた。
「ねぇ、『予備室』って何？」
真理奈が巌にそう尋ねると、巌は応える。
「ああ、『予備室』ってのは、緊急に何か会議したり、急な客を応接したり、一時的な作業場を作る時に使う部屋だ。まぁ、簡単に言えば空き部屋だな。」
巌がそう言うと、真理奈が言う。
「その、空き部屋の扉が歪んでるってのはどういう事だろ？」
真理奈がそう言うと、巌は応える。
「さあな。もしかしたら、生物兵器を持ち込んでいたかもしれん。だが、実際はどうだか解らんな。」
巌がそう言うと、巌は続いて喋る。
「この扉はどうやっても開かんらしい。次の扉に向かうぞ。」
巌がそう言うと、二人は、次の扉に向かった。
次の扉は、扉のプレートに、『プレゼン資料室』と書かれていた。その扉は、先程の扉のように歪んでいる事はなかった。巌達は、充分に警戒しながら、部屋の中に入っていった。部屋の中は、片側に４人位が座れるくらいの長さがあるテーブルと、部屋の奥のほうにパソコンとスクリーンがあった。また、テーブルの左側に４つ、テーブルの右側に４つのパイプ椅子があった。
「此処はどうやら、少人数に見せるためのプレゼンや小規模の会議をするときに使う場所のようだな。」
巌がそう言うと、真理奈が言う。
「じゃあ、あのパソコンを調べてみようよ。」

真理奈がそう言うと、巌も肯定し、パソコンを調べた。
パソコンは、電源が付いていなかったが、電気は供給されているようなので、真理奈は電源ボタンを押して、パソコンの電源を付けた。すると、画面に、、『Ｎｅｗ　Ｍａｋｅ　Ｏｆ　Ａｒｍｓ　Ｄｅｖｅｌｏｐｍｅｎｔ　Ｆｏｒ　Ｍｉｌｉｔａｒｙ　Ｏｂｊｅｃｔ　Ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎ』のロゴが表示された。それから暫くすると、デスクトップ画面が表示された。そのデスクトップ画面には、『コンピューター』と『ごみ箱』と『Ｎ．Ｍ．Ｏ．Ａ．Ｄ．Ｆ．Ｍ．Ｏ．Ｏ．』のアイコンしか表示されていなかった。すると、巌が言う。
「この『Ｎ．Ｍ．Ｏ．Ａ．Ｄ．Ｆ．Ｍ．Ｏ．Ｏ．』のアイコン、恐らくこれがドキュメントファイルだな。まずはこれを開こうぜ。」
巌がそう言うと、パソコンを操作している真理奈は『Ｎ．Ｍ．Ｏ．Ａ．Ｄ．Ｆ．Ｍ．Ｏ．Ｏ．』のアイコンをクリックした。すると、幾つかのプレゼンのファイルがあった。どれも『パワーポイント』というソフトウェアで作られたファイルのようだった。真理奈と巌はそのプレゼンのファイルを見ていたが、どれも一般的な業務関係の物で、気になるようなファイルはなかった。試しに一つ開いてみたが、『現行セキュリティシステムにおける保全性向上案』というものであり、生物兵器とは何の関係も無いファイルだった。
「どうやら、此処のパソコンには、表向きの業務関係のものしかないみたいだ。他を探索するぞ。」
巌がそう言うと、巌と真理奈は、『プレゼン資料室』全体の探索を始めた。部屋はそれほど広くなく、調べる所も少なかったので、探索はすぐに終わった。
「そっちでは何か見つかったか？」
探索が終了した巌が真理奈にそう尋ねた。すると、真理奈は応える。
「特に何も。でも、訳の解らないスプレーみたいなのはあったけどね。」

真理奈はそう言いながら、巌にスプレーの様な物を手渡した。そのスプレーは、形状は救急スプレーの様だったが、ラベルが貼られており、そのラベルには、『Ｉｎｖａｒｉａｂｌｅ　Ｍｅｄｉｃｉｎｅ　Ｖｅｒｓｉｏｎ６．０』と書かれていた。

「『Ｉｎｖａｒｉａｂｌｅ　Ｍｅｄｉｃｉｎｅ　Ｖｅｒｓｉｏｎ６．０』、……無変化薬剤って事か？」

巌がそう呟くと、真理奈が訊く。

「無変化薬剤？」

真理奈がそう言うと、巌が言う。

「『Ｉｎｖａｒｉａｂｌｅ　Ｍｅｄｉｃｉｎｅ』を直訳で和訳すると、無変化薬剤って事だ。まぁだからどうしたっていわれればそこまでなんだが。」

巌がそう言うと、真理奈が言う。

「でも、これはウィルスに関係ありそうね。」

真理奈がそう言うと、巌も言う。

「そうだな。確信は出来ないが、ウィルスの方も、『Ｖ（ヴァリアント）ウィルス』って名前なんだから、何かしらの関係はあるだろうな。」

巌がそう言うと、巌は続けて喋る。

「この部屋にはもう何も無いみたいだな。入ってない扉が一つあるから、そこを調べるぞ。」

巌がそう言うと、巌は一つの扉に近づいて行った。その扉は、『プレゼン資料室』に入って来た時に通ってきた扉と全く同じ形状をしていた。真理奈も扉の近くに移動すると、真理奈は喋る。

「この扉、場所的に、さっき開かなかった扉の奥の部屋に続いてそうだね。」

真理奈がそう言うと、巌は言う。

「そうだな。気を引き締めて行こうぜ。お前は一歩後ろから入って来い。」

巌がそう言うと、真理奈は肯定し、『スタームルガーＰ８９』を腰の位置に構えた。そして、巌は、『ブローニングＨＰ』を扉に向

け、扉を思いっきり開いた。

部屋の中は何も物品が無く、がらんとしていた。ただ一つおかしい所は、先程開かなかった扉の所に、生物兵器の様なものが倒れ掛かっている事だけだった。巌は、その生物兵器の様なものに銃口を向け、警戒しながら近づいていった。

遂に、その生物兵器の様なものに手が届く位置まで接近してきたが、その生物兵器の様なものは、ピクリとも動かなかった。巌はその生物兵器の様なものを調べた。すると、それは、巨大なカマドウマの様な生物だった。更によく見てみると、その巨大なカマドウマの腹部にはショットガンを持った人間がうずくまっていた。

「……どうやら、この生物兵器をショットガンで倒そうとしたものの、相打ちになって両方とも死んだってところか。」

巌はそう呟くと、後ろの真理奈に言う。

「どうやらこの部屋はこれだけしかないみたいだな。次の場所に向かおうぜ。…ただ、生物兵器と戦ったにしては、いやに部屋が綺麗なのが気になるけどな。」

巌はそう言うと、疑問を残しながらもこの部屋を出た。真理奈も続いて部屋を出る。そして、『プレゼン資料室』を出た所で、奥の通路に二人の人影がいるのを発見した。それをよく見ると、のび太と織恵だった。

「のび太君！」

真理奈がそう叫ぶと、のび太と織恵は振り返った。そしてのび太は言う。

「巌さん！　真理奈ちゃん！」

のび太は思わずそう叫んだ。すると、織恵は言う。

「やっぱりあの通路は、左側の通路に繋がっていたのね。」

織恵がそう言うと、巌が織恵に尋ねる。

「どういう経路で此処まで来たんだ？」
巌がそう訊くと、織恵は応える。
「右の通路を少し進むと、大会議室があって、そこの奥の扉を開けると、クランク型の通路があったの。そのクランク型の通路を進んだら、ばったり会ったって訳。」
織恵がそう言うと巌は言う。
「そうか。なら、此処からは４人一組で探索を進めよう。どうやら、此処にも何かがいそうだからな。」
巌がそう言うと、のび太が巌に尋ねる。
「何かがいそうって事は、巌さん達の方でも何か出たんですか？」
のび太がそう訊くと、巌は応える。
「もう死んでいた奴だが、新型の生物兵器らしい生物がいた。外見はカマドウマみたいだったが。」
巌がそう言うと、巌は続けて言う。
「俺達の方でもって事は、のび太達の方では生物兵器がいたのか？」
巌がそう訊くと、のび太は応える。
「ええ、『ＦＮ　ＭＩＮＩＭＩ』を持ったゾンビが３体程、『大会議室』にいました。」
のび太のその言葉を聴いた巌は言う。
「『ＦＮ　ＭＩＮＩＭＩ』っつーと軽機関銃か。それが３体となればきついな。やはり、４人で行動した方がいいな。」
巌はそう言った。すると、真理奈は言う。
「それより、早く探索を再開しようよ。」
真理奈がそう言うと、巌が言う。
「そうだな。此処で話をしても無駄だな。よし、行こうぜ。」
巌がそう言うと、４人は、通路の奥へと向かった。少し進むと、またもや同じ様な扉があった。巌はその扉を開けようとしたが、扉は全く動かなかった。
「……開かないな。恐らく、向こう側から打ち付けられているんだ。」

巌がそう言うと、のび太が言う。
「じゃあ、奥の扉に向かいましょう。」
のび太がそう言うと、４人は、奥の扉に向かった。その扉のプレートには、『電圧供給室』と書かれていた。そして、巌は、その扉を慎重に開けた。部屋の中は丁度、左側に延びているＬ字型になっていて、奥の壁には、４つのレバーがあり、その壁の右端には、何かの張り紙があった。その張り紙にはこう書かれていた。
『このレバーは、この施設の電圧供給用レバーです。左から、第一エレベーター、第二エレベーター、第三エレベーター、下層棟全体の電圧と並んでいます。原則として所定の社員以外の操作は出来ませんので注意してください。また、レバーの不具合を発見した場合、『施設構築ハードウェア課』に連絡をお願いします。』
その張り紙をみた織恵は言う。
「どうやらこれは、電圧供給の為の部屋みたいね。しかも、この張り紙を見る限り、１１階から上は、別の管制システムで制御しているようだわ。」
織恵がそう言うと、巌が言う。
「そうだな。見た感じ、４つ全て電圧が供給されているようだが。」
巌はそう言った。すると、のび太が、他の３人に話し掛けた。
「みんな！　ここに扉があるみたいです。」
のび太がそう言うと、他の３人も、のび太の所に行った。すると、電圧供給用レバーの並んでいる壁の中央の丁度向かい側の壁に、扉が一つあるのが確認できた。のび太はその扉をゆっくりと開けた。その部屋の中は、大量の長い棚があり、その棚には、大量の配線ケーブルや基盤、工具等があった。
「どうやら此処は、修理用の道具を置いておく為の場所みたいだな。」
巌がそう言うと、織恵が言う。
「見た感じ、あまり使われた形跡は無いみたいね。」
織恵がそう言うと、のび太が言う。

「修理した事があまり無いって事でしょうか？」
のび太がそう言うと、巌が言う。
「いや、定期点検とかでも、新しい配線や新しい基盤に変える事はある筈だ。恐らく、この様な部屋が他に幾つかあって、その部屋から修理道具を持ってきているから、この部屋の物はあまり使っていないんだろう。」
巌がそう言うと、真理奈が言う。
「それって、他の場所にも修理道具用倉庫みたいなのがあって、その場所を使う方が、此処の場所を使うよりも都合がいいって事？」
真理奈がそう言うと、巌は応える。
「ああ、恐らくな。ま、それがこの企業の特殊な業務に関係しているとは考えにくいけどな。」
巌はそう言うと、続けて喋る。
「この部屋は、修理道具位しかないようだな。他の場所をあたるぞ。」
巌がそう言うと、４人は、この部屋を出た。そして、『電圧供給室』を出た。『電圧供給室』の扉の反対側に延びていた。丁度、先程通ってきた通路が右に折れている形である。４人は、慎重に、その通路を進んで行った。その通路を進んですぐに、右側に扉があるのが見えたが、通路の突き当たりにレバーの様な物が見えたので、先にそれを調べる事にした。十数メートル程進むと、通路は行き止まり、壁には、先程の電圧供給用レバーの様なレバーと注意書きがあった。その注意書きにはこう書かれていた。
『このレバーは、緊急時の電子ロック解除システムです。この施設内で何らかの事故が発生した場合、子のレバーのスイッチを入れる事で、１階から１０階までの電子ロックが一時的に全て解除されます。』
その注意書きを見たのび太は言う。
「どうやらこのレバーで電子ロックの解除が出来るみたいですね。」

のび太がそう言うと、巌が言う。
「でも、もう既にレバーのスイッチは入れられてるようだぜ。誰かがこのレバーを操作してたみたいだな。」
巌がそう言うと、真理奈が言う。
「スイッチが入れられてるんなら、早く次の場所を調べたほうがいいんじゃない？」
真理奈がそう言うと、巌はその言葉に肯定し、４人は、先程の扉に戻った。そして、巌がその扉をゆっくりと開けた。扉を開けた先は、左に通路が延びていた。そして、通路の突き当たりの右側の壁には、またもや扉があった。しかし、その付近で何かが動いていた。そして、その動いていた何かは、近くの扉の向こうに消えていった。それを見た巌は言う。
「今、何かいたな。」
巌がそう言うと、のび太が言う。
「ああ、充分に気をつけて行こう。」
のび太がそう言うと、４人は、慎重にその通路を進んで行った。その通路の長さは、２０ｍ程であり、突き当りのすぐ右側に、扉があった。巌は、一拍置いてから、扉を開け、扉の向こうへと行った。扉の向こうも通路であり、扉を開けてすぐ、右に延びる通路があり、５ｍ程の長さがあった。その通路の突き当りでは左に通路が折れていた。巌とのび太が進行方向を警戒し、真理奈と織恵が後方を警戒する形で、４人は慎重に通路を進んで行った。４人は、５ｍ程進んだ後、左に曲がった。通路は更に続き、その通路は、１０ｍ程の長さがあり、突き当りでは、左に通路が折れていた。また、すぐ傍の左側の壁には、扉が一つだけあった。すると、のび太が銃を構え、その扉を開けた。その扉の奥は、金属製の棚が大量に並んでおり、その棚には、何かの資料が置かれていた。のび太がこの部屋に入ったすぐ後に巌達もこの部屋に入り、巌はのび太に話し掛けた。
「ここは、『会議録倉庫』のようだな。」
巌がそう言うと、のび太は巌に尋ねる。

「『会議録倉庫』？」
のび太が巌にそう訊くと、巌は応える。
「ああ、さっきの扉のプレートに書いてあった。会議録ってのは、会議の内容を記した文書の事だ。」
巌がそう言うと、のび太は納得した。そして、再びこの部屋をよく見た。すると、右奥に、更に扉があるのが確認できた。のび太はその扉に向かった。他の3人ものび太に続いて行った。のび太は扉のすぐ傍に待機し、他の3人が来たのを確認すると、銃を構えながら扉を開け、部屋の中へと入って行った。
その部屋の中は、一台のパソコンしかなく、他には何も無かった。のび太はそのパソコンに向かうと、試しに電源ボタンを押した。しかし、パソコンは全く動かなかった。その様子を見ていた巌は言う。
「もしかしてそのパソコン、ハードディスクが抜かれてないか？」
巌がそう言ったので、確かめてみると、確かにそのパソコンには、ハードディスクがなかった。
「ハードディスクが抜かれているって事は、何か都合の悪いデータがあって、俺達にそれを見られたくないから、抜かれてるって事か？」
巌がそう言うと、のび太は言う。
「多分、その可能性は高いでしょうね。」
のび太がそう言うと、のび太は立ち上がり、そのパソコンを後にした。そして4人は、『会議録倉庫』から出て、通路の奥へと進んで行った。
そして、突き当たりにぶつかると、通路は、左に折れていた。4人は左に曲がり、その通路を進むと、5m程の所で、大きな扉があった。その大きな扉の上部にはプレートがあり、そのプレートには、『最高会議室』と書かれていた。4人は気を引き締め、のび太と巌は、『最高会議室』と書かれた扉の向こうを警戒し、真理奈と織恵は、後方を警戒した。
やがて、一拍置き、巌は『最高会議室』の扉を開けた。まずは、巌

が部屋に入り、続いてのび太が入る。そして、一拍置き、真理奈と織恵も『最高会議室』に入った。

『最高会議室』はとても広く、先程のび太と織恵が通ってきた『大会議室』の2倍の広さはあった。そして『最高会議室』の奥に”そいつ”はいた。『最高会議室』の奥には、人間ほどの大きさをした生物兵器らしい”もの”がおり、外見はカマドウマのようだった。

「こいつ、さっき予備室で死んでいた生物兵器と同じタイプの奴だな。」

巌がそう言うと、織恵が言う。

「でも、こっちに向かって来ませんよ。」

織恵がそう言うと、巌は応える。

「こちらに気が付いてない可能性がある。どうやら視力は低いようだな。どうする?」

巌がそう言うと、そのカマドウマはゆっくりと近づいてきた。

「こっちに来ましたよ!」

織恵がそう叫ぶと、そのカマドウマは更にスピードを上げて4人に向かって来た。巌とのび太はそれぞれ『ブローニングHP』と『ベレッタM92FS』を構え、連射した。しかし、銃弾は悉く回避された。

「弾丸を避けた!?」

のび太が思わずそう叫んだ。すると、巌が言う。

「ああ、こいつはちょっと手強そうだな。攻撃の手を休めるな、撃ち続けろ!」

巌がそう言うと、巌とのび太と織恵はハンドガンを撃ち続けた。そして、真理奈は、カマドウマの生物兵器を挟んだ向こう側に移動し、『スタームルガーP89』を撃ち続けた。しかし、カマドウマの生物兵器は銃弾を悉く避け、後ろから来る弾丸は、殻の様な物に跳ね返された。すると、カマドウマの生物兵器は真理奈の方に向かって行った。そして、一瞬停止した後、真理奈に向かって飛び掛っ

てきた。真理奈は、『スタームルガーＰ８９』を床に投げ、肩に掛けていた『マーベリックＭ８８』を構え、飛び掛って来たカマドウマの生物兵器に撃った。

「ＳＹＡＡＡ

ＡＲＥＡ１０『幹部』

カマドウマの生物兵器の死体の傍にいる真理奈に巌は言う。
「やったな、真理奈。」
巌がそう言うと、真理奈が言う。
「いやぁ、ちょっと運が良かっただけだって。」
真理奈がそう言ったがのび太が言う。
「いや、あの機転は凄いよ。」
のび太がそう言うと、どこからともなく声が聞こえてきた。
「あの『センシティブ』をこうも簡単に撃破するとはな。どうやら、お前を過小評価し過ぎていたようだ。」
その声は部屋の奥から聞こえてきた。その声の主は、部屋の奥に何時の間にかいた。
「誰だ！」
巌がそう言いながら、その人物に『ブローニングＨＰ』を向けた。すると、その人物は、余裕たっぷりの態度で、言う。
「そんな物騒な物を簡単に向けないでくれよ。まぁいい。自己紹介が遅れたな。俺の名は、狩谷信彦だ。」
狩谷信彦と名乗ったその人物は、銃を向けられているにも関わらず、表情一つ変えずにそう言った。すると、巌が言う。
「此処にいるって事は、ナムオアダフモ機関の幹部クラスの奴だな。銃を向けられているのに、余裕たっぷりな態度をしているのがいい証拠だ。」
巌がそう言うと、狩谷は言う。
「だとしたら？」
狩谷がそう言うと、巌は言う。
「お前達の目的は何だ！　何の為にバイオハザードを起こした！」
巌がそう叫ぶと、狩谷は応える。
「それは言えんな。企業秘密だ。」

狩谷がそう言うと、巌が言う。
「ふざけている場合か？」
巌がそう言うと、狩谷は言う。
「まだ解っていないのか？　現在優位に立っているのは我々の方だ。素直に引いた方が身の為だぞ。」
狩谷がそう言うと、巌が言う。
「それで脅しのつもりか？　それともギャグか？　全く笑えんがな。」
巌がそう言ったが、狩谷は表情一つ変えずに言う。
「ただの事実さ。それにお前達にこう言っているのは参謀長官の意思ではない、この俺の優しささ。このまま進めば、お前たちは死ぬ事になるぞ。」
狩谷がそう言うと、巌は言う。
「俺はそんなに聞き分けがよくないんでね。」
巌がそう言うと、狩谷は言う。
「ふん、そうか……」
狩谷は後ろを向きながらそう言った。すると、近くにあった長テーブルを巌達に向かって蹴り飛ばした。巌はジャンプして、飛んでくる長テーブルを避け、のび太はしゃがんで、飛んでくる長テーブルを避けた。すると、狩谷は、織恵に急接近し、織恵を蹴り飛ばした。
「うわっ！」
織恵は数メートル吹っ飛ばされ、壁に激突した。すると、巌は、狩谷に向けて、『ブローニングＨＰ』を数発撃った。しかし、狩谷はいとも簡単に、飛んでくる銃弾を避けた。そして、巌に急接近し、右手で巌の銃を持っている手を掴み、左手で銃を叩き落した。そして、右肘で、巌の胸部を攻撃した。その衝撃で、巌は吹っ飛ばされた。
「ぐっ！」
巌は軽く声を挙げ、長テーブルが並んでいる所に吹っ飛ばされた。

のび太は、狩谷が攻撃した隙に銃撃したが、それさえも避けられた。
狩谷はのび太に攻撃すると思われたが、今度は側宙で真理奈の方に接近し、真理奈を蹴り飛ばした。
「真理奈ちゃん！」
のび太はそう叫び、更に銃撃したが、銃弾は全て避けられた。すると、狩谷はのび太に言う。
「遂に、お前一人になったな。ドラ様が一目置くお前の実力を見せてもらおうか。」
狩谷はそう言うと、のび太に向かって行った。のび太は、走って向かってくる狩谷にハンドガンを連射した。狙いは的確だったが、弾丸は全て避けられた。やがて、狩谷はのび太のすぐ目の前まで来た。そして、のび太の頭部に左フックを仕掛ける。のび太は、その攻撃を、頭を低くして避けた。狩谷は続いて、
のび太にキックを放った。のび太はその攻撃を、左方向に前転回避を行って避けた。のび太はなんとか攻撃を避け、体勢を立て直し、再び銃撃した。狩谷はのび太の銃撃を潜り抜け、のび太に肘打ちを仕掛けた。のび太は、軽くバックステップをしつつ、銃撃をした。
狩谷は頭を反らし、弾丸を避けようとしたが、弾丸は右肩に掠った。しかし、狩谷はすかさず左手でのび太に殴りかかってきた。のび太は、右手で何とかガードしたが、右手に持っていた『ベレッタＭ９２ＦＳ』を叩き落された。そして、数メートル飛ばされた。その瞬間にのび太は、左腿のホルスターに掛けてある『ベレッタＭ９２ＦＳ』を左手で取り出し、狩谷の左腕に向かって発砲した。弾丸は、見事に命中し、弾丸が命中した狩谷は怯んだ。
のび太は、着地して体勢を整え、左手に装備していた、『ベレッタＭ９２ＦＳ』を3連射した。３つの弾丸は全て、怯んでいる狩谷の左腕に命中した。
「へえ、中々やるな。流石はドラ様の眼鏡にかなうだけの事はある。」
狩谷はそう言った。弾丸が４発命中しているにも拘(かかわ)らず、狩谷は、

先程とほぼ同じ語調だった。
「…お前達はドラえもんの結成した部隊なのか？」
のび太が狩谷にそう訊いた。すると、狩谷は応える。
「まぁな、第三特殊部隊、別称、『特殊精鋭部隊』だ。第一特殊部隊と第二特殊部隊の雑魚共とは一緒にするなよ。」
狩谷はそう言った。すると、のび太は言う。
「『ナムオアダフモ機関』で研究しているヴァリアントウィルスとは何だ？『特殊精鋭部隊』と関係があるのか？」
のび太がそう言うと、狩谷は言う。
「Ｖ－ウィルスを知ってるか。どこまで知ってるかは解らんが、大した情報収集能力だ。」
狩谷がそう言うと、突然何かのコール音が鳴り響いた。すると、狩谷は、懐から通信機を取り出し、耳につけた。そして話し出した。
「狩谷だがどうした？……ああ、ちょっとした前戯だ。そう怒るな。……判った。今戻る。」
狩谷は誰かと電話しているようだが、のび太には、電話口からの声が聞こえないので、話が途切れ途切れにしか聞こえなかった。やがて、狩谷は通話を切り、のび太に言う。
「どうやら、上からの呼び出しのようだ。遊びは終わりだな。」
狩谷がそう言うと、狩谷は突然のび太の目の前から消えた。のび太はもしやと思い、扉の方を振り向いた。すると、扉が開いていた。
「……逃げられたか。」
のび太はそう呟いた。すると、どこからか声がした。
「何とか凌いだのか？」
声のする方を見ると、巌が立ち上がっていた。どうやら、のび太に話しかけたのは巌だったようだ。
「ええ、逃げられましたけど。」
のび太はそう返事した。すると巌は言う。
「生きてただけましさ。しかし、俺とした事がしくじっちまったな。」

巌はそう言った。すると、のび太が言う。
「あ、真理奈ちゃんと渡井さんは大丈夫かな?!」
のび太がそう言うと、巌が織恵の傍に駆け寄り、のび太は真理奈の傍に駆け寄った。二人とも特に目立った外傷は無く、大事には至らなかった。
「良かった、みんな無事で。」
のび太がそう呟いた。すると、巌が言う。
「しかし、のび太よくあのスピードに反応できたな。」
巌がそう言うと、のび太は応える。
「いや、夢中だっただけですよ。完全に反応できた訳じゃありませんでしたし。」
のび太はそう言った。すると、『最高会議室』にある唯一つの扉から、数人の人が入ってきた。
「お、のび太じゃねぇか。無事だったかよ?」
そう言ったのはジャイアンだった。ジャイアンの他に、スネ夫と迅と聖奈と燐と玲もいた。
「皆そろってどうしたの?」
真理奈がそう言った。すると、スネ夫が応える。
「どうやら、玲さん達の方で新しいゾンビが現れたんで、のび太達の方が無事かどうかを見に来たんだよ。」
スネ夫がそう言うと、巌が玲に訊く。
「新しいゾンビ?どんな奴だ?」
巌がそう訊くと、玲は応える。
「首から、先端に鋏の様なものが付いた巨大な触手が生えているゾンビよ。」
玲がそう言うと、巌は言う。
「俺達の方では、人間と同じ位の大きさのカマドウマの生物が現れた。恐らく、『ナムオアダフモ機関』の生物兵器だろう。」
巌がそう言うと、燐が言う。
「どうやら、試されてるようだな。」

燐がそう言うと、巌が言う。
「そういえばさっき、奴等の幹部の一人と接触した。」
巌がそう言うと、玲が驚いて言う。
「それで!?　何か判ったの?」
玲がそう言うと、巌は言う。
「いや、何も聞き出せなかった。奴、かなり強かったしな。」
巌がそう言うと、玲が言う。
「あんたの言い訳を訊いてる訳じゃないのよ。まさか、真っ先にやられたりしてないわよね?」
玲がそう言うと、巌が言う。
「のび太以外はあいつにあっさりやられたよ。狩谷っつってたな。」
巌がそう言うと、のび太は言う。
「……あいつは、人間とは思えない程、動きが速かった。もしかしたら、ウィルスで何かしたのかもしれません。」
のび太がそう言うと、燐が言う。
「謎は深まるばかりか。」
燐がそう言うと、玲が言う。
「敵の手の内が見えない以上、情報は出来るだけ手に入れておいた方がいいわね。さっき、『Ｌｖ．１ライセンスカードキー』を拾ったわ。これで、地下水路にあった資料のロックが外れる筈。行きましょう。」
玲がそう言うと、全員は、地下水路の方へと向かった。

その頃、ナムオアダフモ機関の１９階では、８人の人間がある部屋に集まっていた。その中に狩谷信彦もいた。
「狩谷、何の為に奴等と接触したのだ?」
初老の男性らしき人が狩谷にそう言った。すると、狩谷は応える。

「ちょっとした余興さ。」
狩谷がそう言うと、初老の男性は言う。
「緊急時までは極力、のび太達との接触を控えるようにドラ様から通達があった筈だが。」
すると、狩谷は応える。
「特に目立った情報漏洩もしてないし、いいだろ？　金田さん。」
狩谷がそう言うと、金田と呼ばれている初老の男性は言う。
「ふん、まあいいがな。だが、あいつ等を甘く見るなよ。ああ見えても、あのバイオハザードを生き抜いた連中だ。」
金田がそう言うと、金田は続けて喋る。
「それより、ドラコルルとかいうよそ者はどうした？」
金田がそう言うと、その場にいた一人の男が言う。
「この施設内にいるようですが、モニターには映っていません。恐らく、地下区画の何処かに居ると思われます。」
その男が言うと、金田は言う。
「そうか、奴の動向も気になるが、今は、のび太達の方を優先させるぞ。狩谷、良さそうなのはいたか？」
金田がそう言うと、狩谷は応える。
「真理奈あたりがいいんじゃないか？　ああ見えて戦闘能力はそこそこ高いようだ。」
狩谷がそう言うと、金田は言う。
「そうだな、ならば、奴にあれを投与するか。よし、岡田、ステーシャ、作戦の遂行に向かえ。後の隊員は待機だ。船井、お前には別の任務を与える。私に着いて来い。」
金田はそう言うと、比較的小柄な黒髪の男性を連れて、その部屋を出た。すると、岡田とステーシャも部屋を出て、地下に向かった。
二人が部屋を出ると、黒髪の碧眼のスペイン人男性がこの部屋にただ一人しかいない女性に向かって言う。
「そうだ、ナーシャ。お前確か、ススキヶ原の作戦に極秘に参加していたようだな。詳しく教えろよ。」

ナーシャと呼ばれたその人物は、金髪のロシア人女性であり、瞳の色は黒色だった。ナーシャは、その男の言葉に応える。
「なんでその事を知っているのか知らないけれど、言う義務は無いわ。極秘事項よ。」
ナーシャがそう言うと、その男は言う。
「新入りの癖によくそんな口が利けるな。」
その男がそう言うと、ナーシャは言う。
「…フアン。あなただって、入隊してから日が浅い筈よ。」
ナーシャがそう言った。フアンと呼ばれたその男は言う。
「俺は、ウィルスを投与して肉体を強化しているのよ。お前とは違う。」
フアンがそう言うと、ナーシャが言い返す。
「ふっ、でもそれ、組織の犬に成り下がる行為じゃなくって？　更に人外のね。」
ナーシャがそう言うと、フアンが言う。
「それでもいいさ。退屈なスペイン陸軍時代よりはましだ。」
フアンがそう言うと、フアンは続けて言う。
「そういやお前、出木杉とよく話してるな。知り合いなのか？」
フアンがそう訊くと、ナーシャは応える。
「ススキヶ原の極秘任務で共に任務を遂行したからね。それで知り合っただけよ。」
ナーシャはそう言いながら、部屋を出ようとした。
「おい、何処行くんだ？」
フアンがナーシャにそう尋ねた。すると、ナーシャは言う。
「私は入隊したてだからね。隣の資料室で調べ物でもするのよ。」
ナーシャはそう言って部屋を出た。そして、隣の部屋に入った。
すると、ナーシャは思う。
（……予想していたとはいえ、先が見えなくなってきたわね。そろそろ、特殊精鋭部隊も動き出す。あと、ドラえもんの奴も行動を起こすだろう。この件では確実にのび太君がキー・パーソン。ドラえ

もんは勿論の事、特殊精鋭部隊の奴等も、『Ｆ．Ｉ．Ａ．Ｓ．Ｕ．Ｆ．Ｅ．』だけでは対応しかねるだろう。だがそれは、特殊精鋭部隊の奴等も重々承知している。ならば、確実に何か策を練っている筈。『野比　のび太』という貴重な戦力にして重要な人間を失えば、のび太の仲間も、そして、世界も終わる。それだけは阻止しなければならない。――やはり、出木杉君に助力を仰ぐしかないか。……だけど今は情報収集をしておかなければならないね。）

ナーシャはそう思考を張り巡らせつつ、端末を操作した。そして、『現第三特殊部隊隊員名簿』と書かれたリンクを参照した。すると、次のように画面が変わった。

『２００４年現在、第三特殊部隊に所属している隊員のリストを下記に記載する。

隊長

・金田　正宗（４３）　日本人
Ｍａｓａｍｕｎｅ　Ｋａｎｅｄａ

副隊長

・岡田　樹（３７）　日本人
Ｔａｔｕｋｉ　Ｏｋａｄａ

一般隊員

・ファン・ブロトンス・マルドネス（３８）　スペイン人
Ｊｕａｎ　Ｂｒｏｔｏｎｓ　Ｍａｒｄｏｎｅｓ

・ステパン・アファナシエヴィチ・モスクヴィチョフ（４０）　ロシア人
Ｓｔｅｐａｎ　Ａｆａｎａｓｉｅｖｉｃｈ　Ｍｏｓｋｖｉｃｈｅｖ

・狩谷　信彦（２８）　日本人
Ｎｏｂｕｈｉｋｏ　Ｋａｒｉｙａ

・霧生　義則（３５）　日本人
Ｙｏｓｈｉｎｏｒｉ　Ｋｉｒｙｕｕ

・出木杉　英才（１０）　日本人
Ｅｉｓａｉ　Ｄｅｋｉｓｕｇｉ

・レナータ・ロマノヴナ・ウヴァチャナ（２６）　ロシア人
Ｒｅｎａｔａ　Ｒｏｍａｎｏｖｎａ　Ｕｖａｃｈａｎａ
』
その画面を見たナーシャは呟く。
「…やはり、日本人が多いのね。」
　ナーシャがそう呟くと、ナーシャは、名簿の一番上から、順番に見ていった。
（『金田正宗』。あいつはススキヶ原研究所での作戦で会話したけど、いけ好かない奴だったわ。次は、『岡田樹』ね。アスリートの様ながっちりした体つきだったわ。次は、『ファン・ブロトンス・マルドネス』。さっき私に話し掛けてきた奴ね。『岡田樹』程じゃないけれど、筋肉質だったわね。４人目は『ステパン・アファナシエヴィチ・モスクヴィチョフ』。さっき、『ステーシャ』って呼ばれていた奴ね。ファンとは違って、細身だったわ。次は、『狩谷信彦』。少し、軽めの男ね。だけど、食えない奴だわ。次は、『霧生　義則』。全く面識がないわね。ちょっと高慢と言ったところかしら。次は『出木杉英才』。彼は、ススキヶ原研究所の坑道で会ったわね。――あの時出木杉君が言った言葉…、もし本当なら、のび太君達と『Ｆ．Ｉ．Ａ．Ｓ．Ｓ．Ｕ．Ｆ．Ｅ．』の隊員は終わるわ。そうならない為には、出木杉君と私がうまく立ち回らなければならないわ。でも、私は、今の状況では動けない。現状では、出木杉君に全て任せるしかないわ。

――最後の『レナータ・ロマノヴナ・ウヴァチャナ』は私ね。よく『ナーシャ』って呼ばれるけれど。……私の歳って２６歳だったのね。忘れてたわ。仕事柄かしら？）
と、ナーシャは、名簿を見ながら思考を張り巡らせていた。すると、ナーシャは、端末の電源を落とし、『非正規武装部隊関係資料室』を出た。そして、第三特殊部隊の隊員が集まっていたさっきの部屋

に戻った。すると、すぐにファンが話し掛けてきた。
「もう情報を集め終わったのか？」
ファンがそう言うと、ナーシャは、顔をファンのほうに向けずに応える。
「あまり時間を掛けてられないから、名前だけは覚えたわ。」
ナーシャがそう言うと、霧生義則が言う。
「おい、そこの女、『ナーシャ』といったか？　ロシア陸軍時代に戦績をあげたとはいえ、少し、調子に乗ってるんじゃないか？　特に口調が。」
霧生がそう言うと、ナーシャは言う。
「別にロシア軍時代は関係ないでしょ。それに、私達は皆、『一般隊員』。そこに上下関係は無い筈よ。」
ナーシャがそう言うと、霧生が言い返す。
「同じじゃないだろ？　俺達はウィルスで人間以上の力を手に入れている。だがお前は生身の人間だ。つまり劣っているのよ。それになんだその重装備は？」
霧生がそう言うと、ナーシャが聞き返す。
「重装備？」
ナーシャがそう言うと、霧生が言う。
「『イジェメックＭＰ－４４３』：ハンドガンはいいとして、『ＡＫ－７４Ｍ』、『レミントンＭ８７０ＭｏｄｕｌａｒＣｏｍｂａｔＳｈｏｔｇｕｎ』、『ＳＶＤ』。アサルトライフルにショットガンにスナイパーライフル。ちょっと重装備じゃないのか？」
霧生のその言葉を聴いたナーシャは応える。
「ロシア軍じゃ大体こんな感じだったけど？　まあ、『レミントンＭ８７０ＭｏｄｕｌａｒＣｏｍｂａｔＳｈｏｔｇｕｎ』は、私が調達した物だけど。」
ナーシャがそう言うと、霧生とファンと狩谷は笑い出した。そして霧生は言う。
「おいおい、軍隊と『第三特殊部隊』が同レベル扱いかよ。いいか、

俺達は新時代の超人類なのだ。古臭い思想に囚われず、肉体も思想も常に可変に進化し続ける。我々は新世界の創造者なのだ。」

霧生がそう言うと、ナーシャは呆れたような表情をした。すると、霧生が言う。

「”何を言ってるんだこいつ？”と思っただろう？　確かに今のは話が飛躍しすぎた。だがな、結果的にはいずれそうなる。このウィルスが表舞台に姿を現したらな。つまり、既にそのウィルスによって強化されている俺達は、新世界創造の先駆者であるのだ。」

霧生がそう言うと、ナーシャが言う。

「…大層なご名目ね。でも、そんな簡単にいくかしら？」

ナーシャがそう言うと、霧生の代わりに狩谷が応える。

「別にそんなに難(かた)くならなくてもいいじゃねぇか。時間はいっぱいあるんだ。余裕持っていこうぜ。」

狩谷がそう言うと、フアンが言う。

「狩谷、時間はあるようでないようなものだ。そのような心持ちであれば、機を逃すぞ。」

フアンがそう言うと、狩谷が言う。

「でも、慌てちゃあかんよ。足元を掬われる。慌てたって何も良い事はねぇよ。」

狩谷がそう言うと、霧生が言う。

「確かにそこは区別が難しいところだな。ナーシャ、お前はどう思う？」

霧生がナーシャにそう尋ねると、ナーシャは応える。

「さぁね、私は今まで、そんなに時間に追われた事はないからね。どっちかといえば、狩谷の方に賛成かしら。」

ナーシャがそう言うと、霧生は言う。

「……まぁいいだろう。我々は、ウィルスのお陰で寿命も長い。着実に計画、行動していこう。まずは、のび太達と『F．I．A．S．S．U．F．E．』の問題を解決してからだ。」

霧生がそう言うと、フアンが言う。

「ん、そうだ、ウィルスといえば、出木杉の奴もウィルスを投与していなかったな。ナーシャ、何故、奴はウィルスを投与しないのだ？」

フアンがそう言うと、ナーシャは言う。

「知らないわよ。て言うか、直接本人に訊けばいいじゃない。」

ナーシャがそう言うと、霧生が言う。

「だって、お前と出木杉、密会してるんだろ。」

霧生がそう言うと、ナーシャが言う。

「間違ってはいないけれど、非常に誤解されそうな言い方ね。彼とは、仕事上の話をしているだけよ。プライベートな話は殆どしてないわ。」

ナーシャがそう言うと、霧生が言う。

「まあいい。奴には期待していない。どうやら今も地下で何かやっているようだが、奴はいまいち信用できん。」

すると、扉が開き、金田正宗と船井栄治が入ってきた。そして、金田が言う。

「些(いささ)かメンバーが少ないが、作戦の最終確認を行うぞ。全員席に着け。」

金田がそう言うと、ナーシャと霧生と狩谷とフアンと船井は席に着いた。すると、金田が話す。

「まず、作戦の確認の前に、こいつの紹介をしておこう。船井、私の傍へ来い。」

金田がそう言うと、船井は金田の左隣に移動した。すると、金田は言う。

「こいつは名を『船井栄治』という。元々は地下水路の管理人だったが、Ｖ－ウィルスを勝手に持ち出し、自分に投与するという困った者だ。しかし、今は状況が状況なので、参謀長官のドラえもんが承諾し、特殊作戦の一部に参加する事になった。皆、宜しく頼む。」

金田がそう言うと、船井は、軽く会釈をした。そして、金田は続けて言う。

「さて、早速だが、作戦の概要を話す。この作戦は、『特殊戦略指揮官』がたてている。そして、この作戦の執行責任者はこの私、『金田正宗』だ。これより、作戦の内容を話す。まず、ステーシャと岡田が協力し、『相葉真理奈』を連行する。そして、『相葉真理奈』に『Ｖ－ウィルス［ＣＯＤＥ：Ａｒｔｉｆｉｃｉａｌ　Ｍａｎｉｐｕｌａｔｉｏｎ］』を投与。わが隊の管理下に置き、非常時に対処出来るようにする。そして、次は、のび太達を、第三エレベーターホールに誘い込む。そして、のび太の両手両足を銃撃し、自由に動けないようにして、エレベーターシャフトに突き落とす。第三エレベーターシャフトは地下１０階まで直通であるから、地上１２階から地下１０階まで約６６ｍ。そこまでの高さから落ちれば、さしものび太であろうとも絶命するであろう。のび太さえいなくなれば、我々に怖い物はない。この作戦が成功した時は、第三特殊部隊全員を自由行動とする。……何か質問はあるか？」

金田がそう言うと、霧生が言う。

「船井の役目は？」

霧生がそう言うと、金田は応える。

「船井には、特別に任務を与えている。第三特殊部隊の作戦とは、また別のな。後は、質問は無いか？」

金田がそう言うと、ナーシャが質問する。

「作戦が無事終了したら、自由行動という事だけれど、召集はかからないのかしら？」

ナーシャがそう言うと、金田は応える。

「ああ、もし、何らかの異常事態が起きたとしても、極力我々で片付ける。まぁ、そんな事は無いと思うがな。他には何かあるか？」

金田がそう言ったが、他のメンバーはもう何も言わなかった。すると、金田が言う。

「ならばこれより、作戦を決行する。いつでも戦闘が出来るように準備をしておけ。」

金田がそう言うと、金田と船井はこの部屋から出て行った。金田

がそう言う直前に、ナーシャは、第三特殊部隊の通信機とは違う、何かのＰＤＡ端末のディスプレイに指を触れ、何かの操作をしていた。そして、打った文章を、別の端末に向かって送信した。ナーシャのその一連の動作は、この部屋にいる誰にもばれなかった。送信を終えたナーシャは思った。

（取り敢えずこれで、どうにかなるわね。今送った文章が無事出木杉君に届けば、彼ならほぼ確実にのび太君を助けられる。あとは、自由行動の時間に私がどう動くかね。）

　すると、ナーシャは、全ての銃火器の点検をした。

その頃、地下１０階の『休憩室』では、出木杉がいた。出木杉は、白い襟付きの半袖と青色の短パンを穿いていた。

「ふぅ、どうやら上では、のび太君達がいろいろ動いているようだね。本来は、のび太君達に合流して、直接協力をしたいところだけれど、そんな事をすれば、たちまち第三特殊部隊の凡人共にばれるからね。第三特殊部隊の事は、ナーシャさんに任せよう。」

　出木杉はそう呟きながら、ショットガンらしき銃火器の整備を行っていた。そのショットガンは、エジェクションポートが無く、代わりに、リボルバーハンドガンにある様なシリンダーがあった。出木杉が作業しているデスクの上には、『１２Ｇａｕｇｅ　００Ｂｕｃｋ』や『１２Ｇａｕｇｅ　Ｓｌｕｇｓｈｏｔ』、『１２Ｇａｕｇｅ　Ｆｌｅｃｈｅｔｔｅ』

『１２Ｇａｕｇｅ　ＤＲＡＧＯＮ'Ｓ　ＢＲＥＡＴＨ』や『１２Ｇａｕｇｅ　ＴＡＳＥＲ－ＸＲＥＰ』や『Ｆｒａｇ－１２』と書かれた箱があり、その箱の中には、ショットシェルがあった。出木杉は、そのショットガンを組み立て終わり、呟いた。

「これで『Ｓｉｘ　Ｓｐｌａｓｈ』の調整も終わった。『Ｒａｐｉ

d Burst』と『Durable』の整備も終わった事だし、僕もそろそろ動く頃かな？」

出木杉がそう呟くと、出木杉は、何かに気づいて、懐に手を延ばした。出木杉は、ナーシャが使っていた様なPDA端末を取り出し、着信履歴を見た。すると、一通の電子メールが来ていた。送信者は『ナーシャ』だった。出木杉は、そのメールを開いた。すると、そのメールにはこう書かれていた。

『第三特殊部隊の作戦が確定したわ。のび太君を第三エレベーターシャフトに突き落とすそうよ。突き落とす際にのび太君の両手両足の自由を奪うらしいわ。地下10階まで落下するそうだから、そっちで何とかお願いするわ。作戦が終わり次第、自由行動になるから、その時になったら、私も地下に向かうわ。』

それを見た出木杉は、呟く。

「のび太君を、エレベーターシャフトを通じて突き落とすか…。凡人にしては中々の考えだね。でも、その前に、のび太君達の誰か一人に、『Ｖ－ウィルス［ＣＯＤＥ：Ａｒｔｉｆｉｃｉａｌ Ｍａｎｉｐｕｌａｔｉｏｎ］』を投与する筈。その件についての対策を先に立てておかなければならないな。……そろそろ行くか。」

出木杉はそう言うと、デスクの引き出しを開け、引き出しの中から、腰に掛ける、ベルトタイプのホルスターを取り出し、装着した。そして、右側と左側にあるホルスターに、『ＦＮ ファイブセブン』と『ＡＰＳ』らしき拳銃を収納し、後ろの部分に、閃光手榴弾（スタングレネード）を装着した。そして、ベルトの尻の部分にあるポケットに、一本のカプセルを入れた。更に、刀身が20cm程のシースナイフをベルト付きの鞘に収納し、左肩に固定した。

の最後に、壁のフックに掛けてあった、白衣を着用し、出木杉は『休憩室』を出た。

ＡＲＥＡ１１『再会』

のび太達は１１階から、来た道を戻り、１階の社員食堂の梯子から地下水路に向かった。そして、『Ｌｖ．１研究資料室』の扉を開けた。玲は、端末に向かい、端末を起動した。そして、暫くして、『Ｎｅｗ　Ｍａｋｅ　Ｏｆ　Ａｒｍｓ　Ｄｅｖｅｌｏｐｍｅｎｔ　Ｆｏｒ　Ｍｉｌｉｔａｒｙ　Ｏｂｊｅｃｔ　Ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎ』のロゴが表示され、デスクトップ画面が表示された。すると玲は、『Ｎ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．性能データ』と書かれたＣＤ－Ｒを読み込ませた。そして、フルスクリーン表示で次の様に表示された。玲は、隣にあるカードリーダーに、『Ｌｖ．１ライセンスカードキー』を読み込ませた。すると画面に、『ライセンス情報を読み込んでいます……。』と書かれたポップアップが表示された。数秒すると、『ライセンス情報を確認。Ｌｖ．１のロックが解除されます。』と表示された。すると、玲は、［ＣＯＤＥ：００３］～［ＣＯＤＥ：００６］の『Ｎ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．』のデータを見ようとした。まずは、『ＣＯＤＥ：００３　ウェブフライヤー』を参照した。すると、画面が次のように表示された。

『ＣＯＤＥ：００３『ウェブフライヤー』

全長（ＳＩＺＥ）

小型

破壊力（ＰＯＷＥＲ）

Ｄ

装甲（ＡＲＭＯＲ）

Ｄ

生命力（ＶＩＴＡＬＩＴＹ）

Ｃ

敏捷性（ＡＧＩＬＩＴＹ）

Ａ

知能（ＩＮＴＥＬＬＩＧＥＮＣＥ）
Ｃ
機動力（ＭＯＢＩＬＩＴＹ）
Ｄ
量産性（ＣＯＳＴ　ＰＥＲＦＯＲＭＡＮＣＥ）
Ｓ
弱点部位（ＷＥＡＫ　ＲＥＧＩＯＮ）
腹部
弱点性質（ＷＥＡＫ　ＰＲＯＰＥＲＴＹ）
焼却
肉体損傷による戦闘力減衰値
１００％
総合評価（ＧＥＮＥＲＡＬ　ＰＥＲＦＯＲＭＡＮＣＥ）
Ｂ
備考
個体での戦闘力は低く、ハンドガンでも充分に対応できるが、それは個体数が少ない場合であり、大抵は１０匹～２０匹の集団で行動する。体格が小さい為、咬み付く等の直接攻撃の破壊力は少ないが、集団で固まって飛行し、対象の頭上を通り抜ける際に粘着性の糸を束ねて放出する事により、対象を全く動けなくしてから、ゆっくりと捕食する性質を持っており、モデュレイテッドＢ．Ｃ．Ｗ．としては、かなり高度な性能を持つ。しかし、炎に当たると、瞬時に絶命する。更に、煙を嫌う性質も持っており、焼夷手榴弾や煙幕弾に弱い。』
それを見たのび太は言う。
「こいつはまだ出てきてないですね。」
のび太がそう言うと、玲が言う。
「でも、これで対策を立てられるわ。」
玲がそう言うと、玲は、次のＮ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．のデータを見た。玲は、『ＣＯＤＥ：００４『センシティブ』』を参照した。

すると、こう表示された。

『ＣＯＤＥ：００４『センシティブ』

全長（ＳＩＺＥ）

中型

破壊力（ＰＯＷＥＲ）

Ｂ

装甲（ＡＲＭＯＲ）

Ａ

生命力（ＶＩＴＡＬＩＴＹ）

Ｂ

敏捷性（ＡＧＩＬＩＴＹ）

Ｂ

知能（ＩＮＴＥＬＬＩＧＥＮＣＥ）

Ｄ

機動力（ＭＯＢＩＬＩＴＹ）

Ｓ

量産性（ＣＯＳＴ　ＰＥＲＦＯＲＭＡＮＣＥ）

Ａ

弱点部位（ＷＥＡＫ　ＲＥＧＩＯＮ）

腹部

弱点性質（ＷＥＡＫ　ＰＲＯＰＥＲＴＹ）

轟音（ただし、至近距離に限る）

肉体損傷による戦闘力減衰値

８０％

総合評価（ＧＥＮＥＲＡＬ　ＰＥＲＦＯＲＭＡＮＣＥ）

Ｂ

備考

カマドウマをベースとして、『Ｖ（ヴァリアント）ウィルス』を用いて作り出したＮ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．。常に六足歩行をしている上に、背部には、強力な殻があり、撃破する事が非常に難しい。その殻は、クラ

ス?のボディーアーマー並の防御能力を持ち、更に、何層にも重なっている為、マグナム弾や対戦車ライフル弾さえ跳ね返される。即ち、腹部を銃撃する事が必須となる。及び、２m近くもある触覚が伸びており、正面から来る弾丸を回避する瞬発性も持っている。そして、最も稀有な特性として、対象の殺害（及び捕食）よりも、自身の生命維持を重視し、生命が危険にさらされた場合、逃げる事がある。その際、エネルギー摂取の方法として、この生物兵器は、人間やゾンビの死体の他、『ディソルブ』の死体を捕食する性質を持つ。数ある生物兵器の中で、同じ『Ｎ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．』を捕食する生物兵器は、『センシティブ』以外に無く、珍しいタイプの生物兵器と言える。

カマドウマは好音性を持ち、音のする方へ向かっていく特徴がある。その分視力が悪く、音を出さなければ、『センシティブ』に気づかれない事も可能。また、至近距離でスタングレネードを使えば、その時の強烈な音響により、一時的に感覚器官が麻痺し、スタン状態に陥る。この時に腹部を攻撃すれば撃破が可能。しかし、その他の撃破方法は殆ど無く、この欠点は修正せずに此の侭にして置いた方が、生物兵器としての運用は容易である。』

これを見た巌は言う。

「こいつはさっき俺達が戦った奴だな。」

巌がそう言うと、のび太が言う。

「あの時、真理奈ちゃんが奴の腹を銃撃していなかったら、僕達はやられていたかもしれなかったな。流石だね。」

のび太がそう言うと、真理奈が言う。

「いやいや、ただの偶然だって。」

真理奈がそう言うと、玲は次のＮ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．の『ＣＯＤＥ：００５『ティンダー』』を参照した。すると、次のように表示された。

『ＣＯＤＥ：００５『ティンダー』

全長（ＳＩＺＥ）

中型（幼体時）及び大型（成体時）
破壊力（ＰＯＷＥＲ）
Ｂ
装甲（ＡＲＭＯＲ）
Ｅ
生命力（ＶＩＴＡＬＩＴＹ）
Ｃ
敏捷性（ＡＧＩＬＩＴＹ）
Ｆ（幼体時），Ｂ（成体時）
知能（ＩＮＴＥＬＬＩＧＥＮＣＥ）
Ｅ
機動力（ＭＯＢＩＬＩＴＹ）
Ｃ
量産性（ＣＯＳＴ　ＰＥＲＦＯＲＭＡＮＣＥ）
Ａ
弱点部位（ＷＥＡＫ　ＲＥＧＩＯＮ）
頭部
弱点性質（ＷＥＡＫ　ＰＲＯＰＥＲＴＹ）
冷凍
肉体損傷による戦闘力減衰値
８０％
総合評価（ＧＥＮＥＲＡＬ　ＰＥＲＦＯＲＭＡＮＣＥ）
Ｂ
備考
通常時は幼体の状態で、巨大な芋虫の様な形態をしている。この状態では、敵とみなした生物に向かって口腔から火を吐き、無差別に焼却する性質をを持つ。この時の火は、火炎放射器と同じ原理であり、まず、この生物兵器の体液はアルコールの様な可燃性を持っており、吐息は、酸素の様な助燃性を持つ。敵を発見した際、体液を息と共に噴出し、歯で火花を起こす事で火を吐くという事だ。但し、

射程距離はかなり短い上に（約５ｍ）、本体の動きもかなり遅いので、兵器としての実用性は低い。しかしながら、この生物兵器は第二形態を持っており、幼体時に多大な肉体損傷を受けると、背部を突き破り、巨大な蝶の様な生物が出てくる。この生物が最も厄介であり、自ら攻撃するような事は無いものの、可燃性の高い燐粉を周囲に散布する性質があり、周辺で小さい火花が起きようものなら、粉塵爆発の要領で、連鎖爆発を起こす。この生物兵器の付近では全く銃撃が出来ない為、敵地の拠点で放てば最も効果的である。』

これを見た燐は言う。

「こいつは、市街地で戦闘ヘリの大群と戦った時にやりあった奴だな。」

燐がそう言うと、巌が言う。

「で、どうやって倒したんだ？　銃火器じゃ無理そうだぞ。」

巌がそう訊くと、燐の代わりに迅が応える。

「私の刀で敵の翅を切断したんです。」

迅がそう言うと、玲が言う。

「じゃあ、ナイフのような、火薬を使わない武器を使わなければいけないって事ね。」

玲がそう言うと、玲は、次のＮ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．の『ＣＯＤＥ：００６『デストロイヤー』』を参照した。すると、次のように表示された。

『ＣＯＤＥ：００６『デストロイヤー』

全長（ＳＩＺＥ）

中型

破壊力（ＰＯＷＥＲ）

Ｓ

装甲（ＡＲＭＯＲ）

Ｃ

生命力（ＶＩＴＡＬＩＴＹ）

Ａ

敏捷性（ＡＧＩＬＩＴＹ）
Ｓ
知能（ＩＮＴＥＬＬＩＧＥＮＣＥ）
Ａ
機動力（ＭＯＢＩＬＩＴＹ）
Ｓ
量産性（ＣＯＳＴ　ＰＥＲＦＯＲＭＡＮＣＥ）
Ｆ
弱点部位（ＷＥＡＫ　ＲＥＧＩＯＮ）
頭部
弱点性質（ＷＥＡＫ　ＰＲＯＰＥＲＴＹ）
なし
肉体損傷による戦闘力減衰値
－５０％
総合評価（ＧＥＮＥＲＡＬ　ＰＥＲＦＯＲＭＡＮＣＥ）
Ｓ
備考
個体での戦闘能力は群を抜いており、破壊力，生命力，敏捷性，知能，機動力，全てに長け、特に敏捷性が高く、１００ｋｍ／ｈを維持する事が可能であり、瞬間的には、２３０ｋｍ／ｈを出す事も可能。更に、牙（顎）の力も強く、大口径ライフル弾である、『．５０ＢＭＧ弾』や、大口径のマグナム弾である、『．５００Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ弾』さえも通さない、『クラーケン』の異常発達した筋肉組織も破壊する事が可能である。特に、肉体損傷を受けても、戦闘力が低下しないばかりか、逆に増加する傾向があり、生物兵器としての完成度は非常に高い。
後、これは未確認事項だが、一撃必殺の『噛み砕き』は、鋼鉄すらも粉砕する威力がある。
このＮ．Ａ．Ｃ．Ｂ．Ｃ．Ｗ．の最大の欠点として、製造にコストが掛かりすぎるという点がある。しかし、それを帳消しにするほど

の戦闘力を持っているので、この欠点はほぼ無視してもいい。ナムオアダフモ機関が開発した生物兵器の中で、最大の成功作である。』

これを見たのび太は言う。

「こいつは、大通りを通った時に戦った敵だ。間違いなく今まで戦ってきた奴の中で一番強かった。」

のび太がそう言うと、のび太は続けて言う。

「これに書いてある通り、あいつはスピードが物凄く速かった。あの時も、たまたま勝てたようなもんだ。今度戦ったら、また勝てるかどうかは解らない。」

すると、ジャイアンが言う。

「へぇ、バイオハザードが起きてから全く弱音を吐かないお前がそう言うって事は相当の奴だな。」

ジャイアンがそう言うと、聖奈が言う。

「この文章を見てみると、そんなに量産されているようには見えないけど…。」

聖奈がそう言うと、玲が言う。

「だけど、1～2体ぐらいは生産されている可能性はあるわ。充分に気を付けましょう。」

玲がそう言うと、玲は続けて言う。

「『Ｌｖ．１ライセンス』で閲覧できる情報は此処までのようね。」

玲はそう言うと、端末の電源を落とした。そして、玲は言う。

「あんまりもたもたしていられないわ。『Ｌｖ．１ライセンスカードキー』があれば、１１階と１２階には行ける筈だから、早く行きましょう。」

玲はそう言ったが、スネ夫がそれを遮る。

「ちょっと待ってよ玲さん。こんな物があったんだけど。」

スネ夫はそう言いながら、手に持っていた数枚の紙媒体の資料を差し出した。

「これは？」

と、玲が尋ねたが、スネ夫は、
「言うより見た方が早いよ。」
と言った。すると、玲と、他の全員は、その資料を見た。その資料は、数枚のプリントをステープラーで留めた物だった。その資料の一枚目の表には、『《有機高分子化合生物核酸変異ウィルスについて》』と書かれていた。玲はその資料の一枚目をめくった。すると、こう書いてあった。
『《有機高分子化合生物核酸変異ウィルスについて》
ｔ－ウィルスは、高分子有機化合生物のみが持つ、『新陳代謝』機能を爆発的に高めて促進させる効果があるが、素体の生理機能や抑制機関を破壊して、細胞の増殖を行うので、素体に本来備わっている筈の能力が損失する可能性が非常に高いという欠点を持っている。例を挙げると、人間に投与した場合、新陳代謝機能の促進によって、損傷部位を瞬時に再生出来る他、筋肉組織の増殖による筋力の上昇等がある。しかし、人間の能力とも言える『知能』が大幅に損なわれる。この欠点は、生物兵器開発に置いては非常に致命的であり、高性能な生物兵器を生み出せない一番の理由となっている。
しかし、ナムオアダフモ機関は、『ＰＣＩＡ』と協力し、新たなウィルスを開発した。そのウィルスは、生物が元々持つ能力を保ちつつ、適応できるスピードで細胞を増殖する事が可能となった事で、安定した生物兵器を生み出せるようになった。また、人間に投与すれば、知能を全く損なわずに、身体能力を劇的に上昇させる事も可能となった。このウィルスの名称を『有機高分子化合生物核酸変異ウィルス』と呼び、『Ｈｉｇｈ　Ｐｏｌｙｍｅｒ　Ｏｒｇａｎｉｃ　Ｃｏｍｐｏｕｎｄ　Ｎｕｃｌｅｉｃ　Ａｃｉｄ　Ｖａｒｉａｎｔ　Ｖｉｒｕｓ』、略称『ヴァリアントウィルス：Ｖａｒｉａｎｔ　Ｖｉｒｕｓ』と呼ぶ事にした。
現在この、『Ｖ（ヴァリアント）－ウィルス』は、試作段階であり、素体の体細胞組織にどの様な影響を及ぼすのか、詳しい事は解っていないので、あらゆる実験データが必要となる。』

それを見た玲は言う。
「どうやらこれが『Ｖ－ウィルス（ヴァリアント）』のようね。」
玲がそう言うと、のび太が言う。
「でも、これはまだ、結構昔のデータみたいですよ。Ｖ－ウィルス開発当初のものらしいし。」
のび太がそう言うと、巌が言う。
「確かにな。あのカマドウマの生物兵器や、異形のゾンビは恐らくＶ－ウィルスで造った物だろう。」
巌がそう言うと、燐が言う。
「遂に核心に近づいてきたって事か？」
燐がそう言うと、ジャイアンが小声でのび太に囁く。
「……『ＰＣＩＡ』か。のび太、お前はどう思う？」
ジャイアンがのび太にそう訊くと、のび太は応える。
「う～ん。だけど、『ＰＣＩＡ』はあの一件で解体された筈。それにあいつ等は僕達から見たら豆粒人間だし。偶然だと思うんだけど。」
のび太がそう言うと、ジャイアンが言う。
「しかし、俺はどうも、只の偶然には思えねえんだよな。」
ジャイアンがそう言うと、のび太は言う。
「でも、もし本当なら、いずれ解るだろうね。」
のび太がそう言うと、ジャイアンは、
「ああ、そうだな。」
と言った。そして、スネ夫が全員に言う。
「で、もう一つ資料があるんだけど。」
スネ夫はそう言うと、手に持っていたもう一つの資料を手渡した。その資料も、数枚のプリントをステープラーで留めた物だった。その資料にはこう書いてあった。
『《Ｖ－ウィルス実用化における経緯》
Ｖ－ウィルス（ヴァリアント）が、ナムオアダフモ機関が開発したウィルスというのは、最早周知の事実だ。しかし、開発当初のＶ－ウィルス（ヴァリアント）は、特定

の電気信号で、ウィルスの核に、論理構成を組み込む性質があったが、素体への変異能力が低く、劇的な戦闘力向上は見られなかった。しかし、Ｓ－ウィルス（スティンガー）の理論を応用する事で、強力な変異能力をもった。そのＳ－ウィルス（スティンガー）の理論とは、『Ｓ－ウィルス（スティンガー）は、『プログラム－Ｔ』を人間の遺伝子を持つ個体に限定的に発現させる能力を持っている。』という理論である。この理論を応用する事により、Ｖ－ウィルス（ヴァリアント）は、あらゆる性質に変わるウィルスに成り得た。今後は、生物兵器の市場において、Ｖ－ウィルス（ヴァリアント）で造られた生物兵器が注目される事だろう。』

それを見た聖奈は言う。

「これを見る限り、Ｖ－ウィルスは、初期ではあまり優秀なウィルスではなかったけれど、改良を加える事でどんな性質にも変える事が出来るウィルスになったって事ね。」

聖奈がそう言うと、真理奈が言う。

「じゃあ、このウィルスで生物兵器を造ったって事なんだね。」

真理奈がそう言うと、迅が言う。

「どうやら、このウィルスを押さえればどうにかなりそうですね。」

迅がそう言うと、玲が言う。

「でも、どうも厄介な事になったわね。これは、簡単には終わりそうにもないわ。」

玲がそう言うと、玲は立ち上がる。そして、右腿のホルスターから『ベレッタＰｘ４』を取り出した。それを構えて、玲は言う。

「じゃあ、上の階へ行きましょう。」

玲がそう言うと、全員は、『Ｌｖ．１研究資料室』を出た。そして、上の社員食堂に続く梯子に向かおうとした時に、事件は起こった。先頭を歩いている玲が、曲がり角に差し掛かった時、右側から銃撃された。

「！　隠れて！」

玲がそう叫んだ。玲は壁に身を隠した。玲のすぐ近くにいた燐は玲に訊く。

「敵か？」
燐がそう言うと、玲は応える。
「ええ、でも、まだ姿は見てないわ。」
玲はそう言いながら、向こうの出方を伺う。全員が前方に注意を向けていたので、後方から来る者には誰一人気が付かなかった。やがて、その者が、一番後ろにいる真理奈を攻撃した。
「うわ！」
真理奈はそう声を挙げたが、すぐに気絶してしまった。真理奈のすぐ傍にいたのび太が一番先に異変に気づいた。
「！　真理奈ちゃん！」
のび太がそう言ったが、後ろから急襲した者は真理奈を担ぎ、そのまま『実験区画』と書かれている扉に向かっていた。のび太はすぐさま追い掛けた。続いて異変に気づいたジャイアンや厳達も追いかけて行った。その場所に残ったのは、玲と燐と聖奈だった。
「……後ろでは何かあったみたいだけど、行かなくていいのか？」
燐がそう言うと、玲は応える。
「向こうはのび太君たちが向かったわ。私達はここの敵を相手するのが役目よ。」
玲がそう応えると、聖奈が言う。
「でも、相手はさっきの銃撃以外は何もしてきませんね。」
聖奈がそう言うと、玲はさっき敵がいた場所を確認した。
「！　いないわ！　まさか逃げられた？！」
玲がそう言うと、燐が言う。
「……あいつはさっきまでいた筈だ。この短時間で一体何処に逃げたんだ？」
すると、聖奈が言う。
「もしかしたら、さっき厳さん達が戦ったっていう狩谷っていう人かも！」
聖奈がそう言うと、玲が言う。
「もしかしたらそうかもね。…私は奥の方を確認するわ。燐と聖奈

ちゃんは此処にいて。いざと言う時は援護をお願いするわ。」
　玲はそう言うと、慎重に、通路の奥に進んで行った。曲がり角の奥も見たが、先程の人物はいなかった。
「どうやら、本当に逃げられたみたいね。」
　玲がそう言うと、燐が言う。
「じゃあ、のび太達の方を追いかけようぜ。向こうでも何かあったかもしれないしな。」
　燐がそう言うと、玲は肯定し、のび太達が向かった『実験区画』と書かれた扉に向かった。しかし、聖奈は何を思ったのか、ふと、上を見上げた。すると、玲と燐に向かって叫んだ。
「！　玲さん！　上に何かいます！」
　聖奈がそう叫ぶと、玲は天井に、『ベレッタＰｘ４』の銃口を向けた。するとそこには、大きな蜘蛛の様な生物がいた。その蜘蛛は、『ブラックタイガー』程の大きさは無かったが、それでも、人間と同じ位の体長を持っていた。
「ＧＹＯＯＯ

その数分前、のび太達は、連れ去られた真理奈を追い掛け、『実験区画』と書かれたプレートが掛かっている扉に向かっていた。そして、その扉を開けた。その扉の向こうは、今までの地下水路と同じ様な造りをしていた。少し進んだ所の左側には扉があり、通路は右に折れていた。その扉には、『B棟』と書かれていた。そして、その扉の向かい側には、更に通路が延びていた。真理奈を連れ去った者は、その通路を進んで行った。のび太達もその通路を進んで行った。右に曲がっているその通路は、右に折れた後、60m程延びており、更に左に折れていた。真理奈を連れ去った者はその突き当たりを左に曲がった。のび太達もそれを追い掛けた。しかし、30m程進んだ所でいきなり網状の足場が粉砕した。そこは丁度のび太がいた場所だった。しかし、のび太は直前で気づき、前転で回避した。すると、のび太は後方にいる巌達に言う。

「巌さん！　下に何かいます！」

のび太がそう言うか言い終わらない内に、穴が開いた足場から何かが飛び出した。その飛び出してきた”それ”は、ゾンビの様だったが、今までのゾンビとは違い多少の知性が感じ取れた。巌は、『ブローニングHP』をそのゾンビに向けると、のび太に言う。

「のび太！　こいつは俺達に任せてお前は真理奈をさらった奴を追え！」

巌のその言葉を聴いたのび太は、

「解りました！　巌さん達も気をつけて！」

と言い、通路の先を進んで行った。のび太は突き当たりを左に曲がった。すると、約30m向こうの左側の壁にある扉に入って行った人影が見えた。のび太は瞬時にそれは真理奈を連れ去った奴だと判断し、すぐに追い掛けた。その扉の向こうは、下りの階段があり、のび太はその階段を駆け下りて行った。2階分程下りると、階段が終わり、扉が一つだけ見えた。のび太はその扉を開けた。その扉の向こう側は、巨大な水槽が下にあり、その上を、丁字状の橋が架か

っていた。その橋はのび太から見て、左右に延びているタイプの丁字状の橋であり、その丁字状の橋の左側には何も無かったが、右側の方には、扉があった。その丁字状の橋の右側の方に、真理奈を担いだ人物がいた。その人物は今にも、扉を開けそうな位置にいた。

「待て！」

のび太はそう叫ぶと、真理奈を担いだ人物の足を狙って『ベレッタＭ９２ＦＳ』を撃とうとした。しかし、のび太は、腕を引いて身を少し引いた。すると、さっきまで、のび太が構えていた『ベレッタＭ９２ＦＳ』があった位置に銃弾が飛んできた。のび太は銃弾が飛んできた位置を向いた。すると、丁字路状の橋の左側に銃を構えた人影があった。その人影は、白衣を着ていたが、のび太のよく知る人物だった。のび太はその人物の名を呼んだ。

「出木杉！！」

のび太がそう言うと、出木杉は言う。

「のび太君、久しぶりだね。地下の坑道以来かな。」

出木杉がそう言うと、のび太の右側の方で、扉の開閉音がした。その時、真理奈を担いだ人物がその扉を通った。のび太は出木杉から目を離さず、『ベレッタＭ９２ＦＳ』の銃口を向けて言う。

「出木杉、何が目的なんだ？」

のび太がそう訊くと、出木杉は応える。

「それは応えられないね。まぁ、直に判ると思うけどね。」

出木杉がそう応えると、のび太は言う。

「……何で邪魔をしたんだ？」

のび太がそう言うと、出木杉が応える。

「――今は助けなくていいって事さ。まだ理解できないと思うけどね。」

出木杉がそう応えると、のび太は一拍置いて言う。

「……僕と戦うのか？」

のび太がそう言うと、出木杉は応える。

「……止めておくよ。やりあったら両方とも深手を負いそうだから

ね。」

出木杉がそう言った途端、水槽から巨大な水飛沫が上がった。

「！　何だ！」

のび太はそう言って、水槽を見た。すると、水飛沫と共に、巨大な烏賊（いか）の生物が現れた。

「出木杉！　まさかこれは…。」

のび太がそう言うと、出木杉は応える。

「僕の差し金じゃないよ。大体、こんな状況で出したら、僕の方が危ないしね。何かしらの理由で制御を放れた、ってところじゃないかな。」

出木杉はそう言うと、続けて喋る。

「……のび太君、ここは共闘といこうか。」

出木杉がそう言うと、のび太は「ああ。」と頷いた。

ＡＲＥＡ１２『共闘』

出木杉は『ＦＮ　ファイブセブン』らしきハンドガンの銃口を烏賊の生物兵器に向け、何発か撃った。しかし、全ての銃弾が触手に弾かれた。

「……やっぱり正攻法じゃ無理か。」

出木杉がそう言うと、のび太は言う。

「出木杉！　こいつはどんな生物兵器なんだ？」

のび太のその言葉を聴いた出木杉は応える。

「こいつは、『クラーケン』という生物兵器だ。大王烏賊（ダイオウイカ）をベースに開発したパーフェクションＢ．Ｃ．Ｗ．だ。こいつの触手はあらゆる攻撃に反応し、その攻撃を弾く。対戦車ライフル弾でも破壊は無理だ。」

出木杉がそう言うと、のび太は、

「じゃあ、どうすれば！？」

と言った。すると、出木杉は応える。

「こいつの弱点は電気だ。高圧電流を浴びせれば、動きが停止する。或いは閃光手榴弾があれば動きを止められるかもしれない。」

出木杉がそう言うと、のび太は懐から閃光音響手榴弾（スタングレネード）を出して言う。

「スタングレネードなら幾つかあるよ。」

のび太がそう言うと、出木杉が言う。

「そうか。なら、それは、緊急時に使ってくれ。まず、僕の持っている閃光手榴弾でクラーケンの動きを止める。のび太君はその間にクラーケンの眼球を攻撃してくれ。それがあいつの弱点だ。僕は援護に回る。」

出木杉がそう言うと、のび太は肯定した。そして、出木杉は閃光手榴弾の安全ピンを抜き、クラーケンに向かって投げた。クラーケンは、閃光手榴弾を掴んだが、閃光手榴弾が強烈な閃光を放った瞬

間、クラーケンの動きは止まった。その隙にのび太は、両手に構えている二挺の『ベレッタＭ９２ＦＳ』を連射した。一秒足らずで３０発の『９ｍｍパラベラム弾』を撃ち尽くし、その全ての弾丸は、クラーケンの眼球に見事に命中した。しかし、クラーケンは再び動き出した。

「！？　…効かなかったのか！？」

のび太がそう言うと、出木杉が言う。

「いや違う。まだ足りないだけだ。やっぱり『９ｍｍパラベラム弾』じゃ威力不足なんだ。」

出木杉がそう言うと、のび太が言う。

「じゃあ、あいつに接近してナイフで止めを刺す。もう一回援護してくれ。」

のび太がそう言うと、出木杉は再び、閃光手榴弾の安全ピンを抜き、クラーケンに投げた。そして、強烈な閃光がクラーケンを襲い、クラーケンの動きは止まった。のび太はその隙にクラーケンの触手をよじ登り、眼球のすぐ傍まで行った。そして、左胸のベルトに掛けてあるナイフ用の鞘からナイフを取り出した。それはかつて、健治が使っていたサバイバルナイフだった。のび太は、そのナイフを眼球に突き刺した。ナイフを突き刺した位置から、青色の血液が飛び出した。そして、のび太は、突き刺したナイフを勢いよく抜いた。すると、ナイフが抜かれると同時に、眼球から青色の血液が噴水の様に大量に噴出した。のび太は透かさず、クラーケンからの体から飛び降りて、丁字状の橋の上に前転受身をしながら着地した。のび太は、すぐに振り向いた。すると、クラーケンが触手と頭を垂れて、丁字状の橋に倒れ掛かっていた。しばらく警戒していたが、動かない事を確認すると、のび太は出木杉に話し掛ける。

「どうやら、何とかなったようだね。」

のび太がそう言うと、出木杉は言う。

「ああ、そのようだね。」

出木杉はそう言いながら、丁字状の橋の右側にある扉に向かって

行った。そこはさっき、真理奈を担いでいた男が入って行った扉だった。

「残念だけど、真理奈の事は、今は保留にしておいてくれ。いずれこの問題は解決するから。」

出木杉がそう言うと、のび太は、

「出木杉……。」

と、呟く様に言った。

「任せてくれよ。天才の僕に出来ない事なんて無いんだ。」

出木杉はそう言うと、扉の向こうに消えた。

（……出木杉、君は一体何が目的なんだ……？）

のび太は暫くそう考えていたが、他のメンバーと合流する事が重要と思い、来た道を戻ろうとした。すると、のび太がさっき通ってきた扉が開いた。その扉を開けて入って来たのは、厳やジャイアン達だった。そしてその中には、玲や聖奈や燐もいた。

「厳さん！　ジャイアン！　無事だったんだね。」

のび太がそう言うと、ジャイアンが言う。

「まぁな。てんで大した事なかったぜ。」

ジャイアンがそう言うと、厳はのび太に尋ねる。

「で、あいつは何処に行ったんだ？」

厳はそうのび太に訊いた。のび太は、出木杉の事を言おうかどうか迷っていたが、結局言わない事にした。

「ごめん、見失ってしまったんだ。」

のび太がそう言うと、厳は言う。

「まぁ、そんな事もあるさ。まだ遠くには行ってない筈だ。捜そうぜ。……と、言いたい所だが、このどでかい生物は何だ？　どうやら巨大な烏賊みたいだが。」

厳がそう言うと、のび太は応える。

「……この部屋に入った時に襲い掛かってきた奴です。何とか倒しました。」

のび太がそう言うと、厳が言う。

「そうか、ナムオアダフモ機関の奴等の差し金かもしれないな。」
巌がそう言うと、ジャイアンが言う。
「そんな事より、早く、奴が行ってそうな場所を探そうぜ。この部屋に来たってんなら、あそこの扉だと思うんだけどな。」
ジャイアンがそう言うと、のび太と巌達９人は、丁字状の橋の右側にある扉に向かって行った。そして巌はその扉を開けようとした。しかし、扉は全く開かなかった。すると、扉を見ていた織恵が言う。
「……その扉、『Ｌｖ．３』って書かれているわ。もしかしたら、『Ｌｖ．３ライセンスカードキー』が必要なのかも。」
織恵がそう言うと、巌が言う。
「そうかもしれないな。という事は、奴は完全に見失ったって事だな。…仕方ない、上の階を探索しよう。もしかしたら、カードキーが見つかるかもしれないからな」
巌がそう言うと、全員は上の階に向かって行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6821n/

のび太のBIO HAZARD『ENDLESS FEAR』

2011年11月29日01時02分発行